

始

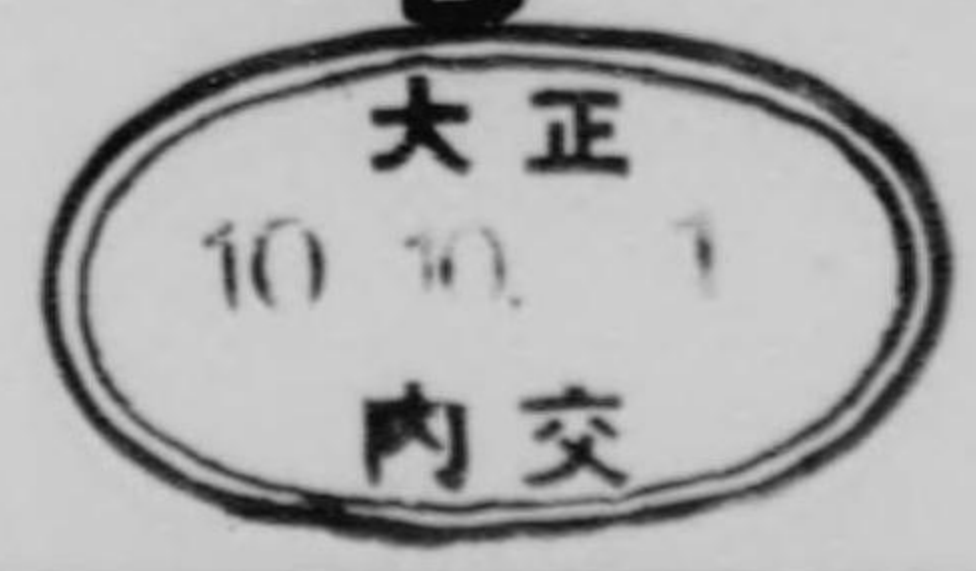


379-12_v



國譯
禪宗叢書

第參卷



國譯禪宗叢書第三卷凡例

一、本叢書第三卷に收むる所は、大慧普覺禪師書(二卷)叢林盛事(二卷)修心訣(一卷)興禪記(一卷)博山警語(二卷)の五部八卷なり。以上上の書中、大慧普覺禪師書は、我が南北朝の初めに印行して叢林の間に喧傳せられ、叢林盛事も亦室町時代に印行せられて禪社の間に傳はり、修心訣は徳川時代の末葉に初めて印行せられたるも、世に流布すること稀なり、興禪記は室町時代の古刻本の外、徳川時代に再び印版に附せられしも、今や殆んど之を觀ること稀なり、たゞ博山警語は徳川時代の中葉に初めて我が邦に印行せられてより、爾來禪衲の間に愛誦せらる。以上五部の書中、大慧書、叢林盛事、博山警語の三部は、支那古徳の撰述に屬し、修心訣は朝鮮古名僧の手に成り、興禪記は本邦

老宿の著述に係るものなり。就中大慧書は、禪門の要旨を簡明直截に説述して、禪の歸趣を窺ふに古今凡そ此の書に過ぎたるものなし。而して叢林盛事は、南北兩宋間に於ける禪門古徳の勝蹟を拾ふべく、博山警語は支那明末禪風の大概を察知すべく、修心訣は朝鮮禪宗の我が邦所傳のそれと異同なきを知り得べく、興禪記は我が南北朝時代の宗論書として、よく禪要を發揮したるもの、蓋し榮西祖師の撰述に係る興禪護國論以後の名著たるを失はず。

一、以上五部の書、今次國譯に際しては、悉く徳川時代の印本に據り、毎卷末の原文も、亦之れに依違せり。たゞその修心訣と興禪記の兩書は、現時禪門の學者も、未だ曾て手にせざるの人多かるべく、今爰に收載し得たるは、編者の深く歡喜する所なり。

大正八年九月

編者識す

國譯禪宗叢書 第三卷

目次

國譯大慧普覺禪師書解題	一
國譯大慧普覺禪師書	一—二三三
大慧普覺禪師書原文	一—六八
國譯叢林盛事解題	一
國譯叢林盛事	一—一一一
叢林盛事原文	一—五七

國譯高麗國普照禪師修心訣解題 一

國譯高麗國普照禪師修心訣 二〇

高麗國普照禪師修心訣原文 一〇

國譯興禪記解題 二

國譯興禪記 二四

興禪記原文 一

國譯博山和尚參禪警語解題 二

國譯博山和尚參禪警語 一六三

博山和尚參禪警語原文 三四

國譯大慧普覺禪師書

解題

大慧普覺禪師書一卷、古來より略して大慧書といふ。臨安府徑山大慧宗杲が、その門下の縉紳居士等に、書を以て宗門の要旨を説示したるものにして、禪師の遺録六十卷は、宋の孝宗、淳熙の初め、詔して大藏に入れて流行せしめらる。今この書は其の中の一なり。本書は我が邦叢林に流傳すると久しく、今猶ほ盛んに僧俗の間に傳誦せらる。

按ずるに禪師名は宗杲、宣州寧國縣の人なり。俗姓は奚氏、宋の哲宗元祐四年を以て生る。夙に英氣あり、年十二にして郷校に入る、一日同窓と戯れ硯を以て之を投ず、誤つて先生の帽に中る、金を償ふて歸つて云く、「大丈夫世間の書を讀まんよりは出世の法を究むるに若かず」と、東山の慧雲院に詣り慧濟に事ふ。年十七にして髪を薙りて得度す。幾もなくして四方に遊び、又曹洞の諸老宿に従つて其宗要を聴き、去つて寶峰に登りて湛堂準禪師に調す。湛堂一見之を異となし左右に侍せしめ、入道の捷徑を教ふ。堂寂して後、張無盡居士に見え、又圓悟禪師に參ず、遂に契ふ所あり、法を圓悟に嗣ぐ。悟、臨濟正宗記一篇を著はして之に付し、記室を掌らしむ。尋で分座說法、室中に竹篋を握つて以て

學者を驗す、是れより名京師に振ふ。右丞相呂公彝、奏して紫衣并に佛日大師の號を賜ふ。紹興七年、詔して徑山に住せしむ、入院の明年、雲梯一千に充つ、皆諸方角立の士なり。これより宗風大に振ひ臨濟再興と號す。翌年に至り學徒の駢集する者一千七百有餘衆、故に眞讚に「一千七百痴禪子」云々、統這箇無明叟の語あり。紹興十一年、侍郎張九成がために上堂す、秦檜、禪師を以て張九成が黨となし朝廷に奏して其の衣牒を毀ち、衡州に竄す。二十一年又梅州に移さる。梅陽は南方瘴煙の郡たり、醫藥絶えて少く、その辛酸極めて多し。二十六年に至り恩を蒙りて北に歸る、時に六十八歳なり。四方より席を虚しうして請すれども就かず。十二月二十三日、詔して明州阿育王山廣利禪寺に住せしめ、同じく二十八年、詔して再び徑山に住せしむ。禪師年老いて住持の印を解かんとを求む、同じく三十一年、旨を得て明月堂に退居す。孝宗の隆興元年八月十日、徑山の明月堂に寂す、世壽七十五歳、僧臘五十八、全身を堂後に葬る。皇帝之を聞きて嗟惜し、詔して明月堂を以て妙喜庵と爲し、蓋を普覺と賜ひ、塔を寶光と名く。その八處九會陞堂の語要、普說、小參、讚偈、機緣、長慶法語、無慮數十萬言、門人道印編して六十卷となし、又、宗璉、曇密、惟禮、宗演、淨智居士黃文昌等、その綱要を哀め、分つて五冊となして世に刊行す。

國譯大慧普覺禪師書上

參學 慧然 錄

淨智居士 黃文昌 重編

曾侍郎に答ふ 天游 問書附

開、頃、頃、長沙に在りて圓悟老師の書を得るに、公、晩歲相從つて所得甚だ是れ奇偉なりと稱す。之を念ふるこ

と再三、今八年なり。常に恨むらくは、未だ親しく緒餘を聞くことを獲ざること、惟切に景仰するのみ。某、幼年より發心し、知識に

①名は宗杲、年譜に曰く、年十六歳の時、大に宗教を興し、濁世を照明すの語を取つて名づく。杲を果に作るは誤なり。師の姓は奚氏、宣州の人なり、年十三にして慧雲齊公に投じ、十七歳にして薙髮す、三十七歳の時大悟す、初め徑山に住し、後に明月堂に退居す、三十八歳の時に紫衣を賜ひ、佛日大師と號す。また妙喜庵

に居せしに因つて、自ら妙喜と號す、七十四歳の時、孝宗帝特に大慧禪師の號を賜ふ、隆興年中(西紀一一六三)に寂す、壽七十五、諡を普覺と賜ふ、圓悟克勤の法嗣なり、偈贊法語すべて五帙あり。臨燈錄十七、普燈錄卷十五、會元第十九、通載第二十、禪宗正脈第十九等に詳かなり。

て、禪師號の始めは義堂日工集第四に云く、支那に在つては北宗神秀に始まる、又特に禪師號を賜ふは大慧に始まる。日本に於ては官賜の號とせらる、古くは道鏡を太政大臣禪師とせらる。諡號としては建長五年、建長寺開山隆興に大慧禪師を賜ひしは、其始めなり。

參禮して、此の事を
 扣問す。弱冠の後、
 婚官の所役を爲つて
 工夫を用ふることに
 純ならず、因循とし
 て今に至る。老いた
 り、未だ聞く所あら
 ず、常に自ら愧歎す。
 然も志を立し願
 を發すること、實に
 淺々たる知見の間に
 在らず。以爲らく、
 悟らざるは則ち已み
 なん、悟らば則ち
 須らく直に古人親證

叙なり、其言を叙布して之を
 簡牘に陳ぶるなりと。此書は
 但だ在家求道の士の爲に答ふ
 る所なり。出家は叢林中に在
 りて朝參暮請するが故に此れ
 に及ばず、故に只だ一二ある
 のみ。大慧が書に妙を得たる
 こと北磻文集七に見ゆ、卍庵
 法語の跋に云く、「妙喜の長
 書、佛眼の普說、卍庵の法語
 は天下の三絶なり」と、又舊鈔
 に韓子蒼の大慧書を評するを
 引いて云く、「古錦囊の如し云
 云。」
 參禪學徒の略、參は會承なり、
 慧然は大慧の法嗣なり。録は
 紀なり、又は勝寫するを録と
 云ふ。
 淨智は徳を標したる號なり、
 居士とは梵語に迦羅越(くら
 ばち)、四徳を具する士の美稱
 なり。一に官仕を求めず、二
 に欲寡く徳を藪ふ、三に居財

大に富む、四に道を守り自ら
 悟る。即ち道義淨白にして居
 處する所、塵累なきものをい
 ふ。
 ① 普燈十八に出づ。
 ② 大惠年譜に云く、「其陞堂の語
 要、普說、小參、法語等數十萬
 言あり、參徒道印編して六十
 卷とす、宗徒、曇密、宗演、
 淨智居士等、其の綱要をとり
 て六冊として世に刊行す。詔
 して大藏に入れて聖教に同じ
 うして以て永く傳ふ」と。
 ③ 答會侍郎の四字は、本書の首
 題なり、此には奉大惠禪師書
 と題すべきなり、然るに此は
 専ら大惠の書にして諸家の書
 を載するに非ず、故に今は問
 書を以て答書の意を發揮せん
 が爲に、之を問書の首に題し
 て、特に注して問書附といふ。
 ④ 天游は會侍郎の字なり。會元
 二十、普燈廿三に出づ。

⑤ 開とは會侍郎の諱なり、自ら
 諱を稱するは謙辭なり。
 ⑥ 湖廣道の長沙府なり。
 ⑦ 公は大惠を指す、師時に三十
 七歳、故に晩歳といふ、幼年
 より隨侍せしならば一倍よか
 らんとなり。
 ⑧ 念とは圓悟の書に依つて大惠
 を念ふの意なり。
 ⑨ 緒餘は殘なり、莊子に云く、
 「緒餘以て天下國家を治む云
 云」と、今の意は、縦ひ相見を
 得て我が爲に餘蘊なく説話し
 給ふと雖も、我れ遺忘なきを
 得ず、然らば寧ろ一たび相見
 を得て其説話し給ふ所の緒餘
 を聞かんことを希ふとなり。
 此れ會侍郎の謙辭なり。
 ⑩ 景は仰なり、慕なり、遠隔の
 地に在りて唯だ切に仰慕する
 のみとなり。
 ⑪ 此の一段は此書の大綱なり。
 幼とは禮記に人生十年をい

の處に到て方に 大休歇の地となすべしと、
 此の心未だ嘗て一念も退屈せずと雖も、自ら
 覺ゆ工夫未だ純一ならず、謂つべし志願大に
 して力量小なりと。向には圓悟老師に痛懇
 するに、老師示すに 法語六段を以てす。其
 の初には此の事を直示す。後には雲門、趙州
 の 放下着、須彌山の 兩則の因縁を擧し
 て 鈍工を下さしむ。常に自ら擧覺せば久久
 にして必ず入處あらんといふ。老婆心切な
 ること此の如し、其れ 鈍滯甚だしきを奈
 せん。今幸に 私家の 塵縁すべて畢んぬ、
 閑居して他事なし、政に痛く自ら鞭策して以
 て 初志を償ふにあり、第、恨むらくは未だ
 親炙教誨を得ざるのみ。一生の敗闕已に一一
 呈似す、必ず能く此の心を洞照して、望む

ふ。
 ① 宗門の一大事なり。
 ② 婦を入るるを婚といひ、君に
 仕ふるを官といふ、即ち妻子、
 公務をいふ。
 ③ 已事を究明することに心力を
 努するを工夫といふ。
 ④ 此より大綱中の發心の事を述
 ぶ。大志大願も佛祖の深玄
 底を究明せんと欲するなり。
 淺淺知見とは意識上の分別を
 いふ、若し知見憶解を違うし
 て玄妙を求めんとせば、此時
 慚慢心おこり、魔其傾りを得、
 これ心志輕劣の致す所なり。
 俗なほ然り、況んや出家をや。
 ⑤ 此れ會侍郎の自ら假設の言な
 り。
 ⑥ 大光明藏上七に云く、生死心
 絶するを悟といひ、絶後更に
 甦るを證といふ。
 ⑦ これは五百由旬の三徳、秘密
 の至極の境を大休歇の地とい

ふ。三百由旬の小歇場に簡ぶ、
 正心論に云く、「一切の煩惱結
 縛を放下する、之を小歇とい
 ひ、一切の佛法知見、利生の
 念を放下するを中歇といひ、
 亦此念をなさず、善事をな放
 下す、是を大歇といふなり」と。
 ⑧ 此段は大綱中の知識に參禮す
 るの語を演出す。
 ⑨ 圓悟心要に四段の法語を載
 す、然るに今六段と云ふは、
 蓋し二段の法語は遺書の中に
 あらん。
 ⑩ 圓悟心要上に曰く、嚴四尊者、
 趙州に問ふ、一物不將來の時
 如何ん。州云く、放下着。尊
 者云く、一物不將來、未嘗の箇
 の什麼をか放下せん。州云く、
 你を見るに放不下なり。嚴闍
 遂に大悟す云云。
 ⑪ 僧、雲門に問ふ、一念を起さ
 す、還つて過ありや、無や。

らくは委曲に提警せよ。日用如何が工夫を
做すべき、庶幾はくは他途に渉らず、徑に
本地とあひ契はんことを。此くの如きの説
話、敗闕亦少からず、但だ誠を投するに方つ
て自ら隠逃し難し、良に惑むべし。至扣。
叙べ及すことを承はる、幼年より仕官に至
りて諸大宗匠に参禮す。中間、科擧婚官の
爲に役せられ、又悪覺惡習の爲に勝たれ、
未だ純一に工夫をなすこと能はず、此を以て
大罪となす。又能く無常世間種々の虚幻、一
も樂しむべきこと無きを痛念して、心を専らに
して、此の一段の大事因縁を究めんと欲す、
甚だ病僧が意に慍へり。然も既に士人となり
ては、祿を仰いで生をなす、科擧婚官は、世間
の免るること能はざる所の者なり、亦公の罪に

門云く、須彌山、此れ又直截
省要、世、無事にして心を慮う
し慮を静にして、且鈍工夫
を下し、只管擧して看よ、之
を久しうして當に自ら入處あ
るべしと。
⑦則は法則なり、即ち佛祖の語
を以て學者の法則となすな
り。
⑧退歩工夫を鈍工といふ、此れ
曾侍郎の語に非ず、謂く、念
を克して回光返照し、著實に
工夫をなすなり。
⑨宗師の接得の丁寧なるを喻
ふ。
⑩鈍根泥滯の謂なり。
⑪公朝に對して自宅を私家とい
ふ。
⑫塵縁は妻子眷屬の類なり。
⑬これ幼年發心の語、又中間因
縁の語に應ず。

⑭呈似の似は猶ほ向と言ふが如
し、又は示の義とし、呈の字
に訓す。
⑮ひきたて、氣をつけるなり。
⑯言は願はくば、方便の他途に
渉らずして、直に本分の田地
に到らんことをなり。
⑰上を結ぶの語なり。
⑱隱逃云は、覆藏し難しと言
ふが如し。
⑲禮記注疏に云く、至扣は頓首
なり。今此は至禱に同じ。
⑳此書は善財の縁を引いて示
す、師四十六歳の時、雲門庵
に於て作る所なり。此書の大
綱は業性の如幻なることを示
すなり。そは曾侍郎が業性を
認めて罪に非ざるを以て大罪
となし、念頭において怖畏す、
故に大愚之を看破して其如幻
を示す。中に先づ第一段に問
書を擧げて讚許す、之に三節
あり。初に宗匠に参すること

あらざるなり。小罪を以て而も大怖懼を生ず、
無始曠大劫來、眞の善知識に承事して、般若
の種智を熏習するの深きに非ずんば、焉んぞ能
く此くの如くならん。而も公の所謂大罪は聖
賢も亦免るること能はず、但だ虚幻にして究竟の
法にあらざることを知らば、能く心を此れ箇の門
中に回して、般若の智水を以て垢染の穢を滌除
して清淨にして自居し、脚下より去つて一
刀兩段して、更に相續心を起さずんば、足りな
ん、必ずしも前を思ひ後を念はざれ。既に虚幻
と曰ふときは、作の時も亦幻、受の時も亦幻、
知覺の時も亦幻、迷倒の時も亦幻、過去現在未來
皆悉くこれ幻なり。今日非を知らば則ち幻藥
を以て復た幻病を治するなり。病瘥え藥除けば
依然として只是れ舊時の人、若し別に人にあり

を叙す。宗匠とは宗門の師匠
なり、匠とは物を成すなり、
器の工師なり。これ自他の功
成を明らむ、若し行解周から
ずんば自他成く失せん。
②第二節、工夫の不純を叙す。
科擧とは朝廷、才智を選び之
を科擧するに射策對射の名あ
り、射策は覆題、對策は露題
なり。
③已下二段の文は來書に之れな
しと雖も、大惠、酌んで第三段
の根本となす、惡覺等とは邪
惡の知覺及び舊習煩惱なり。
④主宰とすることを得ず、却つ
て惡覺の爲に障へらるを謂
ふ、即ち道力の業力に勝たざ
るをいふ。
⑤世人は願はれたる罪をも猶ほ
罪と思はず、公は工夫熱せざ
るを以て大罪となす、實に希
有なり。此意は世人に比して
竊かに其志深を賛歎す。

⑥第三節、心を大事に専らにす
るを叙す。
⑦見性成佛二なし、故に一段と
いふ。大事因縁は、本と法華
方便品に出づ、此れ佛知見に
悟入するをいふ。
⑧此れは總じて前を結んで讚許
す、病僧とは蓋し大惠偶病あ
り故に云ふ。舊云く、病僧老
衰なり、又卑下の語と並に不
可なり。
⑨然云云は第二段、小罪を怖る
るを賛歎す、然の字は大罪の
詞を奪ひ、轉じて他に備つて
贊し、且つ勸進するなり。
⑩無始とは大論三十一に曰く、
「世間若しくは法、若しくは衆
生、始めあるとなし」と、佛教
にては一切の現象、總べて因
縁和合して成じたる者にて、
有情は生老病死の四相循環
し、世界は成住壞空の四劫を
繰り返へすといふ、故に出生

法あらば、則ち是れ ① 邪魔外道の見解なり。公深く之れを思ひて、但だ此くの如く崖め將ち去つて、時時に ② 静勝の中に於て切に須彌山、放下著の兩則の語を忘了することを得ず。但だ脚下より著實に做し將ち去つて、已に過ぎたる者を怖畏することを須ひず、亦必ずしも思量せざれば、思量怖畏すれば即ち道を障ふ。 ③ 但だ諸佛の前に於て ④ 大誓願を發せよ、願くは此の心堅固にして永く退失せず、諸佛の加被に依つて ⑤ 善知識に遇ひ、一言の下に頓に生死を亡じて ⑥ 無上正等菩提を悟證し、佛の慧命を續いで以て諸佛莫大の恩を報せんと。若し此くの如くならば則ち久々にして悟らざるの理あること無けん。見すや ⑦ 善財童子、文殊に従つて發心して、漸次に ⑧ 南に行いて ⑨ 一百一十城を過ぎて ⑩ 五

の始なきが故に無始といふ。今は昔の大昔よりといふが如し。劫とは梵語の劫の略、此に大時分、或は分別時分と譯す、大時間を數ふるに用ふ。① 般若は梵語にして智慧と譯す、法界の事理を照らして能く一切の眞理に通達する聖智をいふ。種智も亦佛所有の聖智にして萬有の本體を悟了し、又萬有の差別を明かに知る智なり。大論に云く、因には般若と名け、果には薩婆若と名く。薩婆若とは一切種智と譯す、即ち如來の智なり。然らば今は因果並べ稱して般若種智といふも、其體は一なり。今は知識に參じて成佛の智慧を稱ふ込みしをいふ。② 第三段、正しく他の問に答へて理性の虚幻を示す。③ 即今當念の謂ひなり。④ 第二念を起さざるなり。⑤ 足はもうそれでよいとなり、曾侍郎痛く業障を怖れて念頭に在る故に、其れをして多を求めざらしむるなり。⑥ 衆罪は霜露の如し、慧日能く消除す、即ち此下は幻の事を譯す。⑦ 作とは善惡の業を起作するなり。受とは苦樂の報を受くるなり。幻治幻愈の外に曾侍郎あらばとなり。⑧ 魔は梵語の魔羅の略、此に能奪命、或は障礙等と譯す、正智の命を奪ひ、又は修道、修善の障をなすが故なり。之に四魔、十魔あり。今は物を認める妄念分別心をいふ。次に、心外に道を求むるを外道といふ。⑨ 坐禪をいふ。⑩ 第四段、此は願力堅固なれば悟らすと云ふこと無きことを叙し、宿習を滅するの用心を

十三の善知識に參す。末後彌勒、① 一彈指の頃に於て頓に前來諸善知識の所得の法門を亡す。復た彌勒の教に依りて文殊に奉觀せんことを思欲す。是に於て文殊、遙かに右の手を伸べて一、百一十由旬を過ぎて善財の頂を按でて曰く、『善哉善哉善男子、② 若し信根を離れて心劣にして憂悔し、功行具せずして精勤を退失し、一善根に於て心住着を生じ、少功德に於て便ち以て足れりとせば、善巧に行願を發起すること能はず。善知識の爲に攝護せられじ、乃至是くの如きの法性、是くの如きの理趣、是くの如きの法門、是くの如きの所行、是くの如きの境界を了知すること能はず。若しくは周徧智、若しくは種種智、若しくは盡源底、若しくは解了、若しくは趣入、若しくは解説、若しくは

示す。① 無上菩提を願求するが故に大といふ。或は云く、此願文は大惠の自作にあらずと、大惠本録等にも此を説せず、然るに此等の語意を觀るに、彼の發願文の意に能く合するより見れば大惠の自作ならん。② 善知識云は下に善財の縁を引く張本なり。③ 阿耨多羅三藐三菩提の譯なり、此れ佛陀の智徳を稱する一名號なり、佛は絶對智者にして、これより勝れたる智なきが故に無上といひ、隨つて空、有に偏せず、一切の偏邪を離れたる平等の聖智にして、三世の諸佛同等なるが故に正等といひ、菩提は此に覺と譯す、即ち本有の理及び萬有の一一を明かに了悟するが故に、正覺或は正徧智とも譯す。④ 心地觀經に云く、眞法を以て衆生に施し、三寶の種を續ぎ斷絶せざらしむ、是を佛恩を報すと名く。⑤ 第五段なり、善財の因縁を引くに二節あり、今は善財を稱贊す。善財は華嚴經入法界品に出づる菩薩の名、文殊菩薩の指南に依りて南方に五十三人の善知識を訪ひ、參問して入法界の益を得、一生に成佛せし菩薩にして、童子と稱するは、己が憶解を立せず、専ら師教に隨ふを表はす。⑥ 南は明なり、智慧なり、北は暗なり、無明なり、是れ文殊の教に依つて南に行く所以なり。⑦ 一百一十城の事、華嚴疏鈔七十八、合論九十一、法華文句記四ノ一等に出づ、謂く、住、行、向、地の四十位に各因果あれば八十なり、妙覺を分つて十となし、之に因果あれば

分別、若しくは獲得、皆知、若しくは獲得、皆悉く能はじ。文殊、是くの如く善財に宣示す、善財、言下に於て阿僧祇の法門を成就し、無量の、大智光明を具足して、普賢門に入り、一念中に於て悉く三千大千世界微塵数の諸善知識に見えて、悉くみな親近し、恭敬承事し、其の教を受行し、不忘念智、莊嚴藏解脱を得

二十なり、合して一百。此の五位は並びに根本の三世諸佛法界體中の十波羅密を離れざれば一百十となる。五十三人の善知識の中に、比丘あり、醫師、女人、仙人、婆羅門、外道等あるも、皆是れ善知識の應現と知るべし。一たび指を弾く時間はいふ、而し今此の彈指は驚覺の義なり、前に得る所の法門は子細に看來れば電の拂ふが如し、故に驚覺して三昧に滞らざらしむるなり。又は去塵の義、謂く説法言句の塵を去らしむるをいふ。要するに同義なり。此は善財は信根等を有する故に、能く法性を了することゝを反顯するなり。若し善財に信根なければ、文殊を見る能はず、隨つて百十城を透過する能はざるなり。

り、諸法の本體を照し、一切法を實の如くに了悟する智なり。此は如量智、後得智なり、種種無量の差別の境に通達する智なり。堅に約して、法の深理を究め盡すを謂ふ。解了は横に法界の諸法解知するをいふ。趣入は自己が果海に入るをいふ、解説は他を教化するをいふ。化他を取る、即ち差別を識別するをいふ。證知は體に就き、獲得は用に約す。華嚴疏鈔三十三上に十句を列ぬ。能はじと、善財は之に反す。第二節、得益を論ず。阿僧祇は梵語、阿僧祇耶の略なり、此に無數と譯す、人間の數へ知る能はざる大數をいふ、今は權教の菩薩が無數の

長時を経て修成する無量の法門、功德を一時に頓に成就するをいふ。大智は文殊にして如理智なり。普賢菩薩は法界の理をつかまざる故に、今は法界に悟入するをいふ。須彌山を中軸としたる世界、即ち須彌山世界を一千箇集めたるを大千世界といひ、此の小千世界を一千箇集めたるを大千世界といひ、更に此の大千世界を一千箇集めたるを大千世界といひ、此の小、中、大を合して一大三千大千世界といふ、この三千大千世界を一佛化教の範圍とす。今は此の大千世界を碎いて教座にした程の無量無數の善知識に一念中に見ゆとなり。一念とは短促の時間をいふ。これ法界の一切諸法は互に一と多と即

たり。以至普賢の毛孔刹に入つて一毛孔に於て一步を行き、不可說不可說佛刹微塵数の世界を過ぐ。普賢と等しく諸佛と等しく、刹と等しく行と等しく、及び解脱自在悉く皆同等にして無二無別なり。恁麼の時に當つて始て能く三毒を回して三聚淨戒となし、六識を回して六神通と爲し、煩惱を回して菩提となし

入し、時間も亦一念と萬年と融即するが故に、若し一度差別の見を離るれば之をなす易易たるのみ。彌勒樓閣中にて得るなり、華嚴經四、施主妙嚴品に云云。八十華嚴三十一、十回向品。また阿僧祇品、華嚴懸談一などに出づ。不可説とは、一十百千等の數の名目なり、小乘にては俱舍第十二に六十の數を立つ、大乘は華嚴經阿僧祇品に百二十四の數を立つ、其中の第二百二十三番目の數の名なり。三藏法數四十三に華嚴を引けり。善財の所行は普賢の行法と等し云云となり。諸佛と同等の時を謂ふ。食欲、瞋恚、愚痴の三は一切の不善行の本となるもの、而して此三は吾人の善心、正智を障害すること、世間の毒の

物を害するが如し、故に喩へて三毒といふ。三聚淨戒の聚は多法を積聚するをいひ、淨とは過失を離るるをいひ、戒は非を防ぎ惡を止むるをいふ。一に攝律儀戒、これは止惡門にして、一切の諸惡を斷捨すべき誓約なり、戒律多しと雖も此の一戒中に攝束して遺すことなし、故に攝律儀といふ。二に攝善法戒、之は修善門にして、一切の善法は悉く實行すとの誓約なり、善法多しと雖も此一戒中に攝束して漏らすことなし。三に攝衆生戒、これは度生門にして、一切の衆生を悉く荷負して利益を施さんとすの誓約なり。今は三毒の汚を回轉し離れて、三聚の善を行じ、やがて智、斷、恩の三徳と顯はるるをいふ。六識とは眼識、耳識、鼻識、

舌識、身識、意識なり。識とは對境を了知する心をいふ、即ち眼識は實質等の色を識別する等の如し。六神通とは妙用洞り難し、故に神といひ、作用塞ることなきを通といふ。一に天眼通とは被障細遠の物を明かに見、進んでは六道の生類が此に死し彼に生るる苦樂の相を見ること自在なるをいひ、二に天耳通とは細遠の言語音聲等を聞くこと自由なるをいひ、三に他心通、これは衆生の心中に思ふ所を知るに自在なるをいひ、四に宿命通とは自身及び他身の過去世に於ける生及び所作の事業を知ること自在なるをいひ、五に身如意通とは、身よく鳥の如くに飛行し及び其他の動作、意の如くなるをいひ、六に漏盡通とは、よく煩惱を滅盡して三界生死

① 無明を回して大智となす。如上の遮の 一絡索、只だ當人末後の一念眞實なるに在るのみ。善財、彌勒彈指の間に於て尙ほ能く頓に諸善知識所證の三昧を亡す、況んや無始の虛偽惡業習氣をや。若し前の所作底の罪を以て實となさば、則ち現目前の境界みな實有とならん。乃至官職、富貴、恩愛、悉く皆是れ實ならん。既にして是れ實ならば則ち地獄天堂も亦實、煩惱無明も亦實、作業の者も亦實、受報の者も亦實、所證底の法門も亦實ならん。若し遮般の見解を作さば則ち盡未來際、更に人の佛乘に趣くことあること無けん。三世の諸佛諸代の祖師、種種の方便、翻つて妄語とならん。承はる、公、書を發する時、香を焚いて諸聖に對し、及び遙かに庵中を禮して而して後に遣すと。

の苦惱を離るるをいふ。此の六通は佛陀は無論、阿羅漢の得る所の通力なり、今は吾人の不完全なる六識を轉換して六神通となすとす。煩惱とは煩擾惱亂などつづけて、即ち貪、瞋、癡等を始めとして、百八、若しくは八萬四千の煩惱ありとす、此等は吾人の曲つた汚れた心づかひにして、吾人の心身をかき亂し、惱ます作用を有する故に煩惱と名く。菩提とは覺と譯す、即ち大覺の智慧なり。然らば煩惱と菩提とは其作用を見れば、明暗の不同、染淨の差別ある様なれば凡人は之を正反對のもの如く思へども、水と波と一體一なるが如くに、煩惱と菩提とは其體は一にして平等一如なり、故に吾人の心得をなほせば煩惱の其のままが菩提となる故にいふ。

② 無明とは明は智の用にして、明照なしとの意にて、愚痴の煩惱なり、即ち人人本具の佛性及び一切法に於ける眞理を實の如く知る能はざるもの、而し前に煩惱とある故に、今これは一切煩惱の根本たる極微細の無明煩惱を指す。此無明を轉じて絕對眞理を照らす根本智となすとす。③ 一絡索とは猶ほ一段といふが如し。④ 諸善知識の所に於て證得する所の三昧との意なり、此の文意は三昧を得て認むる法執すら、尙ほ能く頓に亡す、況んや羸相の虛偽なる惡業惡覺等豈に頓に泯亡せざらんやとなり。三昧とは三摩地と同じ、定、等持、寂靜などと譯す、心を一所に住せしめて、邪僻、散亂を離るるをいふ。或は理智

公の誠心至切なること此くの如し、相去ること甚だ遠からずと雖も、未だ面言することを得ず、意に信せ手に信せて覺えず。切怛すること如許ぞ。① 繁絮たるが若くなりと雖も亦誠至の心より出づ。敢て一言一字を以て相欺かず、公を欺くは則ち是れ自ら欺くのみ。又記得す、善財、最寂靜婆羅門に見えて誠語解脫を得、過去現在未來の諸佛菩薩は、阿耨菩提に於て已退なく現退なく當退なし。凡そ求むる所あれば成滿せずといふことなし、皆誠至の及ぼす所に由れり。公、既に竹椅蒲團と侶をなす、善財の最寂靜婆羅門に見えしに異ならず。又雲門に發する書は諸聖に對し、遙かに禮して而して後に遣はす、只だ雲門が信許せんことを要す。此れ誠至の劇だしきなり、但だ相聽せ只だ

契合して平等一如の境をいふ。虛偽とは實體なきを表はす、習氣とは煩惱の異稱なり。② 之は罪業及び一切の法は如幻にして無實なることを結示す。若し一切法實ならば迷はず。常に迷、苦は恒に苦、樂は永久に樂、地獄は永く地獄、凡人愚者は常に凡愚にして遂に賢者、佛陀となることなけん。佛乘とは、乘は運載の用あるをいふ、佛陀の教を喻へて乘といふ、即ち佛所說の大乗眞實の教法は、能く衆生を來せて迷界を出離して悟りの都に到り、佛果を成就せしむる故に佛乘といふ。併し今は佛果の位を佛乘と見よ。③ 方便とは方法、便宜なり、名醫が病に應じて藥を授くるが如く、佛祖は權智を以て人智の淺深に應じて、種々の教法を説いて教化して妙理を悟ら

しむるを方便といふ、故に佛祖の方便言教は凡を轉じて聖となし、迷を轉じて悟とし、苦を轉じて樂となすにあり、然るに人の悟りて佛果に趣くこと無しとすれば、佛祖の教は皆妄語となるならんと反顯するなり。④ 第七段、問書答書の誠實なることを解す。⑤ 香の芳薰は能く穢を去り、人心を清淨にし、信念を發起せしむ、佛前に燒き、一は佛に供し、一は心を淨む。⑥ 洋嶼の雲門庵なり。⑦ 切怛は字書に今に合する義なし、蓋し俗語ならん、今茲にては事をなすの煩雜なるをいふ、類書纂要十一に切怛は言語甚だ多なりといへり、今の意に合ふ、切は切に作る可なり。⑧ 繁絮は文章の長きをいふ。

此くの如く工夫を倣せば、將來阿耨菩提に於て成滿すること疑なげん。

又

公、身を富貴に處して而も富貴のために折困せられず、夙に般若種智を植うるにあらずんば焉んぞ能く是くの如くならん。但だ恐らくは中ごろ此の意を忘れて、利根聰明のために障へられ、有所得の心を以て前

直下はそのまゝの義なり。此の病とは知解を指す、此は第三段、知解、障となることを叙す。

衲子は禪僧の異稱、衲、野衲等といふ、これ衲衣を着るが故なり。衲或は衲に作る、衲は補縫なり、即ち布片を縫ひ綴りて作りし袈裟をいふ。

省力とは勢力を省除するの謂にて、省悟の省にあらずと。凡そ修行の人に半熟、已熟、未熟あり、未熟の者は文字言句を著ふが故に努力なし、然るに心を寄せて湛々に工夫せば漸く省力を得、即ち知解を離れ、分別の及ばざる處を省力の處といふ。

本分とは當人の受用すべき者ないふ、草とは本草、料とは祿料なり、即ち豆麥等是れ也、これ馬を飼ふ物料なり、此表より轉じて、衲僧が師家より

書の大意は、知解は障となりて、休歇の地に到るを得ざることを叙す。

第一段、教許す。

折困とは、五欲の順境界に没頭せば、自由を得ざるの謂なり。

第二段、知解は障となることを責む。中とは宿世と今世との中間なり。

曾侍郎の病を擧げて之を責む。

證悟を求むるの心を以て法を摸索し、一物を認得するを有所得といふ、若し所得あらば、正知見現在せざるなり。

頓放は物をほりだすを謂ふ、百丈録に曰く、一切の物も頓放すと。

これは須彌山、放下着の則を指す、曾侍郎本參の話なるが故に。

性命截斷するの端的をいふ、

に在いて頓放すること。故に古人の直截徑要の處に於て一

刀兩段して直下に休歇するに能はず。此の病獨り賢士大夫のみにあらず、久參の衲子も亦然り。多くは肯て歩を退き、省力の處に就いて工夫を倣さず、

只だ聰明意識、計較思量を以て外に向つて馳求す。乍ち知識の聰明意識、思量計較の外に向つて示すに、本分

與へらるる棒喝言句を本分草料といふ。

當面は我が面前に當つての謂ひなり。

安りに計しておもへりの意。

便ち是れ本分の草料なり、知解の輩は示すに、本分の草料を以てするを聞いて直下に喫する能はずして、法の傳授すべきありと謂へりとなり。

第四段、古語を引いて知解を退すべきを證す。物とは対象をいふ、却とは達摩のいはゆる外諸縁を息め、内心、喘ぐことなき類の工夫なり、已熟の人は能く所縁の境もて空と覺する故に、物を逐はず、縁境中に坐して而も常に縁境を却く。

大統は先、都てといふ義なり、綱宗は綱要宗旨にて肝要の謂なり。句を讀云は、碧岩の評に云く、未透底の人は句に參

するより、意に參するに如かず、透得底の人は意に參するより句に參するに如かずと、意は疑ひ證悟の分あるも句を識らざるべからずとなり。岩頭の八字の語は百不思議を引かんと爲なり、これ侍郎の利根の病を治するを以ての故に。

居頂とは大般若五百八十、布施波羅蜜多品に出づ、得住とは楞伽の自得本住法これなり。

歴々は分明の義なり、惛は亂想を破す、即ちうっかりとせぬをいふ。

此等は已熟の人の物を却くる様子なり。

恁麼は指示の詞にて「そんな、こんな等の意あり、恁麼地に住着せば便ち不恁麼なり。

これ便ち外諸縁を息め、内心喘ぐことなき様子なり。

智論十一に曰く、喻へば火燭

の如し燭るべからず、手を焼くを以ての故に、般若の相も亦此の如く燭るべからず、火を以て邪見を燒くが故に。火燭着とは時若を認着するをいふ。

此れ義理や知解の通ずる處にあらず、若し向傍すべき處は般若にあらず、全身、火燭中に飛入りて初めて得べし。

第五段、聰明智慧、障をなす人を引いて證す。

丹云は淮南子十三に出づ、今は修行の人、種種の見解を起して邪道に墮するを喻ふ。外道二乗は自ら落處を作りて落つ、今は空に落ちんことを怖るるが故に、未だ空に落ちざる已前に早く知解に墮す、空と知解と異なりと雖も、其過失は相同じ。

第二箇、引證、江西は古の揚州の地。

の草料を以てするを聞いて、多くは是れ 當面に
に蹉過して、將に 謂へり從上の古德實法の人
に與ふる有りと、趙州の放下着、雲門の須彌
山の類の如き是れなり。巖頭の曰く、「物を却
くるを上となし、物を逐ふを下となし。」又曰く、
①「大統の綱宗は句を識らんことを要須す。」と、
甚麼かこれ句、百不思の時、喚んで正句となす、
亦是 居頂といひ、亦是得住といひ、亦是 歷
歴といひ、亦是惺惺といひ、亦是 恁麼の時とい
ふ。恁麼の時を將て等しく、一切の是非を破す、
纔かに 恁麼なれば便ち恁麼にあらず、是句も
亦刻り非句も亦刻る。一團の火の如くに相
似たり、觸著すれば便ち燒く、甚麼の 向傍の
處かあらん。今 時の士大夫、多く思量計較を
以て窟宅と爲し、恁麼説話を聞いて便ち道ふ、

- ① 呂は姓、名は本中、字は居仁、道を妙喜に問ふ、官は翰林に至る。
- ② 此病とは空に落ちんことを怖るる病なり、侍郎に託して言ふ。
- ③ 渠とは居仁を指す、竹思とは思惟し黙するなり。
- ④ 計較安排を喝破するなり、これ大惠の氣風なり。
- ⑤ 茫然に長水疏に曰く、「冥昧にして明ならざるなり」と、之れ仁居なり。巴鼻とは明の獨立云く、「唐人の俗談なり、巴とは鼻端の把るべきに依つて言ふ」と、碧岩古鈔に云く、「巴鼻とは來由の謂なり、又取得の謂なり」と。
- ⑥ 第三節、上を結んで、勸策す。
- ⑦ 知解を混絶して百不思の如く工夫をなさしむ。
- ⑧ これ源に達ひし境界なり。
- ⑨ 第六段、有所得を破す、中に
- ⑩ 今は正しく破す。
- ⑪ 久遠の義を謂ふ、彌勒下生經云云す。
- ⑫ 次に古語を引いて證す。傳燈九に傳あり。
- ⑬ 般若の靈光は神妙にして量り難きを神光といふ、其靈光は凡夫に在りても聖者にありても昭昭として明なれば不昧といふ。今此には「知解を存すること莫れ」の一句肝要なり。
- ⑭ 第七段、古德の語を引いて知解葛藤を斷す、之に三節あり、初に知解を遣る。古德とは保寧禪師を指す、保寧錄上堂云云。
- ⑮ 第二節、大惠、上の語を評す、一等とは之に過ぐるなきをいふ。
- ⑯ 泥は物を汚すの義をとる、今は人に接するに方便言句を以てするをいふ。即ち本分向上に坐せず濁に下るなり。

空に落つること莫しや否やと。喩へば 舟未だ
翻らざるに先づ自ら水跳り下り去るに似たり、
此れ深く憐愍すべし。近 江西に至つて 呂
居仁を見る、居仁、心を此の段の因縁に留むる
こと甚だ久しけれども、亦深く 此の病あり、
渠豈に是れ聰明ならざらんや。某嘗て之れに
問うて曰く、「公、空に落ちんことを怖る、能く
怖るるを知る者は是れ空か、是れ不空か、試に
道へ看ん。」渠佇思して計較祇對せんと欲す。
當時使ち 一喝を興ふ、今に至るまで 茫然と
して巴鼻を討ね著す。此れ蓋し悟證を求むる
心を以て前に在つて頓放して自ら障礙を作す、
別事に干るにあらず。公、試に 此くの如く工
夫を做せ、日久しく月深けて自然に 築著磕
著せん。若し心を將ちて悟を待ち、心を將つて

- ① 念過とは暗記の謂なり、意は此の語を暗記するのみにて仔細に看すとす。鸚鵡、煎茶と叫ぶ、茶を興ふれども、もと知らざるの類なり。
- ② 第三節、前を結んで後を生ず。
- ③ 一截云云は上の一刀兩斷の語に應ず。四路とは有心、無心言語、寂默を指す。葛藤とは文字言句をいふ。
- ④ 淨裸々とはあはだかなり、裸は裸に通ず。
- ⑤ 據り取るべきもの無きをいふ。
- ⑥ 第八段、古人の因縁を引いて、此事は知解の及ばざることを證す。聯燈十、傳燈十二などに傳あり。
- ⑦ 竹椅の類。
- ⑧ 善智云云は「向ふさまに、むなぐらなとらへて」といふ義なり。
- ⑨ 頌頌は合點した合點したとの意なり。
- ⑩ 推出は、彌燈に托開に作る。
- ⑪ 勝様は、有云く、勝は辻札の類なり、言句に涉らざるをいふ。
- ⑫ 心を留めざるをいふ。
- ⑬ 忘念鹿動の散亂心をいふ。
- ⑭ 手脚を縛却すとは、善智に據住の語に應ず、意は灌漑は計較分別なきが故に據住せられて悟る、若し悟を待ち證を待たば分別計較に涉るなり。
- ⑮ 一遭は一周の義なり。
- ⑯ 第九段、知解のために名を安するなり、名とは識情をいふ。
- ⑰ 安排とは安處排列の謂にて、次第に並べ置くをいふ。
- ⑱ 生死云云は科擧婚官に乘る、曾侍郎之を苦となすが故に。
- ⑲ 之は上の計較安排を破す、因に從前の罪業を恐るるを破す。
- ⑳ 裏許は識情、知解を指す。

休歇を待たんと欲せば、脚下より參じて、彌勒下生に到るも亦得悟すること能はず、亦休歇することを得ること能はず、轉た迷悶を加へんのみ。^①
 平田和尚曰く、^②「神光味ます、萬古の微猷、此の門に入り來つて知解を存すること莫れ。」又、古徳の曰く、「此の事は有心を求むべからず、無心を以て得べからず、語言を以て造るべからず、寂黙を以て通すべからず。」^③
 此れは是れ第一等、^④泥に入り水に入る老婆の説話なり。往往に參禪の人只だ恁麼に、念過して、殊に子細に是れ甚の道理と看す。^⑤若し是れ箇の筋骨ある底、聊か擧著するを聞いて、直下に金剛王寶劔を將つて、^⑥一截に此の四路の葛藤を截斷するときは、則ち生死の路頭も亦斷え、凡聖の路頭も亦斷え、計較思量も亦斷え、得失是非も亦斷ゆ。當人脚跟下、^⑦淨裸裸赤灑灑として、沒可把ならん。豈快ならざらんや、豈暢ならざらんや。見すや、^⑧昔日灌谿和尚、初め臨濟に參ず、濟來るを見て便ち繩床を下つて、^⑨葛智に擒住す。灌谿、便ち云く、「領領、濟、その已に徹することを知つて便ち、^⑩推出して更に言句の之れが與に商量する無し。恁麼の時に當つて、灌谿、如何が思量計較し祇對し得ん。古來幸に此くの如き

^① 維摩經法供養品に云く、悟に依つて義に依らず、理に依つて識に依らず、法に依つて人に依らず云々と。南本涅槃經六にも出づ。今は之に反す故に味却と云ふ。
^② 本地の風光は現象界に就ていひ、本來の面目は人に就ていふ、其義は同じ。法のありの儘の處をいふ、妄念分別を離れたる正智の照す所をいふ。
^③ 第十段、識を轉じて智と成すをいふ。
^④ 鼻孔は文字は鼻の穴なり、自分の眼にて自分に見易からず、故に禪語に本分の事に比す、佛果禪師曰く、「始めて知る鼻孔もと面上にあることをしゝの類なり。
^⑤ 子細に看來れば識情に識情てふ體なし、識情の全體即ち眞空にして妙智なり。
^⑥ 鼻を眞智に喩へ、西を識情に喩ふ。
^⑦ 第十一段、妙智の生死を得ざることを示す。理事不二、情智一如の故に相礙得せざるなり。
^⑧ 他とは空なり。
^⑨ 生死の全體即眞空、眞空即生死なり、故に善を作りて天に生じ、惡を作りて地獄に墮して苦み受く、是れ眞空の妙用にして別に眞空の求むべきなく、生死の認むべきなし。喩へば金を以て個人を作るに、鬼を作れば醜、西施を作れば妍、而も全體は異ならざるが如し。
^⑩ 第十二段、信心を勸むる也。聖人は業縛を被らざるが故に自在なり。
^⑪ 雲門、趙州の兩則の公案を以て相交へて語をなす、巧妙なり。一座とは一箇といふに同じ。

勝様あり、^①如今の人總て將つて、事とせざることを、只だ、^②龜心なるが爲なり。灌谿、當初若し一點も悟を待ち證を待ち、^③休歇を待つ底の心あつて、前に在る時は、道ふこと莫れ擒住せられて便ち悟ると。便ち是れ、^④手脚を縛却して四天下を遶り、^⑤挖いて一遭すれども也た得悟すること能はず、也た休歇を得ること能はず。尋常、計較安、^⑥排する底是れ識情、生死に隨つて遷流する底も亦是れ識情、^⑦怕怖悼惶する底も亦識情、而今參學の人、是れ病なりと知らず、^⑧只管裏許に在つて頭出頭沒す。教中にいはゆる識に隨つて行じて智に隨はずと、^⑨故を以て本地の風光本來の面目を味却す。若し或は一時に放得下して百思量計較せず、^⑩忽然として失脚し、鼻孔を踏著せば即ち此の識情、^⑪便ちこれ眞空の妙智なり、更に別智の得べきなし。若し別に所得あり、別に所證あらば則ち又却つて不是なり。人の迷ふとき、^⑫東を指して西となすが如し、悟時に至るに及んで西に即して便ち是れ東、別に東あることなし。此の眞空の妙智は、^⑬太虛空と壽を齊しうす。只だこの太虛空の中、^⑭還つて一物の他を礙得ること有りや否や。一物の礙ふることを受けずと雖も、^⑮而も諸物の空中に於て往來するこ

とを妨げず、此の真空の妙智も亦然り。生死凡聖の垢染、一點を著くこと得ず、著不得なりと雖も、而も生死凡聖の中に於て往來することを礙へず。此くの如く信得及し、見得徹せば方にはれ箇の出生入死に、大自在を得る底の漢にして、始めて趙州の放下著、雲門の須彌山と少分の相應あらん。若し信不及、放不下ならば却つて請ふ、一座の須彌山を擔取して到る處に行脚し、明眼の人に遇はば分明に、舉似せよ。一笑。

又

老龐云く、「但だ願くは諸の所有を空せよ、切に諸の所無を實とすること勿れ」と。只だ遮の兩句を了得せば、一生參學の事畢らん。今時、一、種剃頭の外道あつて、自眼明かなら

ずして、只管人をして死、猶猶地に休し去り歇し去らしむ。若し此くの如く休歇せば、千佛の出世に到るとも、也た休歇することを得ず、轉た心頭を迷悶せしめんのみ。又人をして縁に隨つて管帶し、情を忘じて黙照せしむ。照し來り照し去り、帯び來り帯び去つて轉た迷悶を加へて了期あること無けん。殊に祖師の方、便を失して錯つて人に指示して、人をして一向に虛生浪死せしめ、更に人をして是の事、管すると莫らしめん。但只恁麼に歇し去り歇し得し來るときは情念生せず。恁麼の時に到つて、是れ冥然として無知なるにあらず、直に是れ惺惺歴歴たりと。遮般底更に是れ毒害、人の眼を瞎却す。是れ小事にあらず、雲門、尋常此の輩を見て把つて、人と傲して看待せず、彼れ既に自

明眼に好き眼を有する人なり、下に一笑といふ故に上を弄語となす。即ち戲謔して須彌山を擔取せよといふなり。或は明眼を法眼、明の人となすも可ならん。一笑は大惠と曾侍耶に系る。
① 擧げは拈起をいふ。
② 此書の大意は、大惠、曾侍耶が邪師の爲に誤まるるを知りて之を破し、邪師に隨はざらしむるなり、その中、第一段に邪師を破せんとして先づ正意を評取す。
③ 意は有を空すれば無に墮し、無を拂へば有に著す、故に喻へば兩方の屏風(とびら)を開いて後、主人公を出すが如く、片屏を開けば他の片屏、碍をなす故なり。
④ 第二段、邪解を列す、四節ある中、初に邪師の解。
⑤ 血脈論に云く、若し自心是れ佛と見ば、剃除鬚髮のみにあらず、白衣亦是れ佛、若し性を見ざれば剃除鬚髮するも亦是れ外道なり」と。止觀輔行十に三種の外道を明す。
⑥ 山海經四に云く、「北戴山に獸あり、狼の如くにして赤眉、目なり、猶與と名く」と。或は猶與は恐懼の貌、有云く、此獸死して人を欺き、近づけば則ち人を食ふ。故に今此には偷心の死せざるに喻ふ。
⑦ 第二節、又一師の邪解を擧ぐ。緣とは對境をいふ、即ち六識を六境に留め、管領住帶せしめて妄情を亡せしむ、而して識情の蠢動暫く伏する故に、妄計して情を亡すと謂へり、其實は皆是れ識情なり。
⑧ 失とは其意味を誤まるをいふ。臨濟和尚の曰く、眼にあつては見といひ云云、又曰く、分れて六和合となる等、此等

は皆用を示して其體を知らしめんと欲するなり、然るに若し之を認めば誤りの甚しきなり。
⑨ 第三節、又一師の邪解、蓋し册子上の語ならん。或は念念馳求の心を歇得すといふの類を引いて、邪師、人に教へて言ふ、既に册子上に此の如くいふ、迷と悟に管すること勿れと。
⑩ 無念無知の處に坐在す、これ識の邊際を認めて是となすなり。迦毘羅外道、八萬劫已前を知る能はず、其知らざる處を以て冥諦となす、之を冥然無知といふ。止觀輔行十云云。
⑪ 遮般底、以上は邪解なり、以下は大惠の破なり、心地に近きが故に更にといふ、更の字力あり、これ眞理に似たるが故に、正理を誤ること甚だしきをいふ。
⑫ 人を邪道に導き、妙悟を捨てて識情に帯びしむるが故に小事にあらず。
⑬ 第四節、總じて上の邪師を破す。
⑭ 俗に所謂大畜生の類なり。佛法を以て人情に當つべからざるをいふ。
⑮ 册子の語を手本となしてとの意。十八史略六に陶穀、太祖に對へて曰く、「様に依つて胡蘆を書す」と。今の文意は、佛祖に言語なし、若し言語あらば則ち人をして成佛せしめざるなし、明眼得意の人は、佛祖深源底を見徹する故に、能く其意を得て其言を取らず、修道の人は宜しく其意を得て邪正を辨すべきを訓ふ。
⑯ 道は知を離れ解を絶するをいふ。
⑰ 第三段、自下正しく大惠の正意を示す。

眼明かならずして、只管冊子上の語を將つて、
 様に依つて人を教ふ、^①遮箇作麼生か教へ得
 ん。若し遮般底を信著せば、永劫にも參するこ
 とを得ず。^②雲門、尋常是れ人をして坐禪し靜處
 に向つて工夫を做さしめずんばあらず。此は是
 れ^③病に應じて藥を與ふ、實に恁麼に人に指示
 する處なり。見ずや黃檗和尚の云く、「我が此の
 禪宗、^④從上相承してより以來、曾て人を
 して^⑤知を求め解を求めしめず、只だ云ふ^⑥學
 道は早く是れ接引の詞なり、然も道亦學ぶべか
 らず、情に學道を存するときは、却つて迷道と
 なる。^⑦道は方所なきを大乘心と名く、此の心
 は内外中間にあらず、實に方所なし。第一に知
 解を作すことを得ず、只だ是れ汝而今^⑧情量
 の處を説いて道となす、情量若し盡くるときは

① 應病等、元來に法に定法なし、
 只だ見法の要を示す。
 ② 禪宗の宗名に就て云く、道宣、
 續高僧傳を編して十科を立つ
 る中の習禪科に、達磨等を收
 むるは甚だ不可、故に林間錄
 上に之を破せり、又佛心宗と
 も稱すべからず、故に道元、
 之を破せり。別に定まりたる
 名なし、或は靈山宗、祇園宗、
 佛眼宗等と稱するも可なり、
 何ぞ只だ佛心宗と云はん、禪
 宗と云ふも他家より稱するの
 み、故に傳心法要に云く、「禪
 宗と言ふは世間に隨順するの
 辭なり、總て宗旨を分つば末
 世の弊風なり」と。
 ③ 從上とは括華微笑よりの以來
 なり。
 ④ 根本を以て末を求め、心を以
 て心を求むる故なり。
 ⑤ 學道と云ふ、早く是れ過失を
 生ずる故なり。蠅の熱鐵の上

を渡るに全體熱鐵なるが如
 し、二なく別なし、二物對立
 して能所を分つが故に了明な
 し。
 ⑥ 方所あらば學ぶべし、求學を
 放下して返照する處に聖人あ
 り、此の如く言ふときは或は
 今時、書を捨てて空しく光陰
 を送る人多し、此等の人を可
 憐愍者と名く。
 ⑦ 情量の處を、一本に情量盡る
 處に作る、即ち識の邊際を認
 めて是となし、以て情量盡く
 る處となす、此に於て八識田
 中に一刀を下して少分の相應
 あらん。
 ⑧ 此は説法に實なきを明す。天
 然眞實にして本來具足す、故
 に天真といふ、虚空の頑鈍な
 るが如くにあらず。
 ⑨ 一向に説かざれば、法堂前草
 深きこと一丈ならん、故に強
 ひて説くのみ。凡そ教宗の徒

心に方所なし、此の^①道天真にして本名字なし、
 只だ世人識らず迷ふて情中にあるが爲に、所以
 に^②諸佛出で來つて此の事を説破す。彌が了せ
 ざるを恐れて權に道の名を立つ、名を守つて解
 を生ずべからず。^③前來所説の^④瞎眼漢、錯つて
 人に指示す、皆是れ^⑤魚目を認めて明珠となし、
 名を守つて解を生ずる者なり、人をして^⑥管帶
 せしむ。此は是れ目前の鑑覺を守つて、而して
 解を生ずる者なり、人をして硬く休し去り歇し
 去らしむ。此は是れ忘懷空寂を守つて、而して
 解を生ずる者なり、歇して無覺無知に到つて土
 木瓦石の如くに相似たり、恁麼の時に當つて、
 是れ冥然として無知にあらず、又是れ錯りて方
 便解縛の語を認めて、而して解を生ずる者、人
 に教へ縁^⑦に隨ひ照顧して惡覺現前せしむるこ

の名相を執するは尙ほ可な
 り、今の我が禪門の徒、起意、
 儒書を穿鑿して空しく一生を
 過す者多し、實に可憐生とな
 す。
 ① 第四段、上の邪解を判す、初
 に總じて判す。
 ② 瞎眼漢とはめくらと云ふこ
 と、漢とは、今人を罵るに用
 ふ、痴漢、風顛漢等といふの
 類なり、或は歇語に用ふるこ
 ともあり、老漢といふが如
 し、蓋し晉の末に胡、中原を
 亂すとき、胡人、中國人を罵
 りて漢といふ、之より始まる
 と、事物紀原十。
 ③ 魚目は方便に比し、明珠は眞
 實道に比す、實道は言句に涉
 らざるなり。
 ④ 舊鈔一に云く、管は思量なり、
 帶は腰帶、喻へば帶の腰を絡
 むが如く離れざるの義、思量
 して捨てざるをいふ。

⑤ 第二節、大惠の批判、此れ情
 識の邊際なり、瞎漢、妄計し
 て以て智中に事を記せざる、
 これ即ち岩頭の所謂百不思議
 境界なりとなす。
 ⑥ 萬境に應ずる毎に、自己を照
 顧せよとなり、緣とは所縁の
 境をいふ。
 ⑦ 龜念暫く止みて、死漢に似た
 るを觸摩情識といふ。故に下
 の王教授に答ふる書に云云。
 ⑧ 此は唯だ疑はざれば足ると云
 ふにあらず、若し疑はずんば
 何れの時に悟徹あらん。
 ⑨ 此は上の邪解の所以を立
 つ、放曠自在等の教を全く不
 是といふに非ず、唯だ方便を
 認めて自然の見に墮するを以
 ての故に邪解となす。
 ⑩ 此は融濟の所謂外、凡情を
 取らず、内に根本に住せず等の
 語を誤るのみ、自然の體を守
 るは此れ根本に住するなり、

と莫れ。遮箇又是れ。獨體情識を認著して、而して解を生ずる者、人に教ふるに但だ放曠として其の自在なるに任じて心を生じ念を動ずることを管すること莫れ。念起念滅本質體なし。若し執して實とするときは、則ち生死の心生せん矣。遮箇又是れ。自然の體を守つて究竟の法となして、而して解を生ずる者なり。如上の諸病、學道の人事に干るにあらず、皆瞎眼の宗師、錯つて指示するに由るのみ。公、既に清淨にして自ら居し、一片の眞實堅固向道の心を存して、工夫の純一不純一を管すること莫れ。但だ古人の言句の上に於て、只管塔子を疊むが如くに相似て、一層了つて、又一層すること莫れ。枉げて工夫を用ひば、了期あること無けん。但だ只だ心を一處に存せば、得ざる

根本に住すとば、不二の法を認著するをいふ。
⑦ 以下は上の語を結し、學者の過にあらず、もと邪師の過なることを判す。
⑧ 第五段、正しく工夫を示す、初めに誡む。
⑨ 此文意は唯だ清淨にして自ら居るのみならず、更に眞實堅固向道の心あらば、縱ひ邪師に逢ふとも、爲に誤らるることなし、人多く堅固の心なき故に皆邪師に誤らるるなり。
⑩ これ此の一篇の肝要なり。
⑪ 大惠は恰も塔を造るが如くに、言句の上に言句を付して重重に解會を生ぜしめんとするに喩ふ、子の字は助字なり。
⑫ 工夫辛苦の無益なるをいふ。
⑬ 第二節、工夫の法を示す。
⑭ 頃地とは大悟の處を形容して言ふ、頃地といふに同じ。
⑮ 此れに二意あり、一は須彌山、

放下着の兩則に於て疑破れずんば、只だ兩則に參じ、餘疑等に直るべからずと。一は兩則に於て疑不破ならば、只だ兩則に參ぜよ、更に或は下語し、或は頌を作りて知見解會をなすべからずと。後の義を是とす。
⑯ 第六段、前の邪師に對して決斷す、上來の件々邪師を破し、雲門を信じて只だ參ぜよと。
⑰ 王老とは南泉を指す、もと王氏の故に。
⑱ これ第四書なり、大意は靜關一如なることを示す。第一段歎許す。
⑲ 四威儀は行、住、坐、臥なり。
⑳ 急流は世間の關を喩ふ。
㉑ 鄙懷は謙して言ふなり。
㉒ 第二段、靜關一如を示す、下三節あり、初に世間の塵勞を厭ふを責む、塵勞とは煩惱の異稱なり、塵は染汚の義、勞

底あること無けん。時節因緣到來して、自然に築著磕著して、噴地に省し去らんのみ。「不起一念還つて過ありや也たなしや。」云く、「須彌山、一物不將來の時如何ん。」云く、「放下著、遮裏の疑破れずんば只だ遮裏に參せよ。更に必ずしも自ら枝葉を生ぜざれ。若し雲門を信得及せば、但だ恁麼に參せよ。別に佛法の人に指似するなし。若し信不及ならば、江北江南、王老に問うて一たび狐疑了つて、一たび狐疑するに一任す。」

① 細かに來書を読むに、乃ち四威儀の中、時に間斷なく公冗の爲に奪はれず。急流の中に於て常に自ら猛省して、殊に放逸せず、道心愈久しく愈堅固なるを知る、深く鄙懷に愜

は擾惱勞役なり、即ち世の雜務に由つて起る煩惱は、吾人の身心を汚し驅役する故に名く。
① 前縁は前生の縁なり、即ち前生にて半ば世縁を結び、半ば世間の塵勞を食る等なり。
② 第二節、引證、傳燈二十四祖摩訶多羅尊者の偈なり。流とは生死の流なり。
③ これ亦生死をいふ。
④ 淨名は維摩詰の譯名なり、これ維摩經佛道品の文なり。高原陸地は靜に喩へ、卑濕淤泥は關に喩ふ。
⑤ 釋尊、或は達磨を指して老胡といふ。唐高僧傳二。
⑥ 華嚴經六、如來現相品、演義鈔云。
⑦ 第三節、關中に靜を得べきことを明す。
⑧ 好惡底これ何物ぞと看よとなり。

⑨ 靜關の差別を超越するが故なり。
⑩ 第三段、贊歎、提擲す。
⑪ 第四段、靜關一如を示すの意を叙す。
⑫ 洪の字臨濟録には忙に作る、楞嚴五に云く、阿陀那が微細の識なり、習氣暴流の如し、と、今は迷妄の人をいふ。
⑬ 惡業擔子は吾人の形骸をいふ。
⑭ 第五段、前書を擧げて結す。
⑮ これ第五書なり、大綱は、古人の方便を解することを隨喜す。第一段に讚許す。
⑯ 喘ぐこと無しとは心念間斷なく相續するを喩ふなり。
⑰ 第二節、具さに大惠も侍郎に同することを述ぶ。
⑱ 漆桶輩とは無眼子を罵る言なり、楞伽經に云く、人の曠劫の無明結習の膠固なること、恰も漆を貯ふ桶の如し云云。

へり。然るに世間の塵勞、火の熾然なるが如し、何れの時は是れ了せん。正に闇中に在つて竹椅蒲團上の事を忘却することを得され。平昔、心を静勝の處に留むることは、正に闇中に用ひんことを要す。若し闇中に力を得ずんば、卻つて曾て静中に在つて工夫をなさざるに似て一般なり。前縁駁雜にして今此の報を受くるの歎ありと承はる、獨り敢て命を聞かず、若し此の念を動するときは道を障へん。古徳の云く、「流に隨つて性を認得すれば、喜もなく亦憂もなし。」淨名に云く、「譬へば高原陸地に蓮華を生せず、卑濕淤泥に乃ち此の花を生ずるが如し。」老胡の云く、「眞如は自性を守らず、縁に隨つて一切の事法を成就す」と。又云く、「縁に隨ひ感に赴いて周からずといふことなし、而も常に此の菩提座に處す」と。豈に人を欺かんや。若し静處を以て是となし、闇處を非となさば、則ち是れ世間の相を壞して而して實相を求め、生滅を離れて而して寂滅を求む。静を好み闇を惡む時、正に好し力を著くるに、驀然として闇裏に静時の消息を撞翻せば、其の力よく竹椅蒲團上に勝らんこと千萬億倍せん。但だ相聽せ、決して相誤らざることを。又承はる老龐の兩句を以て行住

- ① 正法眼藏三に衆に示すなり。年譜紹興四年に出づ。
- ② 楞嚴十、同釋要鈔六に出づ。
- ③ 湛入合湛と方便を捨てざるとの兩段。
- ④ 第三段、隨喜して助激す。左右はおそばしゆるの如し、或は足下等といふが如し。
- ⑤ 諸聖の語は廣しと雖も、今正しく達磨を取る、諸異とは種種といふに同じ。
- ⑥ 猶ほ把と通ず、此は此事の端緒を得て少分の相應あるをいふ。
- ⑦ 上の方便門の語に應ず、已に捨てざれば則ち病となす、何ぞ捨てざるを慮らんや、既に方便を借つて道に入ることを知る、何ぞ捨てざるを慮らんや、既に方便を借りて道に入るを知る、何ぞ道に入らざるを慮らんやとの意を含む。
- ⑧ 方便門を借りて而も方便門を守らざるを此の如しといふ。
- ⑨ 竹篋子話は、大惠普說下、善灯十五等、一口吸盡の話は、傳燈八龍居士章に出づ。
- ⑩ 柏樹子話は趙州録に二則を載す、普通にも用ふるは初の則なり、全篇を知らんと欲せば本録を見よ。
- ⑪ 伎倆とは智謀才覺をいふ、或は能巧多藝なりと、即ち偽項を作る等をいふ。
- ⑫ 提は其の耳を提くなり、擡は拾取なり、提擡に同じ。
- ⑬ 第四段、悲覺一如を示す。
- ⑭ 從容は舒緩の貌、或は轉じて、丁寧の義とす。
- ⑮ 證を引くなり、これ大般若第三百三十、行方便品の文なり、舍利弗とは舍利弗多羅の略、鷲子と譯す、佛十大弟子の中智慧第一の稱あり、父は帝沙、母を舍利と名く、那蘭陀に生る、大智度論に云く、「摩陀羅

坐臥の銘箴と爲すと。善加ふべからず、若し正しく闇の時に厭惡を生ずるときんば、乃ち是れ自ら其の心を擾すのみ。若し動念の時只だ老龐の兩句を以て提擡せば、便ち是れ熱時一服の清涼散ならん。公、決定の信を具す、是れ大智慧の人なり、久しく静中の工夫をなす、方に敢て這般の話を説く、他人分上に於て則ち不可なり。若し業識 茫茫たる増上慢の人の前に向つて此の如く説かば、乃ち是れ他の 惡業の擔子を添せん。禪門種種の病痛、已に前書に具にす、識らず曾て子細に理會するや否や。

論すことを承はる、外諸縁を息め、内 心喘くと無うして以て道に入るべし、是れ方便門なり、方便門を借りて以て道に入るは則ち可なり、方便を守つて捨てざる時は則ち病となると。誠に來語の如し、山野之を讀んで歡喜踊躍の至りに勝へず。今諸方 漆桶の輩、只だ方便を守つて捨てず、實法を以て人に指示するが爲に、故を以て人の眼を瞎すること少からず。所以に 山野、邪正を辨する説を作つて以て之を救ふ。近世魔強く法弱くして、湛 入合湛を以て究竟とする者、勝けて數ふべからず。方便

を守つて捨てずして宗師たる者麻の如く粟に似たり。山野、近ごろ嘗て禪子輩の與に此の兩段を擧ぐ、正に來書の所説の如くにして一字を差はず。左右、心を般若の中に留めて念念間斷せざるに非ずんば、則ち從上の諸聖諸異の方便を洞曉すること能はず。公、已に欄柄を捉著す、既に欄柄手に在ることを得ば、何ぞ方便門を捨てずして道に入ることを慮らんや。但だ此の如く工夫を做し、經教并に古人の語録、種種の差別言句を看んも、亦只だ此の如く工夫を做せ、須彌山、放下著、狗子無佛性の話、竹篋子の話、一口に西江水を吸盡するの話、庭前柏樹子の話の如きも、亦只だ此の如く工夫をなせ、更に別に異解を生じ、別に道理を求め、別に伎倆を作すことを得ざれ。公、能く急流の中に向つて時時に自ら此の如く提掇して、道業若し成就せざるときは、則ち佛法に靈驗なし。記取せよ記取せよ。承はる、夜夢に香を焚いて山僧が室に入つて甚だ從容すと。切に夢の會をなすことを得ず、須らく知るべし、是れ眞の入室なることを。見すや、舍利弗、須菩提に問ふ、夢中に六波羅蜜を説くは、覺めたる時と同じきか別か。須菩提云く、「此の義幽深なり、吾れ説くこと能はず、此の會に彌勒大士あり、汝彼に往いて問へ」と。咄、漏逗少からず、雪竇の云く、「當時若し放過せずんば後に隨つて一箭を與へん、誰れをか彌勒と名け、誰れか是れ彌勒なる者、便ち見ん冰銷瓦解するを。咄、雪竇も亦漏逗少からず。或は人あつて、只だ曾待制、夜夢に雲門が室に入るが如きんば、且く道へ覺むるの時と同じきか別かと問はば、雲門即ち他に向つて道はん、誰れか是れ入室の者、誰れか是れ入室を爲す者、誰れか是れ夢を作す者、誰れか是れ夢を説く者、誰れか是れ夢の會を作さざる者、誰れか是れ眞の入室の者。咄、亦漏逗少からず。

又
來書細かに讀むこと數過、鐵石心を辨じ決定の志を立てて、肯て草草ならざることを見るに足れり。但だ此の如く崖めば、臘月の三十日に到つて亦能く閑家老子と厮抵し、更に頂門の眼を豁開し、金剛王寶劍を握つて、毘盧頂上に坐すと説くことを休めよ。某嘗て方外の道友に謂つて曰く、「今時學道の士、只だ速效を求めて錯り了ることを知らず。却

善法を修するに、勇悍に純一にして間斷なく進趣するをいふ。五に禪定とは一心不乱にて、環境の爲に心をかき亂さるをいふ。六に智慧とは、諸佛の覺母なるが故に、之を修研して諸法の性相を觀照し、下つては能く善惡邪正等を分別するをいふ。

須菩提は此に善吉、また空生と譯す、釋尊十大弟子の中の解空第一の弟子と稱す、此人の生るる時に家宅の諸器具等皆空となりし故に空生と名け、又家人驚いて生れし時の奇瑞を相占師に相せしに、これ吉相なりと答へしかば、又善吉と名けしと。此人は天性慈善にして、諍を好まず出家して道を得、慈心を起し、無諍三昧に入り常に善業を行ひしかば、又名けて善業と稱し

王に一女あり、その眼、舍利弗(爲鷲)の眼に似たり、従つて此女を舍利と名く、帝沙に嫁して一子を産む、その世舍利の産む所なれば舍利弗と命名す」と、弗多羅は子と譯す。

波羅蜜とは度、又は到彼岸と譯す、現在の不自由な苦惱多き生活を離れて、自由にして安穩なる境遇即ち涅槃の岸に到るが故なり。之に六ある故に六度といふ、一には布施、これに二あり、財施と法施とにして他に肉肉、靈的慰安を與ふるをいふ。二に持戒とは、諸惡を防止して身、口、意の行業を正しくするをいふ。三に忍辱とは、忍耐にして他より打罵等を加へらるるも、安忍して瞋恨せず、又順境遊境の爲に心を奪はれ亂されざるをいふ。四に精進とは勤勉にして肉體に於て精神に於て、

つて謂ふ、「無事にして、縁を省き、靜坐して體究す」と、爲れ空しく時光を過す。如し幾卷の經を看よ、幾聲の佛を念じ、佛前に多禮幾拜して、平生所作底の罪過を懺悔して、閻家老子の手中の鐵棒を免れんことを要せんには、此れは是れ愚人の所爲なり。而今、道家の者流、全く妄想心を以て、日精月華を想ひ、霞を呑み氣を服し、尙ほ能く形を留め、世に住して寒暑に逼めらるることを被らず、況や此の心此の念を回して、全く般若の中に在らんをや。先聖明明に言へることあり、喩へば、太末蟲の處處に能く泊れども、唯だ火簇の上に泊ること能はざるが如し。衆生も亦爾り、處處に能く縁すれども唯だ、般若の上に縁すること能はず。苟し念念初心を退けず、自家の心識、世間の塵勞を縁す

たりと。
①彌勒は梵語、味恒履曳(Mahā Maitreya)の訛にして、慈氏と譯す、其母の姓慈なりし故に慈氏と名くといふ、本姓は阿逸多、此に無能勝と譯す、其慈悲及び智慧、餘人の及ぶ所にあらざるが故に名づくといふ。この菩薩は過去の善思佛の許にて發心し、今現に兜率天の内院に居たまひ、釋尊の入滅後、五十六億七千萬年にして成佛して此世界に出で、釋尊の後を補ひ、人天を教化し給ふといふ。大士とは菩薩の異稱なり。
②唯とは人を叱咤し、罵る時に多く用ふる語なり、或は禪の妙旨、言説し難き爲に發することあり。已下は大惠の語なり。漏運とは、多く物の取り亂れたる場合に用ふ。
③當時とは須菩提が答ふる時な

り。
④放過とは「とりはずす」やめるの意なり、これ舍利弗に系る、此義幽深なり。
⑤須菩提を詰るなり、本來名字なし、誰をか彌勒と名けんと。
⑥曾待制とは曾侍郎が前の官名を呼ぶなり。本物紀原四に云く、「唐の永徽五年十二月五日、許敬宗に詔して毎日、制を武德殿に待しむ、此れ始めて待制の名あるなり」と。
⑦これは曾待制これ何物ぞと撻す、或は大惠は何物ぞと撻するなり、入室の者を曾侍郎となし、入室をなまじむる者を大惠となす、入室の儀式を行する者は大惠なるが故に。
⑧第六書、大意は、決定の志を立つれば、必ず靈驗あることを示す。中に第一段は決定の志を證明して向上の機關を證明せず。

る底を把りて回し來つて、般若の上に、抵在し今生に、打つて未だ徹せずと雖も、臨命終の時、定めて惡業の爲に牽かれ、惡道に流落せず。來生に出頭し、我が今生の願力に隨ひ、定めて般若の中に在りて現成受用せん。此れは是れ決定底の事、疑ふべきこと無き者なり。衆生界中の事は學することを著ひざれども、無始時來習ひ得て熟し、路頭も亦熟す。自然に之れを取つて、左右其の原に逢ふ、須らく撥置することを著べし。出世間、學般若の心は、無始時來背違す。乍ち知識の説著するを聞いて、自然に、理會し得ず、須らく決定の志を立て、之れと、頭抵を作すことを著ふべし。決して兩立せず、此の處若し入得すること深ければ、彼の處排遣することを著ひず、諸魔外道、自

②草々は荷且(かりそめ)、容易の義、又雜亂して齊しからざる貌。
③死期の到るを喩ふ、即ち眼光落地の時。
④閻魔王のこと、地獄の王にして常に十八の將官と、八萬の獄卒とを従へて、世界の有情の地獄に來る者を審判し、懲罰して諸の不善業を遮止す、故に遮止、又は靜息と譯す、能く一切の惡を靜息し生類を饒益する故に閻魔法王とも名く。今は閻魔に抵抗すること、即ちに道力の業力に勝るをいふ。
⑤第二段、工夫漸く熟すれば、必ず靈驗あることを明す。
⑥世縁のみにあらず、看經等をも廢するをいふ。
⑦道家に託して靈驗あることを述ぶ。
⑧眞仙通鑑に云く、魏夫人、別疑

に齎す、忽ち四真人あり、來降して各各玉女に命じて咏歌せしむ、曰く上は日中の精を採り、下は黃月華を飲む云云。
⑨第三段、縁を般若に結べば決定して失せざるを述ぶ。
⑩西陽雜俎に曰く、蠅の大なる者、首、火の如し、或は大蠅蠅といふ、茅根の化する所なり」と。百丈錄に曰く、喩へば太末蟲の如し」と。洞山初錄にもこれと同じ文あり。
⑪般若に違かりて親近せざるをいふ。
⑫抵は當なり、的なり、常に般若に念を懸けるをいふ。
⑬打は金銀を鑄るをいひ、又水を汲むをまた打といふ。今は其の意を得ざるを云ふ。
⑭第四段、信を排遣することを述ぶ。
⑮世間の事をいふ。
⑯世間の事に於ては滯なく辨別

然に宣伏せん。生處は放つて熟せしめ、熟處は放つて生ならしむること、政に此れが爲なり。日用做工夫の處、欄柄を捉著して漸く省力を覺せん時、便ち是れ得力の處なり。

李參政に答ふ 漢老問書附

① 近ごろ籌室を扣く、伏して蒙滯を激發することを蒙り、忽ちに省入あり。顧み惟るに、根識暗鈍にして、平生の學解盡く、情見に落つ、一取一捨、壞架を衣て草棘の中に行いて、適に自ら纏繞するが如し。今一笑に頓に釋く、欣幸量るべし。大② 宗匠の委曲に慈を垂るゝに非ずんば、何を以てか此れを致さん。城中に到つてより、著衣喫飯、子を抱き孫を弄し、色々舊きに仍る。既に拘帶の情を亡じ亦奇特の想をな

- ① おしのけること。
- ② 或人、大惠に言ふ「華嚴は解し難し」と、大惠云く「華嚴に離ること久し、故に解し難きなり、宿世に親近せざれば今世に於て般若を理會せず」と。今も亦其意なり。
- ③ 頭抵は牛の頭を打ち合はすが如きをいふ。
- ④ 般若は世間を指す。
- ⑤ 著ひずは用ひずと同じ。
- ⑥ 入得すること深しの語を指す。
- ⑦ 第五段、前書を擧げて雍容として通らざるをいふ。
- ⑧ 省力とは、工夫提擲の力、得方は得悟の力なり。
- ⑨ 宋史列傳百三十四に李邵の傳あり、又會元二十にも見ゆ。
- ⑩ 第一段、激發を謝す。
- ⑪ 善室は師家所居の處を稱して
- ⑫ 蒙昧鈍滯なり。
- ⑬ 省悟入得なり。
- ⑭ 已下、前非を懺悔す。根識は根器、識知なり。
- ⑮ 妄情見解。
- ⑯ 破れ綿なり。
- ⑰ 一笑とは李參政の省入の處、此二字、書中に多くあり、誤りに放過すべからず。
- ⑱ 頓に釋くは疑の釋けるをいふ。
- ⑲ 大宗は謝辭なり。
- ⑳ 此を致すとは省入の處を指す。
- ㉑ 第二段、自の得力を叙す。城中とは泉州を指す。
- ㉒ 色色は事事物物の上をいふ。
- ㉓ 悟得の處に於て奇特の想をなさざるなり。
- ㉔ 舊障とは煩惱なり、即ち從來の惡習煩惱なり。
- ㉕ 別に臨んで云々、第三段、重れて提誨を請ふ。

さす、其餘の 夙習舊障、亦稍輕微なり。別に臨んで叮嚀の語、敢て忘せず。重ねて念ふに始めて門に入ることを得たれども、而も大法未だ明かならず、應機接物、事に觸れて未だ礙なきこと能はず、更に望むらくは、以て提誨して卒に所至あらしむることあらんことを。庶はくは法席を玷すこと無からんことを。

示諭す、城中に到つてより、著衣喫飯、子を抱き孫を弄する、色々舊きに仍る、既に拘帶の情を亡じ、亦奇特の想をなさず、宿習舊障、亦稍輕微なりと。三たび斯の語を復して歡喜踊躍す、此れ乃ち學佛の驗なり。儻し過量の大人、一笑の中に於て、百了千當するに非ずんば、則ち吾家に果して不傳の妙あることを知るこ

- ① 玷の字、けがすしと點すべし。
- ② 第一段、現胎長養せば自然に應機明白なることを叙す、已下四節あり、初には來書を擧げて總嘆す。
- ③ 第二節、妙道を自悟せることを叙す。過量は出格の義。
- ④ 事事物物に當つて大悟の處あるを指す。
- ⑤ 妙悟の處は他人に傳へ與ふべからざる故に、不傳の妙といふ。
- ⑥ 下の富樞密に答ふ書に云云す、即ち初は李參政が默照邪禪を呵するを聞いて信ぜざりしが、後に悟りてより疑はず云云と。
- ⑦ 大惠の前には一切普法門なるが故に。
- ⑧ 光明とは智慧なり、助説は大惠の默照を破するを助くとも疑念を壞すべからずといふなり。
- ① 傳とは師家にかゝる、學とは學者に乘るなり。
- ② 頭の字は助字。
- ③ 第三節、佛語に契ふを歎す。
- ④ 復云は極歎の辭なり。
- ⑤ 黃面老子とは、釋尊を稱したる言なり。
- ⑥ 因縁に依りて生じたるものを有爲の法といふ。その實有にあらず、有に似て現生せる事物を、妄りに實有なりと執着せられたる物を虛妄の事といふ。
- ⑦ 上の無言説に著せずの語に係る。
- ⑧ 暗とは、佛語、菩薩の語を見聞せざれども暗暗に合すと也。
- ⑨ 波旬とは、又は波卑夜とも書す、此に惡、障礙、善等と譯す、魔王の名、欲界天の頂に住し、大象に乗り百臂を有し、種種

と能はず。若し爾らすんば、疑怒の二字の法門、盡未來際終に壞すること能はじ。太虚空をして雲門が口となし、草木瓦石皆光明を放つて道理を助説せしむるとも、亦奈何ともせじ。方に此の段の因縁を信す、傳ふべからず學ぶべからず、須らく是れ自ら證し、自ら悟り、自ら肯ひ、自ら休して、方に始めて徹頭なるべし。公、今一笑、頓に所得を亡す、夫れ復た何をか言はん。黃面老子曰く、「衆生の言説する所、一切有爲虚妄の事を取らず、復た言説の道に依らずと雖も、亦復た無言説に著せず。」し、來書の所説、既に拘滯の情を亡じ、亦奇特の想を作さずと、暗に黃面老子の所言と契合す。是の説に即する者を名けて佛説となす、是の説を離る、者は即ち波旬の説なり。山野、平昔大誓願あり、寧ろ此の身を以て一切衆生に代つて地獄の苦を受くるとも、終に此の口を以て佛法を將て、以て人情と爲して、一切の人の眼を瞎せじと。公、既に慙廢の田地に到つて、自ら此事、人に從つて得ざることを知らば、但だ且く舊に仍る。更に大法の明未明、應機の礙不礙を問ふことを須ひされ。若し是の念を作さば則ち舊に仍らず。承はる夏を過して後、方に復た出づべし

奇異の相を現じ、常に其子女を人界に下して、惡人を煽動し聖者を惱ます、釋尊の菩提下に修道し給ひし時に、障礙を加へたるものはれなり。
 ④ 第四節、上來の稱贊は人情にあらざるを叙す、山野とは大惠自らを謙遜して言ふ。大誓願とは、年譜十八に、大惠三十七歳の時に此誓願を立つ。
 ⑤ 人情等とは、愛想うけのよき縁に機縁とりをすること、即ち此には李參政が未だ妙悟を得ざるに、既に妙悟せりと偽證せずとなり。
 ⑥ 第二段、他に求問することなからしむ、中に二節あり、第一節に正しく示す。
 ⑦ これは李が書の語を用ふ、大法、無礙法を以て示すを、大無事、眞の無事とす。
 ⑧ 第二節、來書を擧げて、從容として過らざるをいふ。夏と

と。甚だ病僧が意に慍へり。若し更に熱荒馳求して歇すんば則ち相當らず。前日公の歡喜の甚だしきを見て、故を以て敢て説破せず、恐くは言語に傷られんことを。今歡喜既に定まる、方に敢て指出せん。此の事は極めて容易ならず、須らく慚愧を生じて始めて得べし。往々に利根上智の者は之れを得るに力を費さず、遂に容易の心を生じて便ち修行せず、多く目前の境界に奪ひ將ち去られて主宰と作ること得ず。日久しく月深けれど迷ふて返らず、道力、業力に勝つこと能はず、魔其の便を得て、定めて魔の爲に攝持せられて、臨命終の時亦力を得じ。千萬前日の語を記取せよ、理は則ち頓に悟る、悟に乗じて併せ銷す。事は頓に除くに非ず、次第に因つて盡す。行住坐臥切に忘れざるべからず。其の餘の古人種種差別の言句、みな以て實となすべからず、然も亦以て虚となすべからず。久々に純熟せば自然に黙々として自らの本心に契はん、必ずしも別に殊勝奇特を求めざれ。昔水潦和尚、藤を採る處に於て馬祖に問ふ、「如何んが是れ祖師西來意。」祖云く、「近前來、爾に向つて道はん。」水潦纔に近前す、馬祖、欄臂に一踢に踢倒す。水潦覺えず起き來つて、手を拍つて呵々大笑

は春夏の夏なり。
 ② 熱荒は勢甚だしきの謂なり、意は、匆忙として教化を請はば即ち當らず、緩慢地に言ふ故に大惠之を稱美するなり。相當らずとは、道に相應せずといふにあらず、此れ只だ公には似合はすとすの謂なり。
 ③ 第三段、聖胎長養を勧む。
 ④ 菩薩三大阿僧祇劫の修行を要する所故に……
 ⑤ 自己の見解を以て佛祖を較べ看るとは小事なり。拔隊禪師の如きは到る處人の證明を得と雖も、拈華微笑を透得せず、故に敢て自ら肯はざりき。
 ⑥ 色、聲、香、味、觸等をいふ。
 ⑦ 攝持とは狐につかれるが如きをいふ。
 ⑧ 見惑頓断如破石、修惑漸断如藕絲とて、理を障へる煩惱は見性と同時に頓に断せらるるも、貪瞋等の事に迷ふ煩惱は

す。祖曰く、「汝箇の甚麼の道理を見てか便ち笑ふ。」水潦の曰く、「百千の法門無量の妙義、今日一毛頭上に於て底を盡して、^①根源を識得し去る。馬祖便ち他を管せず。雪峯、鼓山の縁熟することを知りて、一日忽然として驀曾に擒住して曰く、「是れ甚麼ぞ。」鼓山釋然として了悟し、了心便ち亡じて唯だ微笑して、手を舉げて搖曳するのみ。雪峯の曰く、「子、道理を作すや。」鼓山復た手を搖して曰く、「和尚何の道理かあらん。」雪峯便ち休し去る。^②蒙山の道明禪師盧行者を趁ふて大庾嶺に至つて衣鉢を奪はんとす。盧公、石上に擲つて曰く、「此の衣は信を表す、力をもつて争ふべからず、公の將ち去るに任す。」明、之れを擧ぐるに動かす。乃ち曰く、「我れ法を求む、衣鉢の爲にするに非ず、願

- ① 頓に斷じ盡す能はざるをいふ。
- ② 第四段、大法明らめずの間に答ふるに二節あり、初に正しく教示す。
- ③ 第二節、古則を引いて示す、傳燈八に潦を老に作る。藤とは拄杖のことなり。
- ④ 擲言とは、むかうさまにむれにあたるなり。
- ⑤ 根源を識得したから、大に笑ひだしたとなり。
- ⑥ かまはぬといふこと、即ち證明せずの意なり。
- ⑦ 鼓山は傳燈十八に出づ、大惠普說四云云す。
- ⑧ 了心も亦亡するなり、これ快活の境界なり。
- ⑨ 東坡詩集廿五に曰く、「火燃ゆるを搖曳といふ」と、今はその様をなすなり。
- ⑩ 蒙山は傳燈四に出づ。
- ⑪ 盧行者とは、南宗の祖第六祖

惠能禪師なり、傳燈五。禪宗に行者といふは、これより始まる。即ち佛知見を開くべく、如法に修行する者を行者といふ。大惠普說二に云ふ、明上座、六祖を趁ふて大庾嶺に至り、衣鉢を奪はんと要す、六祖、其の來意の不善なるを見て、遂に衣鉢を石上に置き、身を草中に蹲る、明、力を盡して提げ起たす、此れ豈に是れ衣鉢に惹きの殊勝あらんや、若し爾らば則ち達磨の所傳返つて捏怪を成す、所以に道ふ、佛性の義を識らんと欲せば當に時節因縁を觀すべしと。蓋し是れ他の悟道底の時節因縁熟せり、驚然提不提、乃ち告げて曰く、「行者、我れ豈に衣鉢の爲に來らんや、願はくば行者、慈悲もて我が爲に佛法を説け云云。

⑫ 信とは、傳法の信、即ち標幟

くは行者開示せよ。」盧公の曰く、「不思議不思議、正當恁麼の時、那箇か是れ上座本來の面目」と。明、當時に大悟し、通身汗流れて泣涙作禮して曰く、「上來の密語密意の外、還つて更に意旨ありや否や。」盧公曰く、「我れ今汝が爲に説くことは即ち密意にあらず、汝若し自己の面目を返照せば、密は却つて汝が邊にあり、我れ若し説得せば即ち密ならず」と。^③三尊宿の三段の因縁を以て公の一笑の中に釋然たるに較べよ、^④優劣何如と。請ふ自ら斷つて看よ、還つて更に別に奇特の道理ありや、若し更に別にあらば、則ち却つて曾て釋然たらざるに似たり。^⑤但だ作佛を知つて佛の語を解せざることを愁ふること莫れ。^⑥古來得道の士、自己既に充足して己が餘を推して、機に應じ物を接

- ③ 印信なり。
- ④ 此は凡夫の人に迫られて、早く詞を變するに同じからず、隨に當つて眞實を呈露す、轉處自由のところなり。
- ⑤ 明上座、惡念を懐き來る、故に善惡を以て答ふなり、衣鉢を奪はんとするは惡念、法を求むるは善念なり。
- ⑥ 密語とは、不思議の語より、本來の面目に至る語は密語なり。密意とは大悟と云ふ處なり、下の道待制に答ふる書中に「密意とは便ち是れ日用得力の處なり」と對見せよ。
- ⑦ 外より内に返へること、即ち本來の面目を照すをいふ。
- ⑧ 第三節、上を結ぶ、大惠はかく、此三段の因縁は公の分上に於て、豈に會せざらんや」と、一笑の一字に當つて言ふ、甚だ巧妙なり。
- ⑨ 優といひ、劣といふことある

べからず。

⑩ 之は前の默黙として自らの本心に契ふの語に應ずるなり。

⑪ これは前の必ず別に殊勝奇特を求めざればの語に應ず。

⑫ 第五段、應接ありてふに答ふ、これ參政が初悟の處に比して言ふ。作佛とは道を悟るをいふ。

⑬ 意は應機接物を苦しむ莫れとなり、直ちに是れ作佛を言ふ、則ち佛は三阿僧祇を歷て成佛し給ひし人、故に語として解せざるなしと、此段は假設して言ふ、深き解をなすなけれ。

⑭ これは大惠意ありて言ふ、李參政、近ごろ省入を得て、聖胎長發未だ熟せざるに、早く應機接物を要むる故に言ふ。

⑮ 餘とは、上の容易の心を生ずるの語に當るなり、これ字眼なり。

⑯ 胡の人なり、漢來とは漢の人

す、明鏡の臺に當り、明珠の掌に在つて、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現するが如し。意を著くるに非ず、若し意を著くるときは、則ち實法の人に與ふるあらん。公、大法に明かに、應機滞り無きことを欲す。但だ且く舊に仍つて必ずしも人に問はざれ、久々に自ら點頭せん。行に臨んで面稟の語、請ふ座右に書して、此の外別に説くこと無れ。縦ひ説くことありとも、公の分上に於て盡く剩語と成らん。葛藤太だ多し、姑く是の事を置く。

① 耶、比る誨答を蒙り、深旨を備悉す。耶、自ら驗する者三あり。一には事に逆順なく、縁に随つて即ち應じて智中に留めず。二には宿習の濃厚、排遣を加へず、自爾として

- ① 來ればとなり。
- ② 此れは上の第二段に應ず。文の意は、求心を休めて聖胎長養せば、應機接物を何ぞ人に問ふを用ひんとなり。必ずしも言は不定の詞、人に問ふも亦可なりとの意あり。
- ③ 古人の語に於て自ら會得の分あらんとなり。
- ④ 第七段、總結して再び囑す。面稟とは、誼會に、稟は命を受くるなりと、畢竟對面の謂なり。
- ⑤ 此書は問書にあらず、大惠の前書に答へしなり、次の答書は別に大惠より與へしものなり。今は第一段、驗を得ることとを叙す。
- ⑥ 凡夫は逆順の境界に於て憎愛の念を長ず、今はそれに對して憂喜せざるをいふ。
- ⑦ 茫は迷昧の貌。
- ⑧ 瞥地はちらりとみる、即ち目を過ぐるなり。
- ⑨ 自味は妄語をいふ、三の靈驗なきに有りとせば、人を味まし自を味ますなり、今は然らず、故に非といふ。
- ⑩ 前書等は第二段、前書の文、別語にあらざるを叙す。
- ⑪ 我が悟處を認めて無盡の法を盡さざるをいふ。
- ⑫ 第三段、事も頓に除くべきことを叙す、此は上の事は頓に除くにあらずとの語を受く。又下の正性、助因の處を引合せて解すべし。現流とは吾人の八識の現行流注するをいふ。又は自心現の煩惱をいふ。
- ⑬ 理は道理なり、李漢の意は、謂く、實に本性中に此の如き事なしと雖も、又命の如く、生滅の垢染を淨除するの道理なきにあらずとなり。
- ⑭ 此書は李邵の書の後、久しうして大惠より李邵に寄するの

輕微なり。三には古人の公案、舊茫然たる所、時に復た瞥地なり。此れ自ら味するにあらず、前書に大法未明の語は、蓋し恐らくは少を得て足れりとなす、當に擴く之れを充つべし、豈に別に勝解を求めんや。現流を淨除するときは、理は則ち無きにあらず、敢て銘佩せざらんや。信の後益瞻仰を増す、識らず日來縁に隨つて放曠、如意自在なりや否や、四威儀の中に塵勞の爲に勝たれざるや否や、寤寐の二邊一如なることを得るや否や、舊に仍る處に於て走作なしや否や、生死の心に於て相續せざるや否や、但だ凡情を盡して別に聖解する無れ。公、既に一笑に正眼を豁開して、消息頓に亡す。得力不得力は、人の水を飲んで冷煖自知

- 書なり。此書の大意は聖胎長養を示す。第一段、問候。信とは、書を寄するを信といふ。
- ② 今、此の放曠とは拘礙なきをいふ、即ち大悟の後の境界なり、前の邪師を指す所の放曠と異れり。
- ③ 道力が業力に障へらるること無きやとなり。
- ④ 一如は猶ほ一體といふが如し。
- ⑤ 舊に仍る等、悟了すれば即ち舊に仍るなり。走作とは拘滯執着をいふ。此の如く數數之を言ふは、利根聰明の人は之を得るに容易の心を生じ、聖體長養を休めて、本との凡夫の如くなることあり、故に大惠、婆心をもてしばしば否否といふなり。
- ⑥ 生死の心とは、取捨憎愛の心なり。
- ⑦ 第二段、聖胎長養を進む、已下二節あり、先づ悟處を擧げて第二節を發せんとする。凡夫の境界の消息なり、生死禍福は皆是れ消息なり。
- ⑧ 正しく長養を勤む。
- ⑨ 正性とは殺、盜、婬、妄の正性なり、助因とは、或は云く、五辛なりと。
- ⑩ 現業とは現在に果報を受くべき作業なり。逆とは犯さざるの謂なり。
- ⑪ 悟理の智見の前には、方便、修證なし、然し差別の事申に出づれば、方便、修證あり。
- ⑫ 古徳とは寒山を指す、唐の太宗の時の人。
- ⑬ 眞實とは樹木の心の堅きをいふ。
- ⑭ 公、試に之を思への語は上に屬する語なり。
- ⑮ 第三段、上の語を結す。
- ⑯ 臘月の扇子とは無用の處を云ふ。

するが如し、然も日用の間、常に黃面老子の所
言に依つて其の正性を劄しくし、其の助因
を除き其の現業に違すべし。此れ乃ち了事の
漢、無方便中の眞の方便、無修證中の眞の修
證、無取捨中の眞の取捨なり。古徳の云く、
「皮膚脱落し盡して唯だ一眞實のみあり、又梅
檀繁柯脱落し盡して唯だ眞の梅檀のみ在るが如
し」と、斯れ現業に違し、助因を除き、正性を劄
しくするの極致なり、公、試に之を思へ。此
くの如きの説話、了事の漢の分上に於ては大い
に一柄の臘月の扇子に似たり。恐らくは
南地寒暄常ならず、也た少くことを得ざらん。
一笑。

江給事に答ふ 少明

人生一世、百年の光陰、能く幾許かある、公、

① 白屋にして家を起して、清要を歴盡す。此れ
は是れ世間の第一等受福底の人なり、能く慚愧
を知つて、心を回らし、道に向つて出世間、脱生
死の法を學す。又是れ世間の第一等、便宜を
討ぬる底の人なり。須らく是れ急に手脚を著け
て、面皮を冷却し、人の差排を受くることを
得ず。自家、本命元辰を、理會して、去處をし
て分明ならしむべし、便ち是れ世間出世間、一
箇了事底の大丈夫ならん。承はるに連日去
つて參政と道話すと、甚だ善し甚だ善し。此
の公、馳求の心を歇得して、言語道斷、心行處滅
を得、差別の異路、古人の脚手を覩見して、
古人の方便文字に、羅籠せらるゝことを被ら
ず。山僧、渠が此くの如くなるを見る、所以に
更に會て之れが與に一字を説かず、恐らくは

① 恐云云、この文甚だ巧妙なり、
南地とは、李邵は泉南に居る
故に言ふ。寒は大悟に比し、
暄は習氣の發するに比す、こ
れ李邵が工夫未だ純一無雜な
らざるを謂ふ、故に扇子を用
ひて此くの如く勸勵すること
眞の大慈悲なり。
② 意は南地は暖國なり、冬月にも
亦扇子を用ふべし、これ工
夫未熟なるときは上來の説話
も亦少くこと得ざるを喻へ、
以て戲謔と成すなり。一笑と
は上の臘月の扇子等の語は戲
謔なるが故に、之を一笑する
なり。
③ 江氏は萬姓統譜三に出づ、給
事は事物紀原五に出づ、云く、
「加官なり」。初め秦漢に別に
給事黃門の職あり、後漢に給
事黃門侍郎左右給事中あり、
殿中に事あるを以ての故に給
事中といふ。此書の大意は善
友に親近し、高德を戀ふべき
を叙す。第一段に他を贊許し
て勸導す。この書は師四十七
歳の作なり。
④ 日屋とは、漢書七十八に師古
云く、「白蓋の屋、茅を以て之
を覆ふ、賤人の所居なり」と。
⑤ 清要、官職緩きを清といひ、
官職緊しきを要といふ、今は
官に依つて清にして要なら
ず、要にして清ならざるをい
ふ。
⑥ 世間の心を回らすをいふ。
⑦ 便宜等は上の受福底の語に應
ず、福祿相共に不足なし。
⑧ 面皮等とは、人情の絶ゆるを
いふ。例せば法然の念佛を勸
むるが如し。
⑨ 差排とは邪師の指示をいふ。
臨濟禪師曰く、「山僧が人に指
示する處の如くんば紙に你が
人惑を受けざらん、ことを要
す、乃至、如今の學者の病は、

不自信の處にあり」と。大較若
四四八に云く、「菩薩に實智慧
あるが故に、人の差排を受け
ず」と。
⑩ これは本命と元辰とにして、
今は之を自己の本分に喩へし
なり。因に一言せば本命とは
人人の生れたる年の干支をい
ふ、その干支に當れる星を本
命星といふ、如何なる人も其
吉凶禍福は、一にその定まれ
る星宿の支配を受けるものと
せり。又元辰とは、人の生る
るや必ず陰陽の二星ありて其
生涯の運命を司配す、その生
年の當年星は、これを本命星
といひ、陽八陰六の推歩によ
りて見出されたるものを元辰
といふ、この二者の一は必ず
陰星にして他は必ず陽星なり
とす云云。
⑪ 理會とは治作(なまめなす)の
謂なり、理解の謂にはあらず。
⑫ 去處とは眼光落地の處をい
ふ。即ち四大(肉體を組成せる
地、水、火、風の四元素)分離
して何れの處に去るか、その
去處を知れとの意。
⑬ 其功成就せば、世出世の事に
明達せる了事の人となり。大
丈夫とは、止觀輔行二の二に
云く、「佛性の理を見る、之を
丈夫と名く」と。
⑭ 第二段、善友に親近すること
を喜ぶ。
⑮ 自下、あて、こすりを言ふなり。
臨濟云く、「馳求の心を歇得せ
ば諸佛と別ならず」と。
⑯ 異路の上は、於て之を言ふ。脚
手とは、古人の垂れ示せし一
機一境をいふ。
⑰ 眞實は那邊に在るかを覩ひ見
て、文字等に迷はされぬとな
り。
⑱ 説かば既に了解せる人を馬鹿
にすると云ふことになるから

他を鈍置せんことを。直に渠が將來自ら山僧と説話せんことを要せんを待つて、方に始めて渠と共に眉毛厮結んで理會することあらん、只だ恁麼に便ち休するにはあらず。學道の人若し馳求の心歇せずんば、縦ひ之れと眉毛厮結んで理會すれども、何の益かあらん、正に是れ癡狂外邊に走るのみ。古人云く、「善者に親近するに霧露の中に行くが如し、衣を濕さすと雖も時々潤あり」と、但だ頻に參政と説話せよ、至禱至禱。古人の垂示の言教を將つて、胡亂に穿鑿すべからず、馬大師、讓和尚の說法に遇ふが如き、云く、「牛に車を駕するに譬ふ、車若し行かすんば車を打たんか、即ち是なる、牛を打たんか、即ち是なる。」馬師之れを聞いて言下に歸を知る。遮の幾句兒の言語、諸方多

- との意。
- ① 眉毛等とは、額を合すなり。
 - ② 已下は李參政に言ふに似て、實は江給事に對して、あてこすりを言ふなり。次の痴狂云云の語も亦同じ。
 - ③ 癡狂等とは、諸賢外道は種種の異見を生ずる故に、しかいふ。明眼の人、外道を見れば則ち痴狂なり、傳燈二十九寶誌和尚の十二時の頌に云く、「縱ひ爾、多聞にして古今に違するも、またこれ痴狂外邊に走る」と。
 - ④ 偽山の警策の文なり、善者とは暗に李參政に擬ふ。
 - ⑤ 至禱とは、書簡文の通語、至視といふに同じ。一説に願ひの辭なり、參政と説話せよとなりと。
 - ⑥ 第三段、張りに古人の語を解する無れと示す。
 - ⑦ 胡亂は俗語なり、未だ出處を詳にせず、訓會に胡は混なり、混の意は、北狄の人滯茫として據なきをとる、又一義に北胡は北狄を指す、みだりがまじきをいふと。
 - ⑧ 已下は情解すべからざるをいふ。第六祖大德慧能一南嶽懷讓、一馬祖道一。
 - ⑨ 傳燈五、南嶽章等に出づ、車は身に喻へ、牛は心に喻ふ。
 - ⑩ 幾句兒とは、數句兒といふに同じ、いかばかりといふ義。
 - ⑪ 如雷等とは奇言妙句を吐くをいふ。
 - ⑫ 雲の如く等とは辯才無礙なるに喻ふ。
 - ⑬ 錯等とは、江給事が諸方の邪師に隨つて杜撰の注解をなすを言ふ。杜撰とは實訓音義に云く、「杜は塞なり、撰は造なり、迷なり、言ふ意は古法に通ぜずして自ら造るなり、杜充庭が佛經を假りて道經を

少説法して、雷の如く霆の如く、雲の如く雨の如くなる底、理會し得ず。錯りて名言を下して語に隨つて解を生ず、舟峯に與ふる書の尾、杜撰の解注を見るに、山僧之れを讀んで覺えず。絶倒す。如來禪・祖師禪を説く底と一狀に領過し、一道に行遣すべし。來頌子細に看過す、却つて前日の兩頌に勝ち得たり。此れより之れを已むべし。頌し去り頌し來らば、何の了期かあらん。參政が如きに相似よ、渠豈に是れ頌を做ることを會せざらんや。何が故ぞ都て一字なき、乃ち法を識る者は懼るのみ。間或は一毛頭を露せば、自然に山僧が痒處に抓著す。出山の相の頌に、「到る處人に逢ふて、驀面に欺く」と云ふ語の如きは、叢林の輿に點眼の薬と作しつべし。公、異日自ら見ん、必

- ① 作るが如しと、ものの格にあはぬを云ふ、即ち没交涉なり。語に隨つて解を生ずとは、牛、車を駕の語に當る。
- ② 第二節、正しく給事の杜撰なるを説く。舟峰は大惠の法嗣なり。
- ③ 絶倒とは歎息の辭、然し今此には笑ふをいふ、潛確居類書八五に「絶倒は大笑なり」と。
- ④ 七帖見聞に云く、「禪に祖師禪、如來禪の二あり、禪機に上中下の三根あり、上根は向上の機、向上の一路は先聖も未だ傳へず、思量に渉らず、義味に墮せざる本來本是の機なり、中根は公案をもつて得法す、所謂狗子無佛性等、公案の一句肝膽に銘すれば、決して妄念に引落されず、此上中の二根を祖師禪と名く。下根は佛經所説の禪法を以て開悟す、これを如來禪と名く。
- ⑤ 達磨は教法に依らずして悟達す、これ祖師所行の心印なるを以て祖師禪と名く。如來禪は經教に依つて禪行を起すをいふ、如來の所説に依るを以てなり」と。仰山云く、「如來禪は師兄の會を許す、祖師禪は未だ夢にだも見ず」と。
- ⑥ 一狀領過とは、方語に衆人同罪の意と、即ち邪師と江給事と一狀に領過するとなり。
- ⑦ 一道行遣は、流罪に託して言ふ、道は路なり、行はおこなふの意。
- ⑧ 第四段、頌を作ることを訓止す。
- ⑨ 些子の義を露はすをいふ。李參政にかゝる。
- ⑩ 江給事が言はんと欲するに、早く李參政が言ふなり。
- ⑪ 佛、處處に會を結び給ふ故に言ふ。
- ⑫ 叢林とは、僧の衆合團體に名

すしも山僧が注破せざるを。某、近ろ公の頓然として改變して、此の事の爲にすること甚だ力めたるを見る、故に此の書を作りて覺えず縷縷たり。

富樫密に答ふ 季 申

示諭す、蚤歳より此の道を信向することを知れども、晩年知解の爲に障へられて、未だ一悟入の處あらず、日夕體道の方便を知らんことを欲すと。既に至誠を荷ふ、敢て自ら外んせず、款に據りて案を結して葛藤す。少許只だ遮の悟入底を求むる、便ち是れ道を障ふる知解にし了れり。更に別に甚麼の知解かあらん、公の爲に障をなす。畢竟して甚麼を喚んでか知解となさん、知解は何れよりか至る、障へらるゝ者は復た是れ阿誰ぞ。只だ此の一

く、即ち大樹の叢生して林となるが如く、僧の集合せるの意なり。祖庭事苑に云く、多比丘一處に和合せるを僧伽と名く、譬へば大樹の叢聚せるを林と名くる如く、諸の比丘和合するを僧と名け、僧の聚まる處を叢林と名くるを得云云し。

此書は大惠五十歳の作。第一段、切誠を許す。蚤は早なり、少年をいふ。一とは少分の謂なり。體とは體達にて道に合するの義、又は道を以て我體となす、即ち自分が道になりざるを體といふ。正しく切誠を許す、既荷とは大惠、樞密の至誠を荷ふなり。款は誠なり、敬むなり、罪人の白狀、心の奥底を顯はすなり。案を結すとは、居家用心辛集に律令體式に合するなりと。第二段、自ら知解を以て障と爲すを責む。已下四節あり、初に知解を求むれば障あることを示す。第三節、臆説。第三節、判斷して生死の一句を結ぶ。此は下の生死の根本に乗る。

句に顛倒三あり、自ら知解の爲に障へらると言ふ、是れ一。自ら未だ悟らすと言ふて甘じて迷人となる、是れ一。更に迷中にあり、心を將つて悟を待つ、是れ一。只だ遮の三の顛倒、便ち是れ生死の根本なり。直に須らく一念不生にして顛倒の心絶すべし。方に知る迷の破すべき無く、悟の待つべき無く、知解の障ふべきなきを。人の水を飲んで冷煖自知するが如く、久久に自然にして遮般の見解をなさざれ。但だ能く知解と知る底の心上に就いて看よ、還つて障へ得るや無や。能く知解を知る底の心上、還つて如許多般ありや無や。從上大智慧の士、皆知解を以て僑侶となし、知解を以て方便となし、知解の上にて、平等の慈を行じ、知解の上にて諸の佛事を作さずといふこと莫し。龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。終に此れを以て惱とせず、只だ他、知解の起處を識得するが爲なり。既に起處を識得すれば、此の知解に即して便ち是れ解脱の場、便ち是れ出生死の處なり。既に是れ解脱の場、出生死の處は、則ち知底解底、當體寂滅す。知底解底既に寂滅すれば、能く知解を知るもの寂滅せずんばあるべからず。菩提涅槃、眞如佛性、寂滅せずんばあるべからず。更

自の字、主眼なり。第四節、用心を示す、これ一刀兩斷の鐔のなり。傳燈三六、澄觀國師傳にあり。此れより富樫密自ら語る。第三段、古德は知解を以て障となさざることを示す。これに三節あり、今は初。維摩經に出づ。平等の慈とは、無縁の慈、即ち違順任運に與樂投苦する、法性同體の大慈悲をいふ。他とは上の大智慧の人を指す。八識を轉じて四智となす、知解の外に解脱の求むべきなし、迷情を轉すれば凡夫即聖者なるをいふ。知解のその儘が寂滅なり、知解を抑へ滅して始めて寂滅なるにあらず、知解分別の全體が即寂滅にして、解脱自在の徳用なりと了得せば、菩提涅槃

に何物の障ふべきあらん、更に何れの處に向つてか悟入を求めん。釋迦老子の曰く、「諸業は心より生ず、故に心は如幻なり」と説く。若し此の分別を離るれば則ち諸の有趣を滅す。僧、大珠和尚に問ふ、「如何が是れ大涅槃。珠云く、「生死の業を造らざる、是れ大涅槃。僧云く、「如何が是れ生死の業。珠云く、「大涅槃を求むる、是れ生死の業。」又古徳の云く、「學道の人、一念も生死を計すれば即ち魔道に落つ、一念 諸見を起すときは即ち外道に落つ」と。又淨名の云く、「衆魔は生死を樂ふ、菩薩は生死に於て、而も捨てず、外道は諸見を樂ふ、菩薩は 諸見に於て動せず。」と、此れ乃ち是れ知解を以て儕侶となし、知解を以て方便となし、知解の上に於て平等の慈を行し、知解の上

禁等も亦寂滅なり、然らば求むべき菩提等なく、復た捨つべき知解もなし、畢竟平等平等にして吾人の四威儀の其まが本地の風光、何の障、悟の論すべきあらんやとなり。菩提とは、佛智、大覺の智慧の梵名にして、覺と譯す、眞如の理を證悟し、道の至極に到達する聖智をいふ。涅槃とは梵語の涅槃那の略、或は泥洹とも書せり、寂滅、圓寂、滅度等と譯す。迷妄を打破して證得する眞理の寂滅にして、生死の苦、煩惱の擾亂無き故に、消極的名を附したるなり。即ち不生不滅の眞理は、常、樂、我、淨の四徳を具へたる圓滿無碍なる絶對的理想境を涅槃といふ。眞如とは一往名に依つて解せば、眞は眞實にして虚妄に非ざることを顯はし、如は如常にて變易

きを表す、即ち常住不變の眞理を眞如と名けしなり、此の眞如は無量の靈能を具し而も自性を固守せざるが故に、能く活動して十界の染淨差別の諸法となる、これ現象即實在、或は吾人の本體、萬有の實體等といふ所以なり。佛性とは、佛陀たるべき靈性と云ふことにて、吾人の本來具有する所の眞如法性を指す。この性は自性清淨にして佛と寸分異なること無きも、凡夫は煩惱の爲に覆蔽せられて之を自覺せず、而し此性を具する故に、吾人も佛陀たるべき資格を有するなり。以上の四は或は體に就き、或は用に就く等各その名を異にするも、畢竟其體は一なり、宗教的に菩提、涅槃、佛性と名け、哲學的に眞如といふなり。

第二段、引證。これ普賢の偈

に於て諸の佛事を作す底の様子なり。只だ他、三祇劫空にして、生死涅槃、俱に寂靜なることを了達するが爲の故なり。既に未だ遮箇の田地に到らず、切に邪師の輩に、胡説亂道して、引いて 鬼窟裏に入れらるることを被つて、眉を閉ち眼を合して妄想を作すべからず。邇來、祖道衰微して此の流、麻の如く粟に似たり。眞に是れ 一言、衆盲を引いて相牽いて火坑に入る、深く憐愍すべし。願くは 公、脊梁骨を硬著して遮箇の去就をなすこと莫れ。遮箇の去就を做す底は、暫く箇の 臭皮袋子を拘得し、住して 便ち以て究竟となすと雖も、而も心識紛飛して猶ほ 野馬の如し。縱然心識しばらく停れども、石の草を壓すが如し、覺えず又生ず。直に無上菩提に取いて、究竟安樂の處に到らん

なり、然し普賢も佛の威神力を假る故に、釋迦といふも妨なし。
② 三有(欲、色、無色の三界)五趣(地獄、餓鬼、畜生、人、天)なり、趣は往到の義にて吾人が煩惱、業の力に由りて往き生るべき處なるが故に名づく。
③ 大珠は馬祖の法嗣なり、傳燈錄六。
④ 生死の邊際を以て、懸崖に手を撒することを示す。
⑤ 古徳は黃檗和尚を指す、傳心法要に云云。
⑥ 生死を計すとは貪、嗔、痴、慢、疑の煩惱を起して計着するなり。
⑦ 諸見とは、身見、邊見、見取見、戒禁取見、邪見なり。或は一異有無等の妄見と見ても可なり、見とは推度の義なり。
⑧ 淨名とは維摩詰の譯名なり、

維摩經五、問疾品に出づ。
① 生死に樂著せざれども、衆生を救濟せんが爲に之を捨てず、常に生死海に住す。
② 菩薩は有無の實相に達する故に、有無に自在を得たまふ。然も衆生、有に著すれば無を以て之を破し、無に執すれば有を以て之を破す、只だ度生の爲に假に有無を立するのみ、故に動ぜられずといふなり。
③ 第三節、上を判結す。
④ 他とは菩薩を指す、三祇とは三阿僧祇耶の略稱、阿は無と譯し、僧祇耶は數の義なれば數を極むるも、人の算數にて知る能はざる大數をいふ、これ一箇の數の名なり。その數は三つなれば三祇といふ。劫も梵語、劫波の略なり、大時分などと譯す、これ亦非常なる大數を顯はす語なり。檀大業

と欲せば、亦難からずや。某、亦嘗て此の流のために誤らる。後來若し、眞の善知識に遇はずんば、幾ど空しく一生を過すことを致さん。每每思量するに、直に是れ、耐耐なり。故を以て口業を惜まず、力めて此の弊を救ふ、今稍非を知る者あり。若し徑截に理會せんと要せば、須らく遮の一念子を、曝地に一破することを得

教にては、菩薩は三祇百劫の長年月の修養をなして自利利他の功德を成滿して至極の佛陀となるものとす。然し時間とは吾人の分別の上に認むるものと法の上に假立したるものなり、其萬法は本来無自性にて互に融通す、隨つて時亦念劫融即すれば、一念即萬年、萬年即一念なり、故に時間の眞相に達して長短を定執せざるを空といふ。此の如く體得すれば、生死、涅槃一如なるを知る、故に寂靜といふ。第四段、邪説を避けしむ、三節あり、初に正し、避けしむ。遮箇の田地とは上の生死涅槃とともに寂靜の語を指す。胡亂に説道すと云ふが如し。情識分別に味着する等はいふ。丹霞和尚の語なり、傳燈十四に出づ。これは邪師の人を導

いて惡道に墮せしむるをいふ。邪師の説法は知解分別なれば耳に入り易し、故に脊骨を立てて、邪師に請られざることを要せよとなり。去就とは身のふるまひをいふ。第二節、邪師の益なきことを顯はす。これ邪師と邪徒とにかゝる。契皮袋子とは、五尺の形骸をいふ、六祖壇經、頓漸品に云す。安樂を以て究竟となすを破す。野馬とは、司馬曰く、春月澤中の游氣なり」と。即ち陽炎をいふ。これ心のむらむらと起るに比す。方便を知らず、枉げて辛苦を費すを諷むるなり。第三節、自ら昔の事を書して邪説を諷す。

眞の善知識とは暗に圓悟を指す。耐耐とは、たへがたし、こらへ、えぬの義、又忍ぶべからずの謂、今此にはをかし、ことといふ意。第五段、工夫の用心を示す。曝地は、正字通に、物の落つる聲なり」と、今は妙悟をいふ、即ち兩地一下の處なり。按は止るなり、據る、控へる、抑へる等にて、種種分別する心を押へて、分別するもの何物ぞと究むる意か。六祖云く、「不思議不思議、此れ按下の處」と。圓悟、大慧、宗風の振はざるを慮りて提擲の手段を下す、然らば話頭することは南宋の時代より始まるなり、然るに年を経るに隨つて一種の格式を成すに至る。無の字の工夫提擲なり。

て、方に生死を了得し方にて悟入と名くべし。然も切に心を存して破ることを待つべからず、若し心を存して破る處に在かば、則ち永劫にも破るとき有ること無けん。但だ妄想顛倒底の心、思量分別底の心、生を好み死を惡む底の心、知見解會底の心、靜を欣ひ鬧を厭ふ底の心を將て一時に、按下して只だ按下の處に就いて、箇の話

意根とは第七識、併し今は意識をもて思慮を遣しうすることとを諷むるなり。馬眉等とは、一機一用をいふ。操は量度なり、帆を落すなりと、根は木の根、要するに今は思念に滯留するの意。無事甲裏とは、無用の處をいふ、部を分けて棚に打擧げて置くなり。事物紀原四に云く、今の崇文に録する所の書、經、史、子、集を具へて、甲、乙、丙、丁の四部となるは、蓋し晋の李充に始まる。充は著作郎となる、時に典籍混雜す、充、類を以て相從へ分つて四部となす、これ蓋しその始なり、魏の武、四庫の圖書を置くに甲、乙、丙、丁に分つて部となす。擧起等とは、師家の擧處に就て、はやがてんするをいふ。擧覺とは、擧起覺悟にて氣を

引き立てること。月の十日とは甚だ早きないふ。第六段、世務、工夫を妨げざるを示す。一郡等の一とは千に對していふ。一郡は幅密が領する所をいふ。千里とは天子の畿内をいふ。事とは水務をいふ。宋史志に云く、天子の事を司るをいふ」と。古人とは臨濟を指すと、而し此文なし、恐らくは意を取るか。茂古林の天平錄三に出づ。これ圓中に於て靜中の工夫をなすをいふ。圓雜の全體、これ靜なるが故に。世法を除いて佛法を求めば、則ち遠くして遠きなり。これは富樫密に答ふる第二書なり、此書は紹興八年の作。第一段、隨喜問訊す。勇猛等の文、法華方便品に出

作爲の際とは、公務の際なり、相應とは此事に相應するなり。第二段、坐禪を好むを退く、二節あり、初に正しく靜坐を好むを斥く。古人とは法雲圓通禪師なり、坐禪儀に出づ。靜燈、普燈に坐禪儀を載せず、百丈清規に之を載す。活計とは、少分理味を嚼み出すをいふ。靜勝とは坐禪をいふ。下に直開公に答ふる書あり。料る所とは、上の私かに慮るに合す。第二節、靜勝坐禪の益なきを言ふ。餘あるの士とは、世事繁多をいふ。塵勞も亦世事紛冗をいふ。人とは邪師を指す。石の草等とは、靜を以て鬧を

頭を看よ。僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無しや。」州云く、「無。」此の一字子、乃ち是れ許多の悪知悪覺を摧く底の器仗なり。

有無の會を作すことを得ざれば、道理の會を作すことを得ざれば、意根下に向つて思量卜度することを得ざれば、揚眉瞬目の處に向つて探根することを得ざれば、語路の上に向つて活計をなすことを得ざれば、無事甲裏に颯在することを得ざれば、舉起の處に向つて承當することを得ざれば、文字の中に向つて證を引くことを得ざれば、但だ十二時中、四威儀の内に向つて、時に提擲し、時時に舉覺せよ。「狗子還つて佛性ありや也た無しや。」云く、「無」と。日用を離れず。試に此くの如く工夫をなして看よ、月の十日に便ち自ら見得せん。一郡千里の

一義中に無量の義を攝し、一聲中に無量の功徳を蔽する故なり。或は遮持と譯す、煩惱等の諸惑を遮離し、法身般若等の衆徳を持達する所なり。

- ① 第三段、真正寂滅を示す。蓋地とは正字通に云く、「超越なり」と。
- ② 一絲等、會元十二、南嶽の雲峯大悅禪師上堂に云く、「若し諸相は相に非ずと見ば、即ち山河大地並に過智なし、諸上座、終日着衣喫飯し、未だ曾て一粒米を飲者せず、未だ曾て一縷絲を挂著せずんば便ち能く大地を變じて黄金となし、長河を攪して酥酪となさん、然も是くの如く着衣喫飯すと雖も、即ち衲僧門下、汗臭氣無きにあらず」と。
- ③ 心を得れば唯だこれ自利利他なり、利他は用、自利は體にして、日輪の出づる時自ら光を合むが如し、施とは施設なり。
- ④ 陀羅尼とは總持と譯す、一字の中に無量の教文を總攝し、一法の中に一切法を任持し、
- ⑤ 如意とは梵語の摩尼の譯名にて寶珠の名なり、故に如意珠とも摩尼珠ともいふ。此珠を所持すれば、願求する所、意の如く此の珠中より顯現するが故に名づく。これ人人本具の珠を喻へしなり。解脱とは無碍、自在の徳用をいふ。凡夫は煩惱業の爲に束縛せら

事、都て相妨げず。古人の云く、「我が這裏は是れ活底祖師意」と。甚麼物か能く他を拘執するあらん。若し日用を離れて別に趣向あらば、則ち是れ波を離れて水を求め、器を離れて金を求めば、之れを求むれば愈遠し。

竊かに知る、日來此の大事因縁を以て念となすと。勇猛精進、純一無雜なること喜躍するに勝へず。能く二六時中、熾然たる作爲の際、必ず相應することを得るや未だしや、寤寐の二邊一如なることを得るや未だしや。如し未だしならば、切に一向に沈空趣寂すべからず。古人喚んで黒山下の鬼家の活計となす、盡未來際も透脱の期あること無けん。昨に來誨に接するに、私かに慮る左右必ず已に靜勝三昧に耽著することを。直閣公を詢ふに及んで、乃ち知る果して料所の如くなることを。大凡世に涉つて餘あるの士、久しく塵勞の中に膠く。忽然として人指して、靜默の處に向つて工夫を做さしむることを得て、乍ち胷中無事なることを得れば、便ち認著して以て究竟安樂となす。殊に知らず、

- ① れて自由を得ざるが、一たび佛陀の正教に依りて煩惱を離れ理を證すれば、直に生死の迷苦を出離して自在を得る故に、如意解脱門といふ、而も無限の自在なるが故に無盡藏といふなり。華嚴經世主妙嚴品及び入法界品に出づ。
- ② 能事とは、能は獸なり、筋力ありて善く木に緣る故に、今その事を善くするを能といふ。事苑二の十三丁。
- ③ 故らに造作して然らしむるにあらずと。常分とは、もとより此の如しとの意。
- ④ 第四段、預め悟後の境界を叙して勸勵す。期とは大慧が期するなり。
- ⑤ 皎然とは大悟の境界をいふ。
- ⑥ 出世の事成就をいふ。
- ⑦ 世間法成就をいふ。再とは宋史本傳を案するに、紹興の年は大惠は徑山に住す、公は衢

石の草を壓すに似たることを。暫く消息を絶することを覺ゆと雖も、奈何せん根株猶ほ在ることを。寧ろ證徹寂滅の期あらんや。眞正寂滅現前せんことを得んと要せば、必ず須らく熾然たる生滅の中に於て、驀地に一跳に跳出すべし。一絲毫を動せず、便ち長河を攪して酥酪となし、大地を變じて黄金となし、機に臨んで縱奪殺活自由、利他自利、施として可ならずといふこと無けん。先聖喚んで無盡藏陀羅尼門、無盡藏神通遊戯門、無盡藏如意解脫門となす。豈に眞の大丈夫の能事に非ずや。然も亦然らしむるに非ず、皆吾が心の常分のみ。願くは左右快く精彩を著けよ、①決めて期す此に於て廓徹大悟して、胷中皎然として百千の日月の如く、十方世界、一念に卽了にして一絲毫頭の異想なくして、始めて究竟と相應することを得んことを。果して能く是くの如くならば、豈に獨り生死の路上に於て力を得るのみならんや。異日再び鈞軸を乗つて、君を堯舜の上に致すこと、諸れ掌を指すが如くならんのみ。

又

示諭す、初機、少しく靜坐工夫を得るも、亦自ら佳なりと。又云く、

州に在り、而して此時は既に職を辭せし後か。鈞軸とは、不明なるも、約は重なり、樞密は中書と相對して重き官なり、其の樞柄を採ること、車軸を推すが如し、故に斯くいふ。

① 諸掌とは明かにして且つ易きをいふ。論語八佾篇に出づ。

② これ第三書なり、第一段、靜勝に認著する初機を叫す、之に三節あり、初に正しく呵す。

③ 宮が自ら靜勝に耽著して、而も之を知らざるを喻ふ。

④ 坐禪觀法すと雖も、根源を知らざれば益なし、只だ行住坐臥に心か着けて着よとなり。

⑤ 初死の人をいふ。しにもきらめといふ義は不可なり、魂不散とは用なり、死人は體なり。

⑥ 第二節、古則を引いて、靜坐をからず、初機も亦作佛することゝを叙す、此段は初機晩學

「敢て妄に靜見をなさず、黃面老子の所謂、譬へば人ありて自ら其の耳を塞いで高聲に大いに叫び、人の聞かざらんことを求むるが如し、眞に是れ自ら障難をなすのみ。若し生死の心未だ破せずんば、日用二六時中、冥冥蒙蒙地に魂不散底の死人の如く一般なり。更に甚の閑工夫を討ねて靜を理會し閑を理會せんや。①涅槃會上に廣額の屠兒、屠刀を放下して便ち成佛す。豈に是れ靜中の工夫を做し來らんや、渠豈に是れ初機にあらずや。左右此れを見れば、定めて以て然らずとなして、須らく差排すべけん。渠は古佛の示現をなすのみ、今の此人の力量なし」と。若し是くの如く見れば、乃ち自らの殊勝を信せず、甘んじて下劣の人となるなり。我が此の門中は、初機晩學を論せず、亦久參先達を問はず、若し眞箇の靜を要せば、須らく是れ生死の心を破るべし。工夫を做すことを著されども、生死の心破らるれば則ち自ら靜なり。先聖所説の寂靜の方便は、正に此れが爲なり。②自らはれ末世の邪師の輩、先聖方便の語を會せざるのみ。左右若し山僧を信得及せば試に閑處に向つて狗子無佛性の話を見よ。未だ悟不悟を説かじ、正に方寸擾擾たる時に當つて、謾に提撕擧

なしといふことを引く。

① 廣額云は南本涅槃經十七、事苑五等にある語。

② 豈に是れ等とは、靜勝を斥く。

③ 渠とは屠兒なり。

④ 自己分上利那成佛する殊勝を信ぜずとなり。

⑤ 第三節、初機晩學を並嫌す。

⑥ これは閑外に工夫をなすと雖も、生死の心を破らざれば則ち自ら閑なることを示す。

⑦ 寂靜即ち方便なり。

⑧ 此とは、生死の破るる處を指す、佛の方便を設けたまふは生死の心を破らんが爲なり。

⑨ 先聖に過なしと結す。

⑩ 第二段、眞正の工夫を示す。

⑪ 今宮樞密が靜勝に耽著するが故に、敵當して閑處等といふ。

⑫ 方寸とは自己の胷中といふが如し、擾はさわかしきなり。

⑬ 得力を覺する時を放過するとなり、十年の閑の繩索を取

覺して看よ、還つて靜を覺するや也た無や、還つて得力を覺するや也た無や。若し得力を覺せば便ち、^①放捨することを須ひされ。靜坐を要する時は但だ一炷の香を焼いて靜坐せよ、坐せし時は昏沈せしむることを得ず、亦掉擧なることを得ず。昏沈掉擧は、先聖の呵する所、靜坐せんとしき纒かに此の兩種の病現前することを覺せば、但只だ狗子無佛性の話を擧せよ。兩種の病、力を用ひて排遣することを著されども、當下に估估地ならん。日久しく月深くして、纒かに省力を覺せば、便ち是れ得力の處なり。亦靜中の工夫をなすことを著されども、只だこれ便ち是れ工夫なり。^②李參政、頃泉南に在りて初めて相見せし時、山僧が力めて黙照邪禪の人の眼を瞎するを排するを見て、渠初め不平にして疑怒相半ばなり。暮ち山僧が庭前の柏樹子の話を頷するを聞いて、忽然として漆桶を打破して一笑の中に於て千了百當す。方に山僧が口を開けば膽を見て秋毫相欺くことなく、亦是れ人我を争ふにもあらざることを信す。便ち山僧に對して懺悔す、此の公、現に彼に在り、請ふ試に之れに問へ、還つて是なりや無や。^③道謙上座已に福唐に往く、識らす已に彼に到るや否や。此の子參禪辛苦

① 坐禪に用心を示す、此事は關靜の上になし、只だ坐禪を好まば坐禪せよ、坐するも亦可なりと。これ前に靜坐に耽著するを呵す、故に富樫密が坐禪は一向に不可なりと思はん、故に言ふ。
 ② 昏沈は禪床の病にて、昏々として眠むるが如く、くらくなるをいふ。掉擧とは、心おちつかず、さはがしきをいふ。
 ③ 第三段、引證、富樫密相見の原本となす。
 ④ 無分曉、大悟の處をいふ。方とは李參政をいふ。
 ⑤ 文章は、大惠、心肝五臟を突出して敢て覆藏せざるをいふ。
 ⑥ 黙照を説く人を惡むに非ずとなり。
 ⑦ 彼とは泉南を指す。
 ⑧ 虛實を問取するなり。
 ⑨ 道謙は臨燈十七に出づ。

を喫すること更に多し、亦嘗て十餘年、枯禪に入る、近年始めて箇の安樂の處を得たり。相見の時、誠に渠に問へ、如何んが工夫を倣ん」と。^④曾て浪子となつて偏に客を憐む、想ふに必ず至誠に吐露せん。

李參政に答ふ 別紙 漢老

富樫、頃三衢に在りし時、嘗て書來つて道を問ふあり、因りて葛藤を打すること一上、落草少からず。尙ほ爾も黙照の處に滞在す、定めて是れ邪師に鬼窟裏に引入せらるること疑なし。今又書を得るに、復た靜坐を執して佳なりとなす、其の滯泥すること此くの如し、如何んが徑山が禪に參得せん。今次渠に答ふる書、又復た縷々として葛藤す、口業を惜します、痛く與に剷除す。又知らず肯ふて頭を回し、腦を轉じ日用の中に於て話頭を看るや否や。^①先聖の云く、「寧ろ戒を破ること須彌山の如くすべくとも、邪師に一邪念を重せられて、芥子許りの如くも情識の中にくくべからず、油を麪に入るが如し永く出づ可からずとは、此の公是なり。^②如し之れと相見せば、試みに渠に答ふる底の葛藤を取つて一觀して、因つて箇の方便を作して此の人を救取せよ。^③四攝法の中に同事攝を

① 子とは白虎通に云く、男子の通稱。
 ② 偏枯の死禪に陥入す。
 ③ これは只だ古句を引いて喻となすのみ。
 ④ 別紙とは、本書の外に遺はす添狀なり。
 ⑤ 第一段、富樫邪に滯ることを示す。
 ⑥ 三衢は浙江名勝志十に、常山縣にあり。
 ⑦ 一上とは一回の意。
 ⑧ 落草とは、向上の地を離れ下つて、草裡の低下に落ちて人を接するなり、碧巖四十三則に、雲門曰く、「此慈悲の爲に落草の談あり」と。不二抄二に云く、「正路大道に在つて行かざるなり」と。
 ⑨ 此事、元來説くべきなし、僅かに舌を動かさば即ち口業なり。
 ⑩ 破戒の罪は尙ほ償ふべし、一

以て最も強れたりとなす、左右當に大いに此の法門を啓いて其をして信入せしむべし。唯だ山僧が一半の力を省得するのみにあらず、亦渠をして信得及して、肯て舊窟を離れしむるなり。

陳少卿に答ふ 季任

論を承く。意を此の段の大事因縁に留めんと欲すれども、根性極めて鈍なりとなす。若し果して此くの如くならば、當さに左右の爲に賀すべし。今時の士大夫多くは此の事に於て百了千當して直下に透脱すること能はざること、只だ根性太だ利に、知見太だ多くして、宗師の纒かに口を開き舌を動かすを見て、早く一時に會し了るが爲なり。故を以て返つて鈍根の者の許多の惡知惡覺なくして、驀地に一機

たひ邪念情識に住せば救ふべからざるをいふ。

此公とは富樫密を指す。是とは物を指す詞。

第二段、同事攝を勧む。

四攝法とは、一に布施攝、若し衆生、財を欲すれば財を施し、若し法を樂めば法を施し、是に因つて親愛の心を生じ、我れに依つて道を受けしむるをいふ。二に愛語攝とは、衆生の根性に隨つて善言もて慰諭し、是に因つて親愛の心を生じ、我に依附して道を受けしむるをいふ。三に利行攝とは、身口意の善行を起して、衆生を利益し、是れに由つて親愛の心を生ぜしめ、道を受けしむるをいふ。四に同事攝とは、法眼を以て衆生の根性を見、その所樂に隨つて形を分けて示現し、其所作の事を同じくして利益に當はしめ、

是れに由つて道を受けしむるをいふ。仁王經中に出づ。

此の法門とは同事攝を指す。

宋史列傳百三十六、萬姓統語十七に出づ。宋史に季任を壬に作る。

第一段、却つて他の鈍根を示す。之に二節あり、初に正しく示す。

若し云云は、人をあしらひ、うやまふの意。

第二節、却つて利根を斥く。

一機一境とは、拈縫執拂をいふ。

歴代の祖師出で來るも、他を勸辨し得ざるをいふ。

冒中に道理なければ、洒落にして機境に動ぜず。

利根の者を、華嚴には蛇舌に喩ふ。

第二段、古を引いて上の事の證とす。南泉は馬祖の法嗣、傳燈八、傳燈二十八の二十八

一境の上、一言一句の下に於て撞發するには如かず。便ち是れ達磨大師出頭し來つて、百種の神通を用ひ盡すとも也。他を奈何ともすると得じ、只だ他、道理の障ふべき無きが爲なり。利根の者は返つて利根に障へられて、啐地に便ち折れ、曝地に便ち破ることを得ること能はず。假饒ひ聰明智解の上に於て學得するも、自己本分の事の上に於て轉た力を得ず。所以に南泉和尚云く、「近日禪師太だ多し、箇の癡鈍の人を覓むるに不可得なり」と。章敬和尚云く、「至理は言を亡す、時人悉かにせず、強ひて他事を習ふて以て機能をなす、自性元塵境に非ざること知らず。是れ箇の微妙の大解脫門なり、有らゆる鑑覺、染せず礙せず、是くの如きの光明未だ曾て休廢せず。曩劫より今に至るまで固に變易なし。猶ほ日輪の遠近斯に照すが如し、衆色に及ぶと雖も一切と和合せず、靈燭妙明にして鍛鍊を假るに非ず、了せざるが爲の故に物象を取る。但だ目を控つて妄に空花を起すが如し、徒らに自ら疲勞して枉げて劫數を經、若し能く返照せば、第二人なし、舉措爲して實相を虧かすと。左右自ら鈍根と言ふ、試に此くの如く返照して看よ、能く鈍と知る者還つて鈍なり

丁南泉香語なり、近日禪師云云の次に云く、「若し有らば出で來れ、你と共に商量せん」云云。今は少懶が鈍根を苦にする故に、鈍根に憤せざらしめんが爲に此を引くなり。

京兆府章敬寺の懷暉禪師なり、馬祖の嗣、之は上堂の語なり、會元三、三十四丁に出づ。

他事とは至理の外の事、瓦を磨して鏡となすが如し。功能は功用藝能にて功行に同じ。

鑑覺は見聞覺知をいふ。

和合は不染の義、靈は靈明なり。

修行して成するにあらず、本來解脫の故に。

目前の萬物、本來無なるを取つて自ら解を成す。

目を云云は楞嚴經八。

凡夫は妄に衆法を現出して苦惱を受けて流轉すと、或は行

や無や。若し回光返照せずして只だ鈍根を守つて更に煩惱を生せば、乃ち是れ幻妄の上に向つて重ねて幻妄を増し、空花の上更に空花を添ふ。但だ相聽せ、能く根性鈍なりと知る者、決定して鈍ならず。這箇の鈍底を守著することを得すと雖も、然も亦這箇の鈍底を捨却して參することを得ざれ。取捨利鈍は人に在つて心に在らず、此の心、三世の諸佛と一體無二なり、若し二あらば則ち法平等ならず。教を受け心を傳ふ、俱に虛妄たり、眞を求め實を覓む、轉た參差を見る。但だ一體無二の心、決定して利鈍取捨の間に在らざることを知得せば、則便ち當に月を見、指を亡じて、直下に一刀兩段すべし。若し更に遲疑して前を思ひ後を算らば、則乃ち是れ空拳指上に實解を生じ、根境法の中、虚しく捏怪す。陰界の中に於て妄に自ら囚執して了時あること無けん。近年以來一種の邪師ありて、默照禪を説いて人を教へて十二時中、是れ事、管すること莫れ、休し去り歇し去つて聲を傲すことを得ざらしむ、恐くは今時に落することを。往々に士大夫、聰明利根の爲に使はるゝ者多くは是れ闇處を厭惡す。乍ちに邪師の輩に指して靜坐せしめられて、却つて省力を見

人、六度萬行を立て五十二の階級に隨す、善宗には階級に入らず、直に本性此の如し等と。
 ① 舉措とは、處置動作なり、ふるまひなり。施爲とは安布施爲なり、なしなすなり。
 ② 第三段、眞心の上に鈍根なきことを叙す。已下大惠の語。
 ③ 鈍根を守るこれ一つ、其上に煩惱を生ずるなり、此れきのどくといふ意。今の煩惱とは貪嗔等を指すにあらず、世上に言ふ煩惱惱亂の謂なり。
 ④ 相聽は下の語にかけて看よ。
 ⑤ 第二節、鈍根を取捨すること。
 ⑥ 鈍底を返照して看よとなり。
 ⑦ 不昧の自己の本心に二なし、此れ仰山の所謂鈍底を知る處あり許多般なし、本性の上には利鈍なし、何の是れを嫌ふことか之れあらんと。金剛經

て、便ち以て是となして、更に妙悟を求めず、只だ默然を以て極則となす。某、口業を惜まず力めて此の弊を救ふ、今稍々非を知る者あり。願くは公、只だ疑情破れざる處に向つて參せよ、行住坐臥放捨することを得ざれ。僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無しや。」州云く、「無。」這の一字子、便ち是れ箇の生死疑心を破る底の刀子なり。這の刀子の欄柄、只だ當人の手中に在り、別人をして手を下さしむること得ず、須らく是れ自家手を下して始めて得べし。若し性命を捨得せば、方に肯て自ら手を下さん、若し性命を捨て得ざれば、且く只管疑不破の處に在つて崖め將ち去れ、驀然として自ら肯て命を捨つること。一下せば便ち了せん。那時に方に信せん、靜の時便ち是れ

に云く、是の法平等にして高下あることなしと。
 ① 受と傳とは虚妄なり、虚妄を徹證し虚妄の處を知らば、此れ傳法なり。
 ② 月を見る云云は圓覺經三、楞嚴二に出づ、指を忘るるは魚を得て筈を忘るるが如し。
 ③ 遲疑疑惑、前を思云云は計較分別するをいふ。
 ④ 空拳等は、證道歌に出づ。涅槃經に曰く、拳内に物なきが如し、此心上の心に利鈍なしと。
 ⑤ 六根所緣の境法。捏怪とは、此には奇を好み怪を好む心上法界の中には一物なし、無き處に於て一物ありと見るなり。
 ⑥ 陰界は、色、受、想、行、識（初の一は物、後の四は心なり）の五陰と。六根、六境、六識の十八界となり。

① 第四段、利根の人却つて邪見に隨することを叙す、利根とは師教を受けて早や合點するをいふ。
 ② 事とは一大事因縁。
 ③ 道安否禪師の語、會元。
 ④ 省力とは、省力得力にあらず、靜坐して僅かに安を得るをいふ。石の草を懸するが如し。
 ⑤ 第五段、正工夫をなさしむ。
 ⑥ 下の文にかけて看よ、此一句心切の謂なり。
 ⑦ 自家、優婆塞戒經に云く、「我身自ら度脱す」と。
 ⑧ これ煩惱相續を喻ふ。
 ⑨ 一下とは一度の意なり。證道歌に云く、「行また禪、坐もまた禪、語默動靜體安然」と。
 ⑩ 問ふことを著すとは上に屬して見るべし。
 ⑪ 第六段、引文。此の文簡要なり、朱世英は林間錄下巻に出

開時底、闇の時便ち是れ靜時底、語の時便ち是れ默時底、默の時便ち是れ語時底、人に 問ふことを著すとも、亦自然に邪師の胡說亂道を受けじ、至禱至禱。昔朱世英、嘗て書を以て雲庵の眞淨和尚に問うて云く、「佛法の至妙、日用如何が用心し、如何が體究せん、望むらくは慈悲もて指示せよ。」眞淨の曰く、「佛法の至妙は無二、但だ未だ妙に至らざれば、則ち互に長短あり、苟も妙に至れば則ち悟心の人なり。」如實に自心究竟本來成佛なることを知りて、^①如實自在、如實安樂、如實解脫、如實清淨にして、而も日用唯だ自心を用ふ、自心の變化、把得して便ち用ふ、是と非とを問ふこと莫れ。擬心思量すれば早く不是なり、^②擬心せざれば一々天真、一明妙、一々蓮花の水に著かざるが如し。心清淨なること、^③彼れに超えたり。所以に自心に迷ふが故に衆生となり、自心を悟るが故に成佛す。而も衆生即ち佛、佛即ち衆生、迷悟に由るが故に彼此あり。如今學道の人、多く自心を信せず、自心を悟らず、自心を明妙受用することを得ず、自心の安樂解脫を得ず。心外に妄に禪道ありとし、妄に奇特を立し、妄に取捨を生ず。縦ひ修行するも、^④外道二乗の禪寂斷見の境界に落つ。^⑤所謂

づ、雲庵は隱居處の名なり、眞淨は禪師號なり、僧寶薄二十三、續燈十三。上行住坐臥放捨するを得ざれといふ故に、日用の事を引いて示す。
 ① 圓覺經普賢章、華嚴經五十二如來出現品に出づ。
 ② 此四句は常、樂、我、淨の四徳を取るなり、自在は隱顯出沒自在にして、これ我の義なり。安樂は生死を放捨す、これ樂の徳なり。解脫は世間、業縛を解脫したることにて、是れ常の徳なり。清淨は煩惱の汚を受けざるをいふ、これ淨の義なり。四皆法に稱ふ故に如實といふ。
 ③ 擬心とは心を起して分別するなり。
 ④ 彼とは蓮花を指す。
 ⑤ 外道は斷、常に安住して、因果を擲無し、二乗は禪寂の處に耽著して捨てず、いま行脚

修行、恐らくは斷常の坑に落ちんことを。其の斷見といふは、自心本妙の明性を斷じ滅却して、一向に心外に空に著し、禪寂に滞るなり。常見といふは、^①一切法空を悟らず、世間諸の有爲の法を執着して以て究竟となす。邪師の輩、士大夫をして心を攝して靜坐して、事々管すること莫く、休し去り歇し去らしむ。豈に是れ、心を將て心を休し、心を將て心を歇し、心を將て心を用ふるにあらずや。^②若し是くの如く修行せば、如何してか外道二乗の禪寂斷見の境界に落ちざらん、如何してか自心の明妙受用、究竟安樂、如實清淨、解脫、變化の妙を顯得せん。^③須らく是れ當人自ら見得し、自ら悟得して、^④自然に古人の言句に轉せられずして、而も能く古人の言句を轉得すべし。^⑤清淨摩尼寶珠を泥濼の中に置くが如し、百千歳を経れども亦染汚すること能はず、本體自ら清淨なるを以ての故に。^⑥此の心も亦然り、迷ふ時に正りて、塵勞の爲に惑はさるれども、而も此の心體は本會て惑はされず、所謂蓮花の水に著かざるが如し。^⑦忽ち若し此の心本來成佛なることを悟得すれば、究竟自在如實安樂、種々の妙用も亦外より來らず、本自ら具足するが爲の故に。^⑧黃面老子の曰

の眼を具せざるが故に、妄見に墮するなり。
 ① 第七段、外道二乗の如く、禪寂に滞ることを叙す、此は雲庵の語を敷衍す、已下五節あり、初に外道二乗自心を明妙受用の語を敷衍す。
 ② 本來具足の本明を外道は自ら斷滅すと雖も、實は斷滅するにあらず、妄計して異物を認むるのみ。
 ③ 元來一切の法は無自性空なり、然るに……
 ④ 上の證道歌の斷常の語を解す、邪見を以て邪師の處を結す。
 ⑤ 心とは安心なり。
 ⑥ 眞淨の語を以て邪師の教化を結す。
 ⑦ 第二節、上の自心を信せず自心を悟らすの語を敷衍す。自ら見得すとは、自己本有の處を悟得するなり。

く「定法として、阿耨多羅三藐三菩提と名づることあること無く、亦定法として如來の説くべき有ることなし。若し本體實に、恁麼の事ありと確定せば、又却つて不是、事已むことを獲ずして迷悟取捨に因るが故に、道理を説くこと若干あることは、未だ妙に至らざる者の爲にする。方便の語のみ。其れ實に本體亦若干なし。請ふ公、只だ恁麼に用心せよ。日用二六時中、生死佛道是れ有と執すること得ず、生死佛道を撥して無に歸することを得ざれ。但只だ看よ、狗子還つて佛性ありや也た無しや。趙州云く、「無」と。切に意根下に向つて卜度すべからず、言語の上に向つて活計をなすべからず。又口を開く處に向つて承當することを得ず、又擊石火閃電光の處に向つて會することを得ず、狗子還つて佛性ありや也た無しや、無、但只だ此くの如く參せよ。亦心を將て悟を待ち、休歇を待つことを得ず。若し心を將て悟を待ち休歇を待たば則ち轉た没交涉ならん。

又

示諭す。山野が向來の書を得てより後、彈避し得ざる處に遇ふ毎に、常に自ら點檢すれども、而も未だ著力の工夫あらずと。只だ遮の彈避し得

- ① 自然とは、心を疑はざるをいふ。言句云云とは、言句につきまばらぬをいふ。
- ② 第三節、心清淨なること蓮花の如しといふを敷演す。濼は泥水をいふ。
- ③ 下は喻を法に合はす。
- ④ 外道二乘の有、無に滯着するは、本分に稱はざれば、みな塵勞なり。
- ⑤ 第四節、上の自心究竟本來成佛すの語を敷演す。
- ⑥ 第五節、金剛經を引いて、前の至妙無二の説を敷演す。
- ⑦ 阿耨多羅三藐三菩提は梵語、無上正徧智と譯す、佛陀の智徳を稱する一名號にして、佛は絶待智者にして其智に超えたるものなきが故に無上といひ、萬法の一々了悟し通達せざるなきが故に正徧智といふ。
- ⑧ 恁麼の事とは、上の自在安樂

ざる處、便ち是れ工夫了れり。若し更に力を著けて點檢せば、則ち又却つて遠し。昔、魏府の老華嚴云く、「佛法は日用の處、行住坐臥の處、喫茶喫飯の處、語言相問の處、所作所爲の處に在り、心を擧し念を動すれば又却つて不是なり」と。正に彈避不得の處に當つて、切に忌む心を起し、念を動して點檢の想をなすことを。祖師の云く、「分別生ぜざれば、虛明自照す」と。又、龐居士の云く、「日用の事別なし、唯だ吾れ自ら偶諧す。頭々取捨せざれ、處處々張乖すること勿れ、朱紫誰か號を爲す、丘山點埃を絶す。神通並に妙用、水を運び及び柴を般ふ」と。又、先聖の云く、「但だ有心にして分別計較する、自心見量の者は悉く皆是れ夢なり」と、切に記取せよ。彈避し得

- 本有具足するをいふ、恁麼の事ありとせば不可なり。
- ① 本體無二の語を説いて眞淨の語を結す。
- ② 方便の中に種種の妙用を具足して説く。
- ③ 無とも言はれざる故に若干といふ。
- ④ 第八段、再び正工夫を勧めて結す。
- ⑤ 撥は絶なり餘なり。
- ⑥ 著語、頌作等の言語。
- ⑦ 口を開くとは師家に系る。
- ⑧ 頓機を以て是となすは、一往の方便なり、其實は頓に在らず、漸に在らず、故にいふ。
- ⑨ 此書の大意は、疑心點檢せば、皆道に達するを叙す。第一段、來書を擧げて工夫を演ぶ。
- ⑩ 彈は韻學集成にさくる、彈避なりと、即ち回避の義なり。
- ⑪ 力を着くれば枝葉を生ず。
- ⑫ 第二段、證據を引いて、力を

- 著けて點檢すべからざることを示す。雲臥紀談下に云く、魏府の老華嚴は、諱は懷洞、五季の時、華嚴の教を弘む、晩に興化の存契禪師に參じて教外別傳の旨を得、遂に天鉢に出世す、編纂之に尊事して老華嚴と稱す。今は示衆の語なり。
- ① 好事面前に現すれども即ち差過す、故に……
- ② 信心銘の語なり、力を著けて點檢せざれば虛明自ら照す、自照は彈避を得ざる處。
- ③ 傳燈八に云く、居士龐蘊は衡州衡陽縣の人、字は道玄、世儒を以て業となす、而るに居士、唐の貞元の初、石頭和尚に謁し、言を忘じ旨に會ふ云云、復た一偈を呈して云く、日用の事云云。
- ④ 唯だ吾れ自ら偶諧の一句、肝要なり、偶諧はたまたまかな

ざる時、更に心を擬することを得ざれ。心を擬せざる時は、一切現成す。亦利を理會することを用ひざれ。總て他の利鈍の事に干らず、亦他の靜亂の事に干らず。正當禪避し得ざる時、忽然として布袋を打失せば、覺えず掌を拊つて大笑せん。記取せよ記取せよ。此の事若し一毫毛の工夫を用ひて證を取らば、則ち人の手を以て虚空を撮摩するが如し、只だ益自ら勞せんのみ。應接の時は但だ應接せよ、靜坐を得んと要せば、但だ靜坐せよ、坐の時、坐底を執着して究竟となすことを得ず。今時邪師の輩、多く黙照靜坐するを以て究竟の法となして後昆を疑誤せしむ。山野、怨を結ぶことを怕れず、力めて之れを誣る、以て佛恩を報じ、末法の弊を救はん。

趙待制に答ふ 道夫

示諭せらる、一々に備悉す。佛の言く、「心ある者は皆作佛を得」と。此の心は世間塵勞妄想の心に非ず、無上大菩提心を發するを謂ふ。若し是の心あらば成佛せざる者なけん。士大夫學道多く自ら障難をなすこと、決定の信なきが爲の故なり。佛又言く、「信は道の元、功德の母たり、一切の諸の善法を増長す。疑網を斷除し、愛流を出でしめ、涅槃無上道を開示す。又云く、「信は能く智功德を増長す、信は能く必ず如來地に到らしむ。示諭せらる、鈍根にして未だ悟徹すること能はずんば、且く佛種子を心田に種ふんことを。此の語淺近なりと雖も、然も亦深遠なり。但だ肯心を辨せよ、必ず

ふにて契當の義、分別を生ぜず、舉心動念せざる處自心に能く契當すとなり。
② 頭頭物物、境上に於て懸擇なきをいふ。
③ 境に向ふ時、張垂するなし、取捨なきが故に。張垂とは違背の義、おしのけるを云ふ。
④ これは自ら朱紫と言はず、外より朱紫と名くとの説を可となす。意は、只だ朱紫を號となす、早く是れ不是にし終るとなり。
⑤ 絶は清淨の義、本地の風光、些の汚染なきをいふ。東坡の所謂、山色清淨身これなり。
⑥ 只だ日用事、即ち是れ神通妙用なりとなし、般の字、本録に據に作る、般は俗字なり。
⑦ 先聖は達磨大師を指す、安心法門に出づ。
⑧ 自心見量に二義あり、一には自心は自己の妄心なり、見量は各々の依報正報なりと。二には自心とは自己の本心、見量は十界の依正、本有の自性なりと。初義を是とす、即ち自の妄心にて現見量度する境界の不實なるをいふ。着力點檢も夢、舉心動念も夢、有心分別も亦夢なりと。
⑨ 上の古語を結び、著力點檢することなからしむ。
⑩ 第三段、重ねて自心點檢を忘すことを示す、かく重ねて言ふは陳少卿が鈍根なりと言來るが故に叮嚀に言ふなり。
⑪ 萬法の一天眞一妙明にして一切現成すと。
⑫ 利根なり。
⑬ 利は利處に現成し、鈍は鈍處に現成し、靜は靜處に、亂は亂處に現成す、現處は利鈍にあらず、靜亂にあらざるべからざるなりと。
⑭ 椅子を放下するが如くに修行

の人は日に損し、又損して一切煩惱を放捨せば、即ち是れ放身命の處にして、此れ修行者の面目なり。拊は撃なり。大笑とは、無盡の法義現成する故に。
① 記取せよば、上の文に屬するなり。
② 黃栗の所謂學道といふも、早く是れ接引の詞といふと一般なり。
③ 虚空云とは、楞嚴二に出づ。
④ 第四段、再び前書に言ふ處を擧げて教示す。
⑤ 然れども、坐の時云云。
⑥ 正法を傳へ、衆生を利益するを以て眞の報恩となす。
⑦ 異説ありと雖も、一説に云く、佛入滅後一千年を正法の世とし、次ぎの一千年を像法の世とし、其後萬年を末法の世とす。中論疏の説。教、行、證の三備足するを正法といひ、
⑧ 像は似の義にて、教、行ありて證の一を缺くをいひ、末は微少の義にて教の一ありて他の二を缺くをいふ。而し多分に就いていふなり。
⑨ 趙待制のこと、萬姓統譜八十三に出づ。此書の大意は趙待制の少信根を責む。第一段は發心決定せんことを示す。
⑩ 南本涅槃經二十五、獅子吼品。圓覺略疏二。
⑪ 此心已下は、大惠、經文を判す。
⑫ 華嚴經十四、賢首品の偈。
⑬ 疑とは煩惱なり、煩惱の正理及び智等を覆蔽すること網の物を掩ふが如し、故に喻へて網といふ。
⑭ 愛流は貪愛流轉なり、吾人が對象に愛執し三界六道に流轉輪廻する有様は水の流れて斷えざるが如し、故に流といふ、其流轉の本は愛なり、愛に由

相賺さす。今時學道の士、往々に緩處は却つて急に、急處は却つて放緩にす。龐公云く、「一朝蛇布襪襠に入る、試に宗師に問はん、甚の時節ぞと。」昨日の事、今日すら尙ほ記し得ざる者あり、況んや陰を隔つる事をや、豈に忘失すること無かる容けんや。決めて今生に打して徹せしめんと欲せば、佛を疑はず、祖を疑はず、生を疑はず、死を疑はず、須らく決定の信あり、決定の志を具して、念々頭然を救ふが如くすべし。此くの如く做し將ち去つて、打して、未だ徹せざる時、方に始めて鈍根なりと説くべきのみ。若し當下に便ち自ら我れ鈍根にして今生に打得徹すること能はず、且く佛種を種えて結縁せんと謂はゞ、乃ち是れ行かすして到らんと欲するなり。是の處あること無し。某

り業を造るによる、故に愛流といふ、涅槃經に云く、「愛河は淵液にして衆生を没し、無明に育せられて、食と愛とを出づることを得ざらしむ」と。
②第二段、今生に徹悟せんことを勤む。
③大乘教を一偈一句にても聞いて之を了解する智慧を佛種子といふ。心は第八識、田は能く五穀等を生ずるものなれば、種子に對して心を喻へて心田といふ。然らば大乘教を聞いて、それを了解せし智解を第八識に熏附するを種子を種ふ付けたといふ、これが聞、思、修の縁に依りて體て成佛する因となるなり。
④此語以下は大惠、趙道夫の語を批判す、その言辭緩かなれども、實は決烈の志なきを責む。

①昔心は、佛種子を種うることを肯ふなり。辨は趙道夫に系る、實は大惠に系る。
②上は情に順じて與へ、自下は他を奪ふて緩緩地なるを責む。
③一朝云は、顛倒匆忙をいふと。親は禪なり、禪も亦禪なり、或は補遺(うちかけ)なり。
④陰を隔つとは、陰は五陰にて、今世の五陰身壞して未來の五陰身を受、故に隔といふ。
⑤悟徹を欲する信。
⑥頭然等、永嘉集下、華嚴七十八、中峰廣錄二十等に出づ。念念無間に精勵するをいふ。
⑦行かすして云云は、荀子一收身驚の語。
⑧第三段、省力即ち得力なることを辨す、趙待制は少信根なる故に、吾は此道を信する者の爲に説く、信せざる者には説かずとの意。

毎に此の道を信する者の爲めに説く、漸く日用二六時中省力を覺得する處、便ち是れ學佛得力の處なり。自家得力の處、他人は知ること得ず、亦拈出して人に與へて看せしむること得ず。盧行者、道明上座に謂つて曰く、「汝若し自己本來の面目を返照せば、密意は盡く汝が邊に在り」といへる是れなり。密意といふは便ち是れ日用得力の處なり、得力の處、便ち是れ省力の處なり。世間塵勞の事は、一を拈じ一を放つて、無窮無盡なり。四威儀の内未だ嘗て相捨てざることは、無始時來之と縁を結得すること深きが爲の故なり。般若の智慧は無始時來之れと縁を結び得ること淺きが故なり。乍ちに知識の説著するを聞いて、一へに會し難きに似たることを覺得す。若し是れ無始時來、塵勞の緣淺く、般若の緣深き者は、甚の會し難き處かあらん。但だ深處は放つて淺からしめ、淺處は放つて深からしめ、生處は放つて熟せしめ、熟處は放つて生ならしめよ。纔かに塵勞の事を思量することを覺ゆる時、力を著けて排遣することを用ひざれ。只だ思量の處に就いて輕々に話頭を撥轉せよ。限りなき力を省し、限りなき力を得ん。請ふ公、只だ此くの如く崖め將ち去れ、心を存して悟を等ると

①拈出とは、下の密意を言はんが爲に之をいふ。
②第四段、世事を放捨して話頭を參究せしむ。
③塵事未だ去らざるに、馬事到來すとの意。
④相捨てとは、塵勞を指す、下の之と縁をの之とは塵勞を指す。
⑤力を著けて排遣すれば、排遣そのものが即ち病なり、放つて蕩蕩地ならしめば、忘相に因つて大悟あらんとなり。力とは工夫の力なり。
⑥限りなき力とは得悟の力なり。
⑦第五段、道友に問著せよと勤む。
⑧黑白、並に子とは基石をいふ。
⑨一著とは、基石一手を下すなり。
⑩宋史に傳なし、司理は蓋し法律の事を主る職ならん。此書の大意は、大信力を具せん、

莫れ、忽地に自ら悟り去らん。參政公想ふに日々相會すらん、圍碁を除いて外、還つて曾て與に這般の事を説著するや否や。若し只だ圍碁して曾て這般の事を説著せずんば、只だ黑白未だ分れざる處に就いて、盤を掀了し、子を撒了して、却つて他に問うて、那一著を索取せよ。若し索不得ならば是れ眞箇に鈍根の漢ならん。姑く是の事を置く。

許司理に答ふ 毒源

黃面老子曰く、「信は道の元、功德の母たり。一切諸の善法を長養す。又云く、「信は能く智功德を増長す、信は能く必ず如來地に到る」と。千里に行かんと欲するに一歩を初めとなす。十地の菩薩の障を斷じ、法門を證するも、初め十信より入りて然して後に法雲地に登つて、正覺を成す。初めの歡喜地は信に因つて歡喜を生ずるが故なり。若し決定して脊梁骨を豎起して、世世世間、没量の漢と做らんことを要せば、須らく是れ箇の生鐵鑄就す底にして、方に了得すべし。若し半明半暗、半信半不信ならば、決定して了することを得べし。此の事人情なし、傳授すべからず、須らく是れ自家省發して始めて趣向の分あるべし。若し他人口頭の辨を

とを勤む。第一段、古語を引いて信心を立てしむ。
②老子經下六十四丁に出づ。
③本業瓔珞經に因果の位を五十二位と立つ、十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺これなり、中に妙覺は佛果にして前の諸位は因位とす、因中にて次第に修證して十地中の初歡喜地に至りて一分斷惑證理し、進んで第十法雲地に至り、之を過ぎて正覺を成じて妙覺の佛陀となるとなり。今は等覺位を立てざる説に依る故に、法雲地に登つて正覺を成すといふなり。
④正覺とは邪を離るるを正といひ、妄に背くを覺といふ。即ちあらゆる邪惡妄惑を斷じて涅槃の正理を證り諸法實相を窮盡したる佛果をいふ。
⑤没量は猶ほ過量の如し、即ち果度越えて格外の機用を具するをいふ。

取らば、永劫にも歇する時あること無し。千萬十二時中、空しく過さしむること莫れ。日を逐ふて起き來つて應用の處、圓陀陀地、釋迦達磨と少しも異なること無し。自ら是れ常人見不徹、透不過ならば、全身聲色の裏に跳在して、却つて裏許に向つて出頭を求めば、轉た沒交涉。此の事亦久しく知識に參じ、徧く叢林を歴て而して後に了得するに在らず、而今多少、叢林に在りて頭白く齒黃んで、了じ得ざる底あり、又多少、乍ちに叢林に入り、一撥すれば、便ち轉じて千了百當する底あり、發心に先後あれども悟る時先後なし。昔李文和都尉、石門の慈照に參じて、一句下に承當して便ち千了百當す。嘗て偈あり、慈照に呈して云く、「學道は須らく是れ鐵漢なるべし、手を心頭に著けて便ち判す、直に無上菩提に趣いて、一切の是非管すること莫し」と。但だ脚下より崖め將ち去つて死せば、便ち休せん。後を念ひ前を思ふことを要せざれ、亦煩惱を生ずることを要せざれ、煩惱は則ち道を障ふ。祝祝。

左右正信を具し正志を立つ、是れ乃ち成佛作祖の基本なり。山野、因

①生鐵云とは大信根の人をいふ、第五段の根本となす。
②半明は信、半暗は不信なり。
③第二段、自悟を要するを明す。
④辨の字、辯に作るべし。
⑤第三段、欲境を離れんことを勤む、富貴の人は多く五欲に溺るるが故に。
⑥空しく過すとは、光陰惜しむべしといひ、唯だ坐禪觀法を成ぜしむ、下に釋迦と異なるなしといふ、容易の看をなす勿れ、少しも差あらば空過す。
⑦圓陀陀地とは、要するに六道の神光圓滿して缺少なきをいふ。臨濟云く、「多般の用處、の什麼を缺少す」と。
⑧跳在は、一生難れざるをいふ。
⑨裏許とは聲色五欲を指す。
⑩第四段、發心の運きことを苦しむ莫れと示す。

つて湛然を以て公の道號に名づく。③水の湛然不動なるが如くんば、則ち④虛明自照にして心力を勞せず。⑤世間出世間の法湛然を離れず、纖毫の透漏なし。⑥只だ此の印を以て、一切處に印定すれば是もなく不是もなし。⑦一一解脱、一一明妙、一一實頭、用ひる時も湛然、用ひざる時も亦湛然たり。⑧祖師の云く、「但だ心あつて自心見量を分別計較する者は、悉く皆是れ夢なり」と。若し心識寂然として一動念なき處、是れを正覺と名く。覺既に正しきときは則ち日用二六時中に於て、色を見、聲を聞き、香を嗅ぎ、味を了じ、觸を覺し、法を知る。行住坐臥、語默動靜、湛然ならずといふこと無し。亦自ら顛倒の想を作さず、有想無想悉く皆清淨なり。既に清淨を得れば、動の時は湛然の用

- ①一撰とは一機一境なり。
- ②第五段、古人の發心遅うして早く悟りしことを引いて發心せしむ。李文和は宋史列傳二二三に云く、諡して和文と曰ふ云々と、李和文に作るべし。
- ③慈照は廣燈錄一四に出づ。
- ④鐵漢とは直に新道に趣いて是非等を觀ざるをいふ。之を言はんとして前に生鐵鑄就すといひしなり。
- ⑤煩惱は常に言ふ、煩惱快惱をいふ、前に辯する如し。
- ⑥祝祝は至禱に同じ、韻會に云く、「呪と通ず」と、かうあれと呪願するなり。
- ⑦許壽源に答ふる第二書なり。
- ⑧第一段、公の法願あるを讚す。信に依つて此道に入るを得、志を以て此道を成ずることを得。
- ⑨道號とは、道に名くるの意、號を以て其人の所得の道徳を
- 表はす、即ち表徳號なり。昔は別に道號なし、字を稱して名となす、道號即ち字なり、明極語要に云く、「諷訪性了居士、門を過ぎ字を爾む、以て其の道にす、余達空の二字を以て之に授く」と。
- ⑩第二段、道號の義を解す。
- ⑪虛明云云は、三祖の信心銘に云く、「心力を勞せざれば、虛明自照を見るべし」と、虛明は水を喻ふ、水性明にして萬象を照映す、水と萬象と不即不離なるをいふ。以て道眼の明かなるを表す。
- ⑫世間とは世は遷流の義、間は間隔差別の意なり、然らば宇宙萬有の一一が箇箇別別の相を現はし作用をなして、而もそれが少時も停ることなく、變遷生滅しつゝある故に名く、即ち三界六道の邊界を世間と名く。此世間を出離した

を顯はし、不動の時は①湛然の體に歸す。體用殊なりと雖も、而も湛然は則ち一なり。②梅檀を析つに片々皆梅檀なるが如し。③今時一種の杜撰の漢ありて自己の脚跟下不實にして、只管に人を教へて心を攝して靜坐して坐して氣息を絶せしむ。此の輩を名けて眞の可憐惑となす。④請ふ公、只だ⑤恁麼に工夫を做せ。⑥山野、然も此くの如く公に指示すと雖も、眞に已むを得ざるのみ。若し⑦實に恁麼に工夫をなす底の事あらば即ち是れ公を汚染せん。⑧此の心實體あること無し、如何んが硬く收攝し得て住せん。收攝して甚の處に向つてか安着せんと擬せん。既に安着の處なくんば則ち時なく節なく、古なく今なく、⑨凡なく聖なく、得なく失なく、靜なく亂なく、生なく死なく、亦湛然の名もなく、

- る悟の光明世界を出世間といふ。されど世と出世と別にして而も同なり、必ずしも兩箇あるに非ず、分別妄見を以て差別の法を實有なりと固執せば、法の爲に繫縛せられて自由を得ず、之を世間と名く。若し智見を開き世間差別の眞實相に體達すれば、則ち法法塵塵みな光明を放ち、一多即入無碍なることを知らん、之を假りに出世間と名く。然らば世間の其儘が出世間にして茲に至れば、世出世の假名も亦絶するに至る、譬へば金の獅子の如し、獅子の全體が金の金の當體即獅子にして別異なし、差別と平等と其體は一、迷悟も亦一如なり、之を本來の面目ともいふ、故に纖毫の透漏なしといへり。
- ⑭此印とは湛然の印なり、印とは親しく法に契合するのいひ
- なり、世出世の法本來自性、自性本來世出世の法、一にあらず、異にあらず、一異を絶し湛然平等なり、この印を以て一切法に印すれば、迷も湛然悟も湛然、起滅も凡聖も是不足も悉く湛然ならぬはなし、此に至りて始めて行住坐臥一一に於て解脱自在を得らる、同時に明妙も實相にも達し得らるゝなりと。
- ⑮祖師とは達磨大士なり、安心法門に出づ、前辯の如し。起信論に云く、「心生すれば種種の法生ず」と、動念妄想ある故に種種の妄境を生ず、臆病者が枕木を見て怪物と想ひ恐怖するが如し、若し妄念滅すれば妄境滅す、已下は上の湛然を解す、動に住するは是れ迷、寂滅不動を認得するも亦不是、此二を離れて任運なれば正覺と名くるをいふ。

亦① 湛然の體もなく、亦湛然の用もなく、② 亦
恁麼に湛然を説く者もなく、亦恁麼に湛然の説
を受くる者もなし。若し是くの如く見得徹し去
らば、③ 徑山も亦虚しく此の號を作さじ、左右
も亦虚しく此の號を受けじ、④ 如何ん如何ん。

劉寶學に答ふ 彦備

① 即日恁 恁、不審 燕處悠然とし、放曠 自
如として諸の魔擾なきや否や、日用四威儀の内、
狗子無佛性の話と 一如なりや否や、動靜の二
邊に於て能く分別せざるや否や、② 夢と覺と合
するや否や、③ 理と事と會するや否や、心と境
と皆如なりや否や。老龐曰く、「心、如なる
ときは境も亦如なり、實もなく亦虚もなし。有
も亦 管せず無も亦拘はらず。④ 是れ聖賢にあ
らず、了事の凡夫なり。」若し眞箇に箇の了事の

① 六識縁境中にありと雖も、即
ち是れ湛然の境界なり。
② 且く體用を分ちて説明するも
本不二なり、火の體と熱と不
二なるが如し。又水波異なり
と雖も、濕性は是れ同じ。隨
つて千波萬浪同一水にして互
に相融す、以て迷悟不二、現
象實在の相即ち復た現象と現
象との互融を識るべし。

③ 永明註心賦一、護法論に出づ。
第三段、邪を捨て正に就かん
ことを勧む。湛然不動と云は
ば、則ち是を默照邪禪に濫す
るが故に、爾かいふ。
④ 楞嚴二、圓覺經四。
⑤ 恁麼とは、上の湛然の義を指
す。
⑥ 湛然に滯着せざらんことを示
す。
⑦ 湛然寂靜中に在つて、工夫せ
ばの意。
⑧ 一轉して直に湛然の名なき、

とを知らしむ。
② 既に安着すべき處なくんば、
迷悟なし、何ぞ凡聖等あらん。
③ 眞如法性もと湛然の名なし、
眞體自ら我れは湛然なりと言
はず、猶ほ體なし、何の用が
之れあらん。
④ 説く大惠もなく、聽受する許
司理もなし。
⑤ 上の道義に精歸す、許司理は
湛然の眞諦を見徹せる人故
に。
⑥ 上の見得徹し去るに系けて看
よ、果して見徹するか如何に
となり。
⑦ 宋史列傳百二九に、劉子羽、
字は彦備、寶文閣の直學士な
り」と、紹興十一年に卒、大惠
の法嗣なり。名臣言行錄十二、
居士分燈錄下、會元二十等に
出づ。劉は狗子の話に於て悟
處あり、其後に發する書なれ
ば、是れ向上の説法なり。

凡夫と作得せば、釋迦
達磨是れ甚麼の泥團土
塊ぞ、① 三乘十二分教
是れ甚麼の 熱盃鳴
聲ぞ。② 公既に此箇の
門中に於て自ら 信じ
て疑はず。是れ小事に
あらず、生處は放つて
熱せしめ、熱處は放つ
て生ならしめんとを要
す。須せば、始めて此の事
と少分の相應あらん
のみ。往々士大夫、多く
不意の中に於て箇の
瞥地處を得れども、却

國譯大慧普覺禪師書 上

① 此書の大意は、弟の彦沖を化
度せしむ。第一段、心境一如
を説く。恁海は今日ほむしあ
ついでといふ意。
② 燕處は閑暇無事の時をいふ。
論語、述而篇に云く、「燕居申
申如たり」と、此意なり。
③ 自如は自然の意、心力を勢せ
ず、法の儀に作進退するを
いふ。境はかきみだすなり、
宴如、若しくは好事を行は
んとすれば寢、障礙擾亂をなす、
故に問ふ。
④ 一如の一は絶待、如は契如、
又は平等無差別の義、即ち無
佛性の話と不即不離にして一
體的作用をなし居るやとな
り。
⑤ 夢と覺とは、前辯の如し。
⑥ 理は眞理、事は事相にて日用
事をいふ、合は融會するをい
ふ。
⑦ 如は不異の義、空如の義、能

縁の心も所縁の境も俱に無自
性空なりと了すれば、心境の
取るべきなし、既に心境の認
むべきなければ眞なく、而も
心境宛然たれば虚もなし。
② 管せずとは、かまはぬの意な
り。
③ 既に聖賢を認むるの病を治す
るが故に、聖賢の位に居らず、
復た妄執なきが故に凡夫にも
あらず。形容すべからざる那
一人と作得す、之を強ひて了
事の凡夫といふ。
④ 三乗とは聲聞、緣覺、菩薩の
修學する教をいふ。即ち苦、
集、滅、道の四諦の教を聲聞
乘といふ。苦諦は吾人の身心
等にして迷界の果、集諦は煩
惱業のことにして迷界の因な
り。滅諦とは涅槃にして悟界
の果、道諦とは佛陀の聖教に
して悟界の因なり。次に一に
無明、二に行、三に識、四に

名色、五に六入、六に觸、七
に受、八に愛、九に取、十に
有、十一に生、十二に老死の十
二因縁の教を緣覺乘といふ、
之は吾人の三界六道に輪廻す
る道理を説明したるもの。次
に布施、持戒、忍辱、精進、
禪定、智慧の六波羅密を菩薩
乘といふ、菩薩は此の六度を
修して他を救済し、同時に自
の修養をなす、已に前に略解
す。十二分教とは新譯に十二
部經といふ、教は經に通ず。
一に修多羅、契經等と譯す。
二に祇夜、重頌と譯す。三に
和伽羅、授記と譯す。四に伽
陀、孤起と譯す。五に優陀那、
無問而自説と譯す。六に尼陀
那、因縁と譯す。七に阿波陀
那、譬喩と譯す。八に伊帝目
多伽、本事と譯す。九に闍陀
伽、本生と譯す。十に毘佛略、
方廣と譯す。十一に阿浮陀達

つて如意の中に於て打失し了る、公をして知らしめずんばあるべからず。如意の中に在いて須らく時々不如意の中の時節を以て、念に在いて切に暫くも忘るべからず。但だ本を得て末を愁ふること莫れ、但だ作佛を知つて、佛の語を解せざることを愁ふこと莫れ。這の一著子、得ることは易く守ることは難し、切に忽にすべからず。須らく頭正しく尾正しからしめて、擴く之を充て、然して後、己が餘を推して以て物に及ばさしむべし。左右の所得、既に一隅に滞在せず、想ふに日用の中に於て心を起して管帶し、心を枯して忘懐することを著され。近年以來、禪道佛法衰弊すること甚だし、有般の杜撰の長老、根本自ら悟る所なく、業識茫茫として本の據るべき無く、實頭の

- 磨、未曾有と譯す。十二に優婆提舍、論議と譯す。これ經文の説相を十二種に分類したるものなり、略解は人天寶鑑に附するが如し。
- 熱盤等とは、無用の意なり、盤は碗の正字なり、碧巖七十九則に云云す。これ陸にて、碗に熱湯を注ぐ時は、ぢりぢりとなる聲なり。
- 第二段、聖胎長養の法を示す。
- 劉彦簡、悟處ありと雖も、大惠未だ全く齊すにあらず、故に言ふ。
- 不意の不の字の下に如の字を加ふべし、居士分燈錄下、彦簡傳に不如意に作る、これ紹興八年に遠流せられたる事を指すが、逆境界をいふなり。管地とは、僧傳音義に、目を過ぐるなりとあり。
- 但だ本云云は、證道歌の語なり。
- 作佛とは本事なり、佛の語云は末事なり。
- 若し聖胎長養せざれば本の凡夫に歸らん。
- 頭尾は始終の意、頭正は悟徹の意。
- 此の如く言ふは、弟の劉彦沖を接得せしめん爲の張本なり。
- 第三段、劉彦沖は邪師に譯らる、故に其方之を救ひ度せよと勸む。
- 管帶とは、見聞覺知に實を認むるをいふ。百丈云く、心を起すは増益の毀なり、心を枯らすは損減の毀なりと。之れ弟の彦沖が事を言はんとするなり。
- 白下彦沖が事を説く、即ち邪師に譯らるるをいふ。
- 業識とは、第八阿梨耶識なりといふも可なり、阿梨耶識とは生滅と不生滅、即ち眞如と

伎倆の學者を收攝すること無く、一切の人を教へて渠が如くに相似せしめて、黑黍黍地に緊しく眼を閑却して喚んで黙して常に照すと作す。彦沖、此の輩に教壞し了らる、苦なる哉苦なる哉。遮箇の話、若し是れ左の狗子無佛性を悟得するにあらずんば、徑山亦説く處なけん。千萬面皮を持下し、痛く手段を與へて這箇の

無明と和合して一にあらず、異にあらざるをいふとて、眞妄和合識なり、今は法相宗のそれとは異なり。其阿梨耶識に業、轉、現の三細ありとす、即ち平等一味の眞如の上に根本無明のちらつと起り、眞心を動かさんとする刹那を業相といふ、これ根本無明の起り始にて、至極微細にして凡見の及ぶ所にあらず。これが一轉して僅かに能見の用を起したる所を轉相といふ。更に一轉して所見の境界相なる少物を認むる現相といふ。この三は至極微細にして凡見の及ばざる所なれば三細といふ。業相の業は動の義、因の義なり、これ無明が動用を起す最初なれば別して業と名け、又この發動が轉變生起して竟に三界生死を生ずべき故に因の義あり。今業識とは業相なり。茫

- 茫とは遙遠なり、或は云く、茫は忙に作るべしと、忙は急速なり、暇あらずの意。何れにしても此業識は恒に變遷生滅して停らざること流水の如く、而も幽遠微細にして眞心を蔽へるもの、此業識の支配を受けて徒らに昏々擾擾たる生活を茫茫といふ。本とは本分の田地をいふ。即ち杜撰の邪師が本分に倚らず、皆情識を以て人を教ふるをいふ。
- 伎倆とは方便の意なり。
- 收攝は接得するをいふ。
- 黑黍黍地は無分曉なり。
- 此輩とは杜撰の長老なり。教壞とは、人を導きそこなふをいふ。即ち正見解を破らるるなり。
- 遮箇の話とは、彦沖が邪師に教壞せらるるをいふ。
- 千萬とは幾度の意。持下は面を摩つること、人を離れてし

- つかりと教導せよとの意。
- 第四段、廣く彦沖を教ふの方便を説くに二節あり、初に同事攝方便を説く。
- 此公とは彦沖を指す。
- 濁濁は濁は泊なり、うとうとしきをいふ。
- 此とは世味濁濁を指す。
- 彦沖の如き人は功達自在の人を看るも信ぜず、擲法眼を缺く故に言ふ。これ下の華嚴の文を引く張本とす。
- 維摩經佛道品。
- 欲の鉤の言、眼を著けよ、これ同事攝なり、彦沖が欲は清淨清淨これなり。經に云く、「或は現じて婦女となりて好色の者を引くは、先づ欲の鉤を以て牽いて後に佛智に入らしむ」と。
- 黄面云云は、華嚴經十八妙法品の文なり。
- 無邊の行門の語、肝要なり、

人を救取せよ、至懇至禱。然も一事あり、亦知らずんばあるべからず。此の公、清淨にして自居し、世味澹薄なること積んで年あり、定めて此れを執して奇特とせん。若し之れを救はんと欲せば、當に之れと事を同じうして、其れを歡喜せしめて心に疑を生ぜざらしむべし。庶幾はくば信得及して肯つて頭を轉じ來らんことを。淨名の所謂、先づ欲の鉤を以て牽いて後に佛智に入らしむといへる是なり。黃面老子云く、「法の先後を觀じて智を以て分別し、是非審定して法印に達せず、次第に無邊の行門を建立して諸の衆生をして一切の疑を斷せしむ。此れ乃ち物の爲に則を作す萬世の楷模なり。況んや此の公の根性、左右と廻かに同じからず、生天は定めて靈運が前

即ち是れ同事攝なり。
⑦楷模は法式なり、手本なり。
⑧第二節、傍ら劉寶學を激して言ふ。公とは彦沖を指す、況の字眼を著くべし。
⑨生天とは行業澹泊清淨の者は必ず天に生ずと、これは彦沖に喩ふ。靈運は謝靈運にして南史十九に傳あり、涅槃經を譯せし人。此處は弟の彦沖が却つて兄の彦衝より勝ることを稱美するなり。靈運の惻惻發明なるを彦衝が悟得發明に喩ふ。今茲には生天は靈運の前にありの語を肝要として引くなり。上の文に欲鉤を以てすといふ、惡行すら之を救ふを得、況んや彦沖の行跡は彦衝の行跡に勝るをや、若し公の行跡正しからざる時は唯だ公を信ぜざるのみならず、却つて公を近傍せしめざらんとなり。

⑩智慧は正見なり、彦沖は行跡正しと雖も、般若の縁薄くして正眼を缺く故に言ふ。
⑪好む所とは、世味澹薄なり。
⑫非を知らんとは、照の不可なることを知らんとなり。
⑬不定の義、非を知りて捨つることあるべし、或は捨てざるべし、今日定め難しと。
⑭頭を轉じとは、邪を捨て正に入るをいふ。
⑮一頭を出づとは、邵氏開見後錄に云く、「一頭地を出づることを許すべし」と、今と同意なり。北朝外集に要出二頭地といふは、超出の義にて今の意にあらず、一頭は一人なり。今は一人の立つべき餘地を譲り退いて他をして先づ歩行せしむの意なり。
⑯第五段、彦沖が事を批判すれども、先づ總じて嘆許す。禪禪とは、禪は名なり、禪は禪

にあらん、成佛は定めて靈運が後に在らん者なり。此の公決定して智慧を以て攝すべからず、當に好む所に隨つて攝すべし。日月を以て之れを磨せば、恐らくは自ら非を知らんことを。忽然として肯つて捨てんこと亦定まるべからず。若し肯つて頭を轉じ來らば、却つて是れ箇の有力量底の漢ならん。左右亦須らく歩を退いて渠に一頭を出づることを譲りて始めて得べし。比る時禪、歸るに渠が紫巖老子に答ふる一書を録し得たり。山僧隨喜して讀むこと一遍、讚歎歡喜して日を累ね、直に是れ一段の文章、又一篇の大義に似たり。末後に之れが與に箇の謹對を下す、識らず左右如何とか以謂る。昔達磨、二祖に謂つて曰く、「汝但だ外、諸縁を息めて内、心喘ぐことなく、心牆壁の如くにして以て道に入るべし」と。二祖、種々に心と説き性と説くに、俱に契はず。一日忽然として達磨の示す所の要門を省得し、遽かに達磨に白して曰く、「弟子此回始めて諸縁を息む」と。達磨、其の已に悟れることを知つて、更に窮詰せず、只だ曰く、「斷滅となり去ること莫きや否や。」曰く、「無し。」達磨曰く、「子作麼生。」曰く、「了々常知の故に、之れを言ふも及ぶべからず。」達

人のいひなり、大惠の門下なり。
⑰紫巖老子は、張德遠なり、これ秦國夫人の子。
⑱隨喜、讚歎とは、心を新道に寄することを嘆美するなり。書を美むるにあらず。
⑳下は彦沖が文章を贊むるなり。
㉑大義とは、及第の詞なりと、前漢蕭望の傳に出づ。
㉒之とは及第の文章なり、又は知許の人を指す、知許は文章を穿鑿する者なり。
㉓謹對とは及第の詞策文の始に先づ答と書す、終には必ず謹對と書す。
㉔昔云云、第六段、邪師の教壞を論するに四節あり、初に達磨二祖の因縁を引く。之を引く意は、下の處をして縁する所なく云云の張本となす、又彦沖が方便に滞在すること

磨曰く、「此れ乃ち從上の諸佛諸祖、所傳の心體なり、汝今既に得たり、更に疑ふこと勿れ。」彦沖が云く、「夜は夢み晝は思ふこと十年の間、未だ全く克つこと能はず、或は端坐靜黙して一へに其の心を空じ、慮をして縁する所なく、事託する所なからしめて、頗る輕安なることを覺ゆ」と。讀んで此に至つて覺えず失笑す。何が故ぞ、既に慮、縁する所なくんば、豈に達磨の所謂内心喘ぐこと無きに非ずや、事託する所なくんば、豈に達磨の所謂外諸縁を息むるに非ずや。二祖初め達磨の示す所の方便を識らず、將に謂へり、外諸縁を息め内心喘ぐこと無うして、以て心を説き性を説き理を説くべしと。文字の證據を引いて印可を求めんと欲す、所以に達磨一々に列下す。用心する所無うして方に始めて歩を退いて、心、牆壁の如しといふの語、達磨の實法に非ざることを思量して、忽然として牆壁の上に於て頓に諸縁を息む。即時に月を見て指を亡じて便ち道ふ、了々常知の故に言これ及ぶべからずと。此の語亦是れ時に臨んで達磨に拶出せらる、底の消息なり、亦二祖の實法にあらず。杜撰の長老輩、既に自ら所證なくして便ち逐旋捏合して、他人をして歇めしむと雖

が、二祖が錯りて達磨の語を認むるに無同する故に、彦沖が語を結判せんが爲なり。
① 大悟せしをいふ。
② 諸縁を息むとは、外六塵を却絶すといふにあらす。
③ 斷滅とは息の語に因んでいふ。
④ 之を言云云は言語道斷の意。
⑤ 汝今既云云は印可なり。
⑥ 第二節、彦沖の語を以て、達磨の語に合す。夜は云云とは妄念の止むことなきをいふ。
⑦ 道力の、業力に克つ能はざるをいふ。
⑧ 託は寄の義なり、事縁に拘はる無きをいふ。
⑨ これ靜を以て闇を止む、石の草を壓するが如し。
⑩ 彦沖が語は達磨の語に似、又二祖初め外諸縁を息む云云の語を認めて謬りし、彦沖が語りは二祖に同す、故に失笑す

も、渠が自らの心火熠々として晝夜停まらず、二税を缺く百姓の如くに相似たり。彦沖、却つて許多の勞攘なし、只だ是れ毒に中り得たること深し。只管外邊に亂走して動と説き靜と説き、語と説き黙と説き、得と説き失と説く。更に周易、内典を引いて、硬く差排和會す。眞に是れ他の閑事の爲めに無明を長す。殊に一段生死の公案未だ曾て結絶せざることを思量せず。臘月三十日、作麼生か折合し去らん。眼光落ちんと欲して未だ落ちざる時、且く閑家老子に向つて、我が神を澄して慮を定むること少時せんことを待てと道ふべからず、却つて去つて相見し得んや。此の時に當つて、縦横無礙の説も亦使ひ著じ、心木石の如くなるも亦使ひ著じ、須らく是れ當人生死の心破れて

るなり。
① 第三節、二祖の謬、彦沖が謬に同す、依つて暗に斥く。
② 心、牆壁の如くなるを以て便ち道なりと云つて、門頭戸口を認むるなり。
③ 列下すとは、それもそれもと取り除くなり。
④ 二祖、如何んともする能はざるをいふ。
⑤ 歩を退くとは、心と説き、性と説くなり。
⑥ 息は止め盡すなり、者裏に到れば、外諸縁を息むこともなく、内心喘ぐこと無きも亦無く、心牆壁の如きも無く、以て道に入るべきなく、無も亦なきなり。
⑦ 此語とは、了了等の二祖の語なり。
⑧ 第四節、彦沖を結判し、過を以て邪師に歸せしむ。
⑨ 逐旋は次第の義。
⑩ 渠とは邪師を指す。心火云云は心縁分別の止まざるをいふ。楞嚴十、長水の經。
⑪ 二税とは二度の年貢、缺とは未納なり、生死相續の人の生死到來を怖懼するは、二税を納めざる百姓の官徴を怖るゝが如くに相似たりと。
⑫ 勞攘は煩冗の貌、毒とは邪師の毒なり。
⑬ 彦沖は、靜を説き黙を説くを内邊と思へり、實は外邊亂走なり。
⑭ 第七段、古聖の語を譯解するを説く、三節あり、初に生死の心を破せんことを要す。周易一、内典とは佛教經典なり。廣弘明集八、道安の二教論に云云す。
⑮ 硬等とは、實安排すべからざるをいふ。
⑯ 意は、内典外典を捏合するも無益の事なりと。洞山悟本の

① 始めて得べし。若し生死の心破るゝことを得ば、更に甚麼の神を澄しめ慮を定むるとか説かん、更に甚麼の縦横放蕩とか説かん、更に甚麼の内典外典とか説かん。② 一了一切了、一悟一切悟、一證一切證、一結の絲を斬るが如し。一斬一時斷、無邊の法門を證するも亦然り、更に次第なし。③ 左右既に狗子無佛性の話を悟る、還つて、此くの如くなることを得るや也た未だしや。若し未だ此くの如くなることを得ずんば、直に須らく恁麼の田地に到つて始めて得べし。若し已に恁麼の田地に到らば、當に、此の法門を以て大悲の心を興起して逆順の境の中に於て、和泥合水して身命を惜まず、口業を怕れず、一切を拯拔して以て佛恩を報すべし。方に是れ大丈夫の所爲なり。若し是くの如くならず

- ① 偏に云く、「衣裳破處重重補。糲食無時旋旋營。一箇幻軀能幾日。爲他閑事長無明。」
- ② 生死を透脱するの公案なり。
- ③ 折合とは、事のまにあはするをいふ、碧巖六十三則の下語。
- ④ 大手振つて相見し得るや、さうばてきまいとの意。
- ⑤ 前の周易内典の語に對して言ふ。
- ⑥ 前の端靜默に對して言ふ。
- ⑦ 此に於て圓老に向つて初めて折合し去らんと。
- ⑧ 時節を經す。
- ⑨ 一結等は碧巖十九則の垂示の語。
- ⑩ 第二節、傍らに劉賓客を勸策す。
- ⑪ 此の如とは、一了一切了の境界を指す。
- ⑫ 上の無邊の法門を指す。
- ⑬ 和泥等、その意は、彦沖を救はれよとなり。
- ⑭ 第三節、正しく譯つて周易内典を引き合はすことを論ず。
- ⑮ 劉之器、字は彦沖なり。
- ⑯ 易注疏八下系辭なり。易大全二十三蘇氏易傳八等。
- ⑰ 應無等は金剛經の句、纂要上。林間錄上に老安國師を引けり、上の句は如理智、下の句は如量智。
- ⑱ 寂然等は易の註疏七上の聖辭。
- ⑲ 土木等は無心をいふ。楞嚴一、長水の釋あり。
- ⑳ 渠とは彦沖なり。
- ㉑ 無間とは、梵語阿鼻の譯、八大地獄の中の最苦處にして墮獄の罪人、劍樹、刀山、鐵湯等の痛苦を受けること無斷なきが故に、無間地獄といふ。今は無間地獄に墮する業因をいふ。業とは身、口、意の上に作す行爲をいふ。
- ㉒ 正法輪とは、佛陀の説きたま

んば、是の處あること無し。彦沖、孔子の易の道たるや、屢に遷まると稱するを引いて、佛書の中の、應無所住而生其心といふに和會して、一貫と爲す。又、寂然不動といふを引いて、土木と殊なること無しと云ふ、此れ尤も笑ふべし。渠に向つて道はん、無間の業を招がざることを得んと欲せば、如來の正法輪を誘ふること莫れと。故に、經に曰く、「色に住して心を生ずべからず、聲香味觸法に住しても心を生ず應らず」と。此の廣大寂滅の妙心は、色を以て見、聲もて求むべからざることを謂ふ。應無所住とは、此の心實體なきを謂ふ。而生其心とは此の心、眞を離れて立處あるに非ず、立處眞なることを謂ふなり。孔子、易の道たるや、屢に遷まると稱するは、此れを謂ふに

- ひし聖教をいふ。能く眞理に契ひし教なれば、外道の邪法に簡んで正と云ふ。輪とは喻の名にして、輪王の輪寶のよく凹凸の地を平坦ならしめ、又人の惡心を破するが如く、佛陀の正法は能く衆生の煩惱、業、外道の邪見を破摧する力用ある故に喩へて法輪と名く。いま寂靜を認着し、或は強ひて外典に和會する等の名相を認むるを正法を誘ふとなす。
- ② 金剛經なり。
- ③ 此心は方處なし。安國師云く、「色聲に住せず、迷悟に住せず、體用に住せずして而も心を生ぜば、一切法に即して一心を顯はす、若し善に住して心を生ぜば即ち善現じ、若し惡に住して心を生ぜば即ち惡現じて、本心即ち隱る、若し所住なければ十方世界唯だ是れ一心なり」と。六祖云く、「風幡動せず是の心動す云云」と。
- ④ 眞を離るは、體なり、立處は用なり。體用互融一如なること水波の如し。
- ⑤ 此とは應無所住の語を指す。
- ⑥ 荐は訓はしきりにて廻轉の義。
- ⑦ 易下繫辭十九、屢遷は吉凶等の變動をいふ、即ち陰窮りて陽生じ、陽窮りて陰生じ、吉窮りて凶生ず等、吉凶に偏らざるをいふと。吉は得、凶は失、悔は憂、吝は虞なり。
- ⑧ 始終輪環して而も寂然不動の體は、變易の道に合すと。
- ⑨ 孔子のは世間の教を説く、出世の教に非ず、又大極無極等を説くも出世の至理にあらす、然るに二者を和會せんとする故に言ふ。
- ⑩ 左右とは劉彦倫なり。
- ⑪ 自在なるを喩ふ、法華譬喻品

は非ず、屢とは 荐なり、遷は革るなり、吉凶悔吝は動より生ず、屢に遷るの旨は、常に返いて道に合す。如何が應無所住而生其心と合して一塊と成ることを得ん。彦沖、但だ佛意を識らざるのみに非ず、亦孔子の意を識らず、左右、孔子の教に於て出沒すること 園觀に遊ぶが如く、又吾が教に於て深く 園域に入る。山野此くの如く杜撰、還つて是なりや無や。故に 圭峯の云く「元亨利貞は乾の徳なり、一氣より始まる、常樂我淨は佛の徳なり、一心に本づく。一氣を專にして 柔を致し、一心を修して道を成す」と。此の老の此くの如く和會す、始めより儒釋の二教に於て 偏枯なく、遺恨なし。彦沖、應無所住而生其心と易の屢遷とを以て大旨同貫すといふは、未だ敢て相許

に出づ。
 ② 園域とは奥域なり、佛境界に入るの深きをいふ。
 ③ 山野云は、大惠自ら謙退して言ふ、此れは易を解するに系る。
 ④ 圭峯とは華嚴宗の宗密禪師のこと、終南山の圭峯に居せし故に稱す。果州西充の人、澄觀に對して深く華嚴の奥義を窮め、復たあらゆる内外の學に深く、著述甚だ多し。
 ⑤ 元亨等は、易經一に之を四徳といふ、もとは萬物の始、亨とは萬物の長するなり、利とは萬物の遂ぐるなり、貞とは萬物の成するなり、唯だ乾坤に此四徳あり云云」と。割覺略疏一序等に云云す。此れは義通じて、而も理同じと謂ふにあらず。
 ⑥ 一氣とは、陰陽の未だ分れざる根本元氣なり。
 ⑦ 常等を涅槃の四徳といふ。迷界の人は明智なきが故に、五蘊身に著し正理を顛倒して見、即ち世間の無常なるを常住とし、五欲に耽りて樂となし、非我を我とし、不淨を淨とす、之を凡夫の四顛倒といふ。二乗は諸法實相なる涅槃の常住なるを非常となし、樂を苦となし、自在なるを無我となし、清淨なるを不淨とし、世法を苦、空、無常、無我なりとす、之を枯の四倒といふ。佛は眞實相に達し玉ふが故に、常、樂、我、淨の四徳を具し智徳圓滿の境界に住す。常とは法身の常住不變の徳をいふ、生死の苦なきを樂といふ、煩惱束縛なく自在なる徳を我といふ、又妄執等の染汚なき徳を淨といふ。吾人若し智見を開きなば此世間の常相即常樂我淨の涅槃なり、此四

さす。若し彦沖が差排に依らば則ち孔夫子と釋迦老子と 殺著して 草鞋を買はしめて始めて得ん。何が故ぞ、一人は屢遷、一人は無所住なればなり。想ふに 讀んで此に至らば必ず 絶倒せん。

劉通判に答ふ 彦沖

令兄寶學公は、初めより未だ嘗て 管帶忘懷の事を知らず、手に信せて鼻孔を摸著す、未だ盡く諸方の邪正を識得せずと雖も、而も基本堅實なれば、邪毒も侵すこと能はず、忘懷管帶も、其の中に在り。若し一向に忘懷管帶のみにして、生死の心破れずんば、陰魔其の便を得ん。未だ免れず、虚空を把りて 膈截して兩處と作すことを。靜に處する時は無量の樂みを受け、闇に處する時は無量の苦みを受く。

徳は本と一心中の徳にして四徳も萬法も一心を出でざるなり。
 ① 柔とは順なり、萬物と相應するをいふ。一氣發動して四象八卦萬物となる、その一氣に還へり之を體すれば、能く萬物に相應するなり。一心は一切の本なり、故に一心を研修すれば無上道成じ、萬徳顯はれて物と諍はず、自在を得。故に二教その致を一にすといふなり。
 ② 偏枯は、片落なく、圓滿なるをいふ、遺恨なしとは、甲乙なきをいふ。
 ③ 正しく利根を結斥す。
 ④ 夫子とは有道者を尊稱するの辭。
 ⑤ 殺著とは、殺は降なり減なり衰小なり、今謂く、孔子と釋迦と共に其徳位を減じ降して、再び學人となして奔馳せしむるの意。孝經玄宗の序の注に云く、「長服を殺いで短衣と作す」と。
 ⑥ 草鞋は草鞋の如し、屣は「くつ」なり、即ち遊歴する爲に。
 ⑦ 讀とは、此書を讀んでなり。
 ⑧ 絶倒は、これ戲言なるに依る、公必ず笑ひ絶倒せんとなり。
 ⑨ 氏族大全五に云く、劉子筆字は彦沖、屏山先生と號す。朱熹、入道の次第を問ふ、答へて曰く、吾れ易に於て道に入るの門を得たり」と。朱晦庵の師なり、宋史列傳百二十三等に出づ。通判とは、宋史三十八職官志に曰く、太祖始めて諸州通判を置く云云」と、即ち州事を通判するの官なり、今の縣知事の如き。
 ⑩ 此章は、學者の智解、情識分別を刺破し、打成一片の工夫を示す。
 ⑪ 第一段、邪工夫を責む、之に

① 苦樂均平なることを得んと要せば、但だ心を起して管帶し、心を將て忘懐すること莫れ。十二時中、放つて蕩蕩地たらしめよ。忽爾として、舊習暫起せば、亦心を用ひて按捺することを著ざれ。只だ暫起の處に就いて箇の頭を看よ。狗子に還つて佛性ありや也た無きや。無と。正恁麼の時、香爐上一點の雪の如くに相似

二節あり、初に産翁を歎美す。① 昔て邪師に見えざれば……忘懐は、事を胸中、記せず、空寂を守つて木石の無心の如きないひ、管帶は管は意を領じて忘れず、帯は物を帯びて身を離れずとて、一切を思量する知解情量なり。② 其中とは、邪毒も侵す能はずの語を指す。意は忘懐管帶は言はずして上の語に於て知るべしとなり。③ 若し一向等は、第二節、正しく通判の邪工夫を費む。若し公の如くに一向に……④ 陰魔とは四魔の一、四魔とは、一に煩惱魔とは、貪瞋等が吾人を惱亂して善事をなさざらしむるをいふ。二に天子魔とは、第六天の魔王等にて、吾人の正心を妨げ、善行を成ぜざらしむ。三に死魔とは、吾人は死あるが爲に、永く佛道

を修行し慧命續くる能はざるをいふ。四に五陰魔、吾人は色(肉體)受、想、行、識(精神)の爲に束縛せられて善を行する能はざるをいふ。今はその五陰魔を指す、正念相續せざれば、知らぬ間に肉欲に耽けり、快感(受)を貪る様になるを、覺、便りを得と名く。即ち物に執着するをいふ。⑤ 脇は有云く、「唐本大慧書に隔に作るは誤なり」と、今云く、隔の方却つて正しき。即ち隔截等とは、本來無自性なる虚空の如く障礙なき本地風光裡に強ひて靜閑を分隔して妄に苦樂に認着するをいふ。⑥ 靜に處すとは、兩處となす様子を述ぶ。⑦ 第二段、用心の得益を述ぶ、苦樂の苦の上に「若し」を加へ見よ。⑧ 蕩蕩地は、廣遠にして檢束な

き貌。論語泰伯篇、惟摩佛道品などに出づ。⑨ 舊習等とは舊來の習氣、暫然發起せばの謂なり。⑩ 按捺は共に抑へるなり。⑪ おさへやむは是れ妄想なり、妄想を以て妄想を止むときは了期あることなし、故に無字の頭を拈提して業識の根源を截斷せしむ。⑫ 圓覺經講義に云く、「當に知るべし、圓覺寂照すること、香爐一點の雪の如し、豈に暫住すべけんや」と、顯燈十九、石頭章に云云す。⑬ 眼辨等は、智眼も能くわかり、手も能くきく者は即今直ちに「ひつつかめ」との意なり。遠は驚なり、行なり。誦會に云く、「超なり、跳なり」と、一連に連得とは、矢の飛び来るを一つかみにつかむ程の意に見よ。

たり。⑭ 眼辨じ手親しき者は一連に連得すべきなり。⑮ 方に知らん懶融の道く、⑯ 恰恰として用心する時、恰恰として心用ふる無し、曲談すれば名相に勞し、⑰ 直説すれば繁重なし、⑱ 無心にして恰恰として用ふ、常に用ふれども恰恰として無なり、⑲ 今無心と説く處、有心と殊ならず」と。是れ人を誰かすの語にあらざることを。昔、婆修盤頭、常に一食にして臥せず、六時に佛を禮し、清淨無欲にして、衆の爲に歸せらる。二十祖、閻夜多、將に之れを度せんを欲して、其の徒に問うて曰く、「此の徧行頭陀、能く梵行を修す、佛道を得べけんや。」其の徒曰く、「我が師、精進なること此の如し、何が故にか不可ならん。」閻夜多曰く、「汝が師、道と遠し、設ひ苦行して塵劫を歷るとも

① 靜閑一味を説かんが爲に引くなり。懶融は牛頭法禪師にして三祖道信の法嗣なり、博陵王の間に答ふる偈なり。② 恰恰は心を用ふるなり、即ち事事物物に心を用ひ氣をつけるなり。③ 曲談とは迂曲の談にして、直ちに眞理を顯はさず、廻はり遠く説くをいふ、即ち三乘十二分教みな是れ迂曲の談なり、既に迂曲の方便説なれば聞く者、迷、悟、佛、凡夫等の名相に滞りて徒らに煩勞すとなり。④ 直説とは教相學解に涉らず、直ちに眞理を説くをいふ。直説といふも早く是れ曲談に墮す、故に云ふ、言語道斷と、口を聞くも早くこれ錯り了れり。⑤ 無心とは、心を用ひて而も用心の迹なく、任運に物に應ず

るをいふ。此の意を以て下を見よ。⑥ 人の無心の處を認めんことを恐れて、木石の如くにあらざるをいふ、是れ全く靜閑一味なるを示す。眞空は有に異ならざるの空といへるは、この意なり。⑦ 第三段、古人の梵行を執することを破す。婆修盤頭は梵語、徧行と譯す、羅閱城の人、第二十一祖なり、傳燈二に出づ。⑧ 六時とは晨朝、即ち卯の刻にして今の六時頃。二に日中、正午の意。三に日没、酉の刻にして今の約六時なり。四に初夜、戌の刻にして約午後八時。五に中夜、子刻にして午後十二時。六に後夜、寅の刻にして、約午前四時なり。又卯の刻より、酉の刻に至る間を畫の六時とし、戌の刻より寅の刻に至る間を夜の六時と

皆虛妄の本なり。其の徒不憤して皆色を作し
 聲を厲して、闇夜多に謂つて曰く、「尊者何の徳
 行を蘊んでか而も我が師を譏る。」闇夜多曰く、
 「我れ道をも求めず亦顛倒もせず、我れ佛
 をも禮せず亦輕慢もせず、我れ長坐もせず、亦
 懈怠もせず、我れ一食もせず亦雜食もせず、
 我れ足ることも知らず、亦貪欲もせず、心
 希ふ所なし、之れを名けて道と曰ふ。」婆修、
 聞き已つて、無漏智を發す、所謂先づ定を以
 て動かして後に、智を以て抜くなり。杜撰の
 長老の輩、左右をして靜坐して作佛を等たしむ、
 豈に虛妄の本にあらずや。又言く、「靜處は失な
 く、闇處は失あり」と、豈に世間の相を壞して
 而して實相を求むるに非ずや。若し此くの如く
 にして修行せば、如何んか癡融の所謂今無心と

いへり。
 ② 頭陀は梵語、抖擻と譯す、眞心を障蔽する煩惱の塵垢を除去し、抖擻するの謂なり。此頭陀の行に十二あり、人天寶鑑に解説せし如し。
 ③ 梵行とは、梵とは淨の義なり、無欲清淨に生活するを梵行といふ、又慈、悲、喜、捨の四無量心を行するを梵行といふ。今は前の義に近き。
 ④ 雜亂心を離るるを精といひ、間斷なく進趣するを進といふ。又眞精の智を以て、眞淨の行に進むが故に精進と名く。
 ⑤ 我師佛道を成すべし、何ぞ得べからずと云ふの意。
 ⑥ 塵劫は塵沙劫といふに同じ、亦無量劫に同じ。劫は梵語、劫波の略、大時分と譯す、普通の算數に應ふ能はざる長時間といふ。塵は微塵にして世界を碎いて微塵にした其數、或は恒河の沙の數ほどの年月を經るてふこと。
 ⑦ 不憤は不意憤怒の義。
 ⑧ 上に梵行にかかる。
 ⑨ 凡夫外道の顛倒の見。
 ⑩ 雜食等は、摩訶止觀三之三。
 ⑪ 知足等は、南本涅槃二十五、師子吼品に出づ。
 ⑫ 無漏智とは、有漏に對する語にて、漏は漏泄、或は留住的の義にして煩惱の異名なり、煩惱は能く吾人の六根より、殺、盜、邪淫等の種種の過失を漏泄し、隨つて吾人をして迷苦の三界に繫留し住せしむるが故に漏といふ。今はその煩惱を離れたる無碍清淨の智慧なれば無漏智と名く。
 ⑬ 先定等は、南本涅槃經師子吼品の文。
 ⑭ 智は兩人にかかる。又闇處は般若、智を以て他の無明の根本を抜くとの意。

説く處は、有心と殊ならずといふに契得せん。請ふ公、此に於て、諦當に思量して看よ。婆修、初めは亦將に謂へり、長坐不臥にして以て成佛すべしと。纔かに闇夜多に點破せられて便ち言下に歸を知つて無漏智を發す、眞に是れ、良馬の鞭影を見て行くなり。衆生の狂亂は是れ病なり、佛寂靜波羅蜜の藥を以て之れを治す、病去つて藥存すれば其の病愈甚だし。一を拈り一を放てば、何れの時は是れ了せん。生死到來せんとき、靜闇の兩邊、都て一點を用ふること得じ。道ふこと莫れ、闇處に失する者多く、靜處に失する者は少しと。如かず、少と多と、得と失と、靜と闇と。縛して一束となして他方世界に送放せんには、却つて好し。日用多にあらず少にあらず、靜にあらず闇にあらず、得にあらず失にあざる處に就いて、略提擲して看よ。是れ箇の甚麼ぞと。無常迅速なり、百歳の光陰も一彈指の頃に便ち過ぐ。更に甚麼の闇工夫ありてか、得を理會し失を理會し、靜を理會し闇を理會し、多を理會し少を理會し、忘懷を理會し、管帶を理會せん。石頭和尚云く、「謹んで參玄の人に白す、光陰虚しく度ること莫れ」と、這の一句子、開眼にも也た著け、合眼にも也た

① 第四段、上の二條に對して邪見を結列す。
 ② 諦當とは、とつくと思量してといふ義なり。
 ③ 雜阿含經三十三に云く、四種の馬あり、一には鞭影を見て便ち驚き、二には毛に觸れて便ち驚き、三には肉に觸れて驚き、四には骨に徹して始めて驚くこと。
 ④ 拈は取なり、即ち寂靜の一を取り、狂亂の一を棄つるをいふ。
 ⑤ 第五段、世間の無常を説いて急に切りに新事に趣向せしむ。
 ⑥ 却つて好しとは、下の是れ箇の甚麼に系る。
 ⑦ 日用云云は他方に送放するの端的なり。
 ⑧ 略とは、少しの謂なり、彦冲は是に未だ此の如き境界を見ず、少しく靜闇に非ざる處に

著け、忘懐も也た著け、管帶も也た著け、狂亂も也た著け、寂靜も也た著くべし。此れは是れ徑山此くの如くに差排す。想ふに杜撰の長老の輩は、別に差排の處あらん。咄、且く是の事を置かん。

又

左右、靜勝の工夫を做すこと、積んで年あり、識らず眼を開きて物に應ずる處に於て、心地安閑なることを得るや否や。若し未だ安閑なることを得ずんば、是れ靜勝の工夫未だ力を得ざるならん。若干久しうすれども猶ほ未だ力を得ずんば、當に箇の徑截得力の處を求めて、方に始めて平昔許多の工夫に孤負せざるべきなり。平昔靜勝の工夫を做すことは只だ箇の關底を、支遣せんことを要するが爲なり。正

於て試に工夫せよとなり。

① 雜阿含經四十七に出づ。

② 一彈指とは、一たび指を彈く時間といふことにて、百年といへば長きが如きも、瞬間に過ぎ去るの意。

③ 此の如き生死の急切の事あるに、何の暇あつてか呑氣な無益の工夫をなすかとなり。斯く云ふは、上に忘懷管帶は生死到來の時に何の用をなすに堪へんと斷ぜし故に、今生死到來の時に用は堪へ利益ある活工夫を示す。

④ 第六段、古語を引いて、此事は忘懷管帶に在らざることを明す、即ち上に百歳の光陰を引き、又之を引いて譬喩して時光を惜ましむ。此は參同契の語、石頭は青原に嗣ぐ、諱は希遷、端州の人、俗に在る時、毎に民間に娼妓多きを厭ひ、轆車牛を養ひ祠を毀らし

ことあり、老いて禁ずること能はず、青原に參じて悟徹す、天寶の間、衡山に之き南寺の東に石あり、狀臺の如し、庵を其上に結ぶ、時に石頭と號す。傳燈十四に出づ。

⑤ 支理に參する學者といふこと。

⑥ 遮の一句子とは、光陰虛しく度す莫れの一句を指す。

⑦ 開眼等、此れより、大惠の判釋なり、著は著者破著の謂なり、碧巖十則の評に云々。時刻刻皆是れ道なり、空しく看過するなかれ。

⑧ 此れは是とは、邪師に對して言ふ。此の如く光陰虛しく度すこと莫れとの句を差排すと。

⑨ 邪師は、虚しく度すと莫れの語を引いて、教へて靜坐默照せよと云はんとなり。

⑩ 咄云とは、鈍滯の處を咄破

に關の時に却つて關底に自家の方寸を、聒擾せらるれば、却つて平昔曾て靜勝の工夫を做さざるに似て一般なるのみ。① 這箇の道理只だ太だ近しと爲す。遠くとも自家眼睛の裏を出でず、眼を開けば便ち、刺著す、眼を合する處も亦缺少せず。② 口を開けば便ち道著し、口を合する處も亦自ら現成す。③ 心を起し念を動して、渠に承當せんと擬欲せば、早く已に蹉過すること、十萬八千にしたらん。直に是れ、備が心を用ふる處なき處、這箇最も是れ省力なり。④ 而るに今此の道を學する者、多くは是れ力を用ひて求めんことを要す。⑤ 之を求めば轉た失し、之れに向へば愈背く、⑥ 那ぞ得失解路の上へ墮在して、關處に失する者多く、靜處に失する者は少しと謂ふに堪へん。⑦ 左右、靜勝

するなり。意は此くの如く説話すと雖も、尙ほ滯著せば徑山如何ともする能はざれば、且く此事を置かんとなり。咄とは、人を呵し、人を罵る時に用ひる語。或は禪の妙旨の絶言の處に發することあるも、祖錄多くは叱咤の意に用ふ。楞嚴經に云く、佛言く、咄、阿難」と是れ語原なり。

⑧ 第二書なり、大意は、専ら靜關を隔つる過を誡む。此書は甚だ微細妙密の文なり、産冲が深く邪毒に當てらるる故に、普通の藥にては治すべからざれば親切に工夫を示す。先づ第一段に靜勝工夫の益あることを論ず。

⑨ 次の下に二十餘年といふを指す。

⑩ 靜勝の工夫は益あるべきや否やとなり、これ定めて益なしと知り了つて之を斥けんが爲

に先づ微語す。

⑪ 利益あらば可なり、若し無くんば利益ある法を求むべしとなり。

⑫ 寂然工夫は力を得んが爲めなり、若し力を得ずんば數年の工夫に孤負するなり、若し孤負せざらんとせば、邪師の教に執着せず、得力の工夫をなすべしと示す。

⑬ 支遣、支は出なり、度、遮、分なり。遣は送、縱つ、祛く、發つなり。然らば關熱を拂ひ除くの意。

⑭ 聒擾は取り亂す貌、鶻海に云く、「多言多語にて人意を亂す」と。意は一切境界に於て心を擾亂するなり。

⑮ 靜坐工夫は境界に於て自由を得んが爲なり、然るに既に云ふ、晝は思ひ夜は夢むと、又關底に聒擾せらるれば、未だ修行せざる時と同じとなり。

の處に在つて住し了ること二十餘年、試に此子の得力底を將ち來れ看ん。則箇若し椿椿地底を將つて靜中得力の處と倣さば、何が故ぞ却つて闇處に向つて失却するや、而今省力に靜闇一如なることを得んと要せば、但只趙州の無字を透取せよ。忽然として透得せば、方に知らん、靜闇兩ながら相妨げざることを。亦力を用ひて

第二段、現成の受用に得失なきことを示す。此れ辯も及ばざる處、大惠、近しと云ふも早や是れ千萬里、言はんと要すれば唇吻重うし、故に遠しといふ、遠しと云ふも自家の中にある。刺著は、竹針を以て眼を刺すなり、元來者裏に在るが故に。言言句句皆是れ道。此の如く太だ近し、之を求むれば轉た遠し、此等の語を見て學者誤りて多く無事の禪に墮して無明妄想を是となす、若し求心を歇得ざれば何れの時か了悟あらん、求心を歇めて初めて大道に契はん、此に到れば、咳唾掉臂も、祖師西來意も尙ほ通路あり、黃檗の道も亦學ぶべからずと云ふは、意路絶し義路絶する處を云ふなり。藥とは道理を指す。承當とは

背誦なり、深く道理を鉢得するの意なり。十萬八千里にて、遙遠の謂なり、里數にあらす。用心の心を認めざるをいふ、即ち無修の修なり。此れは彦冲に對して言ふ、彦冲は多平工夫を費すが故に。應病與藥の佛祖の言句は元來實法なし、若し輕心慢心を生ぜば却つて毒藥となる。臨濟云く、之を求めば轉た遠く、求めざれば却つて目前にありと。道は常に露現す、然るに靜處は得、閑處は失ふと云ふ、豈に是れ眞道といふべけんやとの意。解路上とは、思量計較、智解分別をいふ。第三段、重ねて靜默の工夫の益なきことを述べて、徑截の工夫を勸む。則箇とは俗語なり、又云く、

「禮語なり、日本の候と稱する語勢と一般なり、親しく通事の説を聞くなり」と。椿々地は、痴兀の貌、椿は懶杌なり、今は枯木の義を取る、此の靜默管帶の益なきこと憐の如く、其不自由なるをいふ。支障は、心を用ひ習問を支ふるなり。これ工夫を作す法を示すなり。秦國太夫人とは、郭國夫人、小國夫人といふに同じ、所封の名なり、普燈十八、大惠法嗣なり。案するに張凌魏公、德遠の母なり。兵族排訥に云く、「計氏、張魏公の母を夫人に封す云云」と。事物紀原一に云く、「夫人の封は王莽より始まる」と。又云く、「國夫人は宋の鄴陽侯、孟豫玉の母、國夫人を拜す、階に消んで高涼の洗氏、功を以て譚國太夫人に封せらる、これ夫人を國に封

支撐することを著さざれ、亦支撐するなき解をも作さざれ矣。

秦國太夫人に答ふ

謙禪、歸るときに、賜ふ所の教と並に親書の數頌を領す。初めは甚だ之れを疑ひき、謙、子細を詢ふに及んで、方に知りぬ自ら欺かざることを。曠劫未明の事、豁爾として現前す、人に從つて得るにあらず、始めて法喜禪悅の樂みは世間の樂みの比すべきに非ざることを知ると。山野、國太の爲に歡喜して累日寢食俱に忘る。兒子は宰相となり、身は國夫人と作ること未だ貴しとするに足らず。糞堆堆頭に無價の寶を收め得て、百劫千生受用すれども盡きすして、方に始めて眞貴となすのみ。然れども、切に此の貴を執著することを得ざれ、

するの始めなり云云。普燈錄十八に云く、「秦國夫人、計氏、法眞は常に蔬食して有爲の法を習ふ、因に大惠、謙禪者を遣はして、問を其子の魏公に致す云云」と、其の接得の話、委出す、披見せよ。此章の大意は、一旦の見地に安ぜず、人類救濟の願を發すべきを示す。第一段、秦國夫人に隨喜す。謙は、開善の密庵禪師にして、法を師に嗣ぐ。未だ修行の功を積まずして發明す、故に之を疑ふなり。未だ悟らずして悟るが如くすれば、自らを欺き人を欺くなれば、今は心と語と相應す、故に自ら欺かざるなり。曠劫已下非ざることを知るまで、來書の語なり。曠劫とは久遠劫と同じ、曠は空曠にして數量を超越するをいふ、劫は劫波の略、時とも譯す、即ち

ち悠久の時間をいふ。今の意は無限の過去以來未だ明らめ得ざりし此事を、今豁爾として發悟し惠身を成就す、これ他に依つて悟らすとの意なり。法華五百弟子授記品に云く、「法喜禪悅食にして更に餘の食想なし」と、科註に云く、「法を聞いて歡喜し、心地充足し、乃至禪定を修して、安穩の樂を得」と、華嚴淨行品に云く、「禪悅を食となし、法喜充滿す」と。即ち諸法の實相を覺悟して苦惱を離れ、常に法性常樂の法味をあらはふ樂少なり。世間の樂とは、五欲の樂、五欲とは、色、聲、香、味、觸の五境に對して、眼、耳、鼻、舌、身の五官の上にて起す情欲をいふ。又財寶、色、飲食、名譽、睡眠に對する欲をいふ。

若し執著せば則ち尊貴の中に墮在して、復た悲を興し智を起して有情を憐愍せざるべきのみ。記取せよ、記取せよ。

張丞相に答ふ

德遠

恭しく惟みるに、阿練若に燕居して、彼の上人と同じく一處に會して、毗盧藏海に娛戲し、宜に隨つて佛事を作し、少病少惱、鈞候動止萬福

吾人凡夫は此等に對して常に求欲を起し、少しにても之を得れば快樂の思ひをなして、益々執著して惱まされつつあり。

第二段、向上の見解に滯ること無からしむ。兒子とは、秦國夫人の子、張德遠を指す、兒子以下眞貴となすのみまで夫人の問書中の語なり。

宰相とは、事物紀原四に云く、昔周公、冢宰に位し、百工を正して以て成王を相く、故に宰相の稱あり、其のこと秦漢より始まる、陳平の、宰相は上天子を佐くと言へる是れなり。亦上相ともいふ。

葦塔堆頭とは、はきだめをいふ、是れ煩惱妄想を喻ふ。無價の寶とは、佛性を比す、維摩經佛道品に出づ。

千生とは、佛教は無始の昔より無終の未來に向つて循環轉

示すなり。

排訥に云く、張浚字は德遠、紫巖先生と號す、紹興中に相を拜し川陝宣撫に充てらる、忠は日月を貫き、孝は神明に通じ、勳は王室に在り、思は生民に在り、威は四夷に震ひ、功は永世に垂る云云と。金湯篇十四に云ふ、紹興中に相を拜し和國公に封ぜられ、孝宗の朝に魏國公に封ぜらる。忠獻と諡す、南軒の父なり、圓悟勤公、蜀に歸へり昭覺寺に住す、公、道を師に問ふ云云と。傳中に僕射といふは即ち丞相の事なり、萬姓統譜三十八、名臣言行錄三などに出づ。別に張浚といふ惡しき人あり、濫すべからず。

此書は公の永州に謫せられし時に寄する者に似たり。文意は謫居の用心を示すなり。

阿蘭若は梵語、單に蘭若、ま

なることを。從上

の諸聖、皆然らずといふこと莫し。所謂念念の中に於て一切法滅盡三昧に入りて、菩薩の道を退せず、菩薩の事を捨てず、大悲心捨てず、波羅蜜を修習して未だ嘗て休息せず、一切の佛國土を觀察して厭倦あるとなし、度衆生の願を捨てず、轉法輪の事を断せず、教化衆生の業を廢せず。乃至所有

たは練若ともいふ。空靜處、閑靜處、又は無喧諍と譯す、これ村落を離れたる閑靜の所にして、多く寺院を標する名にして、修行する好適の地なり。肇師云く、忿競は衆聚より生じ、無諍は空閑より出づ、故に佛は蘭若に住することを讚したまふと。燕居とは閑暇無事なるをいふ。

上人とは何人を指すか詳かならず。摩訶般若經に云く、一心に佛道を行じて、心を散亂せしめざるを上人と名く。増一阿含に云く、人の世に處して過あれば自ら改むるを上人と名く。一般には聖人と同じく有徳の僧の敬稱に用ひらる、今は其寺の住持を稱す。

毘盧は梵語、毘盧遮那の略、處一切處、或は光明徧照等と譯す、これ佛の自性身なり、

法身佛なり。即ち釋尊の證り給ふ所の靈體にして、法身、般若、解脫の三徳等の萬徳を圓具し、十方に周徧し、能く任運に一切法を照し、而も差別を超絶したる平等絶待の唯佛與佛の境界なり、絶待といふも相待に對していふ絶待にあらず、唯絶待界なり、即ち柳は綠花は紅、蝶舞ひ鳥歌ふ、所謂長者は長法身、短者は短法身、唯行、唯住、唯坐、唯臥にして其の思議を容れざる本地の風光裡に遊戲するをいふ。

藏とは萬行萬徳を包藏して受用するも盡くることなきを顯はし、海とは喩にして、其の甚深無量、其廣の無涯なることを彰はす。華嚴疏抄一。

佛事とは、佛陀の事業にて、佛は人を教化するを事とし給ふ。依つて佛教の祭祀、法會等を始めとして説法度生の事

業、みな是れ佛事なり。

少病少惱とは、問候の詞なり、法華涌出品、維摩香積品に云す。僧史略上に云く、卑尊に問ふときは、則ち不審少病少惱起居輕利なりや不やといふ云云と。

鈞候等とは、尊候の起居動靜如何といふに同じ。今は宰相に對する故に鈞といふ、鈞とは、陶師が瓦を造るの模範なり、瓦形に軸あり、埴を其上に置きて之を旋回するときは、方圓の形、手に隨つて成る故に、相公は天下の政柄を執る之を鈞軸と謂ふ、丞相は宰相なり故に鈞候といふ。詩經に國の鈞を乘る云云といへり。

第二段、張丞相の謫居を慰めて日用の用心を示す。諸聖云云とは、張丞相の謫せられたるを謂ふなり、然るに朝廷に憚る故に、顯露にその事な

勝願 皆圓滿せしむ

ることを得て、一切

國土の差別を了知して

佛種性に入りて彼岸

に到ると。此れ 大丈夫

夫四威儀の中に受用す

る家事なるのみ。大

居士、此に於て 力め

行ふて倦むことな

れ、而して妙喜、此に

於て亦 普州の人と作

らん。又識らず、還つ

て 外人の手を挿むこ

とを許さんや否や。聞

く、長沙に到つて即ち

はすして従上の諸聖といふ。

意は古の聖賢を而を冒して直

に諫を上りて横に諷諭に逢ひ

し、唯だ公のみにあらずと張

丞相を慰諭するなり。

所謂等とは、華嚴經十通品の

文の取意なり、經に云く、念

念中に於て滅盡三昧正受に入

り一切の漏を盡す云云と。念

念とは十二時中なり、一切法

とは、佛法世法等の一切法な

り、若しくは五蘊の法なり、此

等諸法の當體寂滅なりと達し

て差別の法に妄執せざるを滅

盡三昧に入るといふ。滅盡と

の所作進退、治生産業の動作

の其儘が寂滅なりと體達する

を滅盡三昧に入ると解す。

菩薩とは梵語、菩提薩埵の略

稱、菩提とは覺、或は道と譯

す、覺智のこと、薩埵とは衆

生或は有情と譯す、即ち上、

菩提を求め、下、有情を教化

する悲智の二大願を具して自

利、利他の修行をする人をい

ふ。いま菩薩の道とは、上、

佛陀に向つて覺智を求むるこ

とを退失せずとなり。菩薩の

事とは、人類を救済するの行

事を捨てずとなり、即ち佛國

に悟入すれば涅槃の彼岸に到

るなり。以上彼岸に到るまで

が華嚴經の文なり。

大丈夫等とは、如上の經説の

如きは、大丈夫の行住坐臥の

四威儀の中に用ふる平常の茶

飯事のみとなり。

大居士は、張丞相を指す、梵

語の迦羅越、居士と譯す、四

徳を具する士の美稱なり。一

に官仕を求めず、私に云く、名

利の爲に仕官を要求するを斥

ふなり、教化の爲めの仕官は

其徳を害せず、二に欲を寡う

し徳を蘊蓄す、三に居財大に

富む、四に道を守り自悟す。

力め行ふとは、華嚴の文の如

くに行へとなり。

同じ道を唱和するの意、之は

身を兼て内に在りとの方語な

り。其意は、普州の人はみな

賊なり、故に其身賊の中に

在りとなり。案するに張丞相

といふ。今は其佛の慈悲心を

吾心となして、拔苦與樂の行

を止めざるをいふ。心地觀經

一などに出づ。

波羅蜜とは、波羅蜜多の略、

到彼岸、又は度と譯す、即ち

佛陀の教法なる布施、戒等の

船に乗つて生死の此岸より煩

惱の中流を渡りて悟りの涅槃

の彼岸に到るの意。これ菩薩

の大行なり、之に布施、持戒、

忍辱、精進、禪定、智慧の六

あり、之を六度行と稱す、一

一の解釋は入天寶鑑に附すれ

ば略す。智度論二十九、等。

佛國土とは、唯佛のみ住した

まふ境界なる常寂土、或は極

樂淨土の如き諸佛の國土をい

ふ、又直接に佛の感化を受く

べき國土をも佛國土といふ。

而し外にのみ求むべきにあら

ず、吾人若し佛の慈悲心を以

口を毗耶に杜ちて深

く不二に入ると。此れ

亦 分外に非ず、法

是くの如きが故に、願

くは居士、是くの如

くに受用せば、則ち

諸魔外道、定らず來つ

て護法善神とならん。

其の餘の 種種差別の

異旨は皆自心現量の境

界なり、亦他物に非ず、

識らず居士、以て如何

んと爲す。

張提刑に答ふ

詐のなき清淨なる生活をなす

所これ佛國土にあらざるなけ

んや。吾宗にては、種種の因

縁、話頭を參究するを、佛國

土を觀察すといふ。

轉法輪とは教法を説くをい

ふ。前に解するが如し。

一切等、衆生の類無量なるが

故に、國土も亦種種差別ある

なり。

佛種性とは、佛性といふに同

じ、中道實相の理性なり。種

とは因の義なり、即ち吾人の

心内に本來佛性を具有する

も、對境に向つて起す所の煩

惱の爲に隱蔽せられて顯はれ

ざれども、聖教及び善知識等

の勝緣に逢はば、本有の佛性

漸く起動して次第に淨用を顯

現するに至る、これが體て成

佛すべき因といふ、而して之

を證悟する故に佛種性に入る

といふ。入とは悟入なり、既

に悟入すれば涅槃の彼岸に到

るなり。以上彼岸に到るまで

が華嚴經の文なり。

大丈夫等とは、如上の經説の

如きは、大丈夫の行住坐臥の

紹興二十五年、永州(或は順

州に作る)に謫せらる、此書を

得たるは其時なり。大惠も亦

紹興二十年梅州に謫せられ、

同二十五年十二月、恩を蒙つ

て自ら便す、然らば大惠、張

浚俱に謫處に在り、故に再び

いふ。この意は道を守り忠を

立てて屈せざるは、是れ菩薩

の大事なり、我も亦普州人の

賊とならんとて、此流寓を以

て賊に比して言ふ。

挿手とは、普州の人といふ語

に因んで言ふ、賊人は外人の

手を挿むを嫌ふ。外人とは大

惠なり。

毘耶は毘舍利國の毘耶離城な

り、毘舍利國は釋尊傳道の

舊址にして、今のゴラクデー

ル縣とモチハカケル縣に亘る地

方にて即ち恆河と那羅延河と

にて包まれたる一帶の地域な

り。其内の一都市を毘耶離城

といふ。

張提刑に答ふ

張提刑に答ふ

張提刑に答ふ

張提刑に答ふ

張提刑に答ふ

張提刑に答ふ

張提刑に答ふ

張提刑に答ふ

老居士の所作所

爲、冥に道と合す、但だ未だ、因地下することを得ること能はざるのみ。若し日用の應縁、故歩を失せずんば、因地下を得ずとも、臘月三十日閻家老子も亦須らく、手を拱いて歸降すべし、況んや一念相應せんをや。妙喜老漢未だ目撃せずとも、其行事を観るに、小大折中して過不及なし、只だ此れ便ち

といふ、これ維摩居士の居處なり。口を杜づとは、杜は閉なり、塞なり、譬て佛弟子の、文殊菩薩を上首として、諸菩薩等、維摩の丈室に來り、佛教の原理たる不二法門に就いて問答し、三十二の菩薩は各自に其了悟する所を説く、最後に文殊、維摩に向つて不二法門を問ふ、維摩黙す、一も言説するなし、之を口を杜づと言ふなり。これ黙を以て絶言絶慮の不二絶待の法門を説破せしなり、故に文殊も、善哉これを眞の不二法門となすと讃歎せり。後世に、維摩の一默即ち千言萬答すといへる、此意なり。維摩經不二法門品に出づ。今は張凌の論處にあるが故に、口を杜ちて維摩と同一三昧なることを顯はすなり。

②公に於ては當然の事の意か。③法とは萬物の道理なり、或は法本有の自然の理なりと。④是の如とは、上の華嚴經の文を指す。⑤諸冤等とは、讒人を指す、釋尊、大寶坊に於て大集經を説きたまふ時、天魔波旬等の言く、「我れ今より以往、正法を護持せん云云」と。今は是の如く受用せば、公の爲に敵となる惡輩を捨てずして、度衆生の願を専らにせば、彼惡輩必ず來つて公の爲に護法神とならんとす。⑥差別等の意は、差別の異旨は皆これ自己本心の物、擒縱與奪は本有の境界なりと。⑦張は會元二十に云く、吳偉は明居士、字は元昭、久しく眞敬了禪師に參じて自ら受用三昧を得、以て極致となす、後に大惠を淨峴庵に訪ひ、衆に隨

つて入室す、大惠、狗子無佛性の話を擧して之を問ふ、公、擬答す、惠、竹篋を以て便ち打つ、公、對ふるなし、遂に留つて香案す云云。提刑は、案するに本邦の刑部侍郎に當る、事物紀原六、事文外集八に出づ。此章は經言、祖句を擧して、言外に自證自得せんことを勸む。⑧老居士等、第一段、張公が平生の行履を寢む。冥とは、自然に合するをいふ。⑨因地下、因は船を遊むる聲なりと、宗門に或は因地下一聲などいひて、大悟徹底せし時に用ふ。廬山の優曇寶鑑十に云く、「世人の口中未だ嘗て説かず、喻へば物を失ひし人の如き、忽然として尋見して覺えず此一聲を發す、是れ因の字なり」と。⑩故歩とは、前かどより佛道に

是れ道、所合の處なり。這裏に到つて塵勞の想を作すことを用ひざれば、亦佛法の想を作すことを用ひざれば、佛法といふも塵勞といふも都て是れ外事なればなり。然れども亦外事の想を作すことを得ざれば、但だ回光返照せよ。是くの如きの想を作す者は甚麼の處よりか得來る、所作所爲の時、何の形段がある。所作既に辨じて我が心意に隨つて、周旋せずといふことなく、少刺あることなし。正當恁麼の時、誰の恩力を承くるやと、此くの如く工夫を倣して、日久しく月深くんば、人の射を學んで自然に的中するが如くならん。衆生顛倒して己に迷ふて物を逐ひ、少欲味に耽りて甘心して無量の苦を受く。日を逐ふて未だ眼を開かざる時、未だ牀を下らざる時、半惺半覺の時に、心識己に紛

一步を進み入る意。班固傳に云く、「邯鄲に學歩する者あり、未だ髣髴を得ず、其故歩を失す」と。莊子秋水篇に出づ。前漢書百序傳等、意は從來の所作所爲の如くならば悟徹の分なしと雖も、道力、業力に勝るべしとなり。①手を拱くとは、道力の業力に勝るをいふ。②一念相應とは、一念は時間の短きをいふ、相應とは眞理に相應契當するをいふ、即ち忽然として情識破れ、本有の妙智開發して法性の理に冥契し、境智俱に忘するをいふ。③第二段、工夫の法を示す。④行事とは、平日の所作所爲なり。⑤折中とは、楚辭四九章に云く、「兩端を折つて其中を取る」と。漢書七十二、及び左傳には中を衷に作る。過不及とは論

語に出づ。⑥佛法とは塵勞に對して言ふのみ、性中に此の如き名なし、皆是れ因名句の故に。智論十五に云く、「佛涅槃皆妄法より生じて實定あることなし」と。而し此性中に内事外事といふ者もなし、故に外事の想云云といふ。⑦形段とは、大小長短等の形をいふ、今は心法は形なうして十方に通貫するの意。⑧周旋とは、法華の六に云く、「周旋遊戯」と、左傳僖公二十三年及び孟子に云云す。今は周旋周回自在の謂なり。⑨誰の恩力とは、工夫をなし得たる様子なり。⑩人の射云は、宗鏡錄四十五に大寶積經を引けり。⑪衆生等、第三段、衆識逐流の相を示す。楞嚴經二。⑫己に迷等は楞嚴二上に云く、

飛して、妄想に隨つて

流蕩す。善を作し惡

を作すこと未だ發露せ

ずと雖も、未だ牀を下

らざる時、天堂も地獄

も、方寸の中に在つて、

已に一時に成就す。

發する時を待つに及ん

で已に 第八に落在

す。佛云はすや、一切

の諸根は自心現なり、

器身等の藏は自の妄想

の相もて施設顯示す。

河流の如く、種子の如

く、燈の如く風の如く

如しといふなり。

因縁生にして無常なる物を常

と執し、不淨の物を淨と心得

て妄執して諸の業を造りて、

三界六道に輪廻轉生すること

井の水を汲む輪の如く無始無

終なりと。

識得破とは、佛説の如く、一

切法は唯心所現なり、因縁生

のものなれば心外に認むべき

實法なく、復た五蘊假和合の

身なれば、自己と固守し人我

と執すべきものなしと識得着

破せば云云となり。

無人とは實我實人なしと知る

智を無人智即ち人空智とい

ひ、宇宙萬有も亦因縁生のも

のにて執着すべきものなし、

本來空なりと悟る智を無我智

即ち法無我智、法空智といふ。

第四段、用心の得益を示す。

善惡の念の發す云云。

祖は、三祖僧琛大師の信心銘

言ふ。

第六段、妙悟を勸激す、已下

四節あり、初に工夫を勸む。

此道を修行するの人。此話と

は、省力得力の話なり。

往往は重重なり、頻は數度相

重なるをいふ。

此くの如くとは、發せんとし

て未だ發せず等を指す。

先德は、清涼國師なり、皇太

子が心要を問ふに答ふる語な

り、傳燈三十七にあり。之れ人

に呈似すること得ずを證す。

第二節、正しく妙悟せんこと

を激す。天資は天稟の資質、

即ち生れつきなり。

更め云云は、眞道を以て安心

にあらため易ふるに及ばずの

意。

噴地一發は因地一下に同じ。

士大夫等、第三段、思量は道

にあらざることを示す。著實

は實事に撞着するに、眞實

一切衆生、無始より以來、已

に迷ひ物の爲に本心を失ふこ

と。

少欲味とは、五欲味なり。少

は些少、耽は過樂なり。

日夜に爲す所の業根の光すこ

と。

不覺の心起りて麤業を成就す

ること。

第八に落在とは、太だ遲しの

謂なり、畢竟未だ發起せざる

内に猛省せよとなり。舊鈔に

第八を阿頼識のこととせるは

未詳、今は猶ほ遲八刻といふ

が如し。

佛云等は、楞伽經一に出づ、

諸根とは、眼、耳、鼻、舌、

身、意の六根なり、これ自己

の一心より顯現する所なるを

いふ。器とは器界にて國土世

間なり、一切の有情等を容る

ること器の如きが故にいふ。

身とは吾人の五蘊身をいふ、

なり。臨濟の所謂已起の者は

續くこと莫れ、未起の者は放

起するを要せざれと一般な

り。

第二節、得益を論ず。

疲氓等、これ得力の處に無緣

の大悲を具する故なり。湖は

傷なり、又潤澤なり、瘵は病

なり。唐詩紀四十八等に出づ。

孝故の所謂心を一處に制すれ

ば事として辨ぜずといふこと

なしと一般なり。

第五段、重ねて警策し法と非

法とを捨てしむ。

先聖とは、金剛經に云く、何

に泥んや非法をや」と。

誦道歌の語。

請ふ等、此は上を結んで說佛

說祖の一段の説を指す。

上の故歩を失せずの語を敷衍

す。

本地云云は、境に約して言ふ、

本來の面目とは、人に約して

便ち是れ當人、地獄を變じて天堂となすの處なり。便ち是れ當人穩坐の處、便ち是れ當人出生死の處、便ち是れ當人君を堯舜の上に致すの處、便ち是れ當人 疲氓を凋瘵の際に起すの處、^①便ち是れ當人子孫を覆蔭するの處なり。^②這裏に到つて佛と説き祖と説き、心と説き性と説き、玄と説き妙と説き、理と説き事と説き、好と説き惡と説くも、亦是れ外邊の事なり。此くの如き等の事すら尙ほ外に屬す、況んや塵勞の中、^③先聖の詞する所の事を作さんをや。好事を作すすら尙ほ肯はず、豈に不好の事を作すことを肯はんや。若し此の説を信得及せば、^④永嘉の所謂「行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜體安然なり」と、是れ虚語にあらず。^⑤請ふ、此れに依つて行履せよ、^⑥始終變易せずんば、則ち未だ自己 本地の風光を徹證せずとも、未だ自己本來の面目を明見せずとも、雖も、生處は已に熟し、熟處は已に生なるべきなり、切切に記取せよ。^⑦纔かに省力を覺する處、便ち是れ得力の處なることを。妙喜老漢、毎に^⑧箇の中の人の爲に此の話を説く、^⑨往往に説得することの頻なるを見了つて、多く之れを忽にして肯て將つて事となさず。居士試に^⑩此くの如くに工夫を做して看よ。只だ十餘日

- といふが如し。
- ① 棒打石人頭、囉囉論實議。
 - ② 華嚴經五十二、出現品。
 - ③ 第八段、道體は思量を絶することを示す。前後等とは、維摩經に云く「我れ如來を觀るに實際より來らず、後際に去らず、今は則ち住せし」と。又或離に云く「實際の生死實際の涅槃」と。意は此の事の中には生死涅槃の前後際なきをいふ。
 - ④ 金獅子の全鉢、これ命なるが如し。
 - ⑤ 維摩一經の筋骨なり、解脱とは縛を離るるを解といひ、自在なるを脱といふ。
 - ⑥ 只だ等は、言を以て言を遣るなり。
 - ⑦ 環等は荷子の語、又越絕書十三、說苑三建木篇等に出づ。註に云く「環の中の如きは所なく終なうして窮なし」と。即ち言、不思議と言はんと欲すれば、一切の境界縁起し、縁起すと雖も而も蹤跡なきの謂なり、起る處等とは、法に合はずなり。
 - ⑧ 菩薩等は、華嚴經十回向品、金剛般若薩の偈なり。
 - ⑨ 思とは、思議の境にして即ち凡夫又は生死等。非思とは、二乘空寂の涅槃等なり、此事の中本來二法なし。
 - ⑩ 第九段、法塵煩惱を盡せば、能く道に契ふて自在の用を起すことを示す。

にして便ち自ら省力不省力、得力不得力を見得せん。人の水を飲んで冷煖自知するが如く、人に説與すること得ず、人に呈似すること得ず。^①先徳の云く「證を語るときは則ち人に示すべからず、理を説くときは則ち證に非ざれば了せず、自證自得、自信自悟の處は、曾て證し曾て得、已に信じ已に悟る者の方に黙黙として相契ふを除く。未だ證せず、未だ得ず、未だ信せず、未だ悟らざる者は、唯だ自ら信せざるのみならず、亦他人の此の如きの境界あることを信せず。」と^②老居士、天資道に近し、現定の所作所爲、^③更め易ふことを著ひざるなり。他人を以て之れに較ぶれば、萬分が中已に九千九百九十九分を省得す。只だ^④噴地一發して便ち了することを缺くのみ。^⑤士大夫の學道、多くは著實に理會せず、口議心思を除却すれば便ち茫然として手足を措く所なし。手足を措くなき處、正に是れ好處なることを信せず、只管心裏に思量し得て到らんことを要し、口裏に説得して分曉せんことを要す。^⑥殊に知らず、錯り了ることを。佛の言く、「如來、一切の譬喩を以て種種の事を説きたまへども、譬喩能く此の法を説くこと有ること無し。何を以ての故に、心智路絶して不思議なるが故に」と。

信に知る、思量分別は道を障ふること必せり。若し前後際斷することを得れば、心智の路自ら絶せん。若し心智の路絶することを得れば、種種の事を説くも皆此れ法なり。此の法既に明なれば、此の明處に即して便ち是れ不思議大解脱の境界なり。只だ此の境界も亦不可思議なり。境界既に不可思議なれば、一切の譬喩も亦不可思議、種種の事も亦不可思議なり。只だ這の不可思議底も亦不可思議なり。此の語も亦著くべき處なし。只だ這の著くべき處なき底も亦不可思議なり。是の如く展轉窮詰するに、若くは事、若くは法、若くは譬喩、若くは境界、環の端なきが如く、起る處なく盡くる處もなく、皆不可思議の法なり。所以に云く、「菩薩是の不思議に住すれば、中に於て思議し盡くすべからず」と。此の不可思議の處に入れば、思と非思と皆寂滅するなり。然も亦寂滅の處に住することを得ざれば、若し寂滅の處に住せば則ち、法界の量に管攝せらるることを被る。教の中に之を、法塵煩惱と謂ふ。法界の量を滅却して、種種の殊勝一時に蕩盡したつて、方に始めて好し。庭前の栢樹子、麻三斤、乾屎橛、狗子無佛性、一口喫盡西江水、東山の水上行の類を見るに、忽然として一句下に透得せば、方

① 羅湖野錄上に云云す。
 ② 種種等とは、次下の種種の勝妙の境界をいふ。
 ③ 趙州の庭前……洞山の庭……雲門の乾……趙州の狗子……馬祖の一口……雲門の東山……以上の公案は實參實究すべきなり、門より入るものは家珍にあらず、解説するの要なげん。
 ④ 法界無量回向とは、瓔珞經に五十二位の階級を説く、十後、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺なり、その中十回向の第十が法界無量回向なり。華嚴に云く、「此菩薩の修する所の願行は法界に等しく、虚空の量の如し、盡く廻して一切衆に與へ、同じく一究竟菩提に向はしむ、故に回向と名く」と。即ち法界に四種あるもと融攝して一眞法界

に始めて之を、法界無量回向と謂ふ。如實にして見、如實にして行し、如實にして用ひば、便ち能く一毛端に於て寶王刹を現じ、微塵裏に坐して大法輪を轉じて種種の法を成就し、種種の法を破壊すると一切我に由る。壯士の臂を展ぶるに他の力を借らず、師子の遊行するに伴侶を求めざるが如し。種種の勝妙の境界現前すれども、心驚異せず、種種の惡業の境界現前すれども、心怖せず、日用四威儀の中、縁に隨つて放曠し、性に任せて逍遙すべし。這箇の田地に到り得て、方に天堂なく地獄なし等の事を説くべし。永嘉の云く、「亦人もなく亦佛もなし、大千沙界海中漚、一切の聖賢電の拂ふが如し」と。此の老若し、這箇の田地に到らずんば、如何んか説得出で來らん。此の語錯つて會する者甚だ多し、苟も未だ根源に徹せずんば、語に依つて解を生ずることを免れず。便ち一切皆無なりと道ひて、因果を撥無し、諸佛諸祖の所説の言教を將て、盡く以て虚なりとなす、之れを人を誑惑すと謂ふ。此の病除かすんば乃ち「莽莽蕩蕩として殃禍を招くてふ者なり。佛言く、「虚妄の浮心は諸の巧見多し」と。若し有に著せざれば便ち無に著す、若し此の二種に著せざれば、便ち有

となる、その性徳圓成して量の量るべきなきが故に、法界無量といふ。然るに吾宗は教外別傳にして名相を絶する故に階級に隨せず、次位に關はらざるなり、然るに若し吾宗の大悟を以て第十回向の位に對當せば大に非なり、只だ義似たれば取り、以て之を助顯するのみ、階位を論するに非ざるなり。
 ⑤ 一毛等は大小の融通、事事無碍を示す、楞嚴四上及び華嚴經に出づ。
 ⑥ 成就とは建立、破壊とは掃蕩にして無自性をいふ。一切我れ等とは、自在なるをいふ。
 ⑦ 縁に隨ふの二句、天皇の語、前に出づ。
 ⑧ 第十段、上の文を承けて遙かに天堂地獄の語を結す。田地とは、法界最盡る處をいふ。
 ⑨ 永嘉證道歌の語、註に云く、

無の間に於て、博量し卜度す。縦ひ此の病を識得するも定めて非有非無の處に在いて、著到せん。故に先聖、苦口叮嚀に、四句を離れ、百非を絶して直下に一刀兩段して、更に後を念ひ前を思はずして、千聖の頂額を坐斷せしむ。四句とは乃ち有、無、非有非無、亦有亦無、是れなり。若し此の四句を透得し了れば、一切の諸法は實有なりと説くを聞きて、我れ亦隨順して之れと與に有と説けども、且く此の實有に礙へらるることを被らす。一切の諸法は實無と説くを聞きて、我れ亦隨順して之れと與に無と説けども、且く世間虚豁の無に非ず。一切の諸法は亦有亦無なりと説くを聞きて、我れ亦隨順して之れと與に亦有亦無と説くも、且く戲論に非ず。一切の諸法は非有非無と説くを聞きて、我れ亦隨順して之が與に非有非無と説くも、且く相違するにあらず。淨名の云く、「外道六師の墮する所、汝も亦隨つて墮せよ」といふ是なり。士大夫の道を學する多くは肯て心を虚却して、善知識の指示を聴かず、善知識纒かに口を開けば、渠已に言前に在いて一時に領會したる。渠をして吐露し盡さしむるに至るに及んで、一時に錯つて會す。正に好し、言前に在りて領略する底も、又却つて

「眞如界内に生佛の假名なく、平等性中に自他の形相なし、即ち物なく人なく佛なし云」と。人とは迷者、佛とは悟の至極にして是れ人を空す、大千等は境を空す。

①一切等とは生と佛との中間の三賢十聖を擧ぐ。電等とは譬爾として雖なく卒爾として横索し難きをいふ。

②這箇の田地とは、法界量盡る處、即ち一眞法界をいふ。

③說得等とは、空を説いて空見に墮せず、有を説いて有見に墮せざるをいふ。

④第十一、上の文を承けて撥無の見を拂ふ。

⑤因果等は、中阿含經四、智度論十八に出づ。

⑥大品般若十八、阿毘跋地品、道元の正法眼藏。佛教祖教なるものは、後人書して以て佛教祖教と名けて、人を誑かすなりと謂ふの意。

⑦此病とは邪見の病なり。

⑧舞舞等は、證道歌に云く、「罄達空は因果を撥ふ蕩蕩舞舞殃禍を招く」と。註に云く、「罄達空とは西天の外道の修する所の斷滅の空也、因果を撥すと、一向に空に著して因果を撥無するなり、既に斷滅の見に落つ、招く所の殃禍、言説すべからず、譬へば大海の濤濤蕩蕩として邊表なきが如し」と。殃禍とは謗法墮獄なり。

⑨圓覺經金剛藏章の語、虚妄の浮心とは、人の氣のつかぬを氣をつけていふ義なりと。

⑩二種とは有無の二なり、實悟の人是有と説くも無と説くも妨なし。

⑪博は憂なり勞なり、或は博に作る、博は廣なり、善なり。

言語の上に滞在す。又一種あり、一向に聰明を作し、道理を説き、世間種種の事藝、我れ會せざる者無し。只だ禪の一般ありて、我れ未だ會せずといつて、當官の處に在つて、幾枚の杜撰の長老を呼び來つて、一頓の飯を與へて喫却せしめ了つて、渠をして意を恣にして亂説せしめ、便ち心意識を將つて這の杜撰の説底を記取して、却つて去つて人を勸して、一句し來り、一句し去る、之れを、厮禪と謂ふ。末後に我れは一句多くして、備語なき時、便ち是れ我れ便宜を得るといふ。箇の眞實明眼の漢に撞著するに至るに及んで、又却つて識らず、縦然識得するも、又決定の信なき故に肯て、四楞塌地に放下せず。師家に就いて理會して、舊に依つて印可を求めんと要す。師家、逆順の境

本録に博に作る、博は取るなり、捕へるなり、撥なり。何れにても可なり、妄計分別するをいふ。

①著到は「おちつく」なり。

②第十二段、外道の四句、佛法の四句を辨す。

③四句とは、卷七十三則の評に云く、「有、無、非有非無、非有非非無」と。楞伽二等に出づ。百非とは行願品別行疏、起信筆削記に云く、「一、異、有、無の四句に約して一一に各四あり、謂く、一、非一、亦一亦非一、非一非非一。異、非異、亦異亦非異、非異非非異。餘の二句も之に準ぜよ、以上四四十六を成す、之を三世に約すれば四十八を成す、又之を已起未起に約すれば九十六を成す、更に根本の四句を加ふれば即ち百非なり。楞嚴釋要鈔三に云云、意は有無、

中に於て示すに、自分の 鉗錘を以てするに至るに及んで、又却つて怕懼れて敢て親近せず、此等を名けて可憐愍者となす。 老居士、妙年にして 高第に登つて家を起し、所在の處、時に隨つて利益の事を作す、 文章事業みな人に過えたり。而も未だ嘗て自ら裕らず、一心一意に只だ歩を退いて著實に此の段の大事の因縁を理會せんことを要す。其の至誠なるを見て、覺えず切但すること如許す。 獨だ居士の 這般の病痛を識得せんことを要するのみに非ず、亦初心の菩薩を勸發して道に入るの 資糧と作さんとなり。

汪内翰に答ふ 彦章

承る門を杜ちて壁觀すと、此れ 息心の良藥なり。若し更に 故紙を鑽らば定ず藏識中、

眞妄等の一切の見を立てざるをいふ。
⑦ 千聖等とは、四句百非不到の處なり。
⑧ 經の弟子品の説。今引く意は、上に言ふ所の實有實無等は皆外道の見に似て而も非なるを示す爲なり。鷲、雪に立つ同色にあらざる意なり。
⑨ 六師とは、初めは釋尊の聖業に妨げをなせしも、弟子舍利弗尊者の教化を受けて、遂にその弟子となりし六人の外道をいふ。一に富蘭那迦葉、空無を計す。二に末伽黎瞿睺摩子、これ無因外道なり。三に闍闍耶毘羅胝子、これ自然外道なり。四に阿耆多翅舍欽婆羅、これは樂因に非ざるものを樂因と計して善行を修す。五に迦羅鳩駄迦旃延、これは斷常二見を計す。六に尼乾陀若提子、罪福の定因を認めて、修行するも之を動せず能はずと計す。是れ九十六種の外道の首なり。今文に隨つて墮すとば、其用處を迷人に同するをいふ、所謂和泥合水なり。
⑩ 第十三段、士大夫の輕信を呵す。
⑪ 正に好しは、恰も好しの意、言前領略底は皆是れ識情妄想なり、故に師家の勘驗するに及んで言語の上に滞るなり。言前とは師家の言は前なるをいふ。
⑫ 先づ張提判に當る。
⑬ 物件を數へて枚といふ。
⑭ 一頓は一度の謂なり。
⑮ 斷禪は相禪するにて問答をいふ。
⑯ 便宜は、唐の世話に買賣に利を得るを便宜を得といふ。
⑰ 又等と、明眼の人なることを識らすと。
⑱ 縱然の二字にてたとひと讀む

無始時來の生死の根苗を引起して善根の難をなし、障道の難とならんと疑なし。 息心を得ば且く息心し已つて、過去底の事、或は善或は惡、或は逆、或は順都て思量すること莫れ。 現在の事も、省することを得ば便ち省せよ、一刀兩段して遲疑すること不要せざれ、未來の事は、自然に相續せざれ。 釋迦老子云く「心妄に過去の法を

① 四楞とは冠註に云く、「兩手脚歟、場は地の低下なり、又墮なり、場を一に榻に作る」と。即ち從來の自己の知見解會を捨てざるの意。
② 杜撰の長老に印可せられたるが如くにの意、印可とは念佛三昧經に云く、「今此三昧は一切諸佛の印可したまうなり」と、音義に云く、「印は信なり、可は許すなり」。
③ 鉗は「はさみ」、錘は「つち」なり、學者を鍛練すると、即ち人を接する道功を比す、これ必ずしも棒喝のみにあらず。
④ 第十四段、此書を作る意を述ぶ。妙年とは少年なり、妙は少なり。
⑤ 史記の註に云く、「高第とは、才優れて品第高きなり」と、或は甲科を高第といふ。家を起すとは、布衣より起つて官人

となるをいふ。
⑥ 文章とは必ずしも紙筆上の文字言句をいふに非ず、徳を給み儀自ら時に顯はるるをいふ。
⑦ 切但は冠註に云く、「當に明咀に作るべし、多言の貌なり」と。
⑧ 病痛に三あり、一は世間の作業に熟して他の作業を蔑みす、二に今世の外、未來に天堂地獄あることを信ぜず、三に佛法を信すと雖も妙悟あることを信ぜず。
⑨ 資糧とは資身の糧食にて、喻へば人の遠きに行くに必ず身を養くる糧食を要する如く、今修行者も法身を開發し證悟を成ぜんとするには、必ず之を資助する縁を要す、それが資糧となさん爲に多言を費しきとなり。法相宗に立つる資糧、加行等の五位の中の資糧

にはあらず。
① 汪藻字は彦章、徳興の人、博學強記にして六經百家の書より、佛、老、兵法、天文、曆法、蠻夷の書に至るまで記覽せざるなし、其著述實に數十萬言、自ら一家を成せり。崇寧二年進士第に登り、紹興中に翰林學士となり、自ら龍溪居士と號す。内翰とは、事物紀原四に曰く、「開元二十六年翰林供奉を改めて學士となし、別に學士院を置く、後に選用ますます重く號して内翰となす云云」と、内相を亦内翰といふ。宋史列傳二百四、宋名臣言行錄七、同外集二十七、等に出づ。
② 第一段、前後際斷するは即ち息心の法なることを示す。此時、汪は落職して永州にあり、時に六十三歳。
③ 息心とは、外、諸縁を息め、

取らず、亦未來の事に貪著せず、現在に於て所住あらず、三世悉く空寂なりと了達す」と。^①但だ看よ、僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや。」州云く、「無」と。請ふ只だ閑思量底の心を把つて無の字の上に回在して試に思量して看よ。^②忽然として思量不及の處に向つて這の一念破することを得ば、便ち是れ三世を了達する處なり。了達する時、^③安排することを得ず、計較することも得ず、引證することをも得ず。何を以ての故に、了達するの處には、安排を容れず、計較をも容れず、引證をも容れざればなり。縦然引證し得、計較し得、安排し得るも、了達底と了に没交渉なり。但だ放つて蕩蕩地ならしめて、善惡都て思量すること莫れ、亦意を著ること莫れ、亦忘懷すること莫れ、意を著くれば則ち、流蕩し、忘懷すれば則ち昏沈す。意を著けず懷を忘せざれば、善も是れ善ならず惡も是れ惡ならず。若し此の如く了達せば、^④生死の魔、何れの處にか摸擦せん。^⑤一箇の汪彦章、聲名天下に満てり、平生安排し得、計較し得、引證し得たる底は、是れ文章なり、是れ名譽なり、是れ官職なり。晩年に^⑥收因結果する處、那箇か是れ實なる、限り無きの^⑦之乎者也を做し了る、那の一句か力を得たる、名譽既に彰はると、徳を匿し光を藏する者と、^⑧相去ること幾何ぞや。官職已に做して、^⑨大兩制に到ると、秀才たりし時と、相去ること多少ぞ。而して今已に^⑩七十歳に近し、公の伎倆を、儘して如何せんと要待するや、臘月三十日、作廢生か折合し去らん、^⑪無常の

内心喘ぐことなきをいふ。
 ① 文章に著し經典を究むるをいふ、これ書籍は故紙なれば爾かいふ、彦章は好學にして老に至るも捨てず文章を愛し、故紙に耽る故に此誠あり。之れ神讚禪師の語。
 ② 此れ皆世事について言ふ、畢竟前後の念を相續せざらしめん爲なり、蓋し此くの如く言ふは汪内翰が老年に發心して從來の事を悔い、遲疑煩悶する故に、鍼靜せしめんが爲に爾かいふ。
 ③ 證を引くなり、華嚴十回向品の金剛種の偈なり。
 ④ 第二段、提擲工夫の法を示す。
 ⑤ 三世を思量する、これ閑事なり。
 ⑥ 學者多く此處を認めて眞證となす、而し此れ所謂識の邊際なり。
 ⑦ 此は先づ初入の用心を示す、意は了達の處を長養せよとなり。安排、計較、引證といふは、汪内翰が文字を受する故にして、學を好み老に至るも止めざるに當るなり。
 ⑧ 此れは了達の上の用心に就いて言ふ、忘懷とは昏沈をいふ、意を著くるは掉舉をいふ。
 ⑨ 流蕩とは、これ亦掉舉なり、即ち境界の上に於て掉舉流蕩するなり。
 ⑩ 臨濟曰く、「菩薩の疑ふが如きは生死の魔、便りを得」と。維摩詰品に「生死の魔とは、善惡取捨し念念起滅するをいふ」と。
 ⑪ 第三段、警策して無常を示す。
 ⑫ 文章巧みなるが故に名譽高し、名譽高きが故に官職高しと、次第を逐ふて言ふなり。
 ⑬ 始終成功し成就す、評に曰く、「所謂天真喪盡して虚名を得」と。

こと莫れ、意を著くれば則ち、流蕩し、忘懷すれば則ち昏沈す。意を著けず懷を忘せざれば、善も是れ善ならず惡も是れ惡ならず。若し此の如く了達せば、^④生死の魔、何れの處にか摸擦せん。^⑤一箇の汪彦章、聲名天下に満てり、平生安排し得、計較し得、引證し得たる底は、是れ文章なり、是れ名譽なり、是れ官職なり。晩年に^⑥收因結果する處、那箇か是れ實なる、限り無きの^⑦之乎者也を做し了る、那の一句か力を得たる、名譽既に彰はると、徳を匿し光を藏する者と、^⑧相去ること幾何ぞや。官職已に做して、^⑨大兩制に到ると、秀才たりし時と、相去ること多少ぞ。而して今已に^⑩七十歳に近し、公の伎倆を、儘して如何せんと要待するや、臘月三十日、作廢生か折合し去らん、^⑪無常の

① 之乎者也とは、無用の文句。
 ② 徳を匿し等とは、隱居退避の謂なり。
 ③ 意は、名を彰はすと徳を匿すと異なりと雖も、眞實得力の處に至れば則ち名譽官職は虚妄の事のみ、一點も用不着なり、故に徳を匿すと名彰はると、眞實結果の處に於て何の差別ありやとなり。
 ④ 大兩制とは、韵府に「宋の翰林を内制といひ、中書を外制といふ、その後を併せ混じて之を兩制といふ」と。尙ほ職林及び文獻通考五十四、等に出づ。
 ⑤ 秀才とは、未だ及第せざる人を稱すと、又云く、漢氏、士を取るに、孝廉、秀才の二等あり、齊宋以來は州に秀才の舉あり、唐以後は進士と雖も秀才を以て號となす。又云く、蓋し憲宗の時より進士の稱となすと、事物紀原三に出づ。
 ⑥ 紹興二十三年より進算するに此時は六十五歳なり。
 ⑦ 儘は盡に同じ。
 ⑧ 無常即ち殺鬼なり、四巻の金光明經捨身品、臨濟録に出づ。
 ⑨ 頰を引いて誡む、傳燈十六、雪峰義存禪師は泉州の人、首領官に調し後に三たび投子に到り、九たび洞山に上り、四縁契はず、後に徳山に參す。此頰は五燈に載せず、碧巖事苑に出づ。碧巖題して自贈と云ふ、意は、只だ自らを誡め其餘を以て人に及ぼすなり。
 ⑩ 倏忽は疾きなり。須臾は敢て久しからざるをいふと。
 ⑪ 嶺は飛猿嶺にして福建にあり。三十二は唐の宣宗の大中年に當る。
 ⑫ 闕に入等、註に云く、時に四十六、闕に入り宗教を闡くと四十餘年、八十七にて入滅

殺鬼は念念停らす。雪峯の眞覺云く、光陰倏忽として暫須臾、淨世那ぞ能く久しく居ることを得ん、嶺を出でて年三十二に登とす、閩に入りて早く是れ四旬餘、他の非類類に擧ぐることを用ひず、己が過還つて須らく旋旋に除くべし。爲に滿城の朱紫に報じて道ふ、閩王は金魚を佩ぶることを怕れずと。古人の苦口叮嚀なること、甚麼の事の爲ぞ。

世間愚庸の人は飢寒に迫られ、日用他の念なし。只だ身上稍煖かにして肚裏飢えざることを得れば便ち了る。只だ是れ這の兩事のみにして生死の魔却つて惱をなすこと能はず、富貴を受くる者を以て之れに較ぶるに、輕重大いに等しからず、富貴を受くる底は身上既に常に煖かに肚裏又常に飽く。既に這の兩事に迫らるることを被らず、又却つて一件不可説底の無狀なるもの多し。故を以て常に生死魔網の中に在つて出離するに由なし。宿に靈骨あつて方に見得徹し、識得破するを除く。先聖云く、「瞥起は是れ病、續かざるは是れ藥、念の起るを怕れざれ、唯だ覺の遲きを恐れよ。」と。佛とは覺なり、其の常に覺するが爲の故に之を大覺と謂ひ、亦之れを覺王と謂ふ。然も皆凡夫の中より做し得出で來るなり。彼れ既に

① 旋旋は漸漸の義、次第の義なり。
② 朱紫とは官人をいふ、白氏文集三十七、舊唐書志二十五に出づ。日本仁明天皇の時に服を唐制に隨はしむ、紫は上、緋は之に次ぐと。
③ 一と思斷える時は其の業に隨つて剎剎磨礫等の責を受くとなり。金魚とは、事物紀原三、舊唐書志二十五に云ふ。
④ 大惠の請問なり、古人とは雪峰を指す。
⑤ 第四段、貧富業障の輕重を談す。
⑥ 一件は欲事を謂ふ。
⑦ 無狀とは「すぢなき、いはれなき」の意。後漢書三帝紀に云く、尤を察して無狀とは、謂く、其罪惡尤も大にして言に寄すべきなきが故に無狀といふ。

丈夫なり、我れ寧ぞ爾らざらんや。百年の光景能く幾時をか得ん。念頭然を救ふが如くせよ。好事を做すすら尙ほ做して辨せざらんことを恐る、況んや念念塵勞の中に在りて覺せざるをや、畏るべし畏るべし。近ごろ呂居仁が四月初の書を收むるに、曾叔夏、劉彥禮が死を報す。居仁云く、「交游の中、時に復た一兩人を抽んで了る、直に是れ畏るべし」と。渠邇來此の事の爲にすること甚だ切なり、亦警地に頭を回すとの稍遲きを以て恨となす。比る已に書を作して之れに答へて云く、「只だ末後非を知る底の一念を以て正となす、遲速を問はざれ、非を知る底の一念便ち是れ成佛し作祖する底の基本なり、魔網を破る底の利器なり、生死を出づる底の路頭なり」と、願くは公亦只だ此の如く工夫を做せ。工夫をなし得て漸く熟せば、則ち日用二六時中、便ち省力を覺せん、省力を覺得する時、放つて緩からしむることを要せざれ、只だ省力の處に就いて崖め將ち去れ、崖め來り崖め去つても這の省力の處に和して亦有ることを知らざる時、多きことを争はざるべきなり。但だ只だ箇の無の字を看よ。得と不得とを管すること莫れ。至禱至禱。

① 靈異骨相なり。見得徹とは、五欲は即ち是れ魔網なりと見得するなり。
② 第五段、激勵す。此の語は何人の語か未詳、宗鏡錄三十八に龍居士の語として出せり。
③ 佛者等、大法炬陀羅尼經十二、華嚴疏抄二十。
④ 凡夫等、天然の彌勒、自然の釋迦なし。
⑤ 彼れ既等、宗鏡錄七十六、佛、羅睺羅を誡むるの頌、乃至我も亦爾り、何ぞ自ら輕んじて退屈することを得んや」と。
⑥ 第六段、無常を説いて勸策す、今七十歳に向はんとす、縱ひ百年を窮まるとするも幾時もなしと。
⑦ 無常の殺鬼に抽き出し引き去られしとなり。
⑧ 漫りに死を畏るるにあらず、老年に發心して此事未だ了畢せざるに、空しく死し去るを

又

伏して承はる、門を杜ち、交を息めて、世
 事一切闕略にして、唯だ朝夕某が向に擧ぐ
 る所の話頭を以て提撕すと。甚だ善し甚だ善
 し。既に此の心を辨せば當に悟を以て、則とな
 すべし。若し自ら退屈を生じて根性陋劣なりと
 謂つて、更に入頭の處を求めば、正に是れ
 含元殿裏にして長安は甚れの處に在りやと問ふ
 がごときのみ。正に提撕するの時、是れ阿
 誰ぞ、能く根性陋劣なりと知る底、又是れ阿誰
 ぞ、入頭の處を求むる底、又是れ阿誰ぞ、妙喜、
 口業を避けず、分明に居士の爲に説破す。只だ
 是れ箇の汪彦章にして更に兩箇あることとな
 し、只だ一箇の汪彦章のみあり。更に那裏にか
 箇の提撕する底、根性陋劣なりと知る底、入頭の

畏るべしとなり。
 ⑦第七段、晩年の發心を慰諭す、
 此れ上の呂居仁の事を承け
 て、此事に接入せしめんとし
 て此くの如く轉換す、巧妙の
 文なり。
 ⑧亦警地等は、居仁、發心の運
 きを恨む、汪内翰も亦云云と
 なり。
 ⑨公とは、居仁なり。
 ⑩第八段、工夫の効驗を論ず。
 ⑪省力あることを知らざる、こ
 れ打成一片の處なり。
 ⑫全く許さざるの詞、意は漸く
 悟に近づいて能所一片の時、
 遮事に相應せんとなり。
 ⑬此文を上へ屬すべからず、頭
 を起して言ふなり。
 ⑭第一段、隨喜して勸勵す。
 ⑮交を息めるとは歸去來の辭に云
 く、交を息め以て游を絶すし
 と。闕略とは、疎闊省略の義
 にして、世間の事を「おほあ

らまし」にするなり。
 ⑯話頭とは、趙州の無字の話な
 り。
 ⑰則とは模範なり。鴻山の警策
 の語なり。
 ⑱更にの下に「別に」を加へ見
 よ。
 ⑲含元殿とは、唐書に龍朔三年、
 高宗蓬萊宮に幸して新に含元
 宮を起す、後咸亨中に、又蓬
 萊宮を改めて含元となす云云
 と。秦宮は阿房宮を以て最と
 なし、漢の宮は未央を以て最
 となし、唐宮にては含元殿を
 以て最となす。長安は唐の故
 都なり。天中記十三、通鑑綱
 目四十一、大明一統志三十一
 等に出づ。今の意は含元殿に
 入得し畢つて、其處として長
 安を問ふとなり。
 ⑳第二段、主人公を提示す。
 ㉑阿誰とは、此れ主人公にあ
 らずやとなり。即ち自ら門外客

處を求むる底を得來らん。當に知るべし、皆是れ汪彦章が影子なり、並に
 他の汪彦章が事に干らす。若し是れ眞箇の汪彦章ならば、根性必ず陋
 劣ならず、必ず入頭の處を求めじ、但だ只だ自家の主人公を信得及せば、
 並に許多の勞攘を消得せざれ。昔僧あり、仰山に問ふ、「禪宗の頓悟、
 畢竟して入門の的意如何ん。」山曰く、「此の意極めて難し、若し是れ祖宗門
 下、上根上智ならば、一聞千悟して大總持を得べし。此の根の人は得
 がたし。其れ根微に智劣なるあり、所以に古徳の道く、若し安禪靜慮せ
 すんば、這裏に到つて總に須らく茫然たるべし。」僧曰く、「此の格を除い
 て外、還つて別に方便の學人をして得入せしむることありや也た無きや。」
 山曰く、「別に有り別に無しといはゞ、汝が心をして不安ならしめん、我
 れ今汝に問はん、汝は是れ甚の處の人ぞ。」曰く、「幽州の人。」山曰く、「汝
 還つて彼の處を思ふや否や。」曰く、「常に思ふ。」山曰く、「彼の處の樓臺林
 苑、人馬駢闐す、汝が思ふ底を返思せよ、還つて許多の般ありや否や、
 也た無きや。」曰く、「某甲這裏に到つて一切有ることを見ず。」山曰く、「汝
 が解猶ほ境に在り、信位は即ち是、人位は即ち不是なり」と。妙喜已

作の漢となるなり。
 ①只だ血肉團聚にあらず。
 ②皆是れとは、知る底、求むる
 底、提撕する底を指す。
 ③他の等は、眞の主人公を謂ふ、
 此れ下の所謂人位に當る。
 ④血肉團聚にあらず、亦血肉團
 聚ならざる者にもあらず、如
 何とも言ひ難し、言語路絶の
 處なり。
 ⑤昔等、第三段、古人の因縁を
 引いて示す、之を引かんが爲
 に別に入頭を求むといふ、下
 の僧曰く、此格を除く云云に
 應ず。傳燈十一、會元九仰山
 章に此因縁を載す、傳燈の方
 正しき歟。
 ⑥禪宗等、直指人心見性成佛の
 處。
 ⑦大總持は陀羅尼の譯、前に解
 するが如し、これ百千の法門、
 無量の妙義を一毛頭に現する
 處をいふ。圓覺經一、大寶積

に是れ老婆心切なり、須らく更に箇の注脚を下すことを著すべし。人位は即ち是れ汪彦章、信位は即ち是れ根性陋劣なりと知りて、入頭の處を求むる底なりと。若し正に話頭を提擲する時に於て、能く提擲する底を返思せよ。還つて是れ汪彦章なりや否や、這裏に到つて間に髪を容れず、若し佇思停機せば則ち影下に惑せられん。請ふ快に精彩を著けよ、忽にすべからず、忽にすべからず。前書の中に嘗て寫し去ること記得するや。心を息むることを得んとならば、且く心を息め已つて過去底の事、或は善、或は惡、或は逆、或は順、都て理會すること莫れ。現在の事も省することを得んとならば、便ち省せよ、一刀兩段して遲疑することを要せざれ。未來の事、自然に相續せざるべきなり。

經四、等に出づ。

① 大珠海禪師の語、傳燈二十八、頓悟要門論下に出づ。若し安禪等とは、上根上智の者は動靜の外に出身す、下根下劣の者は安禪を要すの意。
② 此格とは、一聞千悟、安禪靜慮をいふ。
③ 本來此事に許多の名相なし、然るに……
④ 幽州は東北方の國、廣輿記一。駢闐は連る貌、又物の盛に集る貌。
⑤ 返思とは、傳燈に思の字なし、先づ此僧をして幽州の千差萬別の境を觀念せしめて、其をして有無を返照せしむるなり。
⑥ 樓臺人馬等あらざるをいふ。
⑦ 境に在りとは、境とは山河等をいふにあらす、空理の目前に在るを境といふ。還源觀に云云。

⑧ 信位、此れ教意を以て之を辨するにあらず、祖宗門下の相承の秘妙の法門なり、臨濟錄の所謂入境俱不奪なり、百丈錄に依るに、境位は即ち信位なり、人位は言を以て示し難し、主人公拄杖子を突出するなり、之を得ると見れば則ち境位となる、又無位を加へて三位となせり、宗門玄鑑の圖に見ゆ。又注に云く、金剛三昧經に云く、凡天地より佛地に至るまで五等位あり、一に信位、謂く、身中に佛性あり、本來清淨なり、諸の境界は皆是れ意識分別なりと觀す云云と。信位人位は偽仰家の立つる所の宗旨なりと。
⑨ 第四段、信位人位を解す。
⑩ 馳求底みな信位。
⑪ 返思する底、之を汪彦章と謂ふべきや、返思なき處尙ほこれ信位なり、此れ一應方便を

りと識らず、曾て此くの如く、戲捕するや否や。這箇便ち是れ第一力を省きて工夫をなすの處なり。至禱至禱。

① 伏して承はる、第五の令嗣、疾を以て起たす、父子の情は千生百劫、恩愛習氣の流注する處なり。想ふに、此の境界に當つて、是の處あること無し。五濁世の中の種々の虛幻、一も眞實なるあることなし。請ふ行住坐臥常に是の觀をなさば、則ち日久しく月深うして漸漸に銷磨せん。然して正に煩惱するの時に子細に揣摩窮詰せよ、甚廢の處より起ると。若し起る處を窮め得ずんば、現今の煩惱する底は却つて甚廢の處よりか得來るや、正に煩惱するの時、是れ有なるか是れ無なるか、是れ虛なるか是

垂れて言ふのみ、本來人中に返思提擲なきことを知らしめんが爲なり、方便は枝蔓上に枝蔓を生ずる故に工夫法にあらす、提擲の處を得るが故に。
② 汪彦章を見得せしや。
③ 意は信位を轉じて人位となす、太だ急、擊石火、閃電光の如し。前漢書五十一。
④ 影子は信位なり。
⑤ 第五段、再び前書を顧みて指示す。
⑥ 觀捕は把得して用ふるをいふ。
⑦ 汪内翰に答ふ第三書なり。
⑧ 第一段、亡子を弔慰す。
⑨ 令嗣とは、人の兒子を稱して令郎、令嗣といふ、猶ほ好きの子と言ふが如し。
⑩ 起たすとは、死するをいふ。
⑪ 此の境界とは、亡子の境界なり。
⑫ 是の處等とは、處置する所なり。
⑬ 第二段、有惱の根源を斷ぜし

れ實なるか、窮め來り窮め去らば、心之く所な
けん。①思量せんと要せば但だ思量せよ、哭せ
んと要せば、但だ哭せよ。哭し來り哭し去り、思
量し來り思量し去つて、藏識中の許多の恩愛習
氣を、抖擻し得て盡きん時、自然に、氷の水に
歸するが如くにして、我れに箇の本來煩惱なく
思量もなく、憂なく喜なき底に還り去らんのみ。
②世間に入得すれば出世、餘なし、世間の法は
則ち佛法、佛法は則ち世間の法なり。父子は天性
一なるのみ、若し子喪すれども而も父煩惱せず
思量せず、如し父喪すれども而も子煩惱せず
思量せざること還つて得べけんや也た無や。若し
硬く止遏して哭すべき時に又敢て哭せず、思量
すべき時にも又敢て思量せずんば、是れ特に
天理に逆らひ天性を滅せんと欲するなり。聲を

む、前段は慰諭を以て主とし、
此段は教化を以て本意とな
す。
①揣摩等は、他人に由らず獨自
心に於て諦審揣摩して道理を
研磨せんことを勤む。雜國策
三上、史記六十九。
②若し根源を休歇せば過去、現
在、未來、不可得なるべし。
③前の所謂蕩蕩地ならしむと云
ふ、是れなり、此の如く云ふ
は根源を截斷せしめんが爲な
り。
④抖擻は震動振揮なり、日用規
範に云く、精神を抖擻し身を
將つて端坐すと。
⑤水等、傳燈二十八、忠國師の
語。
⑥第三段、天理に順じて慰諭す、
世間の實相を得ば、即ち出世
にして、世の外に出世なし。
大惠普說二。
⑦天理も天性も同一なり。聲を

一一四
揚ぐとは先づ喻を擧ぐ、哭思
止歇は皆是れ妄想なり、根源
を窮むるは水を滾いで火を救
ふなり。圓覺經三、前漢書五
十六、董仲舒傳。
⑦第四段、佛性中に煩惱なき、
とを示す。
⑧煩惱の時も悟徹も皆是れ佛性
の用なり。
⑨證道歌の語。
⑩金剛經要に解釋す。
⑪慙慙とは、永嘉の語を指す。
⑫圓覺經四、楞嚴經八に出づ。
⑬法華譬喻品に云く、「無智人中
にて此經を説くこと莫れ」と、
即ち無明即佛性、幻化即法身
等の語、無智の人之を聞かば
錯り會すべき故なり。今文は
一は無智の人の前にて説いて
人を教壞する莫れと彦章を説
む。一は彦章は有智の人なれ
ば此くの如くに説く、若し無

揚げて響を止めんとし、油を滾いで火を救はんとするのみ。①正に煩惱する
に當る時、總て是れ外事にあらず、且つ外邊の想を作すことを得ざれ。
永嘉の云く、「無明の實性即佛性、幻化の空身即法身」と。是れ眞語、實語、不誑、不安等の語な
り。②慙慙に見得しれば思量せんと要し、煩惱せんと要するも亦不可得なり。③是の觀をなす者を
名けて正觀となす。若し他觀ならば名けて邪觀となす。邪正未だ分れざるとき、正に好し力を著くる
に、此れは是れ妙喜が決定の義なり。④無智人の前にて説くこと莫れ。

智の人ならば之を説かずと、
次ぎの義可ならん。

一一五

國譯大慧普覺禪師書上終

國譯大慧普覺禪師書下

參學慧然錄

① 夏運使に答ふ

示論せらるる、道契ふときは則ち霄壤共に處り、趣異なるときは則ち觀面も楚越なりと。誠なるかな是の言、即ち此れ乃し不傳の妙なり、左右意を發して、妙喜が書を作らんと欲し、未だ觚を操り、紙を拂はざるに、已に兩手に分付し了れり。又何ぞ堅忍究竟を待つて以て、他日を俟たんや。此箇の道理は唯だ證する者のみ、方に黙黙として相契ふ、俗子とにも言難し。延平は乃ち閩領の佳處なり。左右能く自ら調伏して、逆順の關楔子の爲に

① 夏、字は志宏、今の題下に之を脱落す、年譜に見ゆ、覺明居士と號す。運使は、唐會要に云く、先天二年、李傑、陝州の刺史となり、水陸發運使に充てらる、開元十八年、裴耀卿始めて江淮轉運使となる、此れ其官を命ずるの始なりと。事物紀原六等に出づ、之れ運糧の事を司る官なり。此章は文字を離れて、有無の心を調伏せんことを示す。

② 第一段、前來の書を擧げて道の契ふことを許す。道契とは夏運使が此道に契當すと謂ふにあらず、運使の得る所の道と大惠の道と相契ふなり、相契ふ時は千里を隔つと雖も、一處に居るが如し、君子は千里同風。

③ 觀面は面のあたり見ると、莊子、四十二章經に出づ。楚越とは莊子に曰く、仲尼曰く、其の異なる者より之を見れば、肝膽も楚越なり、其同じき者より之を視れば、萬物皆一なりと。

④ 道契ふのみを謂ふにあらず、道契ふも天覺も楚越も皆不傳の妙なり。

⑤ 上卷の雲門に發する書の例なり。

轉せられずんば、便ち是れ大解脫の人なり。

り。

此人能く一切の關楔子を轉じて、日用活潑々地なり。他を拘牽惹絆すること得ず、苟も若し直下に便ち、恁麼に承當せば、自然に一毫毛も我れに於て障を作すこと無けん。古徳の言へるとあり、「佛、一切の法を説くは、一切の心を度せんが爲なり、我れに一切の心なくんば、何ぞ一切の法

⑥ 操觚、觚は竹簡なり、筆なり、淮南子に觚の權柄なりと謂ふは、今は取らず。詢府に、韓愈、皇甫湜、李賀家を過ぎる、賀忻然として觚を操りて輪に染む云云。

⑦ 紙とは、楚客遺書、八に云く、「帚の字或は紙に作る。蓋し古は織帛を以て書す、故に糸に従ふ、後に蔡倫、故布を剉りて紙を作る、故に其字、巾に従ふ」と。今紙を拂ふとは紙上の塵を掃ふなり、或書に健筆を掃紙といふ、その早きこと塵を掃ふ如きをいふ、其義は、聯珠詩格一、李白詩集八に見ゆ。

⑧ 兩手等とは、道契ふて妙旨を得、其の得る所の妙旨を以て妙喜が書を發せんと欲す、未だ筆にせざる已前に相見分付し了るとの意。

⑨ 堅忍、五十二位の中の十回向道種性を堅忍の位といふ、仁王經下に云く、道種性、堅忍中に住して一切法は無生無滅と觀すと、堅忍とは堅固なる智慧なり、或る抄に云く、「豈に十回向、十地、妙覺を待たんや、今圓融の理に入り主伴交參の處なり、千里を隔つと雖も、眉毛鬚ひ結び、鼻孔相拄ふ故に云ふ、又何ぞ堅忍究竟を待たん」と。究竟とは佛果なり、即ち三祇の修行、五十二位の階級を歴て相見すといふにあらざるなり。

⑩ 他日等とは、夏の來書に他日の相見を待つと言ひ來りしにや、言は分付し了る、何ぞ他日を待たんやとなり。

⑪ 黙黙等は、二人共に言語を交へずと雖も、黙黙として相契ふとなり。

⑫ 俗子とは在家の人のみにあら

ず、從ひ出家と雖も、凡夫庸流の漢をいふ。

⑬ 第二段、夏運使が境に轉ぜられざるを讚す。延平は、關中の名津なり。

⑭ 安心を調伏して順境に轉ぜられざるをいふ、道の字は今は意なし。

⑮ 關楔子に、諸説ある中、正字通に、門樞(くるる)の車なりとあり、葛藤語彙に云く、關(からくり)を造り、多く小車を製して順に轉じ、逆に轉ず、之を關楔子といふ」と。今は此の義なり。又新道の微妙なる處をいふことあり、傳燈錄、黃髮希運の章等に出づ。

⑯ 活潑々地とは、活達自在の義、恰も魚の水中に游泳するの自在なるが如く、又びちびちと水上にとびはれるが如くに活達なるをいふ。

⑰ 拘牽等とは、圓悟心要上に云

を用ひんと。又癡融の云く「^① 恰恰として心を用ふる時、恰恰として無心に用ふ、曲談は名相に勞す、直説は繁重なし、無心にして恰恰として用ふれば、常に用ひて恰恰として無なり、今無心と説く處、有心と殊ならず」と。特に癡融のみ是くの如くなるに非ず、妙喜と左右と亦其中にあり、^② 其の中の事、拈出して人に似し難し。前に所謂、默然として相契ふといふ是なり。

呂舍人に答ふ 居仁

^③ 千疑萬疑、只だ是れ一疑、話頭上に疑ひ破るれば、則ち千疑萬疑一時に破る。話頭破れずんば、則ち且く^④ 上面に就いて之れを厩崖めよ。若し話頭を棄て了つて却て去つて、別に文字の上に疑を起し經教の上に疑を起し、古人の公案

- 云す、他とは大解脫の人を指す。
- ① 第三段、古語を引いて前を結ぶ。古徳とは六祖なりと。禪源諸詮都序下、傳心法要。文意は、順逆の境に轉ぜらるるが故に、佛は八萬四千の法門を説きたまふ、今夏運使は無心の故に。
- ② 恰恰無心等は、上に既に辯ず、會元二に云云、抄に曰く、恰恰は間斷なき貌云云と。此は夏運使、圓領の佳處に轉ぜられざるをいふ。
- ③ 是の如くとは、無心にして自在に物に應ずるをいふ、即ち無心なれども恰恰として用ふるなり。
- ④ 冷煖自知の處、得る所あるものは默契す、只だ自ら怡悦すべし、持して君に贈るにたへず。
- ⑤ 宋史列傳百三十五、名臣言行錄別集七、佛法金湯編十四等
- に出づ。舍人は、事物紀原五に出づ。此の章は打成一片の大疑團を要することを明す。
- ① 第一段、多疑を斥く。來書に佛祖の語を引いて問ふ、故に大惠一一持下して本參を疑はしむ。
- ② 上面とは、話頭上面なり。
- ③ 第二段、工夫の法を示す。
- ④ 思量盡きんとする處、好消息なり、漸く道に近づく、木を鑽つて將に火の出でんとする時なり。
- ⑤ 老鼠等は、驚地に偷心絶する處、此語は五代史六十五に出づ、下に復た之を出す。
- ⑥ 斷は斷絶なり、兩地一聲大悟の處をいふ、偷心絶する處倒斷するを見る。
- ⑦ 第三段、自家に看取すべきを示す。問とは佛祖の語に就いて疑あるが故に問なり。
- ⑧ 狗子云々は、人天寶鑑に徳山

の上に疑を起し、日用塵勞の中に疑を起さば、皆是れ邪魔の眷屬なり。第一に擧起の處に向つて承當することを得ざれ、又思量卜度することを得ざれ、但だ意を著けて、不可思量の處に就いて思量せよ。心之く所なくんば、老鼠、牛角に入るがごとく便ち、倒斷を見ん。又方寸若し鬧しくんば但只だ、狗子無佛性の話を擧せよ。佛語祖語、諸方老宿の語、千差萬別なるも、若し箇の無の字を透得せば、一時に透過せん。人に問ふことを著ひざれ。若し一向に人に佛語又如何ん、祖語又如何ん、諸方の老宿の語又如何んと問はば、永劫に悟る時あること無けん。

呂郎中に答ふ 隆禮

令兄の居仁より兩び書を得たり、此の事の爲にすること甚だ忙はし、然も亦當に著忙す

- 蜜禪師の會下云々と、往見。
- ① 呂は居仁が弟なり、郎中は唐以來は正郎と號す、武徳三年に尙書郎を改めて郎中となす、事物紀原五などに出づ。
- ② 章の大意は乾屎橛を擧げて萬疑を破し、涅槃經を引證して生滅の心を破す。此書は居仁が爲に前書を發す、後に再び佛祖の語の斷滅等を問ひ來るが故に、再び答ふる時居仁が事を以て隆禮に告ぐる也、即ち居仁が事を本となし、隆禮が事を傍となして論ず、そは毎毎居仁が教誨すれども居仁肯ぜず、故に暗に隆禮に託して相俱に居仁を勸警するなり。
- ③ 第一段、居仁に託して隆禮を勸誨す。
- ④ 著忙は唐の俗語。
- ⑤ 從官は官事に従ふなり。
- ⑥ 死を待つの外別にあらず。
- ⑦ 早は、早年の早にあらず、死
- 後に對していふ。
- ① 臘月等は、生死到來の時節なり。
- ② 打疊は萬事をうちしまふをいふ。
- ③ 此事を透得せざる故に忙はし。
- ④ 消息とは、ありさまなり。
- ⑤ 第二段、徒らに他家の事を知ることヲ誡め、自家の事を知らざることを責む。措大とは、天下の大を措くなり、或は謙言長語するなりと、或は自負高慢の人ヲ罵る意にも用ひらる、家とは人を指す詞なり。
- ⑥ 是事とは、世間の萬事即ち百今の故事來歷等。
- ⑦ 孟子、名は軻、字は子輿、鄒の人、戰國の初に出で、萬章の徒と仲尼の道を祖述す、史記七十四に載す。
- ⑧ 莊子、名は周、字は子休、楚國蒙縣の人、寓言荒唐を以て世

べし。年已に六十、^①從官又做し了れり。^②更に如何んがせんと待たんや、若し早く著忙せずんば、臘月三十日に如何んが打疊し得辨せんや。聞く左右も邇來亦忙はしと。只だこの著忙底、便ち是れ臘月三十日の消息なり、如何んが是れ佛乾屎橛と。這裏を透らすんば臘月三十日と何ぞ異ならん。^③措大家が一生故紙を鑽りて、^④是の事知らんことを要し、博く群書を覽て、高談闊論し、孔子又如何ん、孟子又如何ん、莊子又如何ん、周易又如何ん、古今の治亂又如何んと。^⑤這些の言語に使はれ得來つて、七顛八倒す。^⑥諸子百家、纔かに人の一字を擧著するを聞かば、便ち卷を成して、念じ將ち去りて一事の知らざるを以て恥となす。他に、自家屋裏の事を問著するに及んで、並に一人として知るものなし。謂つべし、終日他の寶を數へて自ら半錢の分なしと。空しく世上に來りて、一遭を打するのみなり。この穀漏子を脱却せば、天堂に上ることも也た知らず、地獄に入ることも也た知らず、其の業力に隨つて、諸趣に流入せんも並に知らず。若し是れ、別人の家裏の事は、細大知らざる者あること無し。士大夫、書を読み得ること多き底は無明多く、書を読み得ること少き底は無

を驚かす、史記列傳三に載す。
 ②周易、本義に云く、易書の名なり、其卦は本伏羲の畫する所、交易あり、變易の義、故に之を易といふ。
 ③這些等とは、學道の眼より之を看れば則ち些子なりとの意。
 ④諸子とは、莊子、列子、墨子、韓非子、慎子、淮南子、荀子等なり。百家とは全數を擧ぐ。
 ⑤念とは、暗誦、記憶なり。
 ⑥自家等とは、自己の本性。
 ⑦終日等は、華嚴經六菩薩明難品に出づ。
 ⑧一遭を打すとは、生より死に到るなり。
 ⑨穀漏子とは、身尸なり、普通に見がら、又からといふ義は蓋し此字を書く。傳燈二十八忠國師の語、掌珠故事四等に載す。
 ⑩諸趣は地獄、餓鬼、畜生、人、

明少し。官を做し得ること小なる底は人我小なり。官を做し得ること大なる底は人我大なり。自ら道ふ、我れは聰明靈利なりと、秋毫ばかりの利害に臨むに及んでは聰明も也た見え、靈利も也た見え。平生所讀底の書の一字も也た使ひ著す。蓋し、上大人丘乙巳の時より便ち錯り了れり、只だ富貴を取らんと欲するのみ。^①富貴を取り得る底、又能く幾人かある、肯て頭を回らし腦を轉じて、自己の脚跟下に向つて推窮せよ。我がこの富貴を取らんとする底、何れの處よりか來る、即今富貴を受くる底、異日に却つて何れの處に向つてか去るや。既に來處を知らず、又去處をも知らず、便ち心頭迷悶するを覺すべきなり。正しく迷悶の時、亦他物にあらず、只だ這裏に就いて箇の話を看よ。僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ佛。」門云く、「乾屎橛」と。但だ此の話を擧せよ。^②忽然として伎倆盡きん時便ち悟らん。切に忌む文字の引證を尋ねて胡亂に傳量注解す、縱然ひ注解し得て分明に説き得て、下落あるも、盡く是れ鬼家の活計なり。疑情破れされば生死交加す、疑情若し破るれば則ち生死の心絶す。生死の心絶するときは、佛見法見亡す、佛見法見すら尙ほ亡す、況ん

天堂等なり。
 ①自己に對して孔子、孟子等をいふ。
 ②秋毫は、極小をいふ。利害とは、天下の政事の成敗利害なり、即ち天下の利と害とを辨別する能はずと。即ち自家屋裏の事を會せば、則ち智を以て前導となし、力を用ひずして而も君を堯舜に致す、若し自分の事を會せずんば則ち天下の政に臨んで利害成敗に一字も使ひ得ずとなり。
 ③上大人等、普燈四、白雲章に出づ。冠註に云々す。上大人は上古の大聖人なり、丘乙巳は孔丘一人のみの意、則ち孔子の時よりの意か。
 ④士大夫、自利利他を求めず、故に此の如く富貴を取らんと欲するなり、學問をなすは天下を治めんが爲なり、然るに士大夫は然らず、故に云々す

や復た更に衆生、煩惱の起るを起さんや。但迷悶する底の心を將つて乾屎橛の上に移し來つて、一抵に抵住せよ。生死を怖るる底の心、迷悶底の心、思量分別する底の心、聰明を作す底の心、自然に行せず、行せざることを覺得せん時、空に落ちんことを怖るること莫れ。忽然として抵住の處に向つて消息を絶せば、平生を慶快にするに勝へざるべきなり。消息絶することを得了つて、佛見、法見、衆生見を起して思量分別し、聰明を作し、道理を説くも都て相妨げず、日用四威儀の中、但だ常に蕩蕩地ならしめて、靜處閑處、常に乾屎橛を以て提撕せよ。日往き月來らば水牯牛自ら純熟せん。第一に外面に向つて別に疑を起すことを得ざれ、乾屎橛の上に疑破るれば、則ち恒河沙數の疑一時に破れん。此れより前に亦嘗て此の如く居仁に寫し與ふ。此の趙景明來りて書を得たり、書中に再び來問して云く、知らず。此れを離れて別に工夫を下す處ありや也た無きや。又舉手動足、著衣喫飯するが如き當に如何んが體究すべき。復た只だ話頭を看んとやせん、復た別に體究すべきありとやせん。又平生の一大疑の事、今に至るまで未だ了せず、只だ死後の斷滅か不斷

- ① 第四段、喚醒して話を轉ぜしむ、斯く警策して下の文を起す。取り得ば求め得る義なり、佛家には因果といひ、儒家には天命といふ。
- ② 頭等とは、欲求の境より眞道に向ふ。
- ③ 好消息漸く相近づく。
- ④ 第五段、計較を斥く。
- ⑤ 轉は度るなり。注は物を記するをいふ。
- ⑥ 下落は落着の意、また證據正しきをいふ。
- ⑦ 鬼等は小理味を咬み出して愛着するなり。
- ⑧ 交加は、物の入り雜るをいふ。今の意は、念念前滅後生するをいふ。
- ⑨ 佛見法見の語は、思益經簡註三、菩薩無二品にあり、心外に佛陀、法門の存在を認むる等をいふ。

滅かの如き如何んが決定して見得せん。又經論の所説を引くことを要せず、古人の公案を指すことを要せず、只だ目前に據つて、直截分明に斷滅不斷滅の實處を指示し、剖判せよと。渠が此くの如きの説話を觀るに、返つて三家村裏に事を省する漢、却つて如許多の糞壤無くして死すれども、也た死し得て瞥脱なるに如かず。分明に他に向つて道ふ、千疑萬疑只是れ一疑、話頭の上に疑破するときは、千疑萬疑一時に破せん。話頭破せざれば則ち且く話頭の上に就いて之れを厮崖めよ。若し話頭を棄て了つて、却つて去つて別の文字の上に疑を起し、經教の上に疑を起し、古人の公案の上に疑を起し、日用の塵勞の中に疑を起さば、皆是れ邪魔の眷屬なり。又舉起の處に向つて承當すること

- ① 衆生は佛見に對し、煩惱は法見に對す。
- ② 第六段、工夫の法を示す。
- ③ 抵は、擠なり、擲なり、又は當なり、抵住は、當得の義なりと、どつしりとすわるが如し。
- ④ 行起せずの意。
- ⑤ 平生の碍膈の物一時に盡きるなり。
- ⑥ 水牯牛とは、心法を喻ふ、傳燈九、福州大安章。
- ⑦ 外面は、本參の外をいふ、これ隆禮に向つて言ふに似て、實は居仁に言ふなり。
- ⑧ 千疑萬疑をいふ。
- ⑨ 第七段、此に初めて居仁が書を述ぶ。
- ⑩ 此の如しとは隆禮にいふ、恒河沙數の疑を指す。
- ⑪ 問を致し來るなり。
- ⑫ 此れとは、乾屎橛なり。
- ⑬ 舉手動足等の上に於てなり。

- ⑭ これ外道の邪計なり。楞嚴二、十、華嚴疏抄十七、大論三十八。死後の滅不斷の疑は五蘊を所依として起る邪見なり、五蘊に了達すれば此の疑なし。中阿含十六、廣弘明集九より十卷に至り、范子真傳の神滅論を破せり、五蘊皆空を知らざれば生滅輪廻止むことなし。邵氏の聞見前錄十八に、邵康節が輪廻を信ぜざるを出す。
- ⑮ 剖判せよ、までが再問の書なり。渠は下は大惠の判語なり、渠とは居仁を指す。
- ⑯ 三家村裏は張無盡の語なり、大惠普說一の八十五丁。事を省すとは、事務を省略するなり、東坡詩集四。
- ⑰ 糞壤とは塵知分別をいふ。
- ⑱ 瞥脱は瞥地的脱にて、速かに成就するをいふ。
- ⑲ 第八段、答書の事を述ぶ。

を得ざれ、又思量下度することを得ざれ。但只だ
意を著けて不可思量の處に就いて思量せよ、心
之く所なくんば、老鼠の牛角に入ることく、便
ち倒斷を見んと、寫し得て此くの如くに分曉し
了る。①又却つて更に來りて切切但地にして
問ふ、知らず許多の聰明知見甚の處に向つてか
去る。②道ふことを信せずや、平生讀む底の書、
這裏に到り一字も也た使ひ著し。③而今已むこ
とを得ずして更に他の爲に此の惡氣息を放た
ん。若し只だ④恚麼に休し去らば却つて是れ妙
喜、渠に⑤問ひ了られて更に答へ得ずといは
ん。此の書纒かに到らば便ち送つて⑥渠に與へ
て一看せしめよ。⑦居仁自ら言ふ、行年六十
歳、此の事未だ了せずと。渠⑧に問へ、未だ了
せざる底、復た是れ舉手動足、著衣喫飯する底、

- ①又云々は、道量明が來時の來問をいふ。
- ②道ふこと等とは、前書に道ふことを信せずとなり。
- ③第九段、總論して下段を起す。
- ④惡とは息の臭きなり。大光明藏上。
- ⑤恚麼とは、已むことを得ずを指す。
- ⑥道量の來書に對して、返答せずんば、居仁欺き言はん、大小の大惠も死後の不斷滅に於ては如何ともせずと。
- ⑦渠は居仁を指す。
- ⑧第十段、多疑即ち一疑なることを示す。
- ⑨他問を以て返詰す。居仁は舉手著衣等に疑をなし、何を以て未了といふや、平生の語頭を見了するは、著衣喫飯の上に於て了するや。又外に工夫すべきありや云々。
- ⑩了は體窮なり、自ら未了底と

- 言つて未了の者にし去つて而も了ぜんと欲す、又如何んが了ぜんと請るなり、畢竟、一疑を以て千萬疑生するを責む。
- ⑪殊に已下、大惠の評論なり。
- ⑫此の疑とは、本樂の疑なり。
- ⑬五蘊の斷不斷を疑ふ故に。
- ⑭渠は居仁を指す也。
- ⑮第十一段、斷滅不斷滅を辨ず、中に初に不正の文を説く。斷滅は斷見、不斷滅は常見なり、元來常斷なきが故に、然るに居仁は割判をせよといふ。
- ⑯人とは大惠なり。
- ⑰こちらからも、くさい息を吹きかへすぞとなり。
- ⑱第二節、故らに古人の公案を引く。前の居仁の書に、古人の公案を指すを要せず云云といふ、今は居仁に當りて、彼書の問語を徴して他の疑ふ所を引くなり。志道は傳燈五に

未だ了せざるか、若し是れ舉手動足、著衣喫飯する底、又①如何んが他を了
せんと要するや。殊に知らず、只だ這の死後の斷滅不斷滅を了知し決定し
て見得せんと欲する底、便ち是れ闍家老子の面前にて鐵棒を喫する底なり。
②此の疑破れずんば、生死に流浪して未だ了期あらじ。渠③に向つて道
へ、千疑萬疑只だ是れ一疑なり、話頭若し破るれば死後の斷滅不斷滅の疑
は當下に冰銷瓦解せん。④更に直截分明に斷滅不斷滅を指示割判せしめん
や、此くの如きの見識は外道と何ぞ異ならん。平生許多の之乎者也を做す
は何の用を作さんとか要す。渠既に許多の遠地より這般の惡氣息を放ち來
りて⑤人を熏す、妙喜、只だ恚麼に休し去るべからず、⑥亦些しの惡氣息
を放ち却つて去つて他を熏せん。則箇、渠、經教及び古人の公案を引くこ
とを要せず、只だ目前に據つて直截分明に斷滅不斷滅の實處を指示せし
む。⑦昔、志道禪師、六祖に問ふ、「學人出家してより涅槃經を覽ること十
餘歳に近し、未だ大意を明めず、願くは師、垂誨せよ。」祖曰く、「汝何れの
處か未だ了せざる。」對へて曰く、⑧「諸行無常、是れ生滅の法なり、生滅
滅し已つて、寂滅を樂となすと、此に於て疑惑す。」祖曰く、「汝作麼生か

- 云く、六祖慧能の法嗣云云經にも亦云云す、古今異なりと雖も了解せば同じ、然るに居仁は滅か不斷かを疑ふのみならず、又古今の二見をなす故に、大惠、古今を一にせんと欲して之を引く、而して同時に復た志道の邪解と居仁の邪解と同じことを擧げて、古邪今邪の異ならざるを示す。故に下に葛藤少からず等といふ。
- ②諸行等の偈は涅槃經十三聖行品に出づ。之れ釋尊因位の時、婆羅門となりて雪山に住して菩薩行を修す、時に釋提桓因、化して羅刹(食人鬼等と譯す)となりて、過去佛所説の此偈を宣べしなり、長ければ之を略す、祖庭事苑一に略抄せり。諸行とは、因縁の關係に因つて生成したる總ての法をいふ。生滅滅已とは、吾人本具

疑ふ。對へて曰く、「一切衆生皆二身あり、謂く色身と法身なり、此れ乃ち居仁、色身は無常にして生あり滅あり、法身は有常にして知もなく覺もなし。經に云く、生滅滅已寂滅爲樂とは、未審、是れ何の身か寂滅し、何の身か樂を受くるや。若し色身なりといはば、色身は滅する時、四大分散して全く是れ苦なり、苦を樂と言ふべからず。若し法身は寂滅して即ち草木瓦石に同じ、誰か當に樂を受くべきや。又法性は是れ生滅の體、五蘊は是れ生滅の用、一體五用なり。生滅は是れ常なり、生ずるときは則ち體より用を起し、滅するときは則ち用を攝して體に歸す。若し更生すること聽さば、即ち有情の類は不斷不滅ならん。若し更生を聽さずんば即ち永く寂滅に歸して無情

の佛性に體達すれば、宇宙間の現象の一一の其儘が法性の活動妙用なることを如實に知ることを得、既に之を識れば生の欣ぶべきなく、死の厭ふべきなく、全く生死を超越するを、生滅滅已といふ。既に生滅を滅し已れば、無限の生命を得、理想境に達したるものにして、政事に、教育に、將た農、工、商等に奮闘しつつある日常生活の其儘が寂滅にして、法身、般若、解脱自在の眞の樂地なれば、之を寂滅をもつて樂となすといふなり、迷情分別の境にあらず。色とは、佛敎にては之を狹義に解せば眼識所緣の青黃等な色といひ、廣義に解せば物質を色といふ、今は廣義の方にて肉體を色身といふ。法身とは、法界に周徧せる常住不變の理をいひ、或は吾人本具の

覺體をいひ、或は佛の覺體をいふ。金光明經二、妙宗鈔二、等に出づ。
 疑に二あり、初に經文を擧ぐ。
 次に疑を述ぶ。
 疑惑を破す。四大とは地、水、火、風にして、吾人の肉體は四大和合して成ずとす。智度論五十二等。
 法身に樂なきの疑を破す。瓦石に同じとは志道の己見なり。
 志道は法身の眞樂を知らずして、世間の五欲の樂の如くに思ふて此疑をなす。
 又法等とは、生滅滅已を疑ふ。初に邪見を擧ぐ。法性とは萬法の體性、即ち吾人の本體、萬有の實體の意なり。
 五蘊とは、色、受、想、行、識にして、蘊とは積集の義、此五が調和し積集したるものを吾人の體とす、而して其同

の物に同じからん。是くの如くならば則ち一切の諸法、涅槃に禁伏せらるることを被つて、尙ほ生ずることを得ず、何の樂か之れあらんや」と。居仁と一の狀。祖師、這裏に到りて臨濟・徳山の事を用ふるがごとくなること能はずして、遂に些の氣息を放つて、他に還して云く、「汝は是れ釋子なり、何ぞ外道の斷常の邪見を習ふて、而も最上乘の法を議するや。汝が所解に據らば、即ち色身の外に別に法身ありとし、生滅を離れて寂滅を求む。又涅槃の常樂といふを推して言へり、身に受くる者ありと、斯れ乃ち生死を執著し世樂に耽著するなり。汝今當に知るべし、佛一切の迷人の五蘊の和合を認めて自體の相となし、一切の法を分別して、外塵の相なりとなし、生を好し死を惡み、

種類を集め分類したるものが五蘊なり。初の色とは物質にして肉體なり。受想行識の四は心にして精神上の分類なり。之を事死に略盡して曰く、「變礙を色といひ、領納するを受といひ、像を取るを想といひ、造作するを行といひ、了知するを識といふ云云」と。舊譯には陰と云ふ、眞性を陰蔽するが故なり。名義集の六。
 これ生滅の當體即法性常住の意に非ずして今は前滅後生、前滅後生して相續して絶えざること流水の如くなるを常といふ。
 此は不斷常、相續常に似同す、眞法を著して言ふ。
 次に正しく疑ふ。更生は楞嚴八、法華二等に出づ。
 虛妄の心を以て、妄に生滅を認めて之を疑ふ。
 衆人同罪といふが如し、志道

は斷滅不斷滅をいふ、居仁亦之をいふ、故に同罪なれば一狀に領過すといふ。
 祖師とは第六祖を指す、壇經に詳なり。
 事を用ふとは、棒喝なり。
 他に還すは、答の義なり。
 邪解を破するに二、初に聽して斥く。
 最上乘とは、涅槃をいふ。
 初に別して生滅滅已等の文を譯解するを破す。
 汝等は、六祖の正解を述ぶ、初に諸行無常、是生滅法を譯解するを破す。
 五蘊等は、圓覺經二。
 三界唯心、萬法唯識の理に暗くして妄に外に六塵を認む。
 當體即空なることを知らずして妄に生を好み死を惡み、受くべからざるに之を受け、強ひて生滅の法とす。
 上の何の樂か之れあらんの語

念念遷流すれども夢幻虛假なることを知らずして、枉げて輪回を受け常樂の涅槃を以て翻つて苦相となし、終日馳求するが爲に、佛此れを惑むが故に、乃ち涅槃の眞樂を示す。刹那も生相あること無く、刹那も滅相あることなし。更に生滅の滅すべき無し。此に到りて請ふ。是れ則ち寂滅の現前するなり。現前の時に當つて、亦現前の量なきを乃ち常樂と謂ふ。此の樂は受くる者あること無く、亦受けざる者あること無し、猶ほ些子。豈に一體五用の名あらんや、何ぞ況んや更に涅槃、諸法を禁伏して、永く生ぜざらしむと言はんをや。此れ乃ち佛を誘り法を毀るなり。居仁亦一。吾偈を聴け、曰く。分疎。無上大涅槃、圓明にして常に寂照す、凡愚は之れを死と謂ひ、外道は執して斷と爲す、諸の二

- ①次に生滅滅已等の二句を解す、意は五陰の樂には壞苦、行苦あるが故に、佛、眞樂を示す。
- ②刹那等は、此の眞樂は刹那も云云となり、此の生相、滅相とは、凡夫外道の計着する所の生滅なり。
- ③此樂とは眞樂なり、如如の樂なり故に。
- ④之れは生滅滅已を解す、即ち眞箇の中に凡夫五陰なるものなし。
- ⑤何ぞ等、萬法は燃然、堂堂として露現す、涅槃百草頭の祖師意。禁伏とは禁調といふが如し。
- ⑥志道は佛を誘り法を毀す、居仁も一分子。
- ⑦次に偈を以て、重ねて示すなり。
- ⑧分疎とは、輾轉縁に云く、人の自ら其事の是非を辨白するを偈に分疎と曰ふ。顏師古曰く、解は今の分疎の若し云云。
- ⑨無上、法藏心經疏に云云す、涅槃經如來性起品。圓滿明淨にして寂にして而かも照し、照にして而かも常に寂なり、然るに凡外は迷ふて云云すと。
- ⑩二乘とは聲聞乘、緣覺乘にて小乘の機なり。無作とは、智を滅し識を滅す故にいふ、法界次第中。
- ⑪六十二見とは、外道凡夫の迷執妄見をいふ。法華文句四の二、華嚴疏十七等に出づ。
- ⑫眞妄の眞相に通達するが故に。
- ⑬蘊中の我とは、所謂即蘊の我なり、凡そ我に即蘊の我と、離蘊の我となり、我とは常一主宰の義とて、吾人の身心中に應ず。

乗を求むる人は、目づけて以て無作となす。盡く情の所計に屬す、六十二見の本なり、妄に虚假の名を立す、何ぞ眞實の義と爲さん。居仁、實處を見んと要せば、唯だ過量の人ののみ有りて、未だ其の通達して取捨なし。居仁、更に十年。五蘊の法及び蘊中の我、居仁、裏許に在りて門外に衆の色像眼に花。一一音聲の相人を現するも、平等にして夢幻の如し一半を。と知るを以て、凡聖の見を起さず涅槃の解を作さず、亦た未だ其の二邊三際を斷す。常に諸根の用に應じて而も用の想を起さず、一切の法を分別すれども分別の想を起さず、劫火海底を燒き、風山を鼓して相擊てども、眞常なる寂滅の樂、涅槃の相是くの如し。吾れ今強ひて言説して汝をして邪見背て捨てず。汝を捨てしめんとす。汝

- ①に常住不變にして吾人を支配し事物を主宰する一實體あり、靈魂ありと認むるを即蘊の我といふ、これ一般人類の迷執なり。又吾人の身心以外に別に宇宙間に梵とか、神とか、神我等と目すべき一箇の完全者ありて、よく萬物を造り、吾人を主宰せりと妄執するを離蘊の我といふ、これ多く外道の迷執する所なり。此等を總じて我執といふ。然るに吾人は物質と精神と結合して成れるものにして、決して我といふが如き主宰者あるに非ず、又五蘊其もの及び宇宙萬有も亦皆因縁の大道理に依りて成立し活動せるものにして、必ず神我といふが如き主宰者あるに非ずと教ふるが佛教なり。
- ②色を執取せば好醜、聲を取らば佳不佳を分別す、然るに色、聲も凡聖等の得べきものなきが故に。
- ③二邊は有の邊、無の邊なり。三際とは過去、現在、未來の三世なり。諸根とは、眼、耳等の六根なり。
- ④恰恰として心を用ふる、こと無く、自在に時に臨み機に應ずる境界なり。玄沙廣錄中。
- ⑤世界の成立より破壊し終るまでを成、住、壞、空の四期に分つ、その四期各二十劫を経る中、最後の第八十劫の時に大火災起りて世界の一切を燒き盡すといふ、其火を劫火といふ。
- ⑥世界大戦の砲火相交ふる大慘劇中に在つても、震雷暴風雨の中に在るも、劫火洞然として大千界を燒き盡すも、涅槃眞常の樂は些の異相なし、性相當然として是くの如きのみ。

● 言に隨つて解すること勿くんば、居仁記。汝に許す少分を知ること。只だ這つ少分も。志道、偶を聞いて忽然として大悟す。葛藤少。只だ這の一絡索、便ち是れ直截分明に居仁に指示する底の指頭子なり。居仁此れを見て、若は道はん、「猶ほ是れ經論の所説なり、尙ほ古人の公案を指すなり」と。若し尙ほ此くの如きの見を作さば、地獄に入ること。箭を射るが如けん。

● 呂舍人に答ふ 居仁

承はる日用工夫を做すことを輟めずと、工夫熟せば則ち關楔子を撞發せん。所謂工夫とは、世間の塵勞を思量する底の心をもて、乾屎橛の上に回在して情識を行せざること、土木偶人の如くに相似たらしめよ。昏但にして巴鼻の把捉すべき没きことを覺得せん時、便ち是

- 言語文字に拘泥することなく、言中の眞意を取らしむ。記取せよとは、志道は六祖の下に於て之を捨てしも公は未だ已執を捨てず、公自ら記取せよとなり。
- 第三節、古今を破して結示す。
- 千佛萬祖も教ふ能はず。
- 像法決疑經に出づ。
- 此語は志道の始終の一絡索にかゝる。上來の六祖の公案は即ち是れ大惠の公案なることないふ。居仁は經論等を指すを要せずといふ、本來古今なし、何ぞ古人を離れて示すといふかと、これ居仁の古今の二見を破せんとするなり。
- 此章は、専ら工夫をなすの徑を要示す。
- 第一段、工夫の用心を示す。
- 土木偶とは、木像を木偶といふ、土像を土偶といふ。史記七十五云云。案隱云く、木を以て之をつくり、偶、人に類するなり」と。
- 昏但は、心頭懸機闕絶し愚漫漫地の謂なり。即ち分明ならざるないふ。
- 法華方便品。
- 解とは思量分別解會なり、著は助語の辭。
- 此れ直に主人公を示すに似たり、然し影子に依つて示す、曰く、影子直に是れ個呂居仁なり。
- 前後左右を顧視せず、直に生命を捨つべきなり、意は影子に依つて主人公を取せよとなり。
- 第二段、主人公の作用を示す。
- 禪病、此は言を枉げて言ふ、意は除禮に答ふる書は甚だ居仁を詞責せり、今其れを指して禪病といふなり、即ち眞禪に入らざるを禪病といふ。圓覺經四に出づ。

れ好消息なり。空に落ちんことを怖るる莫れ、亦前を思ひ後を算りて、幾時か悟を得んといふこと莫れ、若し此の心を存せば、便ち邪道に落ちん。佛の云く、「是の法は思量分別の能く解する所に非ず」と。解著すれば即ち禪生ず、思量分別の能く解せざることを知得する者は是れ誰ぞや、只だ是れ箇の呂居仁なり。更に頭を回らし腦を轉することを得ざれ。此れより前に隆禮に答ふる書に、禪病を説き盡す、諸佛諸祖並に一法の人に與ふるなし。只だ當人のみ自ら信じ、自ら肯ひ、自ら見、自ら悟らんことを要するのみ。若し只だ他人の口頭の説を取る底ならば、恐くは人を誤らん。此の事は決定して言説の相を離れ、心縁の相を離れ、文字の相を離る。能く諸相を離ると知る者も亦是れ呂居仁なり、他の死後に斷滅するか斷滅せざるかと疑ふも亦只だ是れ呂居仁なり、直截の指示を求むる者も亦只だ是れ呂居仁なり。日用二六時中或は瞋り、或は喜び、或は思量し、或は分別し、或は昏沈し、或は掉擧するも皆只だ是れ呂居仁なり。只だ這の呂居仁、能く種種の奇特變化を作し、能く諸佛諸祖と同じく寂滅大解脱光明海中に遊んで、世間出世間の事を成就す、只だ是れ呂居仁信不及

- 此の如く言ふは、居仁が種種の疑問を作して問ひ來るが故に、自信自悟すべしといふ。
- 會元七德山章に出づ。
- 汝但だ大惠の口頭の説を取りて、其心を見ざる時は大惠の示す所却つて公を誤るならんの意なり。又一義に云く、「只だ他人の口頭の説のみを取らば唯だ自ら誤るのみならず亦他人を誤らん」と。前義を可とす。
- 言説等とは、越信論の語を假り用ふ、會元二、亦之を引けり。
- 他とは、呂居仁を指す。
- 圓覺經一に出づ。虛妄の動相を離るるが故に寂滅といひ、五蓋十纏を出づるが故に大解脱といひ、通達自在の作用あるを光明海といふ。此は大惠禪師が傍より觀破したる處、故に此の如し、居仁は曾て之

なるのみ。若し信得及せば、請ふ此の注脚に依つて是の 三昧に入れ、忽然として三昧より起つて孃生の鼻孔を 失脚せば便ち是れ 徹頭ならん。

又

令弟の子育、經由するるとき賜ふ所の教を出し、之れを讀んで 喜慰すること知りぬべし。無常迅速にして百歳の光陰も電閃の如し。便ち是れ 收因結果底の時節到來す、乾屎橛如何ん、没巴鼻、無滋味にして肚裏悶することを覺得せん時、便ち是れ好底の消息なり。第一に擧起の處に向つて承當することを得ざれば、又無事甲裏に隠在することを得ず。擧する時は便ち有、擧せざる時は便ち無なるべからず。但だ世間の塵勞を思量する底の心を將て、乾屎橛上に回在し、思量し來り思量し去りて奈何ともする處なくして、伎倆忽然として盡さなば、便ち自ら悟らん。心を將て悟を等つことを得ざれば、若し心を將て悟を等たば、永劫に悟を得る能はじ。此より前、隆禮に答ふる書に 措大家の病痛を説き盡せり。只だ座右に置在すと承はる。若し此れに依つて工夫を做さば、未だ悟徹せずと雖も、亦能く 邪正を分別して邪魔の爲に障へられず、亦般若の種子を種る得るこ

を知らず。五蓋とは、貪欲、瞋恚、睡眠、惛悔、疑なり、此五は蓋覆纏綿して吾人の心神を昏暗にして定慧を發せざらしむるが故に蓋と名く。十纏とは、無慚、無愧、嫉、慳、惡作、睡眠、惛舉、昏沈、忿、覆なり、此十は有情を纏縛して生死の獄に置くが故に纏と名く。
① 堂堂たる居仁、信不及の故に眞箇の居仁を見ることを得ざるなり。
② 三昧とは定、或は寂靜等と譯す、妄念分別を離れて理と智と契合したる寂靜の境をいふ。起つとは、三昧の垢を拂却するをいふ。
③ 忘却とは、法の無生を得ること、即ち悟行底を奪却す、これ三昧より起つての端なり。
④ 徹頭といふも猶ほ是れ靈鷲、尾を曳く、何の徹頭か之れを

と深からん。縦ひ今生に了せずとも來生に出頭して現成受用せんに、亦力を費さじ、亦惡業の奪ひ將ら去らるることを被らさず、臨命終の時も亦能く業を轉せん。況んや一念相應せんをや。逐日千萬、別事を思量することを要せざれ、但只だ乾屎橛を思量せよ。幾く時か悟らんと問ふこと莫れ。至禱至禱。悟る時亦時節なし、亦群を驚かし衆を動せじ、即時に怙怙地にして自然に佛を疑はず、祖を疑はず、生を疑はず、死を疑はず。不疑の地に到ることを得ば、便ち是れ 佛地なり。佛地上本疑あることなし。悟なく迷なく、生なく、死なく、有なく、無なく、涅槃なく般若なく、佛なく衆生なく、亦恁麼に説く者もなし。此の語も亦受けず、亦受けざる者も無く、亦受けずと知る者も無く、

らん。

- ① 第一段、用心を示す。
- ② 經由は他家に立寄るをいふ。又云く、往來の義と。
- ③ 喜慰は、大恵に乘る、知るべしは、居仁に乘る。
- ④ 無常等は、來書の語なり。
- ⑤ 世間を了畢する時節。
- ⑥ 平生打成一片ならんことを要す。
- ⑦ 第二段、深信を承知す。
- ⑧ 措大家とは居仁を指す、事死に云く、「置くなり」と、意は天下の大を措置く者。病痛とは前の禪病に同じ。
- ⑨ 邪正とは、斷滅不斷滅とは是れ正見か是れ邪見かを辨別すとなり。
- ⑩ 縦ひの上に「恁麼ならば」を加へ看よ。
- ⑪ 三途に墮せず、人界に出頭して一度般若の種子を種ふて……。現成受用とは、上の所

謂る、擧手動足の上に受用すとなり、而して是れ甚だ難事なり。
① 前世の般若の重習力あるが故に、工夫を費さすとなり。
② 亦惡業等とは、影子を轉すれば即ち主人公なるが故なり。
③ 逐日とは、毎日なり、千萬とは千回萬回なり。
④ 第三段、悟後の境界を示す。時節なしとは、時節を定め難しの意、自然に築著するが故に。
⑤ 雲岩錄上に云く、「自心を以て自心を悟る故に、衆前に向つて驚動底の事なし、紛飛の妄念を絶し、唯だ怙怙地なるのみ」と。怙怙とは安靜なり。
⑥ 悟後に種種差別の未曾有の境界を見聞するも、自己見得の境界なるが故に、分外となさず。今多くの疑の字を用ふるは、居仁が千疑萬疑を起すが

亦恁麼に受けずと説く者もなし。居仁是くの如くに信得及せよ。佛も亦只だ是くの如し。祖も亦只だ是くの如し。悟も亦只だ是くの如し。迷も亦只だ是くの如し。疑も亦只だ是くの如し。生も亦只だ是くの如し。死も亦只だ是くの如し。日用塵勞の中も亦只だ是くの如し。死後の斷滅不斷滅も亦只だ是くの如し。朝廷に在りて從官と作るも亦只だ是くの如し。宮觀にして静處に在るも亦只だ是くの如し。徑山に住して一千七百衆に圍遠せらるるも亦只だ是くの如し。編管せられて衡州に在るも亦只だ是くの如し。居仁還つて信得及するや、信得及するも亦只だ是くの如し。信不及なるも亦只だ是くの如し。畢竟して如何ん、是くの如し、是くの如し。是くの如くなるも亦只だ是くの如し。

- ① 智徳、斷徳、恩徳を圓備するを佛とす、今は智徳に就いていふ。華嚴、如來現相品。
- ② 悟の字の上に(故に)を加へ看よ。圓覺經三、清淨慧章。
- ③ 日用の迷悟も生死も瞋喜も皆是れ現成受用。
- ④ 宮觀は道士の居處をいふ、即ち呂が太平觀に居るを謂ふ、今は朝廷を去つて宮觀に居るの意なり。
- ⑤ 徑山等は、大惠が……、自己の事をいふ。
- ⑥ 編管とは、選俗せられし事、大惠、徑山に居るや、編流の之に赴く者二千餘衆と、或日(宋孝宗の紹興十一年四月)侍郎張公九成は父の卒哭を以て徑山に登る、師毘座說法す、偈に曰く、神臂弓一發、射破千重甲云々と、次で談論す、偶桑楡の爲に朝政を諷諭すと
- ⑦ 此書は富人の園地一下を欠く

汪狀元に答ふ 聖錫

左右妙年より自立して便ち一切の人の頂額上に在れども、富貴の爲に籠羅せられず。百劫千生、願力の持する所に非ずんば、焉んぞ能く是れを致さん。又能く切切として此の一大事に於て念念退轉せず、決定の信を有し、決定の志を具す、此れ豈に淺丈夫の能くする所ならんや。老瞿曇云く、唯だ此の一事のみ實なり、餘の二は則ち眞に非ず」と。請ふ鞭を著けよ忽にすべからず。世間の事只だこれれのみなり。先聖豈に云はずや、「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」と、知らず聞く底是れ何の道ぞ、這裏に到つて豈に眨眼すること容さんや。更に吾が道は一以て之れを貫くといふを引き去るべからず、須らく自ら信じ自

- ① 汪狀元は、選俗せられし事、大惠、徑山に居るや、編流の之に赴く者二千餘衆と、或日(宋孝宗の紹興十一年四月)侍郎張公九成は父の卒哭を以て徑山に登る、師毘座說法す、偈に曰く、神臂弓一發、射破千重甲云々と、次で談論す、偶桑楡の爲に朝政を諷諭すと
- ② 此書は富人の園地一下を欠く
- ③ 汪は五歳にして書を讀み聰明靈利なり、十八年に及第す。宋史列傳百四十六、狀元とは、凡そ及第に第一甲第二甲第三甲第四甲第五甲あり、五人すべて進士及第といふ、中に第一を狀元といひ、第二を進士及第といひ、第三を進士出身及第といひ、第四第五を同進士出身及第といふ、上三甲に詔書を賜ひ、第四第五には敕書を賜ふ、狀元とは第一狀の元首なるが故にいふと。四河入海に見ゆ、及第して未だ官を授らざる時、自稱して狀元といふ。
- ④ 唐書志五に、孔子を稱して先聖といふ。論語里仁爲美の語なり。護法論に云ふ。
- ⑤ 知らず等は、一擲を與ふなり。
- ⑥ 直下に看よとなり、情議を絶すれば則ち直下即ち是れ道なればなり、既日は目動くなり。
- ⑦ 論語里仁爲美の語、引き去るべからずとは、文字を以て文字の議を引く莫れ、引證は是れ空語なれば益なしとなり。
- ⑧ 第三段、空談して悟を求めざるを責む。
- ⑨ 法華方便品に出づ。増上慢とは、未だ得ずして得たりと思ひ、未だ證らずして證れりといふ。

ら悟るべし、説き得る底終に是れ憑據なし。自ら見得し自ら悟得し、自ら信得及し了らば、説き得ず、形容し出さざるも却つて妨げず。只だ説き得て似、形容し得て似て、却つて見す却つて悟らざる者を怖る。老瞿曇は、指して増上慢の人となしたまふ、亦之れを般若を誘ふ人と謂ひ、亦之れを大妄語の人と謂ひ、亦之れを佛の慧命を斷する人なりと謂ふ。千佛出世したまふとも、懺悔を通せし、若し狗子無佛性の話を透得せば、這般の説話、却つて妄語とならん、而れども今は便ち妄語の會を作すべからず。呂居仁、比ごろ連りに兩書を收む、書中に皆云ふ、夏中隆禮に答ふる書を常に座右に置いて、得るを以て期と爲すと。又聞く、嘗て録して左右に呈すと。近世の貴公子、渠に似たる者、優曇鉢花の時に一たび現するが如きのみ。頃に出頭に在りて毎に公のために這般の話を説く、公の眼、目定動するを見るに、領覽得ること九分、九釐にして、只だ岡地の一下を欠くのみ。若し岡地一下了ることを得ば、儒即釋、釋即儒、僧即俗、俗即僧、凡即聖、聖即凡、我れ即爾、爾即我れ、天即地、地即天、波即水、水即波、酥酪、醍醐、攪して一味となし、餅盤

謂ふをいふ。自ら増上して法を慢じ人を慢するが故に。
 亦等は、永明の註心賦二。
 佛の慧命は眞の證悟の處に在りて相續す。
 千佛等とは、千手千眼大悲心陀羅尼經に出づ。
 通とは、許容の謂なり。即ち千佛も其の懺悔を許したまはじとなり。
 這般の説話とは、前の語を指す、即ち證悟の境界には、増上慢の人もなく、乃至佛の慧命を斷つ人もなく懺悔を通ずてふこともなきが故に。妄語とは、無用の語といふ意なり。
 第四段、居仁を養めて勸發す。
 夏とは春夏の夏なり、安居の夏にあらず。答とは大惠の答なり。
 證悟を得るなり。左右とは汪狀元を指す。
 公子とは公侯の子なり。渠と

釵釧、鎔して一金と成すこと、我れに在りて人に在らず、這箇の田地に到ることを得るも、我が指揮に由る。所謂、我れは法王たり、法に於て自在なりといふものなり、得失是非、焉んぞ罣礙あらん。是れ強ひて爲すにはあらず、法是くの如くなるが故なり。此箇の境界は無垢老子を除いて他人如何が信得及せん、縦ひ信得及すれども如何が手に入ることを得ん。左右已に信得及し、已に觀得見し、已に能く是れ邪是れ正を分別す。但だ未だ手に入ることを得ざるのみ、手に入ることを得る時、老少を分たす、智愚に在らず、梵位を將て直に凡庸に授くるが如し、更に階級次第あることなし。永嘉の所謂、一超直入如來地てふ是れなり、但だ相聽せ、決して相誤らず。

は居仁を指す。
 優曇鉢羅花の略、靈瑞、又は瑞應花と譯す、三千年にして一度、世に現じて希有の花を開くといふ。般泥洹經に云く、「圓淨提の内に尊樹玉あり、優曇鉢と名く、實あり花なし、若し金華生ぜば、世乃ち佛あり」と。
 第五段、悟後の圓融自在を述ぶ。山頭とは、蓋し紹興十二年師五十四歳より五十五歳までは丈室に據りて他處に移らず、故に山頭とは廣州の伊山或は花巖山ならん、徑山にあらずといへるも、案するに此の書は師五十六歳の作といふ、然らば或は徑山ならん、年譜を見よ。
 蓋し汪狀元、大惠を訪ふなり、本傳を案するに、諸方通路を絶す、然るに汪は之を懼らず、書を以て張九成を訪ひ、又廣

と衝と相隣れば大惠を訪ふなり。
 定動は、目のきよまつくをいふ。
 領覽は、領擡(うげとる)の義、覽は擡に通ずるなり。
 釵は韻會に、十釵を釵といひ、十毫を釵といふと。音は釵、牛尾なり、長毛なり。又十毫を釵といひ、十釵を分といふと。
 上に釋迦、孔子を引く故に今之を融會す。
 酥酪は、禪源諸詮の裴休の序の語なり、五味の喻は涅槃經の語なり、五味は醍醐、聖行品に出づ。
 我等は、法華二譬喻品に出づ。
 法は萬物の道理、即ち法性の徳用として爾りの意。
 第六段、張無垢を引いて激動す。
 手に入るは、信得をいふ。

某萬緣休罷して、日用只だ此の如し煩
念を軫すこと無れ。左右の分上、箇の甚
麼をか缺少するや、世界の上にて謂つべし
千足萬足すと。苟し能く此箇の門中に於て、翻
身一擲せば、何ぞ止だ腰に千萬貫を纏ふて鶴
に騎りて楊州に上るのみならんや。昔、楊文公
大年は三十歳にして、廣慧の璉公に見えて膺
に礙へる物を除去す、是れより已後朝廷に在る
も田里に居るも始終一節なりと。功名の爲に移
されず、富貴の爲に奪はれず、亦功名富貴を輕ん
するに意あるにも非ざりき。道の在る所、法是
くの如くなるが故なり。趙州云く、諸人は十
二時に使はる、老僧は十二時を使ひ得たりしと。
此の老の此の説は是れ強ひて爲すに非ず、亦法

- ① 汪は妙年自立の聰明有智の人なれば爾いふ。
- ② 楚位は、楚王の位、これ華嚴合論の語、合論には、楚を法の字に作る。凡庸は、至賤の稱。
- ③ 證道歌の語。
- ④ 相聽は聽信なり、心をゆるせの意、そなたをわろくはしなすまいとなり。
- ⑤ 此章の大意は、仁義五常、格物致知みな自性に在り、文字言句にあるに非ざることを示す、即ち大道唯一の旨を説くなり。
- ⑥ 第一段、汪狀元の問候に答へ、惣じて勸む。蓋し來書に衡州の調處にありと旨ふ故に、其不自由を想ふてなり。某とは、大惠自ら言ふ。
- ⑦ 軫念はきづかひの意、軫は動なり。
- ⑧ 翻身一擲とは、獅子の兒を試

みるなり、抛擲に似たり、故に擲といふ。此れ轉身の一路に喩ふ。
何ぞ止だ云云、之を言はんが爲に千足萬足といひしなり。詩學大成に云く、「小説に云く、客あり相從して各所志を言ふ、或は楊州の刺史たらんことを願ふと、或は貨財の多からんことを願ふ、或は鶴に騎つて上昇せんことを願ふと、其一人曰く、腰に十萬貫を纏ひ鶴に騎つて楊州に下らんと、三者を兼ねんと欲す云云。」野客叢書六に、前の三者を兼ねるの文を擧げて次に云く、「天下の美事、安んぞ兼得るの理あらんや、夏侯嘉は、丹竈をよみし、又知制誥たらんことを欲す、乃至二願竟に遂げずして卒す」と。蓋し兼取を容さず、既に官ならんと欲し、又仙たらんと欲するも安

是くの如くなるが故なり。大率學爲り道爲る一なり、而るに今の學者は往往に仁義禮智信を以て學と爲し、格物、忠恕、一以貫之の類を以て道と爲す、只管博謎子の如くに相似たり。又衆盲の象を摸つて各異端を説くが如し、釋の云はすや、「思惟の心を以て如來圓覺の境界を測度するは、螢火を取りて須彌山を燒かんとするが如し」と。生死禍福の際に臨んで、都て力を得ざることは、蓋し此れに由れり。楊子が云く、「學は性を修むる所以なり」と、性は即ち道なり。黃面老子云く、「性、無上道を成す」と。圭峯云く、「有義の事を作すは是れ惺悟の心なり、無義の事を作すは是れ狂亂の心なり、狂亂は情念に由れば、臨終に業に牽かる。惺悟は情に由らざれば臨終に能く業を轉

- ① んぞ是の理あらんや。今は轉身の一路を得ば三事成就するのみに非ずといふなり。
- ② 第二段、得道の人の境を轉ずること自在なるを謂ふ。楊文は會元十二に云く、「文公楊億居士、字は大年、壯に及んで才名を負ふて而未だ佛を知らず、一日、同僚に過ぎつて金剛經を讀むを見て、嘆じて且つ之を罪す、彼れ自若たり、公之を疑ふて曰く、是れ豈に孔孟の右に出でんやと、後に廣惠禪師に謁し、深く徹悟して其法を嗣ぐ、璉は首山念に嗣ぐ、云云。」普燈錄二十二、大惠普說、宋史列傳六十四、事文類聚前集四十六等を見よ。
- ③ 三十とは、大數を擧ぐるのみ、宋史大年傳を案するに、長和元年に生る、然らば此年は二十七歳ならん。廣惠は、普燈

二十三に出づ。宋史大年傳に云く、「心を釋典禪觀に留む」といふ是れなり。
④ 其本録に出づ。
⑤ 第三段、正しく道の一なることを述ぶ、之に四諦あり、初に總じて述ぶ。大率は略なり。學爲の爲の字を「なす」と點するは不可、學といひ、道といふの意にて、儒家の學道なり。
⑥ 今の學者は妄に分別して別異の思をなす、殊に知らず縱ひ説得分明なるも皆是れ空言なることを、但だ此一性を識得すれば仁義禮智信、皆此中にあり、五常は孟子公孫丑下篇、白虎通三等に出づ。
⑦ 格物は、大學の八條の一なり、朱子の註に曰く、「格は至なり、物は猶ほ事の如し、事物の理に窮め至り、其の極處に到らざる無からんを欲す」と。
⑧ 忠恕、一以貫之は、論語里仁

す、所謂義とは是れ義理の義にして仁義の義に非ず」と。而るに今看來れば、この老子も亦未だ虚空を析つて兩處と爲すことを免れず。

仁とは乃れ性の仁、義とは乃れ性の義、禮とは乃れ性の禮、智とは乃れ性の智、信とは乃れ性の信なり。義理の義といふも亦性なり。無義の事を作さば即ち此の性に背く、有義の事を作さば即ち此の性に順す。然も順と背とは人に在りて性には在らざるなり。仁義禮智信は性に在りて人に在らざるなり。人に賢愚あれども性には即ち無し、若し仁義禮智信は賢のみに在りて愚に在らずんば、則ち聖人の道に、揀擇取捨するとあらん。天の雨を降すが如き、地を擇んで而して下さんや。所以に云ふ、「仁義禮智信は性に在りて人に在らず、賢と愚と順と背と

は人に在りて性にあらす」と。楊子が所謂性を修むとは性も亦修むべからず、亦順背賢愚のみ。圭峯の所謂「惺悟と狂亂とは是れなり、趙州の所謂十二時を使ひ得ると十二時に使はるといふも是れなり。若し仁義禮智信の性の起處を識得せば、則ち格物、忠恕、一以貫之は、其の中に在り。肇法師云く、「能く天に、能く人なる者は豈に天人の能くする所ならんや」と。所以に云ふ、「學を爲め道を爲むるは一なり」と。大率聖人の教を設くることは名を求めず、功に伐らず、春の花木に行くが如し、此の性を具する者、時節因縁の到來すれば、各各相知らざれども、其の根性に随つて大小方圆長短、或は青、或は黄、或は紅、或は緑、或は臭、或は香、同時に發作す。春の能く大に能く小に、能く

篇。 博は解なり、誑は隱語なり、なぞなり、これ實體を見ざるを喩ふ。

象首等は、六度集經に云く、「鏡面王、群首を引いて象を摸せしむ、王、之に問うて曰く、汝等象を見しや、對へて曰く、我等俱に見たり、王曰く、象は何れの類か、足を持ちし者、對へて曰く、王よ象は漆桶の如しと、尾を持ちし者言く、象は掃帚の如しと、尾本を持ちし者言く、杖の如しと、腹を持ちし者言く、鼓の如しと、脇を持ちし者言く、壁の如しと、背を持ちし者言く、高坑の如しと、耳を持ちし者言く、箴の如しと、頭を持ちし者言く、魁の如しと、牙を持ちし者言く、角の如しと、鼻を持ちし者言く、大索の如しと、王前に於て共に説へて言く、

大王よ、象は我れ言ふところの如しと、時に王大に之を嘆じて曰く、譬なる哉譬なる哉、汝猶ほ見ず、今眼目なきが爲に諦觀すと謂ふ云云」と。又涅槃經獅子吼品、鏡面王經等に

出づ。 ① 所説の同じからざるをいふ、備書に謂ふ所の異端にあらす。 ② 釋等、上は儒家の事を述ぶ、故に今は備に對して釋を述ぶ。 ③ 思惟の心とは、上の佛誑子に應ず。 ④ 圓覺經二に出づ。 ⑤ 境に轉ぜらるるに依つて、力を得ざるなり。此れに由るとは、思惟測度をいふ。 ⑥ 第二節、譯解を破す。前漢書五十七、揚子法言一に出づ。 ⑦ 黃面等は、楞嚴經六文殊の偈なりと雖も、本の威神りを以ての故に佛と稱するも妨なし。性の全體元來無上道の故

に、縱ひ學といふも學の全體即ち性なる故に。 ⑧ 圭峰宗密の傳は傳燈十三。有義の義は義理をいふ。林間錄上、洪覺範智證傳上等に出づ。八句偈あり、近くは冠註に之を引けり。 ⑨ 頌を引くは、之を言はんが爲なり、上の頌には過なきも此の自註に過あり。義理の義とは之を道となし、仁義の義とは學となすなり。 ⑩ 道の老子とは圭峰を指す。亦とは楊子に亦するなり。 ⑪ 仁等とは、大惠の了解を述ぶ。義とは乃れ性の義の句肝要なり、正しく之を以て圭峯を破す、性の全體起つて義となる故に下に亦義理の義も亦性なりと云ふ、これ性と理と一物なり。 ⑫ 第三節、性に本と五常を具す、修して始めて得るにあらざる

ことを述ぶ。 ⑬ 取捨賢愚順背は人に在りて性の上にはなし、人人本來性に五常を具す。此性は賢に在つても増せず、愚に在つても減せず。 ⑭ 此道は遍きが故に。天云云は、此理なきをいふ。 ⑮ 所以云云は、判じ畢つて自ら上を結ぶ。 ⑯ 此は楊子の語を破して別に學なきことを明す。 ⑰ 修と不修とは人にあり性にあらす、上の所謂と同じ故に亦といふ。性に契當すれば、皆我家の作用なり。 ⑱ 惺悟は順賢、狂亂は愚背なり、此性は不増不減にして悟と狂とに干らすと。 ⑲ 十二時を使ひ得るは賢順惺悟なり、使はるるは愚背狂亂なり。是れとは、上に引き合はすなり。

方に能く圓に、能く長に能く短に、能く青に能く黄に、能く紅に能く綠に、能く臭に能く香ならしむるに非ず、此れ皆本有の性、縁に遇ふて發するのみ。百丈云く、「佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし、時節若し至りぬれば其の理自ら彰はる」と。又讓師、馬師に謂つて曰く、「汝が心地の法門を學ぶは種子を下すが如し、我が法要を説くことは彼の天澤に譬ふ、汝縁合ふが故に當に其の道を見るべし」と。所以に云ふ、聖人の教を説くこと名を求めず功に伐らず、只だ學者をして見性成道せしむるのみ。無垢老子の云く、「道、一芥に在れば則ち一芥重く、道、天下に在れば則ち天下重し」と、是れなり。左右嘗て無垢の堂に升つて而して未だ其の室に入ら

⑦性の起處とは、五常の起處と云ふに同じ、一往分てば仁義等の五常は用、性は體なり、而し別異のものにあらず、本と體用相即すれば今且く體の起處といふなり。
⑧筆論涅槃無名論に云く、是を以て至人は方に居しては方に、圓に止つては圓に、天に在つては天に、人に在つては人に、原夫れ能天能人は豈に天人の能くする所ならんや、果、天に非ず人に非ず、故に能く天に能く人なるのみ」と。維摩一、宗鏡錄二十三に説けり。此れ第四節、總結す。
⑨第四段、因縁感通の理を示し、傍に大道唯一を示す。
⑩教を説くるは、學者之れに依つて本有の性を開發せしめんが爲なり、名利の爲にあらずとなり。
⑪一法の人に與ふるなし、人人

性自ら開發するなり、故に伐らず。春等とは、聖人教を重る、學者之に依つて因縁熟して開發するに譬へ、名を求めざるを顯はす。
⑫此性とは、大小方圓乃至臭香を指す、法に合すれば大乘小乘の根性に喩ふなり、華嚴如來出現品に出づ。
⑬上の本性、用を發するをいふ、此れ學者の器に隨つて見性するを喩ふるなり。
⑭修行して始めて得るにあらず、學んで始めて得たるにあらず、故に本有といふ。宗匠、聖行等の縁に遇ふて本有の性を開發するのみとなり。
⑮百丈は傳燈九濁山章には涅槃經獅子吼品を引けり、今の文は傳燈七の大濁章の文なり。
⑯時節等とは、光陰空過する勿れの謂にして、時時刻刻をいふ。

す、其の表を見て而して未だ其の裏を見ず。百歳の光陰、只だ一刹那の間にあり、刹那の間に悟り去らば、如上の所説は皆實義に非ざるなり、然も既に悟り了らば以て實とするも亦我れに在り、以て實に非ずと爲すも亦我れに在り。水上の荷蘆の人の動著する無ければ、常に蕩蕩地に、觸著すれば便ち動じ、捺著すれば便ち轉轉地なるが如くならん。是れ強ひて爲すに非ず、亦法是くの如くなるが故なり。趙州の狗子無佛性の話において左右は人の賊を捕ふるに、已に窩盤する處を知れども但だ未だ捉著せざるが如きのみ。請ふ快かに精彩を著けよ、少しも間斷あることを得ざれ。時時に行住坐臥の處に向つて看よ、書史を讀む處、仁義禮智信を修むる處、尊長に侍奉する處、學者を提

⑫讓師は南嶽慧讓、馬祖道一なり、傳燈五に出づ。
⑬天澤とは、雨露の恵みなり。
⑭一芥重の重とは、厚重の義、一義に曰く、卑賤の人、道を得れば則ち一家一村、分に隨つて重く、天子宰相、道を得れば則ち天下國家重しとなり。これ上の大小方圓の證に引くも而も亦道の所在法是くの如きが故にの語に照應す。
⑮第五段、激發す。
⑯韻會に云く、爾雅に古は牛ばより已前之を虛にす之を堂といひ、牛ば已後之を實にし室となすし。
⑰一刹那とは今は悟時をいふ。
⑱水上等は碧巖四十三則にあり、巖頭の語。
⑲蕩蕩地は、廣平の貌、物に應じて自由なるの謂なり。
⑳禪の上に「緣」を加へ見よ。
㉑捺著は、手もて按ず(おす)な

り、おさへるなり。轉轉地は、圓轉滑達して凝滞せざるをいふ、轉は水を波む井上の車なり、轉はころがるなり、地は別に意味なし。
㉒第六段、提撕の法を示す。
㉓窩盤とは高は窟なり、藏なり、穴居なり、盤は、かがまる、やすんずなり、即ち賊の藏れ居る窟は知りなるもの意なり。
㉔看とは無字の語を看よとなり、車擔を放下するを喩ふ。
㉕何をか言はんとは、褒美の辭。
㉖名を失ふ、蓋し宗は姓、直圓は直秘關の官ならん、事物紀原四に、端拱元年五月詔して崇文院中堂に就いて秘關を建つ、是月に宋泌を以て秘關に直す、此れ蓋し官を置くの始なりしと。
㉗第一段、宗直圓の誤解を破す、初に來書を擧げ略破して工夫

誨する處、喫粥喫飯の處、之れを廝崖めよ、忽然として、布袋を打失せば、夫れ復た何をか言はん。

宗直閣に答ふ

示諭せらる、縁に隨つて日に差別の境界に涉れども、未だ嘗て佛法の中に在らずんばならず。又日用動容の間に於て、狗子無佛性の話を以て情塵を破除すと。若し是くの如きの工夫を作さば、恐らくは幸に未だ悟入することを得ざらん。請ふ、脚跟下に於て照顧せよ。差別の境界は甚麼の處よりか起る、動容周旋の間、如何してか狗子無佛性の話を以て情塵を破除するや、能く情塵を破除すと知る者は、又是れ阿誰ぞ。佛云はずや、「衆生顛倒して己に迷ふて物を逐ふ」と。物は本より自性なし、

- ① 破除すまで來書なり。
- ② 略破して工夫を示す、此れ認つて理會す。
- ③ 脚の上に「自己」の三字を加へ看よ、これ自己の當念に氣をつけて看よとなり。
- ④ 外境は皆妄念分別より生ずる故に、前に六祖、志道に示して云く、一切の迷人は五蘊和合を認めて云云に合せよ。
- ⑤ 周旋は前に出でたり。此れは情塵を破除すと云ふを責めんが爲に、之を引いて詰責す、元來破除すべき情塵なきが故に。情塵とは六塵の境に對する迷情なり。圓覺經六に曰く、「六塵の緣影は自心の相となす」と、此の情塵元來兎角の無體なるが如し、無體の者を破するの理なし、然るに妄に之を破除せんと欲するは謬なり。
- ⑥ 第二節、差別の境界なきことを示す。此は曇巖集の鏡清の語なり、而しもと楞嚴の文なるが故に佛云くといふ。
- ⑦ 己とは自性なり、物を逐ふの物とは外界の境界なり。其の萬境は因緣假有の法なれば、固定的の自らの體性なし、或は自心所現の境なれば、心外に境の實體なきをいふ。
- ⑧ 境界は、來書の差別の境に涉るの語を破す。本是れ一心法界、一一の境界皆是れ自心なり、法性なり、何れの處にか涉るべき差別の境あらんや。楞嚴に云く、「自心、自心を取れば非幻も幻法を成す」と、以て心得べし。
- ⑨ 第三節、正しく誤解を破す、宗直閣が最初に錯る故に二語矛盾す。
- ⑩ 此物を取り被物を捨つるの謂なり。

己に迷ふ者自ら之れを逐ふのみ。境界本より差別あることなし、己に迷ふ者自ら差別するのみ。既に日に差別の境界に涉るといひ、又佛法の中に在りといふ、既に佛法の中に在らば、則ち差別の境界に非じ、既に差別の境界の中に在らば、則ち佛法に非ざるべきなり。一を拈り一を放てなば、甚の了期かあらん。廣額屠兒は、涅槃會上に在りて屠刀を放下して立地に便ち成佛す、豈に許多の切切怛怛し來ること有らんや。日用縁に應ずる處、纔かに差別の境界に涉ることを覺せん時には但だ只だ差別の處に就いて、狗子無佛性の話を擧せよ。破除の想を作すことを用ひざれ、情塵の想を作すことを用ひざれ、差別の想を作すことを用ひざれ、佛法の想を作すことを用ひざれ。但だ只だ狗子無佛性の話を看よ、但だ只だ箇の無の字を擧して亦心を存して悟を等つことを用ひざれ。若し心を存して悟を等たば則ち境界も也た差別し、佛法も亦差別し、情塵も亦差別し、狗子無佛性の話も亦差別し、間斷の處も也た差別し、間斷なき處も也た差別し、情塵に惑亂せられて身心安樂ならざる處も也た差別し、能く許多の差別を知る底も亦差別ならん。若し此の病を除かんと要せば、但

- ① 今茲に之を引き合はす意は、廣額屠兒は大信根を看し、一言一句を説かず、立地に成佛して情塵を破する底の異解なかりし。今宗直閣も亦廣額の如くに異解を離れて直下に成佛せよとなり。
- ② 許多等は、上の言句に當る。上に辯する如し。
- ③ 第二段、工夫の用心を示す。想をなす處離れて妄想にして差別の境なればなり。
- ④ 第三段、若し用心錯るときは一切の境界現することを示す。安心をもつて取る所は皆差別となればなり。
- ⑤ 法に實を認め、物を差別するの病なり。
- ⑥ 差別の病を除くの方便なり。
- ⑦ 直圓、直下に信得及するを得ざるが故に之を引く。
- ⑧ 直圓が信得及せば、則ち直圓も亦是れ千佛の一數なり、若

だ只だ箇の無の字を看よ。但だ只だ廣額屠兒が屠刀を放下して、我れは是れ千佛の一數なりと云ふを看よ。是れ實か是れ虚か、若し虚實の商量を作さば、又差別の境界の上に打入し去らん。如じ一刀に兩段して、後を念ひ前を思ふことを得ざらんには、後を念ひ前を思はば、則ち又差別ならん。玄沙云く、此の事は限約すること得ず、心思の路絶す、莊嚴に因らず、本來眞靜なり、動用語笑、處に隨つて明了にして更に缺少することなし。今時の人は、箇の中の道理を悟らず、妄に自ら事に涉り塵に涉りて處處に染着し、頭頭に繫絆す。縦ひ悟るも則ち塵境紛紜として名相實ならず、便ち心を凝し念を斂め、事攝して空に歸せんと擬して、目を閉ち睛を藏め、念の起るこ

し然らざれば屠兒の境界も亦疑ふべきなり。

①直下に信得及して虚實の商量を取りて一刀兩段せよと。

②第四段、古語を引いて直闕が情塵を破除するてふ譯解を判詰す。玄沙録中、傳燈十八、會元七。

③此の事の字は大惠の加ふ所なり、本録を案するに、此の前に此の事を詳叙せり、故に大惠その意を採りて但だ此事といへるなり。限約とは、限量約定にして、此事は心を以て約定する能はざるを言ふ。

④心思等とは、意識を以て思ひ現はす能はざるをいふ。心緣ぞんと欲せば、虚自ら亡すと

いふ是れなり。華嚴五十二。⑤六祖口義に云く、清淨の佛土は無相無形なり、何物か能く莊嚴せんや、唯だ定惠の寶を以て假に莊嚴と名く。事理の

莊嚴に三あり、一に世間の佛土を莊嚴す、寺を造り經を寫し、布施し供養す、是れなり。

⑥二に身の佛土を莊嚴す、一切の人を見て善く恭敬を行ふ、是れなり。三に心の佛土を莊嚴す、心清ければ即ち佛土淨し、念念常に佛心を行す、是れなりと。併し今は此の如き有相の莊嚴を斥す、縱令有相の六度萬行を以て莊嚴するも他之を受けず、永嘉の所謂六度萬行體中に圓なりといふ、是れなり。傳燈十八玄沙章に云す。

⑦眞靜とは楞嚴の所謂寂滅現前の端的なり、靜闕共に脱却の處を眞靜といふ。

⑧缺少等とは、妙用を缺かざるをいふ、臨濟の云く、今日多般の用處、箇の什麼をか缺少す。⑨情らずとは、覺悟の情にして

とあるに隨つて旋旋に破除し、細想纔かに生ずれば則便ち過捺す。此くの如きの見解は即ち是れ空亡に落つる底の外道なり、魂不散底の死人なり。溟溟漠漠として覺することなく、知ることもし、耳を塞いで鈴を偷むごとく徒らに自ら人を欺誑するなり」と。左右の來書に云云するは、盡く是れ玄沙の所訶底の病にして、默照邪師の人を埋む底の坑子なり、知らずんばあるべからず。擧話の時都て許多の伎倆を作すことを用ひざれ、但だ行住坐臥の處、間斷せしむること勿れ、喜怒哀樂の處において、分別を生ずること莫れ、擧し來り擧し去り、看じ來り看じ去りて、理路没く滋味没うして、心頭熱鬧することを覺得せん時、便ち是れ當人放身命の處なり、記取せよ記取せよ。此くの

大悟の悟にあらず、軽く看よ。①事、塵とは、世間の有相の事、六塵の境に照着するをいふ。

②悟とは、此れ亦覺悟の悟にて淺き意味に取る、此處の文意は、事に涉り塵境紛紜たるも但だ名相のみにして無自性不實なりと覺知するも、已上は可なり、次下に過あり而も尙は靜闕に執着して便ち心を凝し云云となり。

③便已下は邪解なり、溟の字別本に疑の字になりたるは寫誤なり。

④事相は本來無自性にして空なり、然るに心力を勞して強ひて空に歸せしめんとす、謬れるの甚だしきなり。

⑤目等は法雲の、黒山の鬼窟といへる、是れなり。⑥意は心を以て心を破す了悟あることなしと、此れ直闕が情塵を破すといふを費む。

⑦過捺とは心を防ぎ押へて起るざらしむるなり。

⑧空亡云云は、楞嚴經十。⑨魂未だ散ぜざれども、死人に如同すの謂なり。

⑩溟は冥に通ず、昏蔽なり、溟は膜に通ず、また冥なり。

⑪耳を塞ぐの語、淮南子十三に出づ。今の意は、本性は元來無智無覺にあり、然るに邪人は強ひて本性を過捺して無智無覺となすとなり。

⑫云云とは、文選四十二に就曰く、辭多く略して載する能はざるの謂なり」と、止觀輔行に曰く、未だ盡さざるの貌」と、廣雅に云く、已下の文あること尙ほ雲の如しとの言なり」と。

⑬所訶等は、情塵を破除すの語を指す。

⑭臨濟曰く、溟溟たる黒暗の深坑、實に怖畏すべし」と、是れ

如きの境界に見ふて便ち退心すること莫れ、此の如きの境界、正に是れ成佛し作祖する底の消息なり。而るに、今默照邪師の輩、只だ無言無説を以て極則と爲し、喚んで、威音那畔の事と作し、亦喚んで空劫已前の事と作し、悟門あることを信せず、悟を以て誰となし、悟を以て第二頭と爲し、悟を以て方便の語と爲し、悟を以て接引の詞と爲す。此くの如きの徒は、人を説じ自ら説じ、人を誤り自ら誤る、亦知らずんばあるべからず。日用四威儀の中、差別の境界に涉つて力を省くことを覺得せん時、便ち是れ得力の處なり、得力の處、極めて力を省くべきなり。若し一毫毛の氣力を用ひて、支撐せば、定めて是れ邪法にして佛法に非ず、但だ長遠の心を辨取して、狗子無佛性の話を廝崖めよ。

- ① 第五段、重ねて工夫の法を示す。
- ② 下の曾宗丞に答ふる書等にも此の語出づ。語頭を擧し來るなり。
- ③ 放身命とは無明の命根斷つないふ。
- ④ 第六段、邪師を避けしむ。會元に、道安の所謂機かに言詮あらば、早く是れ今時に落つ等の語を見て、多く之を謬り認む。
- ⑤ 威音等は、これ但だ久遠の義を取る、即ち差別の境、言論の發現せざる已前の本然の極理なりとなせりとなり。而し威音王佛の名なりと言ふにあらず、それは名義集八、楞嚴六、法華七等に出づ。又事苑五に云く、威音王佛禪宗の不立文字之を教外別傳といふ、今宗匠、經を引くは道を明す所以なり。
- ⑥ 來書の語を擧げて言ふ。
- ⑦ 擧覺提撕を勞せざれども、水牯牛雲遊地の處なり。
- ⑧ 撐は、きをはるをいふ、撐は撐と同じ、今は強ひて事を絶たんと欲せばの意なり。
- ⑨ 圓覺經四、長流不退轉の心。
- ⑩ 心等とは、理路なく、心頓迷闕する處をいふ。

崖の來り崖め去つて、心之く所なくんば忽然として、睡夢の覺むるが如く、蓮華の開くが如く、雲を披いて日を見るが如くならん。恁麼の時に到りて、自然に一片と成らん。但だ日用七顛八倒する處、只だ箇の無の字を看よ。悟不悟、徹不徹を管すること莫れ、三世の諸佛も只だ是れ箇の無事の人なり、諸代の祖師も亦只だ是れ箇の無事の人なり。古徳云く、「但だ事の上にあて無事に通せば、見色聞聲も豊することを用ひず」と。又古徳云く、「愚人は境を除いて心を亡せず、智者は心を亡じて境を除かず」と。一切處に於て無心なれば、則ち種種差別の境界自ら無なり。而るに今の士大夫、多くは是れ急性に便ち禪を會せんと要して、經教の上及び祖師の言句の中に於て博量して、説き得て分曉

- ① 睡等の文、佛地經論一に出づ、又華嚴支談九に此文を釋せり。
- ② 佛法と平生差別の境界と融合し一片となると、これ眞の境界なり。
- ③ 第八段、境を除いて無事なることを説む。
- ④ 古徳とは、龍牙居道禪師なり、僧寶傳九。
- ⑤ 聲とは、見色聞聲を絶するをいふ、即ち百事紛紜たる上に於て是聞是れ什麼ぞと工夫をなし、六根を閉塞せずして、見んと要せば便ち見、聞かんを要すれば便ち聞き、放つて蕩蕩地ならしめて後に返照せよと學者を勸誡す、意は紛紛たる事上即して無事に通ぜよ、見色聞聲を絶すること莫れと。
- ⑥ 古徳は黃蘗或は黃能を指す、傳心法要、續燈十二黃龍章を
- ⑦ 第九段、驍進を説む。
- ⑧ 殊に等とは、如何なるが是れ佛、師家云く、人人具足、箇箇圓成す、然るに箇の什麼をか具足し、箇の什麼を圓成すると云ふことを知らずと此等の謂なり。
- ⑨ 老漢とは、大惠自ら稱す、其例は傳燈十六驍頭章に見ゆ。
- ⑩ 放とは放縱なり、鈍ならしむとは驍進急壯ならず、退歩して著實に工夫をなさしむるなり。
- ⑪ 鈍勝狀元とは、今は戲語をなす故にいふ、退歩工夫に喩ふ。科舉及第に種種の名ある中の一の名をいふにあらず。
- ⑫ 亦等とは、極めて好しといひなり。
- ⑬ 白を控くとは、意は世智才覺を止めて退歩工夫をなせとなり、眞箇の道理を會せずんば

ならんことを要す。殊に知らず、分曉の處、却つて是れ不分曉底の事なることを。若し箇の無の字を透得せば、分曉と不分曉と、人に問ふことを著ひされ。老漢、士大夫を教へて、放(は)に鈍(どん)ならしむることは、便(す)ち是(こ)れ這(しや)箇(こ)の道理(だうり)なり、鈍(どん)勝(しょう)の狀元(じやうげん)と作(な)らんこと、亦(また)惡(あ)からず。只(ただ)白(はく)を拈(ね)かんことを怕(おそ)るゝのみ。一笑(いちやう)。

李參政に答ふ 秦發

華嚴の重重の法界とは斷めて、虚語に非ずといふことを示論せらる。既に虚語に非ずといふ、必ず分付の處あらん、必ず自ら肯ふ處あらん。讀んで、此に至りて嗟歎すること之れを久しうす。士大夫、平昔の所學、死生禍福の際に臨んで、手足俱に露はるゝ者十に常に八九

益なし、故に及第に託して白を拈くといふ。拈白は曳白に同じ。排韵に云く、裴爽、唐の開元中に花萼樓下に試に就く、手に試紙を持ち竟に曰く、一字を成さずと、時人之を白を曳くといふ。文を成す能はざるを、白を曳くといふ。上の事迹の戯に依つて一笑といふ。此の章は逆順禍福の爲に顛倒せられざることを要すと示す。此の書短しと雖も言外に意あり、能く之を味ふべし、これ李參政荊州に在る時の往來の書なり、即ち李公が難に遇ひし時ならん。第一段、來書の語を述べて嗟歎す。華嚴等とは、華嚴宗に一心、理事に隨つて四法界を立つ、一に理法界、これは界とは性の義にて、平等一味の法性の理なり。二に事法界と

なり、其の行事を考ふるに、三家村裏の省事の漢の富貴も貧賤も其の心を汨ること能はざるには如かず。是を以て之れに較ぶれば

① 智は愚に如かず、貴は賤に如かざる者多し。何を以ての故に、生死禍福現前すれば、那时は偽を容るゝべからざるが故なり。② 大參相公の平昔の所學、已に行事に見る、禍福の際に臨んで、

實相なりとす。委しくは華嚴經及び其章疏を看よ。

① 李公、法界の理に證入して虚語に非ずといふにあらす、但だ華嚴廣大の法門、佛境界は定めて是の如し、佛の虚語に非ずと信得せるを叙するなり。② 分付とは師家、悟理を分つて學者に分與するの謂なり。即ち師家が學者の得悟の處の十全なるを檢して之を證明し印可するをいふ。今の文意は、證入の分あるに非ざれば、虚語に非ざることを知らず、虚語に非ざることを知らずんば、手に入ることを能はず、已に手に入ることを得れば、必ず自ら肯ふ處あり、若し實に自ら肯はば則ち嗟歎するに堪ふ。而し恐らくは證入の分ありて此くの如くなるにあらすして、妄心分別にあらすやと

なり。

⑦ 此に至りとは虚語に非ずの語を指す。嗟歎とは文面は讚美するに似たるも、實意は然らず、舊鈔に云く、此れ贊美に非ず、歎の義なり」と、可なり。二の必の字は、肯はざるの底意を表はす。

⑧ 士大夫等、第二段、士大夫の行業の學解に及ばざることを責む、此れ秦發を美めんが爲に、先づ世間の士を訶す、然し底意は秦發も亦世間の士大夫の中に在るか。平昔とは平日といふが如し。⑨ 手足等とは、隠し居たる手脚一時に露現すと、俗にぼるをだす、化けの皮がはげたの謂なり。⑩ 三家等は前に出づ、即ち尋常孔孟の書を學すと雖も、行解相應する者なり。其の心等とは、帝の力何ぞ加はらんかの謂

なり。

④ 之に較ぶとは、智愚貴賤を較量するなり。⑤ 智は學者士大夫を指す、愚は省事の漢、貴は在官の士大夫、賤は三家村裏を指す。⑥ 那时とは、其時の意なり、即ち生死禍福到來の時なり。偽を容るとは、士大夫は聖賢の道を得ざるが故に、平生の所説の如くならざるが故にとなり、容るべからずとは、受け入れずの意。

⑦ 第三段、徳を歎じ所得を審定す。⑧ 行事等、本傳に出づ。⑨ 禍福等、生死禍福の際に臨んで、道力いよいよ露るるを喻ふ。雜一阿含四十七。⑩ 此れは虚妄ならんことを疑はんことを恐れて決定の字を下す。⑪ 定めて等は、四法界を以て他

精金の火に入れば愈明耀を見すが如し。又決定して華嚴重重の法界、斷じて虚語に非ざることを知らば、則ち定めて他物の想を作さじ、其の餘の七顛八倒、或は逆、或は順、或は正、或は邪も亦他物に非ず。願くは公、常に此の觀を作せ、妙喜も亦其の中に在り、異日寂窶の濱に相從つて、當々來世の香火の因縁を結び、重々の法界を成就して以て其の事を實にせん、豈に小補ならんや。更に須らく箇の注脚を下すべし、即ち今這の一絡索も、切に忌む、寓言指物の會を作すことを。一笑。

曾宗丞に答ふ 天隱

左右、天資、道に近し、身心清淨にして他縁の障を作すなし、只だ這の一段も、誰人能く及ばん。又能く行住坐臥、老僧が示す所の省要の處を以て時々提撕せよ。一念相應して千了百當ならんことを説くことを休めよ。便ち是れ此の生に打して未だ徹せずとも、只だ恁麼に崖めば臘月三十日に到りて闍家老子も也た須らく倒退三千里して始めて得べし。何を以ての故に、念念般若の中に在りて異念なく間斷なきが爲の故に。只だ道家の流の如き、妄心を以て想を存するすら、日久しく月深うして尙ほ能く功を成じて地水火風の所使と爲らず、況んや全念般若の中に住するをや、臘月三十日に、豈に業を轉すること能はざらんや。而るに今の人、多くは是れ有所得の心を將つて道を學す、此れは是れ無妄想の中の眞の妄想なり。但だ放つて自在ならしめよ、然

の物との想をなさず、若し他物の想をなさば、如實に知らざるなり。其の餘とは、四法界の餘をいふ。實を言はば、一切諸法は四法界を出でざるも、此れは且く四法界を佛境界となしていふ。其中とは、その觀中なり。異日等、此の時大惠は衡州の謫居にあり、故に他日免教を蒙らば、則ち寂窶の濱に於て相見すべしとなり。年譜を案するに、紹興二十年に自便を蒙る、李參政は紹興十五年に荊州に謫せられ、居ること八年、同二十二年に赦されて歸へる。當々とは、當來は未來世のことなれば、當來世の當來世の謂にして、未來永久の意。香火の因縁とは、社を結んで佛事をなすの類にして、畢竟

法縁を結ぶをいふ。白氏文集七十聖善寺の記に出づ。成就とは、手に入れること。其の事等は、實の字が一篇の眼目なり、問書の虚語の虚の字に反す、意は我れ勤辨の手を垂れん、其時に到つて則ち看驗して其事を成就せんとなり。小補とは孟子盡心の上篇に云す。今の意は、若し華嚴の法界に證入せば、則ち是れ一佛の出世故に大補と謂つべしとなり。第五段、四法界の現成受用を示す。已上にて説法畢る、注脚とは下の即ち今已下を指す。寓は寄なり、莊子九に大鷗に寓言するの類なり、指物は物に託して之を言ふなり。即ち華嚴の四法界は生死禍福の際に現前し用ふる所にして、日に勝るが故に、誰人能く及ばんといふ。省要とは、省略簡要なり、千了百當は、行、住、坐、臥の上に徹悟するをいふ、此處は櫻りに唇皮を鼓する莫れとなり。臘月等とは、眼光將に地に落ちんとして未だ落ちざる時なり。念念等は、道力の業力に勝るなり。第二段、劣を引き勝を況顯して勸激す。妄心は迷妄の心、未だ徹悟せざる心なり、想とは觀念、若しくは念想分別なり、存とは心にかけるをいふ。地水等、之を四大といふ、地は堅性、水は濕性、火は煖性、風は動性なり、此の四は到る處に存在し、萬物に周遍する故に大と名く、而して世界の

も ① 太だ緊しくすることを得ざれ、太だ緩くすることを得ざれ、只だ恁麼に工夫を做さば限りなき心力を省かん。左右は生處は已に熟し、熟處は已に生なり、十二時中自然に心を枯して忘懷し、心を將て管帶することを著さざるべきなり。未だ透脱せずと雖も、諸魔外道、已に其の便を伺ふこと能はじ、亦自ら能く諸魔外道と

萬物は悉く此四者の和合に由りて成る、然らば萬有の四大原素なれば亦四大種といふ。且く吾人の身體に就いて見んか、骨、肉、髮、皮等は地の性、唾、涕、血等は水の性、機温は火の性、運動は風の性なり。然らば今この地水等を吾人の肉體と見て、肉感より起る情欲に支配せられざるをいふ。或は萬物も四大所成なれば、現象界の爲に使役せられずとの意と見るも可なり。② 般若は梵語、智慧と譯す、一切法の實相を照了する悟りの智慧なり、(他に解する如し)境に對して日夜に起る心念分別是れ何物ぞと究め明らか得ば、あらゆる妄念の其儘が般若に契ふ念念、般若に住すといふ。③ 繫縛の業を轉じて、解脱となすといふ。

④ 第三段、工夫の法を示す。沈等の差別を認むる心を有所得の心といふ。⑤ 目前の理路や心を用ひて悟をまつ等の心を放ち、管中を器開して拘はる所なからしめよとなり。⑥ 太等とは、四十二章經に、沙門、迦葉佛の遺教經を誦す云云とあり、披見せよ。⑦ 第四段、此人の見處の正しきことを示す。生處とは案するに無明煩惱なり、凡夫の吾人は未だ修養を積まず唯だ煩惱の支配の許に生き居れば生處といふ、熟處は既に修養を積み道力熟する故に熟處といふ。佛教にては煩惱即菩提(道と譯す)と説き、煩惱と菩提と其作用には逆順・異なるも、其體は一なれば、修養の力に由つて極の邊が轉じて甘味と

なるが如く、煩惱を轉じて菩提となすを得る故に、其處を生處は已に熟すといふ。既に菩提が増勝すれば、隨つて煩惱の間は自ら轉滅するを、熟處は已に生なりといふ。⑧ 管帶は前に辯する如し、要するに認帶すること、今は見聞の境に認着するなかれの意。⑨ 魔は梵語の魔羅の略、能奪命、擾亂などと譯す、人天寶鑑に解する如し。外道とは佛教以外の、宗教を佛教より名く。又佛教の唯心論なるに對して、心外に法を求むる教を外道といふ。今の文は管帶忘懷の邪師を指して諸魔外道といふ。⑩ 共一手等とは、實は彼の一手、一眼に共同せざるなり。⑪ 彼れが事とは、諸魔外道の事なり。是れ彼の惡見に同じて而も惡見に墮せず、正法を成

共一手にし、同一眼にして、彼れが事を成就して、而も其の數に墮せざるべきなり。公、一人のみ以て、此れを語るべきを除く、餘人は但だ公の行履の如くなる能はざるのみに非ず、亦未だ必ずしも信得及せじ。但だ話頭の上に於て看よ、看じ來り看じ去りて没巴鼻、没滋味にして、心頭悶することを覺得せん時、正に好し力を著くるに、切に忌む。他に隨ひ去ることを。只だ這の悶する處、便ち是れ成佛作祖し、天下の人の舌頭を坐斷する處なり、忽にすべからず、忽にすべからず。

王教授に答ふ 大授

識らず左右別後、日用如何んが工夫を做すや。若し是れ曾て理性の上に於て、滋味を得、經教の中に滋味を得、祖師の言句上に滋味を得、

就せしむるなり。① 此を語るとは、一手を共にし、一眼を同じて、他を救ふことを語るに足る公のみは別だとの意。② 第五段、提撕の法を示す。③ 他とは、心頭悶處なり、即ち此に於て因循し去る莫れとなり。④ 天下の人、他を詰難する能はざるをいふ。⑤ 王大授は、宋史に傳なし、何人なるか詳かならず。教授とは、事物紀原六に、唐の武徳の初、府郡にまた經學博士を置き、五經を以て教授することとを掌らしむ、乃至宋の神宗の元豐中に又諸の大郡府に始めて各教授一人を置き、諸生の教導を掌らしむ、大學博士の如し云云。此の書は前に相見して後に書を呈し幾日もなく、密首座、彼に到る時に答

書を附し去りしなり。大意は、心意識を破し、没滋味の處に向つて工夫をなさんことを示す。⑥ 第一段、工夫の去就を示す。⑦ 有所得なるが故に、これは小理味を嚙み出したるなり。⑧ 濟は事を遂ぐるなり、成なり、今は成就せざるをいふ。⑨ 他の是非を管する莫れとなり。⑩ 撈摸なきとは、没可把に同じ、手につかまへられぬ義なり。⑪ 行は行起にて作用をいふ、今は心識のはたらかぬ事なり。土木等とは、將に妄識轉じて智とならんとする處、即ち肉的生活が一轉して靈的生活に入らんとする刹那の境界なり。⑫ 第二段、世智辯聰を斥く。塗に觸るとは、猶ほ隨處といふが如し。

眼見耳聞の處に滋味を得、舉足動歩の處に滋味を得、心思意想的處に滋味を得ば、都て事を濟さざるなり。若し直下に休歇せんことを要せば、應に是れ從前の滋味を得る處、都て他を管すること莫く、却つて撈摸すべきなき處、滋味沒き處に去つて試に意を著けて看るべし。若し意を著け得ず、撈摸し得ず、轉た欄柄の把捉すべき没うして理路義路に意識都て行せざること、土木瓦石の如くに相似たることを覺得せん時、空に落ちんことを怕るゝこと莫れ。此れは是れ當人放身命の處なり、忽にすべからず、忽にすべからず。聰明靈利の人、多くは聰明の所障を被る、故を以て道眼開けずして塗に觸れて滯をなす。衆生無始時來、意識の爲に使はれ、生死に流浪して自在なることを得ざるなり。果して生死を出で、快活の漢と作らんことを欲せば、須らく是れ一刀兩段して意識の路頭を絶却せば、方に少分の相應あるべし。故に永嘉云く、「法財を損し功德を滅すること、は、茲の心意識に由らすといふこと莫し」と、豈に人を欺かんや。頃には、惠教を蒙る、其の中の種々の趣向は皆某が平昔所訶底の病なり、是れ般の事を知らば、腦後に颯在して且く没巴鼻の處、没撈摸の處、没滋味

- ① 證道歌の語。
- ② 第三段、博量下度を訶す。
- ③ 種種等とは、書中に説く所の……。
- ④ 是れ般の事とは、平昔所訶底の禪病を指す。
- ⑤ 博量は、分別量度なり、引證とは古書等を引き證明せんとすること。
- ⑥ 分付は、師家の印可證明なり、前辯の如し。
- ⑦ 引證等とは、明眼の宗匠は容さすとなり。
- ⑧ 欄欄等とは鬼窟裡の活計をいふ、前に出づ。碧巖四の垂示。
- ⑨ 生死岸頭は、華嚴經二十、十行品。玄沙錄中。
- ⑩ 第四段、非を知る人を引いて、來書を反詰す。普天とは毛詩注疏十三、終南山篇。
- ⑪ 禪師長老とは、邪師を指す。
- ⑫ 禪師長老以外の……。
- ⑬ 言に在らずとは、言ふに及ばずの意。

の處に向つて、試に工夫を做して看よ。僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無や。」州云く、「無」といふが如き、尋常聰明なる人は纔かに擧起するを聞いて、便ち心意識を以て領會し、博量し引證して、説き得て分付する處あらんことを要す。殊に知らず、引證を容さず、博量すること容さず、心意識を以て領會することを容さざることを。縦ひ引證し得、博量し得、領會し得るも、盡く是れ。獨體前情識邊の事なり、生死岸頭には定めて力を得ざるなり。而るに今普天の下、喚んで禪師長老と作す者も、會得し分曉する底は、左右の書中に寫し來る底の消息を出でざるのみ。其餘の種々の邪解は、言に在かず。密首座、某、渠と同じく平普融の會中に在りて相聚まる、盡く普融の要領を得て、渠自ら以て安樂なりとなす。然も造る所の者亦左右の書中の消息を出でず、今始めて非なるを知りて、別に箇の安樂の處を得たり、方に知る、某、秋毫も相欺くこと無きことを。今特に去りて相見せしむ、無事の時に試に渠をして吐露せしめて看よ、還つて左右の意に契得せんや否や。八十の翁々の場屋に入るがごとく、眞誠に是れ小兒の戲にあらざるなり。若し生死

到來せんときに力を得ずんば、縦ひ説き得て分曉に和會し得て下落あり、引證し得て差別なきも、盡く是れ鬼家の活計なり、都て我が一星事に干らす。禪門に種々差別の異解あり、唯だ法を識る者は懼る。大法明かならざる者は、往々に多くは病を以て藥なりとなす、知らずんばあるべからず。

劉侍郎に答ふ 季高

臘月三十日 已に到る、之れを日用に要すと示諭せらる。當に是くの如くに觀察せば、則ち世間の塵勞の心は自然に銷殞すべし。塵勞の心既に銷殞せば、則ち來日依前として孟春猶ほ寒からん。古徳云く、「佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし」と。乃ち是れ黃面老子出世成佛して、金剛座に坐し、

① 場屋とは、及第の試験場なり、宋史傳七十八歐陽修傳に出づ、或は場屋とは、歌舞場なりと。意は八十の老翁が舞臺に入りて舞ふは、眞誠にして容易にあらず、小兒の戯をなすが如きにあらずと、即ち眞誠にして是れ小兒の戯にあらずとの方語なりと。取捨は情に任す。
② 理に合して差別なきもとなり。鬼家等とは理味に愛着するをいふ。
③ 自己本分上に關らずとの意なり、一星事とは、予之を知らず。
④ 第六段、猥りに事縁を説くを破す。異解とは憶談なり。
⑤ 法は法令、法度なり、法を識らざる者は、愚瞶する所なし。これ世話を引用するなり。
⑥ 病等とは、誤つて祖師意を認むるをいふ。
⑦ 何人なるか未詳、宋史等に傳なし。紹興十八年、師六十歳の作。此の章は専ら觀念の邪正を示す。
⑧ 第一段、來書を拈じて直に示す。
⑨ 或は云く、已に到るまでが來書の語なり、已下は大惠の言なり、而して要とは、肝要の謂なりと。併し今の譯文の如くに解せば、臘月三十日とは世縁將に盡きんとする時なれば、實際に臨んで吞氣に情欲を充たさんと欲する者なく、心氣頗る緊張して正念に住するものなり、故に平生日用の上にも、其緊張眞面目を要すとなり。
⑩ 塵勞とは、環境に對して起す煩惱の異稱なり、塵は染汚の義、勞は勞役の義、貪瞋等の煩惱は吾人の本心を汚し、身心を驅役し勞苦せしむるが故

⑦ 魔軍を降伏し、法輪を轉じて衆生を度し、涅槃に入る底の時節なり。⑧ 解空の所謂臘月三十日の時節と異なく別なし。這裏に到りて只だ是くの如くに觀せよ。此の觀を以てする者を名けて正觀となす。此の觀に異なる者を名けて邪觀と爲す。邪正未だ分たざれば、未だ免れず、他の時節に隨つて遷變することを、時節に隨はざることを得んと要せば、但だ一時に放下著せよ。放つて放つべきなき處に到らば、此の語も亦受けず、依前として只だ是れ解空居士にして、更に是れ別人ならざるなり。

又

⑨ 吾が佛大聖人は能く一切の相を空じ萬法の智を成す、而れども即ち定業を滅すること能はず、況んや博地の凡夫をや。居士は既に

に名く。銷殞とは、銷散殞滅なり。
① 孟春猶ほ寒しとは、叢林の兩儀三禮の禮話なり、然し底意は悟了は未悟に同じきを謂ふ。孟春とは正月なり。
② 第二段、古徳を引いて證成す、此れ百丈和尚の語。
③ 來書の臘月三十日の語に因んで引く、時時刻刻なり。
④ 金剛座は、三千世界中の南瞻部洲にあり、菩薩成道の時の坐處にて代代の佛の成道も、釋尊も此上に坐して成道し給ひしなり、此座處は下金輪際より地上まで抜け出でたるものにて、平素は地下に隠れ、菩薩成道の時には地上に上がリ現はると傳ふ。俱舍論、同頌疏十一世間品に出づ。
⑤ 魔軍とは、第六天の魔王を始めとして世間總ての誘惑を外魔といひ、煩惱等を内魔といふ、内外の魔軍を皆降伏し斷破するをいふ。華嚴十八、妙法品に出づ。
⑥ 解空とは、劉侍郎の居士號なり、又杼山とも號す。
⑦ 正邪等、第三段、工夫の法を示す。邪の上「然れども」を加へ見よ。
⑧ 他の時節とは、十二時に使はるるなり。
⑨ 放は棄つるなり。
⑩ 此の語とは、上の放つべき處なきの語を指す。
⑪ 依前等とは醒め來りて猶ほ見る舊風光で、孟春猶ほ寒く、悟了すれば未悟の處に同じく、之を發すれば便ち喜び、之を毀れば便ち瞋る、更に別事なし、併し容易の看をなす莫れ。
⑫ 劉侍郎に答ふる第二書なり、此章の大意は、老宿の言を擧げて定業を滅するの法を示

是れ、箇の中の人なれば、想ふに亦常に是の三昧に入らん。昔、僧あり、一老宿に問ふ、「世界恁麼に熱す、未審し甚麼の處に向つてか回避せん。」老宿曰く、「鑊湯鑊炭裏に向つて回避せよ。」曰く、「只だ鑊湯鑊炭裏の如き作麼生か回避せん。」曰く、「衆苦到ること能はずし。願くは居士日用四威儀の中において、只だ、是くの如くに工

す。此書は侍郎の病中に寄す。第一段。山川草木人畜等の一切差別の法は、もと因縁生にして如幻の相なり、故に一切法は如幻虚妄なりと觀するを空すといふ。佛陀は既に一切相を空じ、隨つて妄分別を絶離し給ふが故に、本具の智徳一時に現成したまふ、故に萬法の智を成すといふ。定業とは、決定業の略、業とは吾人の身、口の上の作業動作のこと、決定とは改轉し難きをいふ、即ち宿世に善或は惡の業を造らば、今世に決定して苦樂の果報を受くべき業因をいふ。恰も竊盜をなせば、後日必ず牢獄の苦役を免る能はざるが如し。今の語は蓋房元珪禪師の語なり、謂く、「佛は萬法智を成したまふも、而も定業を減する能はず、佛は

能く群有の性を知り、億劫の事を窮めたまふも、而も無縁を化導する能はず、佛は能く無量の有情を度したまふも、而も衆生界を盡すこと能はず、是を三不能となす。定業も亦牢久ならず、無縁も亦是れ一期の衆生界増減なり云云。會元二、傳燈四に出づ。佛の定業とは、佛、阿羅漢等と城に入り食を乞ひたまふ時に、木棺、馬夢の難ありしを言ふ。法苑珠林七十三に興起行經を引けり、近くは冠註に引けり、披見せよ。今の文は病を慰むるなり、故に病中の事を引くを是となす。博地とは、三大部補註に云く、「廣大なり」と、凡夫、賢人、聖人等ある中に凡夫最も大多數を占むる故に博地の凡夫といふ。箇中の人とは、決定して佛を

信する中の人といふこと。是の三昧とは、疾病三昧なり、意は病を任持して、定業遠くべからざるを知るなりと。昔等、第二段、古則を授けて、劉季高が病を治せしむ。傳燈二十二、曹山章、碧巖四十二則、大惠録一。此は世界の熱に託して三界の熱を問ふ、故に三界の火宅の中に向つて回避せよと道ふ、然るに今は病苦に乘けて言ふなり。曰く等、傳燈録十八、了悟章に出づ。是の如しとは、鑊湯裏に向つて回避すの語を指す。此れは等、病に因んで藥方に喩へて言ふ。傳授とは、これ亦藥方に因んでいふ。一念等、一念相應の無漏智を藥に喩へて草湯といふ、此藥

夫を做せ、老宿の言をば、忽にすべからず、此れは是れ妙喜、効を得る底の藥方なり。居士と此の道相契ひ、此の心相知るに非ずんば、亦肯て容易に傳授せじ。只だ、一念相應の草湯を用て下せ、更に別湯を用て使はざれ。若し別湯を用て使はざ、人をして發狂せしめん、知らずんばあるべからず。一念相應草は他に求むることを用ひざれ、亦只だ居士の四威儀の中に在り、明處は明かなること日の如く、黑處は黑きこと奈の如し。若し手に信せて拈じ來つて本地の風光を以て、一照せば、錯る者あること無く、亦能く人を殺し、亦能く人を活す。故に佛祖常に此の藥を以て鑊湯鑊炭裏に向つて苦惱の衆生の生死大病を醫するを、大醫王と號す、識らず、居士還つて信得及するや否や。若

は能く一切の煩惱の病を治するなり。文意は此公案に相應せざれば、則ち此病を治する能はずとなり。下せとは飲み下すなり。羅胡野錄下、洪堂準の炮灸論に云云す。別湯とは、其の病に適せざる藥にて、分別計較草、憎愛草湯等を指す、使とは使用なり。人等とは、次下の嚴教授に答ふる書中に、「淨潔の處を戀ふこと莫れ、淨處は人をして困せしむ云云」と、是の意なり。知等とは、藥を服用せんと欲せば、先づ藥の適不適を辨別せよ、然らざれば藥却つて毒となるなり。第三段、性上の功徳を示す。四信心要上、正禪人に示す法語。一照とは、上の風光の光の字に因んでいふ、藥種の善惡を鑑定するをいふ。

此藥とは、眞藥なり、前の因縁に應ず、三界の火宅に入りて、衆生を度脱するをいふ。大醫王とは、維摩經佛國品に出づ。又涅槃經に云云す。居士等、意は四威儀の中に、一念相應の奇特ありや否やとなり。第四段、向上の本分を以て結ぶ。父子等とは、學得、修得に涉らざる底の秘方の謂なり。鑊湯裏に向へば早く是れ今時に墮す、緩かに對治道を云はば、早く是れ功勳の邊に墮す、此の如く氣字王の如くんば大惠亦下風に立つべし。これは伴位に立つて言ふなり。これ臨濟下坐し、麻谷に對して曰く、不審の類、又教中の文殊、維摩は皆古佛の應現にして釋尊の會座に來り、主位を退き伴位に立つ、是れ古佛

し我れに自ら 父子不傳の祕方ありて、鑊湯鐵炭裏に向つて回避する底の妙術を用ひずと言はば、卻つて居士の布施せんことを望む。

李郎中に答ふ 似表

士大夫の此の道を學する、聰明ならざることを患へざれ、太だ聰明なることを患へんのみ、知見なきことを患へず、知見太だ多きことを患ふるのみ。故に常に 識前の一步を行じて脚跟下の快活自在底の消息を味卻す。邪見の上なる者は見聞覺知を和會して自己となし、現量の境界を以て 心地の法門となす。下なる者は業識を弄して 門頭戸口を認め、兩片皮を箠て、玄と談じ妙と説く。甚だしき者は發狂して字數を勒せず、胡言漢語、東を指し西を畫するに至る。下々なる者は默照無言、空々

の家風なり、今大惠も亦伴位に下つて却つて居士の藥を布施せんことを望むなり。

李は傳なし、郎中は、唐の武德三年、尙書郎を改めて郎中となす。事物紀原五。此章は、識前没巴鼻の處に向つて工夫を做すことを示す。

第一段、聰明邪見解を破す。聰明とは知見多きをいふ。識は意識なり、識上に纒かに一念を生ずるを一步といふ、纒かに一念を生ずれば早く是れ妄見に墮す、故に自在を得る能はざるなり。

上なる者とは、邪見の淺きをいふ。見聞等とは、此法は見聞覺知を離れず、亦者箇の道理に即せず、一回、筋斗を打する者にあらすんば如何んが知得せん。故に眞言には阿字三密の觀を用ひ、天台は一念三千の觀を用ふ、一度退治道

に入り、功勳の邊を盡さずんば、自分の田地に到ること能はず、故に佛陀は六年苦行を積み、見性の規則を垂れたまふなり。

現量等は、分別を離へずして直觀したる境界てふこと。心地等とは、前に辨ぜり。即ち一回發明の者は當に然るべし、未だ發明せずして此くの如きの會をなさば、何ぞ其縛の凡夫と異ならん、若し爾らば佛教も祖録も亦無用とならん。無眼の長老にして、元來迷もなく悟もなしと云はば可憐愍者なり、碧巖六十二則の評に云す。

下とは邪見深き者。門頭戸口とは、内容なくして唯だ口ききだけに弄する言語といふ如し、即ち口に只だ玄妙の佛法を説き、以て玄妙となすを門頭戸口といふ、こ

寂々を以て鬼窟裏に在つて著到し、究竟の安樂を求めんとす。其餘の種々の邪解は、言に在らずして知りぬべし。冲密等歸るとき、賜ふ所の教を領す、之れを讀んで喜慰すること言ふべからず、更に復た世諦を叙して相酬酢せず、只だ左右の道に向つて勇猛なるの志を以て、便ち葛藤に入る。禪に徳山、臨濟の殊

なり、法眼、曹洞の異なりあることなし。但だ學者に 廣大決定の志なく、而して師家に亦廣大融通の法門なし。故に入る所に差別あり、究竟歸趣する處には、並に如許の差別あることなし。妙喜書に因つて徑要の處を指示せんことを欲すと示諭せらる、只だ這の徑要を指示せんことを求むる底の一念、早く是れ頭を刺し膠盆に入り了れり、更に雪上に向つて霜を加ふべ

れ前の志道の見解と一般なり。箠とは播揚ぐるなり、みをひる、米を揚げて糠を去るなり。

甚しき者とは、所謂野狐者流をいふ。發狂とは、狂者の如くに口に任せて叨叨たるをいふ。字數等とは、法式に拘らず撰りに偏頗の類を作る、こと、勅は鑿なり、刊る、抑る、刻むなり、字餘りの詩の如し。

東を指し等とは、模樣をなすをいふ。臨濟錄に云云、會元五、三平傳に出づ。

下下なる者とは、邪見深く至極卑劣の者、以は用の義。其餘云云とは、詳論するを待たずして知るべしとなり。

第二段、來書を發歎す。喜慰は、平安を聞いてなり。更已下は、來書の文體を贊美す、意は李似表の書は世間の寒暄等を發せず、但だ此事を

以て酬酢すとなり。酬酢とは書翰の往復をいふ。

葛藤とは李の來教を指す。禪等、第三段、究竟の法は意味なき、とを論す。蓋し李郎中の書中に五家七宗の事を問ひ來るが、此の文の意は、究竟の處は差別なきをいふ。永平正法眼藏四十八に宗旨を分つを詞す、楞伽經中にも之を悲む。徳山は宣靈禪師、龍潭崇信の法嗣なり。臨濟は、義玄禪師。法眼は文益禪師、人天眼目に出づ。曹洞は雲巖の法嗣洞山良价禪師、何れも傳燈十五に出づ。

決定の志なきが故に、纒かに一家の門庭を窺ふのみ、若し自他の深源底を究めば、則ち是れ歸家穩坐の處。眞に決定の志を具する者は、善財童子の如きはれなり。

第四段、徑要工夫の法を示す。

からす。然りと雖も問あり答へずんばあるべからず、請ふ左右都べて平昔或は自ら經教、話頭を看、或は人の舉覺し指示するに因つて、滋味を得て歡喜する處を將て、一時に放下し、依前として百不知百不會なること、三歳の孩兒の如くに相似て、性識有れども而も未だ行せず、卻つて未だ徑要を求むる底の一念子を起さざる前頭に向つて看よ。看來り看去りて轉た巴鼻を沒して方寸轉た寧、怙ならざることを覺得せん時、放緩することを得ざれ、這裏是れ千聖の頂額を坐斷する處なり。往往に學道の人、多くは這裏に向つて、打退し了る。左右若し信得及せば、只だ未だ徑要の指示を求むる一念を起さざる前に向つて看よ。看來り看去りて忽然として睡夢覺めなば是れ、差事ならず、此れは是れ妙喜平昔

- ⑦ 頭を刺す等は、頭を器益につき込むにて、言語に粘着して出過ぎる能はざるをいふ。圓悟心要下。
- ⑧ 雪上等、來問する已に不是なるに、我れ復た一言半句を垂れば、是れ雪上に霜を加ふなりと、是れ大惠の徑要指示の處なり。
- ⑨ 滋等は、上の經教等に係る、理味の喜ぶべき處あらば、皆是れ鬼家の活計なり。
- ⑩ これ三歳の孩兒の履行なり。
- ⑪ 怙は帖に同じ、安なり、靜なり。
- ⑫ 坐斷とは、佛祖齊しく下風の地位に立つをいふ。
- ⑬ 所謂郷念を生ずる底なり。
- ⑭ 第五段、實驗の處を説いて信心を固む。
- ⑮ 差は差異なり、意はこれ別物にあらず、睡覺る處即ち是れ悟處なりと。
- ⑯ 悟り來り看れば則ち我が本有の性、此に到つて悟といふ、愧づべし、大惠の面前一場の敗闕なり、所謂悟は是れ第二頭とは便ち此等の處なり。
- ⑰ 宋史に傳なし、年譜に彦嘉に作る、實文とは、事物紀原四英宗の治平の初、實文閣を以て仁宗の御書御製を藏す、即ち實文閣學士、直學士及び待制の官を置く云々と。此書は師六十歳の作、大意は鈍根にして而も妙悟を得るの捷徑を示す。
- ⑱ 第一段、鈍根の工夫を扶くることを述ぶ。
- ⑲ 颯とは勉なり、嚴氏の曰く、「力堪へざる所、心に欲せざる所、而も勉強して之を爲すを颯と曰ふ」云云。
- ⑳ 超悟は超脱妙悟なり。
- ㉑ 某とは、大惠なり、雙徑とは浙江名勝志一に杭州餘杭縣に

做す底の得力の工夫なり。公に決定の志あることを知る、故に泥を挖き水を帯びて、這の一場の敗闕を納る。此の外別に指示すべき無し、若し指示すべきことあらば、則ち徑要ならざるなり。

李實文に答ふ 茂嘉

向に示論を承く、性根昏鈍にして而も、勉して修持すれども、終に未だ超悟の方を得ずと。某、頃に雙徑に在りしとき、富季申が所問に答へき、正に此の間と同じ。能く昏鈍なりと知る者は、決定して昏鈍ならず、更に甚の處に向つてか超悟を求めんと欲するや。士大夫の此の道を學する卻つて、須らく昏鈍を借りて入るべし。若し昏鈍を執して自ら我れは分なしと謂はば、則ち昏鈍の魔の爲に攝せられん。蓋し平昔の知見多きは證悟を求むる

- ① 富季申に答ふる書は上巻の初の方、復た陳季任に答ふる書にも根根云々の事あり。
- ② これ早や主人公の様子なり、李實文を詰つて言ふなり。
- ③ 能く昏鈍と知る者は阿誰そと返照せば、是れ昏鈍を借つて入るなり。
- ④ 昏鈍と知る者を知らず、昏鈍を執るをいふ。
- ⑤ 善事の障碍となるを魔といふ。これ昏鈍魔につかれたる也。
- ⑥ 第二段、主人公を掲げ示す、李實文の意を推するに、彼れ以爲らく、利根の者は頓悟に當る、我れは昏鈍なる故に超悟を得ずと。故に道ふ、唯昏鈍の者、悟を得ざるのみにあらず、縱ひ利根聰明の者も求心あらば、證悟を得ずと、臨濟云く、「求心歇む處、便ち無事」と。
- ⑦ 自ら障碍をなすのみ。
- ⑧ 此は主人公の影手に着いて、主人公の字を出す、これ下に瑞巖を引かん爲の張本なり。
- ⑨ 瑞巖師彦禪師、これ巖頭大歳の法嗣なり、會元七。傳燈十七には、此話を載せず。
- ⑩ 諾は答なり、應なり。惺惺著とは、うつかりするなといふ義、惺の字の上に「乃ち曰く」を加へて看よ。
- ⑪ 勝様は、手本の義なり、上に「出づ」。
- ⑫ 設は設且なり、字彙に「未定の辭」と、或は義理會解をなさず、一切管せざるなり、此れめつたといふ義なり、杜詩の註に「設は徒なり」と。
- ⑬ 本命元辰は上に註す。生時の歳をいふ、本分を喻ふ。
- ⑭ 第三段、言語の述を拂ふて認著せざらしむ、此の上に「而れども」を加へ見よ。
- ⑮ 已むこと等は、不可言の事な

の心、前に在いて障を作すを以ての故に、自己の正知見、現前すること能はざるなり。此の障も亦外より來るに非ず、亦別事にも非ず、^①只だ是れ箇の能く昏鈍なりと知る底の主人公なるのみ。故に瑞巖和尚居常丈室の中に在りて自ら喚んで云く、「主人公。」又自ら應じて云く、「諾、惺惺著なれ。」又自ら應じて云く、「諾、他時後日人の謾を受くること莫れ。」又自ら應じて云く、「諾諾」と。古來幸に愆廢の勝様あり、^②謾に這裏に向つて提擲して看よ。是れ箇の甚麼と只だ這の提擲する底亦是れ別人ならず、只だ是れ這の能く昏鈍と知る者なるのみ。能く昏鈍なりと知る者亦是れ別人ならず。便ち是れ李實文が本命元辰なり。^③此れは是れ妙喜、病に應じて藥を與ふるなり。已むことを得ずして、略居士の爲に箇の歸家穩坐底の路頭を指すのみ。若し便ち死語を認定して眞箇喚んで本命元辰と作さば、則ち是れ識神を認めて自己と爲すなり。轉た沒交涉ならん矣。故に長沙和尚云く、「學道の人、眞を識らざることは只だ從前識神を認むるが爲なり、無量劫來生死の本なるを、痴人は喚んで本來人と作す」と。前に云ふ所の昏鈍を借りて入るといふ是なり。^④但だ只だ看よ、能く是

るも、多く錯り會するが故に已むことを得ずの意。
^①大惠自ら自語を指していふ、意は昏鈍を知る底を認めて、謬つて本命元辰と爲さんことを恐るるが故に。
^②識神は、對象に隨つて轉變する第六意識を指す。
^③長沙は、傳燈十に出づ。湖南長沙の景岑招賢禪師なり、南泉に嗣ぐ、初め兜率に住す、第一世なり、其後、居に定處なく、縁に徇ひ物を接す、請に隨つて說法す、故に時の衆、之を長沙和尚といふ、今の文は和尚の偶なり。
^④聰明を恃み早く領會を作す、是れを識神を認むといふなり。
^⑤第四段、正しく工夫を示す。
^⑥未だ悟らざる時の境界と大に異なる處を大笑せんとす。或は主人公の影子を亡じ、生

くの如きの昏鈍を知得する底は、畢竟是れ箇の甚麼ぞと。只だ這裏に向つて看よ、超悟を求むることを用ひざれ。看來り看去らば忽地に大笑し去らん、此の外に言ふべき者なし。

向侍郎に答ふ 伯恭

① 悟と未悟と、夢と覺と一なりといふ一段の因縁を示論せらる。黃面老子云く、「汝縁心を以て法を聽かば、此の法も亦縁なり」と。至人には夢なしと謂ふは有無の無には非ず、夢と非夢と一なるを謂ふのみ。是を以て之れを觀れば則ち佛の金鼓を夢み、高宗の説を得ることを夢み、孔子、兩楹に奠らるゝを夢みるも、亦夢と非夢との解を作すべからず。却り來りて世間を觀すれば猶ほ夢中の事の如しといふ、教の中に自ら明文あり。唯だ夢は

死の根本破れて本分の田地に證入する初一念の歡喜にて覺えず大笑せん。

① 向の傳は、宋史列傳百三十六、萬姓統譜百六、侍郎は戶部侍郎なり、事文新集十二。此章は寤寐恒一、夢覺不二の旨を示す。
^② 第一段、略して聖人に夢なきことを論ず。
^③ 縁心等とは、楞嚴經三の文意なり、其の註の意に云く、「此の如く問はる、我れ之を説くべし、然るに縁心を以て聞かば則ち此の法も亦縁となる、故に縁心を離れて看ば益あるべきなり」と。縁心とは縁念分別の心なり、凡夫は周遍計度して物に著する故に、猶ほ安心といふが如し。
^④ 至人に夢なしの語は、事文後集の夢部に文中子を引けり、而し今之を檢するに今の文中

子に此の文なし、此の語の出據未詳、列子三、莊子三、淮南子二、論語述而篇、智度論九十、等。

⑤ 夜夢は言ふに及ばず、非夢とは日用の事夢幻なりと觀する底の淺近の事にあらず、そは下に殊に知らず、全體是れ夢なりと云ふが故に、夢とはは夢夢及び日用の七類八倒を指す、非夢とは、下の夢を全うして是れ實等を指す、此の夢と非夢と一如なる處、是れ聖人に夢なき處。
^⑥ 佛の金鼓等は、金光明最勝王經の妙幢菩薩の事なり、新譯の經には信相菩薩に作る、既に菩薩の事なるに今佛といふは、下の孔子に對するが故に、今は能化に歸して佛といふ、或は佛とは佛子のいひなり、或は云く、佛經中にある故に佛といふなりと、何れも可な

乃ち全く妄想なり、^①而るに衆生、顛倒して日用目前の境界を以て、實となす、殊に知らず、全體是れ夢なることを。而も、^②其の中に於て復た虚妄の分別を生じ、^③想心と繫念と神識の紛飛するを以て實夢と爲す。殊に知らず、正に是れ夢中に夢を説くことを。顛倒の中の又顛倒なり。^④故に佛の大慈悲、老婆心切にして、悉く能く徧く、^⑤一切法界の諸の安立海の所有の微塵に入り、一一の塵中に於て、^⑥夢自在の法門を以て世界海微塵数の衆生の邪定に住する者を開悟せしめて、正定聚に入らしむ。^⑦此れ亦普く顛倒の衆生に示すに、^⑧目前實有底の境界を以て安立海と爲し、夢と非夢と悉く皆是れ、^⑨幻なることを悟らしむ。則ち夢を全うして是れ實、實を全うして是れ夢、取るべからず、

り。經に云く、「此菩薩、佛の説法を聞き、後に夢に金鼓の目輪の如きを見る、婆羅門之を撃つに其の音聲、種種の説法をなす甚だ殊勝なり、覺めて後に佛に詣でて白す、佛贊歎じたまひ(乃至)言く善哉云云善男子、彼が夢みる所の如く、金鼓、聲を出し、如來を贊歎す、眞實の功德並に懺悔の法、若し聞くある者は福を獲ること甚だ多く云云」と、甚だ長し、往見せよ。
⑥高宗等は、史記殷本紀に出づ。又尙書註疏十說命に出づ。説とは高宗が夢に逢ひし聖人の名なり。近くは冠註に引けり。
⑦孔子等とは、禮記註疏七檀弓に出づ。史記四十七、孔子世家は禮記の説と少し異なり。
⑧夢と非夢と一なるが故に、次の文に捨つべからず、取るべからずといふ。
⑨第二段、正しく凡夫の夢覺を分つことを斥く、中が第一節教を引いて證す。此文は楞嚴經六文殊の偈なり。世間とは凡夫日用の目前の境界なり。
⑩夢中等は、夢覺一如と悟り了れば、則ち夢中の事の如しとなり。
⑪而るに等、第二節、正しく夢覺を分つを破す。
⑫實と爲すとは、是れ各自の所見に隨つて異を生ず。文意は凡夫は夜夢のみを夢とし、日用を實となす、聖人は十界の依正悉く自心所現にして、心外に實法なく全く如夢如幻とす、幻夢となすといふも虚無といふにあらず、強ひて言はば、心境一如の絶待的夢幻の境なるをいふ。
⑬其中とは、凡夫の世間日夜の夢中なり。
⑭想の心所にて、境の相貌を取

捨つべからず、^⑮至人に夢なしといふの義、是くの如くなるのみ。^⑯來書に問はるること、^⑰乃ち是れ某、三十六歳の時に疑ひし所なり、^⑱之を讀んで覺えず痒處を抓著するがごとし。^⑲亦嘗て此を以て闍悟先師に問ふに、^⑳但だ手を以て指して曰く、「住みね住みね、妄想することを休めよ妄想することを休めよ」と。某復た曰く、「某が未だ睡著せざる時の如き、佛の讚したまふ所の者をば依つて之れを行じ、佛の訶したまふ所の者をば敢て違犯せず、從前師に依り及び自ら工夫を做して、^㉑零碎に得る所の者、^㉒惺々たる時は都て、^㉓受用することを得、^㉔牀に上りて半惺半覺の時に及んでは、^㉕已に主宰と作ること得ず、^㉖夢に金寶を得と見るときは、^㉗則ち夢中に歡喜すること限りなし、^㉘夢に人に刀杖を以て相通らるる

る精神作用をいふ、念とは明記不忘の義とて、心の記憶作用をいふ、所縁の境に念を繋ける注意をいふ。神識は獨頭の意識にて特に夢中の意識をいふ。是等は衆生の夜夢の状態を形容するなり。
⑲第三段、佛の説教に約して廣く夢なきことを明すに二節あり、初に華嚴經を引く。
⑳悉等は、華嚴六、如來現相品。一切法界は、十方世界といふが如し、強ひて對せば事法界、事事無碍法界に當る。安立海とは、安は安置なり、立は建立なり、海とは喩にて、其深廣涯なきことを贊歎す、即ち山河草木、人畜等の諸世界に入るをいふ。華嚴疏抄六、又は七、瑜伽五十八。
㉑夢自在の法門とは是れ法門の名、即ち十種の法門の中の隨一なり、故に今解して云く、
①精神作用をいふ、念とは明記不忘の義とて、心の記憶作用をいふ、所縁の境に念を繋ける注意をいふ。神識は獨頭の意識にて特に夢中の意識をいふ。是等は衆生の夜夢の状態を形容するなり。
②第三段、佛の説教に約して廣く夢なきことを明すに二節あり、初に華嚴經を引く。
③悉等は、華嚴六、如來現相品。一切法界は、十方世界といふが如し、強ひて對せば事法界、事事無碍法界に當る。安立海とは、安は安置なり、立は建立なり、海とは喩にて、其深廣涯なきことを贊歎す、即ち山河草木、人畜等の諸世界に入るをいふ。華嚴疏抄六、又は七、瑜伽五十八。
④夢自在の法門とは是れ法門の名、即ち十種の法門の中の隨一なり、故に今解して云く、

ことを被り、及び諸の惡境界を見る時は則ち夢中に怖怖し惶恐す。自ら念ふ此の身尙ほ存するすら、只だ是れ睡著すれば已に主宰と作ること得ず、況んや地水火風分散して、衆苦熾然たらんをや。如何ぞ 回換せざることを得んや、這裏に到りて方に始めて著忙す」と。先師又曰く、「汝が説く底の許多の妄想絶する時を待ちて汝自ら 寤寐恒一の處に到らん」と。初め聞きしとき亦未だ之を信せず、毎日我れ自ら顧みるに、寤と寐と分明に兩段と作る、如何ぞ敢て大口を開いて禪を説かんや。佛の寤寐恒一と説きたまふは是れ 妄語なりと除非するときは、則ち我が此の病除くことを須ひす、佛語果して人を欺かすんば、乃ち是れ我れ自ら未だ了ぜざるなり。後に因に先師の諸佛出身の處、^① 薰

衆とは、證悟し得ざるもの、即ち十信已前の凡夫の因果を信ぜざる者、三に不定衆とは、二者の中間に在りて、縁あれば證悟せざるもの、即ち十信位の人を指す。今は邪定の人をも悉く導きて正定衆に入らしむと、況んや不定の者に於てをや。
② 第二節、上の文を解釋す。
③ 幻とは、夢と實と俱に無自性にて體一互融なれば、有無の解をなさざる故に幻といふ、若し幻を空無となすときは法に違すると同時に下の文に應ぜず。
④ 此は前の語を結ぶなり、夢と非夢と一如にて實を全うするの夢なれば、佛に夢あるを得るなり。
⑤ 第四段、自らの昔の疑の來書の疑と同じきことを述ぶ。三

節あり、初に未だ悟らざる時は、夢覺をことなすを述ぶ。
⑥ 之れとは來書を指す。
⑦ 亦は向侍郎に亦す、公は我れに問ふ、我亦圓悟に問ひしとなり。
⑧ 零碎とは零は落なり、凡そ數の零餘なり、碎は細破なり、即ち微細の義なり。
⑨ 眞箇の受用にあらず。
⑩ 回換とは、病苦等に牽き將ち去らるるをいふ。
⑪ これ圓悟に非ずんば如何んぞ此くの如き動絶の手を下さんや。
⑫ 首楞嚴經第十に云云す、其處に云く、「想陰若し存すれば、寐寤めたるときは像を想ひ、寐れば即ち夢を成す、今想陰盡れば即ち夢あることなし、想は是れ夢の元なるを以ての故に、寤寐一なれば、寤寐ありと雖も、無想を以ての故に寤

風自南來といふを擧するを聞いて、忽然として礙膺の物を去却す。方に知る 黃面老子の説きたまふ所は、是れ 眞語、實語、如語、不誑語、不妄語にして、人を欺かざることを。眞の大慈悲なり、粉身沒命するとも報すべからず、礙膺の物既に除いて、方に知る、夢時便ち是れ寤時底、寤時便ち是れ夢時底にして、佛の寤寐恒一と言ふことを。方に始めて自ら知る、這般の道理拈出して人に呈似すること得ず、人に説與すること得ず、夢中の境界の取ること得ず、捨つること得ざるが如くなることを。妙喜に未悟已前と已悟の後に於て異なりありや異なりなしやと問ふことを承りて、覺えず實に依つて 供通す。子細に來教を讀むに字字至誠なり、是れ禪を問ふにもあらず亦詰ら見るにも非ず、昔時所疑の處を以て吐露することを免れず。願くは居士試に老龐が語を將て讀く提撕せよ。但だ願くは諸の所有を空せよ、切に諸の所無を實とすること勿れと。先づ目前日用の境界を以て夢の會を作し了つて、然して後却つて夢中底を將て目前に移し來らば、則ち佛の金鼓と、高宗の説を得ると、孔子の兩楹に奠られしと、決して是れ夢ならじ。

亦寐の如く、寐も亦寤の如し、故に恒一といふしと。
⑬ 是れ假設の言なり、寤寐元來別物なりとせばの意。除は拂除なり。
⑭ 後とは師の年譜に宣和七年、師三十七歳の四月、天寧に挂搭す。案するに、禮侍者の爲の普説に云云す。
⑮ 薰風自南來とは、舊唐書列傳百十五。
⑯ 黃面等とは、上の華嚴の説を指す。
⑰ 眞語等は金剛經の語。
⑱ 第二節、悟りて後、夢覺の一如なることを敘す。
⑲ 第三節、供通の意を結す。
⑳ 供通とは、白狀の謂なり。
㉑ 第五段、夢覺一如の工夫を示して前書を結ぶ。
㉒ 全く自心現なるが故に。
㉓ 全夢是れ實なるが故に。
㉔ 陳の傳は宋史には無し、萬姓

此の道の寂寥たること今日より出でたるは無し、邪師の説法、悪又聚の如くにして、各各自ら謂ふ無上道を得と、咸く邪説を唱へて凡愚を幻惑す。故に某、毎々齒を此に切り身命を惜まず、之れを扶持せんと欲す。光明の種子をして吾家の本分の事あることを知りて、邪見の網中に墮せざらしめんとす。萬一に衆生界中に佛種をして不斷ならしむることを得ば、亦虚しく、黃面老子の覆蔭を受けざるなり。所謂此の深心を將つて塵刹に奉ず、是れ則ち名けて佛恩を報すと爲すといふものならん。然れども亦是れ時を知らず、力を量らざるの一事なり。左右は既に是れ箇の中の人なり、得て箇の中の事を説かざることを得ざらん。

筆に因りて覺えず此に及ぶのみ。

林判院に答ふ 少 瞻

一語を求めて道を信する人と工夫を做さんと示諭せらる。既に圓覺經を見るに經中豈に止だ一語のみならんや、諸の大菩薩各自の所疑の處に隨つて問を發す、世尊、所疑に據りて一々分明に剖析す、大段分曉なり。前に給する所の話頭も亦其の中に在り。經に云く、「一切時に居して妄念を起さざれ、諸の妄心に於て亦息滅せざれ、妄想の境に住して了知を加へざれ、此の語最了知なきに於て眞實を辨せず」と。老漢、昔雲門庵に居せし時、嘗て之れを頌して曰く、「荷葉團々として鏡よりも團く、菱角尖々として錐よりも尖し、風柳絮を吹いて毛毬走り、雨梨花を打して蛺蝶飛ぶ」

統譜十八、張九成の友人なり。師五十七歳の作、大意は邪師の説法を憂ひて述懐するなり。
 ① 第一段、邪説の盛なることを悲歎す。
 ② 寂寥とは楚辭九の註に云く、「寂は人聲なきなり、寥は空虚なり」と、出は出過なり。
 ③ 悪又聚は、楞嚴一に出づ。註に云く、「悪又は梵語、線貫珠と譯す云云」と、應法師云く、「悪又は樹の名、其子の形、没食子の如し、彼國は多く聚めて之を賣る、此方の仁杏の如し、故に以て喩となす」と。今は邪師の説法連續繁多なるをいふ。名義集三。
 ④ 是れ楞嚴經十に依つて言ふ。
 ⑤ 幻術師が愚人を迷はすが如くに。
 ⑥ 第二段、邪を破し佛祖の恩を報す。
 ⑦ 史記七十、張儀の傳に出づ。
 ⑧ 此は衆生を指す、光明とは般若の智光なり、一切衆生は本來一切種智を具するが故に。即ち種子の輩なり。
 ⑨ 萬一とは、萬人中の一人を濟度するをいふ、此れ人を得ることの極めて難きをいふなり。
 ⑩ 佛種は、止觀輔行一之一、佛祖統紀。
 ⑪ 菩薩本行經中、佛藏經四、圓圓經下。
 ⑫ 楞嚴經三、同釋要鈔四に云く、深心とは、上求下化の悲智の二心は先づ妙覺性を悟りしより生ずる所、故に深心と名づく。塵刹とは、清涼の釋に云く、「心作佛し、一心も佛ならざるなく、念念成道す、一塵として佛國ならざるなし云云」と。奉とは捧なり、此の心を微塵の刹土に捧するなり。

上の説に轉ず、大惠の謙退なり、配流の人なるが故に。

① 力を量らずとは、邪師、天下に滿つるが故に。

② 第三段、七を結す。

③ 林は宋史に傳なし、判院は知判院、事物紀原四に云く、「知は某官を知るをいひ、判は某官を判するをいふ云云。此書は師五十七歳の作なり。此章は荷葉團團の頌を骨目とす。

④ 第一段、法語を求むる意に答ふ、二節あり、初に先づ圓覺に譲る。道を信する人とは原文は信道人と書せり、故に或説に云く、林少瞻の妻なりと、又云く、信實道樂の人の意と、或は之れ人名にして、東山外集に云ふ所の、淨信道人の事か、或は云く、尼を稱して道人といふと、未詳。今は道を信する諸人の意にて國譯した

⑦ 圓覺經中の十二菩薩。

⑧ 橋は拆と通するが、拆は擊なり、開なり。

⑨ 給はあてがふの義。

⑩ 第二節、經を拈じて頌することを示す、圓覺經中、清淨菩薩の文。
 ⑪ 諸等の註に云く、若し妄を捨てんことを求むるは、猶ほ影を棄てて形を勞するが如し、若し眞を滅して妄を存せば、聲を掲げて響を止むるに似たり。

⑫ 妄想等の註に云く、境は心より現す、元是れ自心なり、若し了知を加へば即ち迷現す、乃至論に云く、心、心を見ず、但だ情を生ぜざれば自然に鏡の物を照すが如し、且つ心體自ら知覺す、何ぞ了知を加へん。知の上に知を起すを加ふといふ。

と。但だ此の頌を將つて上面に放在し、卻つて經文を將つて下面に移し來らば、頌卻つて是れ經、經卻つて是れ頌ならん。試に此くの如く工夫を倣して看よ、悟と不悟とを管すること莫れ。②心頭熱忙することを休めよ、亦、放緩すべからず。③調絃の法の緊緩其の所を得れば、則ち曲調自ら成るが如し。④歸り去つて但だ沖が輩と相親しうして、遽に相琢磨せよ、道業辨せざる者あること無けん。祝祝。

黃知縣に答ふ 子餘

書を收めてより、此の一大事因縁の爲に甚だ力むることを知れり。大丈夫の漢、所作所爲當に是くの如くなるべきのみ。無常迅速にして生死事大なり、一日を過し了れば則ち一日の好事を銷し了る、畏るべし、畏るべし。①左

- ①此語等とは、了知を加へされの一句を指す、此語は提擧して力を得やすきが故に、此一句義路明白の故に、此に於て普語して知らしむるなり。
- ②了知等の註に云く、能知既に寂す、即ち眞實知なり、眞實即ち知なり、誰か眞實を知る、眼自ら見ざるが如し云云。宗鏡錄八十二に此四句を解す。
- ③師五十五歳の時、海昏の雲門庵に在りて頌古百則を作る、竹庵珪禪師の跋あり、古尊宿錄には百則の頌古のみを載す。
- ④荷等、聯燈二十一夾山章に出づ。八方珠玉に、「遠見山見色、近聞水無聲」と、又佛海拈に「芍藥花開菩薩面、櫻櫻葉撒夜叉頭」と。これ鏡に似て鏡に非ず、鏡に似て鏡に非ずといふ。下の二句亦此に同じ。
- ⑤第二段、工夫の法を示す。
- ⑥急悟せんと要する故に熱忙す。
- ⑦大品に云く、「急に道心を起す、是れ菩薩の魔事、急に道心を起さざれば、是れ菩薩の魔事の故に」と。
- ⑧四十二章經。
- ⑨第三段、同參の士を求めしむ。沖とは隆彦沖に非ず、案するに、普燈十八に大惠法嗣に福州の慶成沖禪あり、蓋し此を指す。
- ⑩琢磨とは、大學傳に云く、「切るが如く、磋くが如し」とは學を道ふなり、琢するが如く、磨するが如しとは自修するなり」と、詩經衛風淇澳之篇に云云。
- ⑪黃の傳、宋史になし、知縣は事物紀原六。此章は、専ら工夫の要徑を示す。
- ⑫第一段、無常を示して向道を教す。

右、春秋、鼎に盛なり、正に是れ作業、好惡を識らざる時、能く是の心を回して無上菩提を學すべし、此れは是れ世界の上に第一等、容れ難き靈利の漢なり。五濁界中に、甚麼の奇特の事か此の段の因縁の如きに過ぎたる有らん。色力強健なるときを趁ふて、早く頭を回らすことは、老に臨んで頭を回らすに、比するよりは其の力量の勝ること百千萬億倍せん。老漢、私かに左右の爲に喜ぶ。此れより前に寫し去る法語を會て時々に觀看するや否や、第一に記取すべきは、心を起し念を動かし、肚裏熱忙して急に悟らんと要することを得ざれば、纔かに此の念を作さば、則ち此の念に路頭を塞斷せらるゝことを被つて、永く得悟すること能はじ。祖師云く、「之れを執して度を失すれば、必ず邪路に入る、之れを放つて自然なれば體去住なし」と。此れ乃ち祖師、心を吐き膽を吐いて人の爲にする處なり。但だ日用、力を費す處をば倣すことを要すること莫れ、此れ箇の門中、力を費すことを容れず。老漢常に人の爲に此の話を説く、力を得る處、乃ち是れ力を省く處なり、力を省く處は乃ち是れ得力の處なり」と。若し一念希望の心を起して悟入の處を求めなば大いに人の自家堂屋の裏に

- ①生死等は、增註永嘉章、莊子二德充符の季說註に、「天堂に升り地獄に入らんも知るべからず故に」と。
- ②此の目已に過ぎぬれば、今亦隨つて減す、少水の魚の如し、何の樂みかあらん、一息來らざれば黃泉流劫に。
- ③第二段、此の道は盛年の時に學ぶべきを論ず。
- ④鼎盛は、前漢書四十八、賈誼傳。
- ⑤容は至大なり、靈利の漢故に措置する所なきなり。史記四十七。
- ⑥早等は老少を況景す。
- ⑦比の字、正保版に以に作るは誤、比を正となす。
- ⑧心の裏に思ふを私かといふ。
- ⑨第三段、急に悟を求むることを説む、下二節あり、初に語を引いて示す。
- ⑩祖師とは三祖信心の銘の語。

在りて坐して、卻つて他人に問うて住處を覓むるに似て異なること無し。但だ生死の兩字を把りて、鼻尖兒上に貼在して忘るることを要せず。時々話頭を提撕せよ、提し來り提し去らば、生處は自ら熟し熟處は自ら生ならん。此の語已に寫して、空想道人の書中に在り、請ふ、此の書と同じく互換して一看せよ、便ち了得せん。

嚴教授に答ふ 子痴

眞實に不疑の地に到れる者は、渾鋼打就し、生鐵鑄成すが如し。直饒千聖出頭し來つて無量殊勝の境界を現するも、これを見ること亦見ざるが如くならん。況んや此に於て奇特殊勝の道理を作さんや。昔藥山坐禪する次で、石頭問ふ、「子、這裏に在りて甚麼をか作す。」

これは一回省力ある人に就いて言ふ、之とは得力の處をいふ。度とは急緩中を得るをいふ。

① 之とは、得力なり、臨濟曰く、「之を求むれば轉た遠く、求めざれば却つて目前に在り」と。

② 第二節、力を費して悟らんとを望むを諷む。力を費すとは、前の劉通判に答ふる第二書に今此の道を學する者云云と。

② 此にとは不疑の地を指す。奇特等とは、天花亂墜、動地放光等の類にして、此れ順道法愛の境なり。

③ 但だ等、第四段、提撕を勸む。貼は粘置なり。

③ 第二段、奇特の會を作さざる人を引いて證とす。傳燈十四、續燈も皆藥山は石頭に嗣ぐといふ、虎關の五家辨には馬祖に嗣ぐといへり。

④ 空想道人は、大惠法語下に空相道人に示すの法語あり、その註に「黃道判宅なり」と、蓋し黃知縣の慈母なり。

④ 眞の無生法を得たる故に。一箇は上の無量に應じ、閑坐は、殊勝に應ず、即ち無量の殊勝の道理を認む。

⑤ 祖師の巴鼻を失するをいふ、前と別なり。

⑤ 一切處未だ透得せざれば則ち跟山鐵壁。差別界の一切法の其儘自性なり即空なりと。

⑥ 第二節、奇特支妙の處を認むる邪師を彼す。

⑥ 隱々は、分明ならざるをいふ、五位顯談に云く、「隱々猶ほ昏日の熾を懐く」と。

⑦ 點は落著の義。

⑦ 古德云く、「見地未だ脱せず」と、是れなり。

⑧ 門頭戸口とは、淺近の處をいふ、堂奥の處に非ず、前と異なり。

⑧ 放過等の一句解し難し、人人眼を著げよ、既に法身を透得せば法執なく、己見なし、者裏に到れば、佛見法見を絶す、況んや世間の塵勞をや、然らば則ち大死底の境界なり、若し此くの如く去らば、則ち氣息を絶するが故に用處なし、此に於て大活現前せざる時は、則ち不可なり。

⑨ 光とは、光影邊なり、濟北集十六に、「二光は能取所取なり」と。

⑨ 死漢の謂なり。第二節、判斷す。禪を以て名

藥山云く、「一物も爲さず。」石頭云く、「恁麼ならば則ち閑坐なり。」藥山云く、「閑坐ならば則ち爲すなり。」石頭之れを然りとす。看よ他の古人、一箇の閑坐も也た他を奈何ともすることを得ず。今時學道の士、多くは閑坐の處に在りて打住す。近日叢林、無鼻孔の輩、之れを默照と謂ふ者は是れなり。又一種の脚跟、元會て地に點せず、箇の門頭戸口の光影を認得して、一向に狂發して與に平常の話を説くこと得ず。盡く禪の會を作し了る有り、這般底に似たらば業識を喚んで本命元辰と作す、更に是れ與に自分の事を語るべからず。見すや雲門大師、言へることあり、「光透脱せざれば兩般の病あり、一切處明めざれば面前に物ある是れ一、又一切法空を透得すれども、隱々地にして箇

の物あるに似て相似たり、亦是れ光透脱せざるなり。又法身に亦兩般の病あり、法身に到ることを得れども、法執忘せず、己見猶ほ存するが爲に、法身邊に坐す、是れ一、直饒法身を透得し去るも、放過せば即ち不可なり。子細に檢點し來らば、甚麼の氣息かあらんといふ、亦是れ病なりし。而るに今の實法を學する者は、法身を透過するを以て、極致と爲す、而も雲門返つて以て病となす。知らず法身を透過し了つて作麼生かす、合き、這裏に到つて、人の水を飲んで冷熱自知するが如し、別人に問ふことを著す、別人に問はざ則ち、禍事なり。所以に云ふ、眞實に、不疑の地に到る者は、渾鋼打就し、生鐵鑄成すが如し、と是れなり。人の飯を喫して飽く時、更に人に我れは飽くか、未だ飽

相となし、低聲にして傳授するの類は、所謂自己の道理、智不到の道理なり、此等を以て計較安排し、義解卜度す、此の如くんば實法あるなり、即ち是れ法と人とあるなり。佛語は本と名相に非ず、然るに教家取つて以て名相となす、是れ猶ほ可なり、禪門祖語を以て名相となさば、其だ不可なり。
① 合とは畢竟の意なり。此の意は如何んが放過不放過の病を免れ得んや、進退此に谷まる。
② 禍事は、わるいことその意、自得すべく、別人に問ふべき事にあらず、問は即ち禍事なり。
③ 所以等は前を結ぶ。
④ 不疑の地は、大活現前の境界なり。
⑤ 第五段、自得の道にして人に

向つて求むべからざることを論ず、三節あり、初に百丈を引く。
① 洪州百丈山の懷海禪師なり、傳燈六、聯燈七。
② 從上等、傳燈九、黃檗章。
③ 坐に據る、嚴教授、若し此田地に到らば則ち是れ光影なりや否を疑はざるなり。
④ 拂は裏けるなり、掲げるなり。
⑤ 我れ云々これ生鐵鑄成すの處、遮簡とは、大惠の別語なり、據坐を指す。
⑥ 第二節、臨濟を引く。
⑦ 尚ほ求心ある故にいふ。
⑧ 光影なりや否や、須らく自ら知るべし、辨は口頭の辨別なり、辨舌をいふにあらず。
⑨ 第三節、七地の菩薩を引く。八地已上は自心を見ること明かにして、純無漏智相續すれば、上に攀仰するなく、下、已躬を絶す。

かざるかと問ふべからざるが如し。昔、黃檗、百丈に問ふ、「從上の古人、何の法を以てか人に示す。」百丈只だ、坐に據る、黃檗云く、「後代の兒孫、何を將つてか傳授せん。」百丈衣を拂つて便ち起つて云く、「我れ將に謂へり、汝は是れ箇の人」と、這箇は便ち是れ爲人底の様子なり。但だ自信の處に向つて看よ、還つて自ら信する底の消息絶することを得るや也た未だしや、若し自ら信する底の消息絶せば、則ち自然に他人の口頭の辯を取らじ。臨濟云く、「汝若し念念馳求するの心を歇得せば、釋迦老子と別ならず」と、是れ人を欺かず。第七地の菩薩、佛智を求めて心未だ満足せざる故に之れを煩惱と謂ふ。直ちに是れ備が安排するの處なけん、一星兒の、外料を著くること得ず。數年前に箇の許居士といふものあり、箇の門頭戸口を認得して、書を將ちて來りて見解を呈して云く、「日用の中、空豁々地にして、一物の對待を作すなし、方を知る三界萬法一切元無なることを。直に是れ安樂快活にして放得下す」と。因に之れに示すに偈を以てして曰く、「淨潔の處を戀ふこと莫れ、淨處は人をして困せしむ、快活の處を戀ふこと莫れ、快活は人をして狂せしむ、

佛智等、華嚴三十七卷、十地品、成唯識論九。佛智を求むるすら尚ほ許さず、之を拂ひ去る外、少分の安排求心を許さざるなり。
① 一星兒とは少分の義。
② 外料とは、本分外の求心これなり、意は一事に著すること得すと、料は度なり、計なり。
③ 第六段、許居士に示す所の偈を擧げて光影を勸絶す。
④ 此れ業識を弄するなり。
⑤ 迷妄の外に覺悟の心ありといはば、是れ對待なり。
⑥ 淨潔の處とは、法身邊をいふ。上の書に云ふ空豁々地の處に當る。傳燈二十九、寶誌の十二時の頌に、「淨潔を作すも却つて神を勞す」と。これ淨潔に對する淨潔なれば久しからずして疲勞す、淨不淨を忘する便ち是れ眞箇の淨潔なり。
⑦ 困の字は問の字の形誤か、何

①水の器に任せて方圓短長に隨ふが如し。②放下と不放下と、更に請ふ細に思量せよ、三界と萬法と、何有の郷に歸するに匪ず。若し只だ便ち恚慝ならば、此の事大いに乖張せん。爲に報す許居士、家親、禍殃を作す、千聖の眼を豁開せよ、頻に禱禱することを須ひざれと。③偶々晨に起きて稍涼し、④豁然として記得す、子卿道友、初め箇の入頭を得る時に、尙ほ恐らくは是れ光影ならんかと、疑はゞ、遂に從來疑ふ所の、公案を將つて、控照して、方に趙州老漢敗闕の處を見ん、覺えず、筆に信せて葛藤すること如許す。

張侍郎に答ふ 子詔

⑤左右、自らの所得の瞥脱なる處を以て極則と爲す。纔かに理路に涉り、泥に入り水に入

となれば、此偈は全篇、陽韻を押す、然るに但だ此一字元韻なればなり。若し今の困字誤らずとせば、相對的の淨潔地は人を因へて自由を得ざらしむるが故に困といふなり。⑥快活は、上書に云ふ所の安樂快活の處なり。⑦水等とは、任運の應物は淨不淨、快不快に負かず、我れに於て一物なき故に、佛身は無身の故に一切に應ぜずといふことなきをいふ。⑧放下等は、居士、放得下といふ、若し放下の物あらば則ち眞の放下にあらず、子細に看よ、恐らくは空豁々地を守らならん。⑨何有郷とは、莊子に曰く、「無何有の郷、廣莫の野云々」と。此には空無の義なり、意は三界萬法は一向に空無に非ずとなり。圓覺經二。

⑩若し等は、居士の無の見を責む。⑪此事とは、一大事なり、意は萬法は無なりと云はば、此の一大事と相乖く、此の事は空有の差別を絶したるが故にと。⑫家親等とは、淨潔、快活等は本是れ屋裏の物にして他物にあらず、然るに之に愛着せば、却つて染りをなすと。⑬千聖等とは、己が眼正しき時は、頻りに法執、己見を禱禱するを須ひずとなり。曠は鄭玄曰く、「變異を却くるをいふ、曠は曠なり法速なり」と。⑭第七段、此書を作る所以を敘す。

⑮驚等は、大惠、趙州老漢敗闕の處を見るの語を記得す。豁然とは、所由なき思出なり。下の筆に信すの語に應ず、文意は教授の悟後の事にして、

りて人の爲にする底を見ては、便ち掃除して蹤跡を滅せしめんと欲す。⑯某が集むる所の正法眼藏を見て便ち云ふ、「臨濟下に、數箇の庵主の、好機鋒なるあり、何ぞ收め入れざる。⑰忠國師の如き、義理の禪を説いて人家の男女を教壞す、決定して刪るべし」と。⑱左右道を見ること此くの如く誦當にして、而して忠國師の老婆禪を説くことを喜ばずして、淨々潔々の處に坐在して、只だ擊石火閃電光の一著子を愛して、此の外は一星兒の、別の道理を容れず、眞に惜しむべきのみ。故に、⑲某、力を盡して主張す、若し法性寛からず、波瀾闊からざれば、佛法の知見亡せず、生死の命根斷せずんば、則ち敢て此くの如くに、⑳四楞著地に泥に入り水に入りて人の爲にせざるべきなり。㉑蓋し衆生

彼れをして聖胎長養せしめん爲に此書を作る、道友已下が記得の語なり。⑳疑は子卿自ら疑ふなり。㉑公案とは狗子の語なり。㉒控照は、引き合すの謂なり、教授に係る。㉓敗闕の處とは、宗師、未悟の人の爲に一言半句を垂るる爲、人の手段を悟後に之を見れば則ち大小の敗闕なり。㉔張九成、字は子韶、無垢と號し、又横浦居士と號す、大惠に嗣ぐ、八歳にして六經を點誦す、諸老之を嘆異して奇童と曰ふ、未だ第せず、因に客、楊文公、呂微仲の諸名儒の造る所の精妙なるは皆禪學に由ると談す、是に於て心に之を慕ひ、實明禪を淨慈に訪ひ、入道の要を請問す、明、之を諭し復た柏樹子の語を舉し、時時に提撕せしむ、公、一夕

厨に如き蛙鳴を聞いて釋然として契入す、偶あり云く、「春天月下一聲蛙、撞破乾坤共一家、正恁麼時誰會得、豈頭脚有玄妙。」宋史列傳百三十三、萬姓統譜三十九に禮部侍郎となす、聯燈十八、會元二十。此書は師六十一歳の作。大意は、己見を以て毀りに古德を批判することを誠む。①第一段、正法眼藏に理路禪を收むることを論ず、之に三節あり、初に頓機を破す。②所得とは、大悟の處をいふ。警脱とは、舉起の處に向つて承當する靈利の漢をいふ。③第二節、他の正法眼藏を難するを述べ、師五十九歳の時、衡州に於て、正法眼藏を編む。④數箇等とは、傳燈十二、臨濟下に、虎溪、覆盆、桐峰、杉洋の四庵主を列ぬ、皆機鋒あり。⑤石火電光の頓機をいふ。

の根器同じからざる故に、從上の諸祖各門戸を立して施設し、衆生の機を備にして機に隨つて攝化する故に、長沙の岑大蟲言へることあり、「我れ若し一向に宗教を擧揚せば、法堂前須らく草深きこと一丈にして、人を倩うて看院せしめて始めて得べし」と。既に這の行戸裏に落在して、人の喚んで宗師と作さるれば、須らく衆生の機を備にして法を説くべし。擊石火閃電光の一著子の如きは、是れ這般の根器にして方に承當し得ん、根器不足なる處に之れを用ひば、則ち苗を振くごとし。某も豈に瞥脱の一樞の便ち七穿八穴にして、是れ性燥なることを曉さざらんや。所以に正法眼藏を集むるに門類を分たす、雲門、臨濟、曹洞、瀉仰、法眼宗を問はず、但だ正知正見の、以て人をして悟入せしむ

① 忠國師傳燈五に出づ。
② 義理禪は理致なり、張侍郎は機趣向上を極則となす、國師の眞箇は理致と向上を分たす、故に若し分つべきあらば則ち眞箇の禪にあらず。
③ 第三節、忠國師を主張す。
④ 老婆禪とは、老婆の叮嚀なるを繞路に禪を説くといふに喩ふ。臨濟錄に曰く、普化手を以て指して曰く、河陽は新婦子、木塔は老婆禪、臨濟は小厮兒と。
⑤ 頓機の外なり。
⑥ 別等とは、理路に涉り、泥に入る水に入るをいふ。
⑦ 某とは大惠なり。
⑧ 主張は總べ主るをいふ、これ忠國師を助授するなり。法性は智徳なり。
⑨ 敢は果敢決斷なり、意は知見未だ亡せず生死未だ斷ぜざれば唯だ他人を誦るのみにあら

一八二
す、自ら手を傷つけん、國師にあつては然らざるなり。
⑩ 四楞著地とは、向上の見解を放下して人の爲にし物を接するをいふ。
⑪ 第二段、總じて應機不同なることを論ず。根器とは喩に約す、木の根に大小あり、器に方圓淺深あるが故に、衆生の智恵性質に利鈍大小の差別あるをいふ、又は根は能生の義にて衆生天稟の性に新しき智を生じ、本具の靈智を開發すべき能力あるを喩ふなり。
⑫ 攝化は引攝化度なり。
⑬ 長沙は、傳燈十、景岑禪師章、南泉普願禪師の法嗣なり、岑大蟲とは指呼名なり、虎を大蟲といふ、碧巖三十六則計、千寶搜神記二。
⑭ 說法、聽法の人なきをいふ。
⑮ 行戸裏とは、商賈如肆をいふ、行とは魚行酒肆の行の義

べきある者をば、皆之れを收めたり。忠國師、大珠の二老宿を見るに、禪に衆體を備ふ、故に收めて以て此の類の根器の者を救ふ。左右の書來つて云く、「決定して刪るべし」と、公の意を觀るに正法眼藏盡く諸家の門戸を去除して、只だ公の見解に似たる者のみを收めば、方に是ならん。若し爾らば則ち公自ら一書を集めて大根器の者を化せんに、何の不可あらん。必ずしも妙喜をして、公の意に隨つて之れを去けしむるを須ひざるべきなり。若し忠國師は挖泥帶水の老婆禪を説くがゆゑに、便ち後を絶すと謂はゞ、則ち巖頭、睦州、烏臼、汾陽の無業、鎮州の普化、定上座、雲峰の悅、法昌の遇の諸大老の如き、兒孫地に滿つべきに、今亦寂然として化を主る者なし。諸公豈に是れ泥を挖き水を帯びて、老婆禪を説かんや。然れども妙喜は國師を主張し、無垢は破除す。初より相妨げざるなり。

徐顯謨に答ふ 稚山
① 左右頻に聲を妙喜に寄す、
② 想ふに只だ是れ水牯牛を調伏し、
③ 這の獼猴子を捏殺せんことを要するのみ。
④ 此の事は久しく叢林を歴て飽

なり、此は宗師、刹竿を立て説法する市の如きをいふ。
⑥ 第三段、正法眼藏を撰述する大意を述ぶ。
⑦ 睦州は傳燈十二、烏臼は傳燈八、無業は傳燈八、普化は傳燈二。定上座は林間錄に云く、「臨濟會中に龍象と稱す」と、傳燈に載せず、廣燈十三に之を載す。巖頭は全篇禪師なり。睦州は臨濟の法嗣にして睦州の龍興寺に居す。烏臼は馬祖道一の法嗣なり、無業も馬祖の法嗣、普化は盤山寶積禪師の法嗣にして伴狂、言を出すに度なし、盤山順世に暨んで北行して行化し一鐸を振つて云く、「明頭來や暗頭來や云」と、近くは臨濟錄に出づ。雲峯の悅は續燈八。法昌遇は同六に載す。

まで知識に參するに在らず、只だ一言一句の下に於て直截に承當して之
邊を打せざることを貴ぶのみ。實に據りて論せば間に髪を容れず、已むこ
とを得ずして箇の直截と説くも已に是れ紆曲にしたり。箇の承當と説
くも已に是れ嗟過したり。況んや復た枝を牽き蔓を引いて、經を擧
し教を擧し、理を説き事を説いて究竟せんと欲するをや。古徳云く、「但
だ纖毫あれば即ち是れ塵」と。水牯牛未だ調伏せず、獼猴子未だ死せず
んば、縦ひ恒沙の道理を説き得るも、並びに我が一星兒の事に干らす。
然れども説き得るも説き得ざるも、亦外邊の事にあらず、見すや 江西
の老宿、言へることあり、「説き得るも亦是れ汝が心、説き得ざるも亦是
れ汝が心なり」と。決して直截に擔荷せんと欲せば、佛を見、祖を見
ること 生冤家の如くにして、方に少分の相應あらん。此くの如くに工夫
を做すこと日久しく月深ければ、心を起して悟を求むることを著さずとも、
水牯牛も自ら調伏し、獼猴子も自ら死せん。記取せよ記取せよ。但
だ平昔の心意識の溘泊すること得ざる處、取ること得ざる處、捨つること
得ざる處に向つて、箇の話頭を看よ。僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ

- ⑤ 第五段、機を轉じて蓋覆却す。若し此の一轉なくんば、則ち大惠も五代の檢點を免れざるなり。
- ⑥ 眞理は主張と破除とに相あつからず、或は云く「主張も破除も俱に眞性の作用なるが故に」と。而し初義を可とす。
- ⑦ 徐の傳、宋史になし、萬姓統譜七、顯謨は事文遺集二。此書は師五十八歳の作。大意は心意識を捏殺するの肝要なることを示す。
- ⑧ 第一段、來書の意を述ぶ。の聲を寄すとは、音問をいふ。
- ⑨ 想ふに道を開ふ爲にあらす。數數書を寄せ來るは、但だ妄識を捏殺し進道を得んが爲のみとの意。
- ⑩ 水牯牛等とは、福州の大安の緣、前に見ゆ。
- ⑪ 期の子は、妄識に比す、傳燈六、宗鏡錄三。

佛。門云く、「乾屎橛」と。看る時、平昔の聰明
靈利を將つて思量し卜度することを用ひざれ。
心を擬して思量せば、十萬八千も未だ是れ遠か
らじ、是れ思量せず計較せず、心を擬せざる、
便ち是なること莫けんや。咄、更に是れ箇の
甚麼ぞ、且く是の事を置く。

楊教授に答ふ 彦候

左右強項なるの中に却つて不可思議底の柔
和なるありて、一言の下に千了百當することを
致す、此の事殊勝なり。若し間強項の中に於
て幾く人を打發し得るにあらずんば、佛法豈に
今日に到らんや。般若の根性あるに非ずんば
則ち是くの如くなること能はず、盛事盛事。
來年の春夏の間に、無底の船に棹し、無孔
の笛を吹き、無盡の供を施し、無生の話を

- ① 第二段、強ひて言句を求むるに及ばざることを論ず。
- ② 之邊は迂曲の義、普燈二十五。
- ③ 直截は師家にかかり、承當は學者に乘るなり。
- ④ 言句を葛藤といふ、故に枝蔓といふ。
- ⑤ 經は黃卷赤軸、教は十二分教。
- ⑥ 傳燈二十九、寶誌和尚の十二時の頌。
- ⑦ 水牯牛とは、上の無明妄識未だ滅せずてふに應ず。
- ⑧ 第三段、自心を信じて、他に求めざることを示す。
- ⑨ 說得底これ汝が心なるが故に。
- ⑩ 江西は馬祖なり、四家錄一。
- ⑪ 外に向つて心を求むるは紆曲し了れり。
- ⑫ 佛等は、傳燈十七、碧巖四。下の文の如し。
- ⑬ 生等は外に向つて馳求せざるを喻ふ、生とは熱せざるなり、佛祖の言教は昔日心の中に在るなり。
- ⑭ 第四段、本參を授けて提擲せしむ。
- ⑮ 是れ等とは、上に擬心思量す、故に恐らくは是を認む、故に此くの如くに言つて一擲す。
- ⑯ 咄は、不思議底はれ什麼ぞと破す。
- ⑰ 且く等とは、此に於て進まざれば則ち大惠、之れを奈何ともしするなし、然らば則ち是の事を置くと、除公は信心滿き人なる故に。
- ⑱ 楊の傳は宋史になし。
- ⑲ 第一段、參許す、強項は俗に所謂情強きなり。後漢書列傳五十七、十八史略三。意は此の如き強項底には説法教誨すれども、多くは信ぜず、却つて此の柔和ありて、我慢を摧くことを致さんと。
- ⑳ 若し等とは先づ佛法の靈驗を

説いて、無窮無始不有無の巴鼻を了せんと要することを欲すと示論せらる。但だ請ふ、來りて這の無面目漢と商量せよ、定めて這の話を錯り了らじ。又道號を需めらると承はる、政に相塗糊せんと欲す、快然居士と稱すべし。故に眞淨老人云く、「快然たる大道只だ目前に在り、縦横十字、擬して留連す」と。便ち是れ此の義なり。某、只だ長沙に在つて久住の計を作す、左右、他日果して此れに従ひ來らば、則ち林下寂寞たらざるべきなり。

樓樞密に答ふ

識らず別後、日用縁に應ずるの處、外境の所奪を被らざるや否や、堆案の文を視て能く撥置するや否や、物と相遇ふ時、能く動轉

- 言ふ。
- 般若等はこれ所被の楊教授の機を賛す。
- 盛事云々とは、俗にいふめでたいぞなり。
- 來年等とは第二段、會遇せんことを許す。
- 無底等は、傳燈十六道遙山忠の章。
- 無孔等は、碧巖四十一則の評。
- 無盡等とは、法供養は無盡なるが故に、蓋し書中に齋を設くといひ來る故に、此くの如く言ふなり。維摩經、香積品。
- 無生等は、龍居士錄下。
- 無窮は未來窮盡なきをいひ、無始は過去始めなきをいふ。
- 但だより、大惠の判語なり。
- 無面目漢とは、大惠自ら稱す、これ大いに自信自覺あるを暗示せり。商量とは、事宛に云く、「商賣の量度の如し、中平を失はず、以て各其の意を得
- せしむなり」と。
- 這の話とは、來書の無窮無始の話を指す、意は這の話を決了することを錯らすとなり。
- 了は了畢をいふにあらず。
- 第三段、道號を授く。
- 塗糊とは碧巖不二鈔に云く、「糊糊の義」と、意は那一人もと名なし、今故らに之に名づく、便ち他を染汚するなりと。文面は大惠謙退の辭。
- 眞淨の語を引いて快然の字を證す、其録に出づ。
- 縦横等は、大道の語より出づ、意は通達自在なるをいふ。留連は、留滯の義、意は當人自ら擬義し、自ら留滯するなりと。
- 第四段、相招くの情を露はす。長沙は師の衡州にある時なり。廣輿記十五。
- 寂寞等とは、相與に道話を打するが故になり。

するや否や、寂靜の處に住して妄想せざるや否や、箇の事を體究して雜念あること無きや否や。故に黃面老子の言へることあり、「心安に過去の法を取らず、亦未來の事に貪著せず、現在に於て住する所あらず、三世は悉く空寂なりと了達せよ」と。過去の事、或は善或は惡、思量することを須ひざれば、思量すれば則ち道を障ふ。未來の事、計較することを須ひざれば、計較すれば則ち狂亂せん。現在の事、面前に到らんに、或は逆或は順、意を著くることを須ひざれば、意を著くれば則ち方寸を擾さん。但だ一切、時に臨み縁に隨つて酬酢せば、自然に這箇の道理に合著せん。逆境界は打し易く、順境界は打し難し。我が意に逆ふ者には只だ一箇の忍の字を消ひて、定省すること少時すれ

- 樓の傳は、宋史列傳百三十九、萬姓統譜六十二、師六十九歳の作、此章は專ら順境界は打し難く逆境界は打し易きことを示す。
- 第一段、平生の行履を問ふ。
- 堆案とは堆は滿なり、土を聚むるなり、うづたかし、案は机なり。樞密院の職は重く、天下の公事多く、武事此れより出づ、故に文簿も亦案上に堆きなり。
- 撥置は、事畢りて能く置ける物を收むるをいふ。意は安置せる文簿等を能く安置し收拾するや否やとなり。
- 動轉等とは、變動宛轉のいひなり、物に應じて滯著せざるなり。華嚴六十三入法界品。
- 寂靜等とは、寂靜の處を認め、是となさば、便ち是れ妄想なり、或は云く、坐禪して紛然として妄想起らざるや否やと、前義を可とす。
- 第二段、三世空寂なることを示す。
- 現在の事とは、上に能く撥置するや否や、能く動轉するや否やといふの類なり。
- 意を著るとは、此れ懶融の所謂恰恰として用心する時、恰恰として無心にして用ふるの謂なり。
- 逆等は第三段、順境は打し難きを述ぶ。已下は這法師の語意を帶用す、入天寶鑑を見よ。打の字は上には一切の事を成するをいふ。今此に境を轉するを打といふ。
- 消の字は用なり、忍とは遺教經に曰く、「忍の徳たること持戒苦行も及ぶこと能はず云云。」
- 定省とは、字は曲禮に出づ。今此には心を定むるをいふ。省は論語に所謂三たび吾が身

ば便あ過ぎ了る。順境界は直に是れ備が回避する處なし。磁石と鐵と相遇ふて彼此覺えずして合して一處と作るが如し。無情の物すら尙ほ爾り、況んや現行の無明の全身、裏許に在つて活計を作すものをや。此の境界に當つて若し智慧なくんば、覺えず知らずして他の羅網に引入せらるることを被つて、卻つて裏許に向つて出路を求めんと要す、亦難からずや。所以に先聖云く、「世間に入得すれば、出世餘なし」と、便ち是れ這箇の道理なり。近世に一種の修行に方便を失する者あり、往往に現行の無明を認めて世間に入るとなして、便ち世間の法を將つて強ひて差排して出世餘なきの事と作す、悲しまざるべけんや。夙に誓願あり、即時に識得破して主と作り得て、他の

を省みるの謂にして、省察をいふ。
 宗鏡錄五十三に密嚴經を引けり。
 現行とは、顯現行起なり、無明とは不了一法界の惑とて、本有の面目及び吾人の眞智を掩へる煩惱を指す、即ち現在吾人の上に現起して吾人の總てを支配せる煩惱の謂なり。全身とは全體に同じ。裏許とは順境界を指す。
 他とは順境を指す、羅網とは生死の業報の脱し難きに喩ふ。若し之を覺知せば則ち出路を得べきなり。
 卻つて等は、富貴高名の中に居つて出離を求めんと欲し、却つて裏許に向つて出路を求めんと要す、其だ易からずとなり。亦難からずやとは、一説は前の如し、又は、生死界に即して出離を求めんと要す、亦難からずやの義もあり。
 所以に等とは、上に既に寶積經四、智度論三十九等を引いて之を辨ぜり。
 出世餘なし等とは、全備の義、意は覺知するを以ての故に、順逆の中に於て轉ぜられず、即ち離其等の八風を把握して用ひて名空に著せず、直に本體を把握して用ふ、故に出世無餘といふ、是れ大力量の人。
 近世は第四段、世間即出世間といふの邪解者を破す。方便とは善巧方便を得て世間の實相を知る人は、世間の縛を被らず、故に知識四十三に云々す、今は之に反す。
 往往等とは諷解して、現行の無明三毒を以て直に佛法となす。又染着を離れ、如實に世間の相を知るを、入得すといふ。

牽引を被らざるを除く。故に淨名言へることあり、「佛増上慢の人の爲に、嫉妬痴を離るるを解脱と爲すと説きたまふのみ。若し増上慢なき者には、佛は、嫉妬痴の性、即ち是れ解脱なりと説きたまふ」と。若し此の過を免れ得ば、逆順の境界の中に於て起滅の相あることなうして、始めて増上慢の名字を離れ得ん。恚麼ならば方に世間に入得すと作すべし、之れを有力量の漢と謂ふ。已上の所説、都て是れ妙喜が平昔に經歷過せし底なり。即今の日用も亦只だ此くの如くに修行す。願はくは公、色力の強健を、趣ふて亦是の三昧に入れ、此の外は時時に趙州の無字を以て提撕せよ、久久にして純熟せば、驀然として無心にして、泰桶を撞破すべし。便ち是れ徹頭の處なり。

ふ、然るに智論に所謂五陰の性本來空寂なりと欲見せず、世相に認着して而も入るとなす、謬れり謬れり。
 此は實に其の道理なきをいふ。
 煩惱無盡誓願断なり。
 三毒何ものぞ、業何物ぞと、其實相を識得すれば、決定して經となり得るなり。
 他とは現行の無明なり。
 第五段、淨名經を引いて上の義を證成す。増上慢とは、未得を已得といひ、未證を已證といふ人。法華方便品、楞嚴經十の注。
 修惡即性惡なれば、實は離るといふも、即してといふも同じ、而し嫉妬痴を認着して其性に達し得ざれば法に背く、故に今離るといふ、認着を離るれば諸法實相を知る是れ眞の解脱なればなり。
 諸法無行經上に云く、淫欲即ち是れ道、悲痴も亦復た然り云々しと。
 此過とは三毒無明の過失なり。
 逆順の境界に入りて、逆順の實相皆空なりと見得れば則ち逆順の中に於て……起滅とは憎愛をいふ。
 世間に於て、出世間を打得する故に。蓮忍法師の安心法門。
 第六段、自行を引き證として勸勉す。
 學地の時をいふ。即今等とは、大惠、昔しは勸めて精神せしも、今は已に熟す、故に自然に行するなり、大安の所謂露迫迫地にして遂に亦去らざるなり。
 趙とは墮逐のいひなり。
 泰桶等は疑團の破るるをいふ。
 此章は、才徳の痛處を擧げて